〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政三年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数七四枚）」の記載あり〕

安政三年丙辰　清暦咸豊六年　西暦千八百五十六年

神武天皇御即位紀元二千五百十六年

孝明天皇統仁第百二十代　御即位弘化四年丁未九月十年　御宝算二十六

将軍家定公第十三世襲職嘉永六年癸丑十月四年

藩主齊彬公第二十八世当時薩摩守ト称ス　知政嘉永四年辛亥二月六年　年四十七実八四十八

藩祖忠久公薩隅日三州及琉球国受封（人皇八十二代後鳥羽天皇寿永五年則チ文治三年）六百七十一年

関白太政大臣鷹司政通公

左大臣九條尚忠公

右大臣近衛忠熙公

内大臣鷹司輔熙公

老中

阿部伊勢守正弘（福山藩主）

牧野備前守忠雅（長岡藩主）

久世大和守廣周（関宿藩主）

内藤紀伊守信親（村上藩主）

堀田備中守正篤（佐倉藩主）

若年寄

本多豐後守助賢（ママ）（飯山藩主）

本多越中守忠德（泉藩主）

遠藤但馬守胤統（三上藩主）

本庄伊勢守道貫（高富藩主）

酒井右京亮忠毗（敦賀藩主）

鳥居丹波守忠擧（壬生藩主）

所司代

脇坂淡路守安宅（龍野藩主）

京都町奉行

淺野中務少輔長祚

岡部備後守豐常

伏見奉行
内藤豐後守正縄
国老
島津石見久浮十月六日死
島津豐後久寳
（島津將曹久德）〔ママ〕（嘉永四年七月免）
末川近江久平六月廿一日罷ム
（喜入安房久通）
樺山伊織久成
新納駿河久仰
（鎌田出雲正純）川上筑後久封
島津下總久徵
島津伯耆久福六月廿三日家老ト為ル
島津　登久包
以上十一名前代ヨリ勤続ノモノハ〔ママ〕印ヲ付ス

目録

文武奨励達書
武備実用云々訓諭
三港開市達文
水戸侯意見書
当時之実況（福井藩記事抄）
藤田彪薩製軍艦ヲ見タル形況ヲ武田正生ニ報告書
御参勤御往来ニ洋式剣銃ヲ備フ
海軍創設之令
天璋院殿御結婚始末
齊彬公御意見御建言
新鋳弐分判通用令
琉球国佛蘭西条約ノ事実具申
中山實善日記抄
市來廣貫軍事改革建言（御親書対照）
蒸気船雛形製造事件意見上申
磯永孫四郎上申
砲術号令改定意見上申
藩吏ノ悪弊建言
蒸気船製造届書

四一九　総覧

安政三辰年　公御年四十八歳
正月

年首式、先規ノ如シ、略ス、

六日

砲術館開場式、例年ノ如シ、

十一日

諸役人転遷・地頭所転換ヲ命セラル、人名略、

十五日

年首ノ式了ス、

二月

三月

四月

三日

島津伯耆（久福）江戸ヲ発シ帰国ノ途ニ就ク、京都ニ立寄リ、曩ニ御内願アリシ篤姫君（〔吝彬養女〕）近衛忠熙公ノ養女トラレ（〔ナ脱カ〕）ムコトヲ許諾セラレシニ依リ、伯耆ヲシテ結定式ヲ行ハシム（近衛家奥表両日記参照）

同月十日

京都御留守居伊集院太郎右衛門（俊徳）ト倶ニ近衛邸ニ抵リ、御太刀一振・馬一匹（代銀十両）及酒・魚・布帛ヲ献セラレ、御結定ノ式ヲ行ハレ、諸大夫中川讃岐守之ヲ紹介ス、

此日忠熙公室田織之進ヲ伯耆ガ旅舎ニ遣ハサレ、結成ヲ祝シ肴ヲ賜フ、

同月十五日

伯耆及ヒ伊集院ヲ近衛邸ニ徴ス、御用人松井丹後介進見忠熙公ニ御書院ニ拝謁セシム、御手親熨斗ヲ賜フ、而シテ献品ヲ謝シ玉フ、伯耆又自身ノ御礼太刀一腰・馬一匹（各代目録ヲ以テ献ス）立野勇紹介ス、而シテ又忠熙・忠房二公ニ謁ス、忠熙公自親色紙（玉川乃和歌）一匣・羽重（〔二脱カ〕）二匹、忠房公ハ白縮緬二端ヲ賜フ、而シテ又柳之間ニ於テ老女村岡・亀岡・花乃井・岩瀬四女ニ面接ス、此時信姫君ハ御文庫一ツ及ヒ物ヲ賜フ、尋テ竹之間ニ於テ再ヒ忠熙公ニ謁ス、公宜ク昨十四日奏聞勅許ノコトヲ内示シ玉フ、畢テ慶宴ヲ賜フ、伯耆帰舎ノ後忠熙公坂戸寛次郎ヲ遣ハサレ綿五把、忠房公ハ綿三把ヲ以テ餞シ玉フ、

同十六日

伯耆近衛邸ニ抵リ、御用人林縫殿ヲ以テ鮮魚ヲ献シテ恩ヲ謝ス（近衛家奥表両日記参照）

同十九日
伯耆京ヲ発シテ帰国ノ途ニ就ク（五月十二日着麗ス）
五月
八日
島津藏人（久武）、在府中御家老名義ヲ以テ政務取扱ヲ命セラル、
十八日
大目付ニ訓令シテ、一身（足軽以下ヲ一身者ト唱フ）以下資格ノ者昇級ノコトヲ諭シ玉フ（御書取後巻ニ記ス）
六月
十九日
御一門方其他大身分及諸役人、年頭其他佳節供列人数減スヘキ旨ヲ令セラル、
二十一日
末川近江久平職ヲ免セラル、賄賂受取ノコトヲ以ナリ（事実後巻ニ記ス）
二十九日
音信贈答ノ制令ヲ発シ玉フ、凡八ヶ条国老川上筑後・新納駿河・椛山伊織連署布告ス（御書取後巻ニ記ス）
七月
二日
江戸邸在番ノ者ヲ召テ、武芸及学事ヲ試ミ玉フ（人名後巻ニ記ス）
四日
戸田淡路守ト両殿（御両敬ト通唱ス）ノ親ヲ結ヒ玉フ、
十二日
初テ中村（騎射〔場脱カ〕ト通唱ス）奉行ヲ置レ、玉里奉行ト并立セシム（齊興公御隠邸）
二十三日
若年寄島津伯耆（久福）ヲ国老ニ進ム、島津讃岐（貴敦）代テ之ヲ命ス、「又命年年護琉球人住来江戸」順此日未辰年安政三年琉球王使ヲ従ヘ護シ出府ヲ命セラル、末川近江免職ニ依リテナリ、
十五日
令シテ驕奢ヲ禁シ、職務ヲ穢スコトナカラシム（御書取後巻ニ記ス）
此日新待賢門院本月六日薨セラレタル報達ス、鳴物ヲ禁スルコト三日、
八月
朔日
江戸ノ報至ル、篤姫君来ル十一月御入輿アルベシトノ

旨幕府ノ命アリシヲ告ク、諸士登城之ヲ賀ス、

十四日

府下ニ筆墨製造所創設ヲ布告ス（製造所鹿兒島樋ノ口又ハ水上ニアリ）

十六日

増上寺火ノ御番ヲ命セラル、明後年ニ（安政五年ノ秋）流〔流〕人参府ノ故ヲ以テナリ、

十九日

賢章院殿（齊彬公御母公）〔安政七年卒〕十三回忌辰ヲ大圓寺・福昌寺ニ行ハル、〔三脱カ〕

二十五日

夜戌刻江戸大風、芝及澁谷村ノ二邸損壊多シ、芝本邸其他別邸等損壊ノ事実後巻ニ詳記ス、

二十七日

大目付ニ訓令セラル、ニ、市人長脇差帯、或ハ日傘、或ハ木履、或ハ女ハ天鵞絨ノ緒ヲ用ルヲ禁ス（布告後巻ニ記ス）

同日市人願伺等、他役場ニ向テ直接上申ヲ禁シ、必ス町奉行ニ就キ申暢スベシト厳令セラル（布令後巻ニ記ス）

這日大目付川上矢五大夫（久連）ヲ若年寄ニ進ム、島津讃岐（貴敦）代リテ命ス、

二十九日

島津出雲（久　）ヲ御軍役総頭取トシテ、志布志・内ノ浦・佐多・大小根占等ノ海岸守護ヲ命ス（命令書及布告書後巻ニ記ス）

九月

四日

伊豫松山侯松平隱岐守御卒去、本日訃音達ス、前月十一日卒去セラレタリ（齊宣公第四男）

十六日

若年寄島津藏人全上江戸在勤中病死ス、

二十五日

大身分及ヒ諸役人砲術操練ヲ犬追場ニ催ス、

二十七日

島津左衛門久徵ヲ御軍役総奉行トス（布告命令書後巻ニ記ス）

十月

六日

国老島津石見（久浮）病死ス、

九日
齊興公指宿二月田ノ温泉ニ御光越、
十一月
四日
大身分以下諸役人砲術未熟ノ輩ヲシテ、尓来砲術館ニ於テ訓練スヘキ旨ヲ令セラル、
十一日
篤姫君御入輿（布告及ヒ当時ノ光景後巻ニ詳記ス）
十二日
〔将軍家斉夫人〕廣大院殿十三回忌ヲ福昌寺ニ行ハル、
十五日
篤姫君ヲ篤君ト唱フヘキヲ令ス（布告書後巻ニ記ス）
此日篤君将軍家定公ニ御結婚、齊興・齊彬二公及ヒ御簾中ニ鯛一折ツヽヲ玉フ、
十二月
三日
齊興公指宿二月田ヨリ玉里御帰邸、
六日
加治木郷領主島津兵庫（久長）病死ス、
十八日
将軍家定公御結婚式ヲ行ハル（布告書後巻ニ記ス）
二十日
大目付鎌田出雲（正純）ヲ若年寄ニ進メ、在府中御家老名義ヲ以テ政務取扱ヲ命セラル、

四二〇　文武奨励達書

近年従　公辺モ学問武芸第一心掛、質素節倹相守候様トノ趣共追々被　仰出候付、諸士一同文武之修行、猶又厚心掛〔候様脱カ〕可申渡候、
一当春ヨリ諸役人ハ勿論、馬廻・新番・横目・中小姓・諸座書役、惣テ諸士・郷士・与力等追々名サシニテ呼出シ、旧多調置候武芸ハ勿論、学問等迄相試候儀モ可有之候間、其段兼テ不洩様可申渡置候、尤当日不意ニ相達候儀〔可脱カ〕モ有之候条、「至其節照」到底其節、外勤又ハ遊歩等ノ外〔出カ〕勤申立、不参及毎度候者急度吟味可申付候間、兼テ其段モ申渡置候様可致候、且又〔右脱カ〕已下之者之内、平常心掛宜敷文武練達之者モ可有之候間、兼テ支配頭致吟味置、名前等相尋候ハヽ可申聞候、以上、
学問武芸等之儀ニ付、御別紙之通　御書付ヲ以被　仰出候ニ付　中略ス、於江戸申渡相成候段申来候条、此旨

向々江不洩様可致通達候、

二月

下總島津久徴
近江末川久平
駿河新納久仰
伊織樺山久成

〔昭国公文書ならびに旧記雑録追録にて校訂〕

四二一　武備実用云々訓諭〔安政二年〕

○この文書は、本文第五〇号文書中の二「口演之覚」（安政二年八月十五日付の同席大名宛島津斉彬廻達文）と同文により略す。よって異なる末部のみを収める。

松平薩摩守

御同席中様方

御名略す

右二通（ママ）阿部様・久世様ヨリ御承知、御同席様へ御口演書之写、

四二二　三港開市達文〔安政二年〕

本文久世様ヨリ被相渡候写

○以下の文書は、本文第五〇号文書の一（安政二年八月十三日付老中達）と同文により略す。

四二三　水戸侯政務ニ参与ス〔安政二年〕

四二三の一

卯八月十四日御登　城、於御座之間

御対顔　上意

水戸前中納言殿

○以下の文書は、本文第一四四号文書の二（安政二年八月十四日付老中達）と同文により略す。よって異なる末部のみを収める。

八月

右之通昨日御用召ニテ、老公へ御達相成候由御座候、

四二三の二

此度繁々御登　城之儀被仰出候、付テハ何角御用途モ可有之ト被　思召候付、別段米五千俵年々被遣候旨被仰出之、〔安政二年八月十四日附将軍達抄なり〕

四二四　水戸侯意見書〔安政五年〕

過日

勅答之儀ニ付、　上意之趣モ御座候、右上書致候得共、実ハ　公辺ノ御懐合少々不（モカ）奉承知、一通リ伺候迄ニテ、天下ノ一大事ヲアクレト（何カ）認上候ハ、元ヨリムリナル訳ニ候へ共、登　城イタシ、各方初メ御存意并海防掛人々之見込ヲモ、篤ト承候上トハ存候処、退隠ノ身分、「此節柄登城」不此上ハ独登　城ト申モ、何カ目立候テハ不宜トモ被存、

又海防掛リ其族ヲ、拙宅ヘ招キ承リ可申候存之処、是〔之カ〕〔可申共存候処ニ大〕
又世評イカヽト存候間、無拠認候ヘバ、自然御不都合
ニ相成事ト存候、一体御任セニ相成居候　征夷府ニテ
被遊候御事故、　朝廷ニモ御安心被遊候テ、御伺之通
御許容ニ可相成筋ニモ奉存候得共、ケ様申候拙老ノ御〔モカ〕
懐ノ儀不奉伺候ヘハ、見通シ付不申、宜敷トモ悪敷ト
モ、実ニ認方ニモ指支候ヘハ、マシテ於
天朝テハ、被為悩
叡慮候モ、御至当之御事ト奉恐察候、扨先日指出候書
取ニテハ、　公辺御不都合ニ相成候トノ御事ニテ、認
直シ候様トノ儀承知仕候、何分ニモ　公辺御都合ヨロ
シキ様認可申儀ニ候ヘバ、御懐合御分リ兼候ヘハ、彼
是懸合致候、此度之儀ハ　日本御一大事ニテ不容易、
誠ニ以テ御案申上候故、愚意案兼候件々、左ニ認、内
々各方迄申進候、然処口上ト違ヒ、書取ハ何トカ角立、
殊ニ不文ニテ筆廻リ兼候ヘハ、過言ニ出、不敬ニ渉候
様ノ儀モ可有之候ヘ共、畢竟　公辺御為ハ深ク存入候〔ヲカ〕
ヘハコソ、不憚忌諱認上候、徳川家御為ニ相成候ヲモ、〔不脱カ〕
傍観致居候心得ニモ、素ヨリケ様之事モ不申出候間、〔候ハ、脱カ〕
其段何分御海恕ニテ、各方並海防懸リハ勿論、何御役
人速モ　天下之御為不存者ハ無之候ヘハ、広ク御懸ニ〔迚カ〕
テ御廟算之所伺申度、　御廟算伺之上ハ、　公辺ノ御〔候カ〕
為、日夜憂苦致候所御安心申候故、何分御都合宜敷様
可認候ヘハ、御繁多ニハ可有之候ヘ共、否御付札ニテ
成候、早々御答待入候也、〔共カ〕

〔安政五年〕六月九日　　齊昭

井伊掃部頭殿〔直弼、彦根藩主〕
堀田備中守殿〔正篤、佐倉藩主〕
松平伊賀守殿〔忠優、上田藩主〕
久世大和守殿〔広周、関宿藩主〕
内藤紀伊守殿〔信親、村上藩主〕
脇坂中務大輔殿〔安宅、龍野藩主〕

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

四二五　当時ノ実況　福井藩記事抄

風説覚書

一彦人〔井伊直弼〕トナリ短筆、先年地震ノ頃、作事奉行国元ヨリ大
工ヲヨヒヨセ、過半長屋モ出来候ヲ見分致シ、此迄国
大工ヘ申付無之事故、早々打コツシ作直シ候折、同ト
テ殊ノ外立服致シ、江戸大工ヲヨヒ、作直サセ候事為
有之トノ事ニ御座候、

一川越喜多院隠居ヲ近付、種々事ヲ謀候トノ事、喜多院ハ元東叡山ト唱候ヨシ、本水戸薬師寺住寺之所、改革之時分、自ノ追放ニ相成候者、其ヲ心付ニ存、甲辰之（弘化元年）難ニモ余程奸計ヲ致シ候、頗ル才子ノヨシ、

一上田於志賀ノ方ニ□□□（不明）ヲ引出候ヲ、却テ被打落候故、上田大ニ怨ミ居候トノ事、其外諸役人正奸之見分ナシ打候故、大ニ怨ヲ生シ、一向口ニハ不申候得共、内実憤居候トノヨシ、水野筑後（忠徳、勘定奉行）モ外国奉行ノ田安後見ニ付口出シモ難計候故、遠□（不明）ケ候トノ事、

一此上ノ思召ハ、御目付抔ヘ評定御下ニ不相成、少モ不洩様目密決断致候トノヨシ、

一志賀切腹ハ、尾・水・越取調申付候処、何等ノ仕罪モナキ故、取調兼候ヨシ申候ヲ彦立服、家ヲ廃ル仰ノ事故宅ヘ引取右之次第ノヨシ、其跡原彌十郎ヘ相下ニ相成候ニ付、無拠取調申候トノ事、口ニハ不申候ヘ共落涙イタシ、黙然ト致居候ヨシ、

一大樹公ニハ至極一橋公（徳川慶喜）ヲ御愛被成、西ヘ御立被成度思召イラセラレ候処、急ニ御筆被為替、堀田・伊賀ヲ被召、先達テハ一橋ヲ立候様申候得共、諸大名帰服不致、乱ヲ引出シ候事難計ト被仰候ニ付、今更左様ハ仕兼候段申上候処、何人ヨリ左様ノ事ヲ申上候ト申上候処、是ハ申兼トノ御意ノヨシ、ヲシテ伺候ヘハ、婦人ニ申者有之トノ仰ノヨシ、是ハ於志賀ノ方ト人々被察候トノ事、果シテ於志賀ノ方彦ヲタノミ取計候トノ事、外ニ番頭ノ娘奥ヘ奉公致居候トノ事、是ヲノ親ヘ水野土佐（忠央、新宮藩主）懇意ニ致シ、余程説ヲ入候トノヨシ、

一毒ノ風聞ハ、シカト致シ候処ヨリ為申触候トノ事、奸計ニテ水戸人気早ニ付、少モ事ヲヽコシ候色相見候ハヽ、早速厳重ニ可被申付トノ事、先達モ今少シハ厳ニモ参ヘキヲ、原ナト少ク申諫軽ク出来候トノ事、

一田安御後見清水相立、松平三河守（慶倫、津山藩主）隠居別コムトノ風聞致候事、

一今外立候ハヽ彦御遺言ヲ称シ、定テ□□□□（不明）可致ノ風聞有之候トノ事、是ヨリ破ヲ相生シ候半トノ取沙汰、

一川瀬肥後守帰府後、家ニキス相付不申様、度々福井（松平慶永）候ヘ出入願候トノ事、此程ハ至極彦ヘ取入、機嫌ヲ取申トノ風聞御座候、併シ是モ内実ハ怨候、表ニ心服ノ色為見候トノ事、

一於志賀ノ方甚奸気フカク、人ヲネタムノ気質本壽院様（将軍徳川家定実母）ヘ内々申上、自分ハ一言モ不申、知慮モフカキ由ニ承

リ申候、

一イキリス人ヨリ申立之由ハ、先年於長崎水野筑後応接ノ上条約取替シ、夫ニテ宜敷候処承候ヘハ、亜米利加ヘ十分ノ条約御済之趣、外国ハ一体ノ義ニ付、同様相済ニ相成候ハヽ、格別左モ無之候ハヽ、了見振モ有之趣申述候趣ノ事、

四二六　藤田彪薩製軍艦ヲ見タル形況ヲ武田正生（耕雲斎、水戸藩士）ニ報告書

四二六の一

一昨日ハ両公御同道、明六半時御馬ニテ出御、品川松（池田慶徳、鳥取藩主）平相摸守殿御預之御台場ヘ被為入、御一覧之上、空砲拾発御好ミ、畢テ同所ヨリ御乗船、品川沖ニカケ置候薩州製之大船ヘ被為成、船ノ製造等委細ニ御覧之上、据筒弐発ツヽ御好ミ、右船ニハ大砲拾挺据置候故、打手六拾人別船ニ罷在候処、螺貝之合図ニテ乗船、物ノ見事ニ都合弐拾発相済、其外帆ノ取廻等万端行届候事共ニ有之候ユヘ、御前ヘ島津豊後初メ出張之重役共被為召、御懇之御意有之、夫ヨリ一ノ御台場・五ノ御台場・二・六・三順ニ御廻リ、何レモ空砲十発ツヽ御好ミ、夫々感心之事共ニ有之候故、何レモ出張之家老御賞詞有之、夫ヨリ御船中ヘ公辺御役人被為召、御菓子・御茶被下置、種々御咄誠之進御取合申上、濱御庭前ニテ四人松平河内守（近直、勘定奉行）・川路左衛門尉（聖謨、勘定奉行）・御目付岩瀬修理（忠震）・吟味役村垣與三郎（範正）江御暇被下、別船ニテ濱御殿ヘ着、両公ニハ両國上一橋様御屋敷前ヨリ御上陸、日西山ニ傾候ヘハ直様御馬被為召、暮六ツ時帰御ニ相成候、御供御先詰等、中山備後殿初メ、布衣八人御近習御二方様ヘ四拾五人思召ヲ以被召連候族ハ、山國喜八郎・名越十藏等拾人余ニ候間都合ニテ夥敷御人数、公辺御用船並七家之船、夫々船印相立、袖ケ浦モセマキ計ニ相見得、近来之御盛事ニ御座候、御台場ニ発砲之節ハ両公土塁ノ上ニ御座被成候処、御床几持兼候程ニ震動イタシ候得共、両君御快然ニ被為入、且又昼過ハ東風強ク、御水主共弐十四人必死ト骨折候位之処、聊無御頓着御談論被為在、公辺御役人中モ奉公服候様子ニ御座候、委細ハ別ニ筆記之上為御知可申上候得共、先ツ不取敢為御知申候、始終之懸合並当日之御取合等、愚生一人サシ出、外ヨリ見候ハヽ、嘸々大馬鹿ノ出スキモノト被存候半、不及是非候、以上、

六月　　誠之進

彦九郎様

（四二六の二）
右書ヲ得タル始末

拝啓、久々不奉伺御起居候得共、弥御安康之筈奉欣喜候、然ハ別紙一寸水戸藩ヨリ手ニ入申候間、御参考ニモ可相成哉ト入貴覧候、当時愚宅モ鎌倉雪之下江退隠イタシ居候処、珍敷書類見当不申、遺憾至極ニ御座候、先ハ御安否御尋旁奉捧愚札候、頓首、

三月六日（明治廿三年）　黒岡久直

市來四郎様

四二七　御参勤御往来毎ニ洋式剣銃ヲ備フ（安政元年正月）

以来御上下之節、御鉄砲拾挺為御持可被遊旨、（嘉永六年九月十五日願、十二月五日再願）御願書被差出置候処、先月十日可為伺ノ通旨、御付札ヲ以被仰渡候段申来候、此旨可承向々へ可申渡候、

（安政元年）正月　豊後島津久宝

四二八　海軍創設ノ令

異国船防禦筋ニ付テハ、　公辺ヨリ分テ被　仰出、夷賊覬覦ノ情状　漸ク根深相成居候付、於此　御方モ御国力ヲ被尽、御手当向被仰付事候処、防禦ノ要器、大砲・軍艦ノ二ツニ究リ候儀故、莫大ノ御入費ヲ不被為厭、御製造被仰付、就中大砲之儀ハ、　御両殿様先年ヨリ御手厚御下知被遊候ニ付、打手ノ人数モ稍相備候ヘトモ、軍艦ハ去春ヨリ初テ出来候ニヘ、水軍之兵士未御備不相成、海防第一ノ要器、夫々精練ノ兵士御乗付無之候テハ、軍艦出来ノ詮モ無之事候ニ付、此節別段厚思召ヲ以、水軍兵士御備被仰付筈ニ候、依之小番・新番・御小姓与水軍方懇望之者ハ支配頭ヘ相付、名前可申出候、左候テ年中四石ツヽ御切米被成下、旅行之節ハ別段御賄料可被成下候、尤水軍方役職ノ等級ニ応シ、御扶持米ノ多少ハ勿論、其ノ勤向ニ依テハ、重キ勤場ヘ品能昇進可被仰付トノ　御趣意ニ候条、此旨大番頭・御小姓頭（与番脱カ）ヘ申渡、可承向ヘモ可申渡候、

正月　下總　筑後　近江

駿河

伊織

〔照国公文書にて校訂〕

四二九　天璋院殿御結婚始末〔嘉永六年〕

上封ニ　内用書ソヘ　　薩娘福井侯筆乎上封ニ如此

無事

○以下の文書は、「鹿児島県史料　斉彬公史料」第一巻の第四六九号文書の島津斉彬書翰（松平慶永宛）と同文により略す。

四三〇　齊彬公御意見御建言〔安政五年〕

墨夷之儀、

神州ノ大患、不容易御時節ニ付、猶又諸大名所存被

聞召度、並永世安全奉安

叡慮、

皇国一同後患無之方略可及言上旨、

勅答之趣并御添書慎テ奉拝見候、先達テヨリ再度申上

候外更ニ所存モ無御座候得共、左ニ申上候、

勅答之趣ニテハ、下田条約之外ハ、難被遊

御許容御事ト奉存候、全体万国ニ致卓絶、赫々タル、

神州、若夷狄之軽蔑毫髪モ受候テハ、〔任脱カ〕弘安ノ御嘉例、

〔彼カ〕可非望之邪曲ヲ御糺、尊王攘夷義理之大本ニ被為基、

鎖国之御良法、弥堅固ニ被遊御用、万一襲来候共　神

武拡充御誅伐当然ト奉存候、乍然方今之時勢、能々相

考候ニ、二百年来御治世打続、自然奢侈之風相競、万

〔遂カ〕民怠惰之志ヲ生シ、上下一同、今日之事物ニ遂レ、武

備忽ニ相成候段、誠ニ恐入奉存候、当時外寇攻守之具

ハ、第一大砲礮台、或堅牢之軍艦等、十分ニ無之候テ

ハ、夷狄トハ乍申当時戦闘ニ取訓〔馴カ〕、戎器ヲ巧製イタシ、

航海等ニモ熟練之者共ニ御座候得ハ、　御必勝之算如

何可有之哉、右ニ付テハ、

勅諚之趣ヲ以御取扱相成候ハヽ、孰レ兵端相開可申哉、

勿論

勅諚台命御座候得ハ、人心激励、為報国尽忠戦候ハ必

定之事御座候共〔得脱カ〕、前文通武備相弛、大砲礮台・軍艦等

御手薄候テハ、如何奮発仕候共、忠魂難相遂場モ可有

之ト奉存候、殊ニ彼等ハ数ケ国合体ニテ、若四方辺海

ニ出没致シ候ハヽ、終ニ　御国力疲弊、内乱モ難計、

甚懸念仕候、国之大事在祀ト戎ト古伝ニモ相見得候通、

実ニ億兆民命之所係ニテ、

皇国ノ御浮沈相拘候大機会ト奉存候間、能々

御思慮被為　在度、天時不如地利、地利不如人和、亦

王ハ（公カ）設険以守其国、険之時用大矣哉等之古言、御省察
尤之御時節ニテ、第一人和、継テ諸御手当精実ニ無残
所御行届無之候テハ、
皇国ノ　御守護　御奉職難被為務（整カ）世態ニ御座候、尤旧
典ニモ別段外夷ヲ不近付トノ事モ無之、
慕皇猷帰化スルモノヘハ、姓名・田宅迄モ賜
東照宮ヨリ英夷ヘ交易免許之御朱印頂戴被仰付候処、
寛永以来、彼ノ邪宗ヲ御一洗アラセラレ、御打払之御
建法、此節御変革之儀、彼ニ被圧候様相見得、実ニ千
載之御遺恨共可申候得共、得ト天下之形勢相考候ニ、
一旦忍小成大之御主意ヲ御基本ニ被相居、仮約定通（条）
御許容被為　在候外、有間敷奉存候、尤条約之内、天
主堂取建之儀ハ、今一度御談判有之度、尤和好之儀ハ、
古ヨリ多ク偷安之策ニ出、遂ニ敗衂（従是脱カ）ヲ取候事、往々其
例モ不少候得共、時ト位ニ応シ候儀肝要ト奉存候、併
前文仮約条通　御許容ニモ相成、自然苟安之風押移、
彼ノ夷賊ノ邪誘ニ陥候様罷成候テハ、
御興復迚モ六ヶ敷、天下之御一大事、災害無此上御儀
ト奉存候間、何卒（仮脱カ）約条御取結ノ上ハ、
御興業之御主意、寸陰モ無御油断、非常之御英断被為
在、　御武威四海ニ光耀イタシ候様御盛徳ヲ被為修、
万事旧染之汚習・奢侈怠惰之風俗御一変、諸藩ノ切迫
ヲ御取延、富国強兵之基ヲ被為樹、（上下脱カ）一同嘗胆之憶ヲ成
シ、外寇制禦之設十分ニ被為務度、左候テ彼等弥邪教
相施候ハヽ、不被（為脱カ）差置声罪
御征伐有御座度、左候得ハ御必勝無疑、自然亦彼ヨリ
皇化ニ服候様可相成奉存候、猶又衆議御参考之上、御
決定被為在度奉存候、勿論
勅諚　台命之上ハ、和戦両条如何様共可奉畏候、以上、
（安政五年）五月二十八日

松平薩摩守
（照国公文書にて校訂）

四三一　新鋳弐歩判通令（用脱カ）

此度世上通用之為、吹立被　仰付候新規弐歩判之儀、
来ル廿八日ヨリ可致通用候、此旨可被相触者也、
右之通、従　公義被　仰渡候条、不洩様可被致通達者
也、

六月　　御家老座印

四三二　琉球国佛蘭西条約ノ事実具申

私領琉球国ノ内那覇江、去年九月二十七日、異国船三艘卸碇候ニ付、役々差越、本国来着之次第相尋候処、佛蘭西国兵船ニテ、一艘ハ提督并官人・唐人等都合七百人、一艘ハ人数五百人、内唐人四十人、一艘ハ火輪船ニテ人数二百人、内唐人弐十人乗組、上海ヨリ寧波九山江相渡、彼地ヨリ渡来、五百人乗組ハ日本江渡来、長崎・箱館ヘ一ヶ月半程滞在、夫ヨリ上海ヘ罷渡、此地ヘ渡来之段申出候、然処十月三日、提督并官人八人・唐人二人召列上陸、役々致面会候処、交易向并地面・人家買入、又ハ借宿等ニテ領事官商民等逗留為致候儀共、十ヶ条之約書差出ニ付、琉球国之儀ハ、金銀銅鉄モ無之、産物乏敷偏窮之国柄、迚モ交通不相成訳ヲ以厚申断候処、亜米理幹国ヘモ致約定候ニ付テハ、此節之約定書ヘモ印形押調候様申聞候付、亜国ヘハ渡来之節ハ好友并薪水粮食等ハ随分可相達旨致約定候、然共地面・人家買入、又ハ領事官等逗留為致候儀ハ、国家之大事付、清国ヘ不得差図候テハ難応、其意小国之情状加憐察呉候様、頻ニ申入候処、佛国皇帝之箇条書候間、一事モ増減不相成旨申募、是非其通決着可致返答旨申置、本船ヘ乗帰候ニ付、琉役之者追船元ヘ差取故、障之廉々消除精々申断候得共、不致承引、同十二日官人并兵卒二百三十余人致上陸、約定書取直候ニ付、即可決着旨、甚猛威ヲ示シ、種々申立候ニ付、地ヲ借屋ヲ可借トノ箇条ハ、小国難応旨再三及理解候処、忿怒之面色ニ相変、佛国ヲ小国ヨリ欺候哉抔云罵リ、兵卒四十人余剣銃刀等抜持、座上ヘ躍上リ、琉役々取囲、甚以狼籍之挙動故、此上強テ申断候ハ、既ニ可及異変勢ニ付、不得止総理官布政官印押調候処、一通ハ相渡、漢字并横文字之二通彼方ヘ請取、此節之箇条書仕申立取直候ニ付、形行ヲ以テ佛国皇帝ヘ可致奏聞候、且又逗留佛人等列帰呉候様種々申諭候得ハ、不致承引、是迄之通残置候ニ付、会釈向入念、琉球語、且直字・俗字之書物等相教可呉、左候テ右船之今ヨリ六ヶ月後日本ヘ罷渡約定相窮、カムシヤツカ江渡海、夫ヨリ来秋帰国之砌、又々此地ヘ来着旨申置、乗組之内一人病死致土葬、同十九日三艘共一同出帆、未申ノ方ヘ乗行候、将又一昨年ヨリ逗留之唄人病気ニ付、為養生方妻子召列、右之便船情国之儀罷渡候、猶又取締向之儀、厳重申付置度候、此節琉球ヨリ御飛船之趣ニ付、委曲長崎奉行ヘ申渡候由、国許家来共之趣候、此段御届申達候、

以上、

正月　日　　松平薩摩守

（薩藩史料斉彬公（東大史料編さん所所蔵）にて校訂）

四三三の二

私領琉球（国脱カ）へ去年（安政二年）九月佛朗亜（西カ）国船渡来、交易向等之儀、箇条書ヲ以申出、段々相断候得共不聞入、既可及異変勢ニ付、不得止総理官等印押調相渡候段ハ、先達テ為（御）届為申達置通ニ御座候（薩藩史料斉彬公）御座通ハ、其後逗留佛人住家別所へ引移度申出、偏小之土地段々差支候訳有之候ニ付、当分通寺住居ニテ為相済候様、種々申断候得共、最初約定書へ地屈（屋カ）船借（共カ）渡候儀、裁言今更断難聞済段申募、無是非近辺松原へ、板緑（縁カ）共拾敷拾間程之家一間道調（造カ）召置候、右ニ付番所数所相立、取締向猶又厳重申付置候旨、此度琉球ヨリ飛船ヲ以之趣ニ付（薩藩史料斉彬公）、委曲長崎奉行へ申達候由、国許家来共申越候、此段御届申達候、以上、

正月　日　　松平薩摩守

（薩藩史料斉彬公（東大史料編さん所所蔵）にて校訂）

四三三　佛国条約琉吏具申

去年佛朗西国提督来着、御当地彼国ト箇条相定候様申立有之、段々御断被仰入候得共、一切聞取無之、不被及是非別紙写之通御取替相成、逗（逗カ）留佛人共住家造立、食料品モ蕃銭京銭へ換、銭ヲ以直買御免被仰付置候、就テハ於其許諸事取計之儀、去々年亜米理幹国提督依申立、文書御取替相成候筈、ケ条書ヲ以被仰渡置候振合ニ基キ可取計候、尤佛国ケ条書ノ内、地屋等借セ渡候筋相見得候付、万一右様ノ申立有之候ハヽ、時宜相当ノ謂ヲ以相断、自然落着於無之ハ、彼ハ都合不相損様程能取計、若佛人等残置、長々逗留之模様相見得候ハヽ、早々成行飛船ヲ以可被申越候、此旨御差図ニテ候、以上、

附一佛人等ヨリ約条書御取替相成候段、存知候ヤト相尋候儀モ候ハヽ、府本ヨリ申越有之、存居候段可相答候、

一異国船滞船中クリ船伝間等ノ儀ハ、夷人等雇申出次第無遅滞可相達候、

辰十月七日

益城親雲上
阿波根親雲上
川平親雲上

四三四　参考　中山實善日記

十二月

十二日　晴天

一卯正刻御供揃ニテ、　御乗廻ニテ大井　御邸ニ被為入候ニ付、御供之間丑刻過ニテ起上、洗面、髪ヲ結、食飯、浴湯、出勤イツモノ通、御供之面々野服馬上ト被仰渡候付、股引・半天・鷹野足袋・三尺湯手晒カタ付ヲ帯上ニ締ル、

但半天ハ表着ハ袷、下着右ハ綿入（此分股引ノ上ニ着）、其下股引之下ニ胴着弐ツ・地半壱ツヲ着、鷹野足袋一重フム（下ニ常ノ紺足袋ヲイツモハキ候得共、此頃ハ予ハ一重ニテ為済候也）

陣笠・鞭・馬上燈灯ニテ出、殿供ニハ羅紗・紗綾ラウ引之両雨衣ヲ為持候、六時前ニ表御玄関ヨリ被為出、御玄関ヨリ　御馬也、臣等ハ堀田侯御邸懸リニテ、乗馬（口取藤吉）御小納戸ハ竪山八郎也、御先駆ハ六村　、其次ニ花廉（謙）藏、其次ニ　御、高田十次郎・本田孫九郎・前田龍五郎・木藤角大夫・仙彼（波カ）・竪山八郎・臣ト乗ル、日出過ニ大井御邸ニ被為入（南部遠江守ハ先刻被為入候由）、例之通臣等ハ御次ノ腰掛ニ扣居候、毎之通此扣所ニ相詰ル、

一御先番ハ御側役山口直（記）キ、御小納戸ハ山田壮右衛門也、其外奥御小姓・奥御茶道等イツモノ通御先番、

一松平（黒田斉溥）美濃守（福岡侯）様ニモ御跡ヨリ被為入、

一腰兵糧弐度、壱度ハ澁谷ニテ各請取之跡、一度ハ大井ニテツメ替被下旨被仰渡、

一イツモノ通御下ナトイタ、キ、マタ　御前ニ被召出、御酒・御吸物・サシミ・鴨麺、其他御着等被下候、腰兵糧ニハ候得共、右通ニテ満服也、

一御帰ニハ御駕籠ニ被為召、臣奉之（御往来共秋月侯前通、御薬園坂相模殿橋樹木谷大谷横丁高輪御屋シキ西御門通、御テン山品川宿ニ被為出、青物横丁ニ　御通行被為入候事）

一家来ハ原口金助、草履取ハ駒助（尚之助家来）、口取藤吉也、各銭弐百文ツ、下行ニ与フ、馬飼葉ハ御取持行候事、

一御猟ハ惣数鴨六十余羽也、カラスモ一羽鷹執之由、寒烏トテヨロシキ由也、

一元　富印ニテ　御側女中ナリシツサ女事、到来之由ニテ、交肴一籠被贈候、

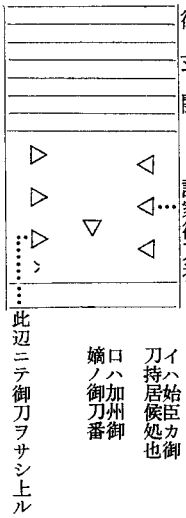
一伊集院相馬（小山御家老）ヨリカマス干物五尾ト、干鮎二連大廻船ヨリ参候由ニテ被贈候、尤大井留守中ニ源藏持来候由、

一昨日頂戴之　御菓子入相下候、御重一ツフクサニ包ミナカラ、今晩持出、谷村小之助殿ニタノミ返上ス、

十五日　晴天

一六時御供揃　月　為御祝儀、就　御登　城御供之間丑刻ニ起上、手水ロソヽキ、結髪、喰飯（侍カ）、浴湯、正七半ニ出　殿、外両人ハ長崎助左衛門上・伊集院藤九郎也、

表　御門笄指六本木・六兵（市カ）衛町・レイ南坂・虎御門・霞ケ關・内サクラダ・桔梗御門ヨリ被為入、　御下乗之節御簾臣奉之、イツモノ通　御右ニ奉随従、



一今日ハ例ヨリモ　御退城　御早目ナリ、先水戸黄門卿、ソレヨリヤカテ　加州御嫡筑前守様間モナク御退城也、

御出口之通　御帰殿（未刻過）

一御玄関（御城）ニテ谷村三育被出、先達テ払物之由ニテ被為見候字書、弥可取入哉被尋候、代三百疋之由也、

一今夜明早朝献上之　御名札ヲ認候様、竪山武兵衛ヨリ承知認候コト、右ハ御右筆芝ニ被行候由ニテ、如此初当直御小納戸（菊地）ヨリ只可認旨申来候付、予申ニハ、脇々ヘノ御品等ハ兎モ角モニ候ヘ共、　公辺テハイカニ御内輪タリ共、重キ御廉故、セメテ御側奉行共内達不承候テハ、難書認旨申返候処、和田九十郎入来、武兵衛ヨリ可認旨被申遣候間、直ニ進上御名ヲ認相渡候事、

一今日　御供帰後ニ、御草履取金兵衛（是人モ御供也）カ下ヲ通リ行ヲ呼入、尋ルコトモ有之、ヲリカラ酒之カン出来居候マヽ、為飲候、佐土原伊集院相馬ヨリ被贈タルカマス魚干物ヲ一ツ遣ス、

一昨日於　御殿、川上孫太郎殿ニ一昨日着之由ニテ会候事、

但右川（有カ）治右衛門殿（庄太郎殿改名之由）ヨリ多葉粉一封状到来由、宿元ヨリ當之助ヘ状一通、予カ名宛ニテ封物一ツ御守モノヽ由シ、

十六日己亥　晴天

一今日ハ鳳瑞丸・大元丸　御見分トシテ、田町御邸迄被為入、ソレヨリ御舟ニテ右両船ニ被為成筈候付、御供之間五ツ過ヨリ出　殿、四時御供揃也（御殿行）、表御門御出下弁指、秋月前、小山、ツナ坂、三田、今堀リ、同朋町ト御通行、田町ヘ被為入申候、直ニ小蒸汽船ニテ御前ハ被為入、臣ハ御供舟也、御小納戸ハ竪山八郎、御先番ヘハ三原藤五郎也、因テ藤五郎始花崎源五・尚之助・木藤・法亢ナト同船也、マヅ鳳瑞丸ヨリ被為入、ヨホト此御船ハ堅固緻密ニミヘ候、ソレヨリ大元丸ニ被為入（鳳瑞ハ鮫州之沖、大元ハカナ杉浜也）、暮前ニ田町御邸ニ被為帰、腰兵粮御賄一度被下候、因テ供ヘモ一度与フ也、

一家来林之丞ヲ供ヨリ岡田屋ニ通、

古事燈　弐冊

代三匁八分之由、取寄候コト、

一酉半刻ニ　御帰邸、御出口之通御通行ナリ、

十七日庚子　晴天

一午後ヨリ少々曇、

一松平美濃守様溜池之御邸ニ、御馬ニテ被為入候付御供也、五半時御供揃也、御小納戸ハ菊地藤助、御庭口ヨリ被為入候付、大小帯ナカラ外ヨリ御庭口ニ相マハリ候テ、御中門ニ刀ハ掛置、脇差計ニテ御中門ニ入、マチ上候、調練場ニテ御馬ニ被為召、裏御門御出、御先乗玉置平兵衛、其次花謙藏、　御、御跡ニ本田孫九郎・須摩守之丞・仙波鐵之助・前田新五郎・木藤宗之丞・藤助・臣列乗、青山通紀州公宮様御門過ルト、右ニ御廻リ、新坂御下リ、新店御通リ、相州侯御屋シキ懸リ、黒田侯御屋シキ懸、本御門前裏御門ヨリ直ニ御鷹場ニ被為入、臣等ハ御鷹場御中門外迄ニ御供仕、扣処ニ参候、左候テ腰兵粮両度被下之候、カノ御方ヨリ御取サカナ二種・御酒被下候、酉之半刻前ニ御供揃也、其時臣・藤助・謙藏・玉置ヲ御鷹場　御腰掛ノ所ニ被為召、鶏之汁・御取サカナ二種・御酒被下候、大宮主曳（ソカサ）マハシ候間、主ニ御レイ申上候、　御馬ニテ御帰殿、戌刻前ニ御帰邸、御出口之通、

一拍子木並割竹ノ音ヲ聞テ、

おのつから其人からの業なれや
霜よの時を告る木の音

二十二日　晴天

一五時御供揃、大井御屋シキニ被為入候ニ付、御供之間寅刻起上リ手水、結髪、食事、浴湯、未明ニ出勤セムトスル所ニ、少々御早目ニ　御出之御模様ニ候之間、其心得ニテ罷出候様　御殿ヨリ申来ル、

一六ツ半過ニ御馬ニテ表御門　御出、御供之人々モ馬上也、　御乗切ニテ辰時分ニ大井ニ被為入、松平美濃守様・有馬中務大輔様ニモ被為入候、（慶頼　久留米藩主）

一供ハ家来石黒林之丞、草履取新大（太カ）、口取藤吉、各二百文ツヽ与之、

一御乗切之故、万藤ニ新太ヲ使ス、手頭用看板地可持出旨也、

一鴨四十八羽被為執候、

一午後ニ相成候トコロ、段々　御下リノ鴨・大根之御羹・鮫之コクシヤウナト、其外御クワシ等モ相下カリイタヽキ候、

一家来已下供ニハ、我々ヘ両度被下候節ハ、両度分締弐百文ツヽ、我々御賄壱度之時ハ、壱度分百文ツヽ与之、

一我々共ハ、御側已下イツレ腰兵糧二度被下候、例之中飯ゴリ也、

一今日之馬上御供ハ御納戸奉行一人臣、御小納戸一人岩元太右衛門、奥小姓六人（須摩守之丞・菊地矢一郎・上村叶・百幸衛・前田龍五郎・仙波鉄之助）、御馬乗（御先駆六村）、都合九人御供也、大井之原ナトハ余ホトノ御乗切ニテ、段々奉後候人々有之、被為入候ト暫時有テ美濃守様・中務大輔様御一緒ニ被為入、

一有馬侯御供ハ、高輪御屋シキマテ披キ之由也、

一黒田侯ニハ猶扣所ニ待上候由、

一黒田侯之御供番ニハ御取肴・御酒被下候、尤大官主外一人ハ　御前ニ被為召、

一夜入過ニ両侯御一緒ニ御立、ヤカテ　上様ニモ被為立、御駕籠也、　御殿山辺ヨリ稀ニ雪雨ラシクチン〳〵ト降、樹木谷辺ヨリハ手笠用ルホトニ成、御薬園坂辺ニテ雪大キニ降、下笄之辺ニテハ路モ真白ニ積リ、手笠ナド度々叩ク計リニ降候、戌之刻前ニ　御帰殿、（中山実善日記（東大史料編さん所所蔵）にて校訂）

四三五　市来廣貫軍事改革建言（御親書対照）

御軍賦御改革ノ儀ハ弘化四年未十月、

宰相様（齊興公）厚以

思召被仰出、専御先代様ノ御軍法ヲ御基本ニ被相建、

其上御流儀砲術ノ規則ヲ以御軍賦被相定、猶又嘉永元年申六月惣鉄砲ノ御備組被仰出、其節ヨリ小銃ノ儀ハ

西洋之法ニ被基、鈎銃（ナポレオン式燧石機銃）製作方被仰付、一統行渡候様トノ　御趣意ニテ、鋳製方又ハ平佐・都城・種子島等ニヲヒテ出来方被仰付候処、纔一ケ年計ノ間ニ、千丁余ノ筒数出来相成候上、並錐通台製作等追々成就相成、当分御手当相成居候、然処如何様急々出来候訳ニモ御座候哉、調練ノ度毎々空放ニテ破裂イタシ、余多筒数ノ内、実場ニ用立候モノハ相少ク、其上右ノ振合ヲ以、昨年猶又製作方被仰付、一日ニ三拾挺ツヽ、出来可仕トノ御請申上候由ニハ御座候得共、当分ノ出来高ヲ承候ニ、一日漸ク拾丁位ノ出来ニ御座候由、依之掛ノモノ共段々吟味仕、至極不取馴ノ細工人六七人程召集、精々催促仕由ニ御座候、且又御老中様方（阿部伊勢守・牧野備中守及ヒ水野土佐守等）御詰ノ筒モ五拾丁程出来候由ニ御座候得ハ、御手当方ノ儀ハ猶更埒明不申由、就テ砲術ハ歩騎共ニ分テ御世話被為在、今般吉野ニヲヒテ調練御覧ニ付、八百六拾四人ノ隊召建候様被仰出候ニ付、取シラベ候処、漸ク五百七拾弐人ノ備相調候、右通鈎銃不足ニ付、適々人数ハ相揃ヒ居候テモ、相洩候人多ク有之、気請モ不宜、左候得ハ邂逅稽古仕候モノ共其詮無之候、右五百人余ノ内全クノ損筒相携ヘ、放発不調モ多々有之候由、騎隊ノ儀モ追々稽古人数相嵩候得共、是以筒不足イタシ、全ク馬上ノ稽古ノミニテ放発モ不致候、大身ノ面々ハ、自筒申請度願出候方モ御座候得共、御筒サヘ不足ニ付、其儀モ不相叶候、就テハ適々稽古仕候テモ、放発ノ業合相叶不申候ニ付、段々内評仕候処、右ノ御仕向ニ被　仰付候ハ、鈎銃・騎銃何レモ御用分丈ハ速ニ出来、御手当御全備可罷成哉ト奉存候、

一当分鍛治六七人被召集、製作方仕由ニ御座候得共、鋳製方ノ儀ハ日々被成下候賃銭、朝六時ヨリ暮時迄僅三百文ヨリ四百文迄ノ被下方ニテ、上手ノ細工人四百文取ニ御座候由、夫故上手ノ細工人ハ御用細工相勤候儀、別テ難渋仕、右通ノ被下方ニテハ家内ノ介抱モ調兼候ニ付、自分細工仕候得ハ、一日ニ七八百文程ノ利潤ニ相及候間、自然御用細工相勤候モノハ下手ノ細工人迄ニテ、頼手モ無之モノノミ御座候、右体下手ノモノ共催促ニマカセ埒明キ細工仕（粗漏ノ方言）候ニ付、廃銃多ク看々御損亡ニヲヨヒ候、尤鋳製方ニテ細工仕候得ハ、一挺ノ張調方日数十日計ニテ出来候由、彼是ノ入

目算当仕候得ハ、筒ノ荒張迄ニテ壱丁凡四百貫文程ニ及候由、上手ノモノ共自宅ニテ張調候得ハ、至極入念候テ、壱丁三日計ニテ出来、凡拾八九文程ニテ出来候由ニ御座候、就テ吟味仕候ニ、右通御入費ノ上廃砲多ク御座候テハ、数千丁ノ数ニヲヨヒ候テハ、莫大ノ御損ニモ相成事候ニ付、御府内中上手ノ細工人相撰ヒ、右モノ共宅ニヲヒテ張調ノ上、壱丁何程ト申定直被建置、御買上ケ相成候テハ如何様可有御座哉、尤一々精微ニ相改候上、打試ノ上実用無懸念分撰ヒ御買入相成候様ノ御仕向ニ相成候ハ、御城下諸士中ヘ御渡シ丈ケノ員数ハ不遠出来可仕候、左候テ一ケ月ニ七拾丁程モ買入ノ御定ニ相成候ハ、一年ニハ八百丁余ニテ、御城下ノ儀ハ一二ケ年ニシテ相揃可申、尤右様打試ノ上御買入ニ付テハ、掛役々精微ニ吟味イタシ、不正ノ手数無之様堅固ノ法召建候ヘハ、懸念ノ儀ハ有御座間敷、当分ノ通鋳製方ヘ細工人御引揚ケニ相成、僅ノ被下方ニテハ渡世出来カネ候ニ付、右通御趣法ニ被　仰付候ハ御出費モ無之、彼是御弁利ニ可有御座候、尤御老中様御詳ノ筒モ稍右通ノ御仕向ニテ御買入相成候由、且前ニ申上候通一月ニ三拾丁ツヽ出来ノ儀モ御請申上候迄ニテ、出来ハ無之如何ノ御届ニ相成儀ニ御座候哉ト奉存候、何レニモ一月ニ七拾丁ツヽハ出来候様被仰渡度奉存候、

一御買入ノ節ハ打試方ノ作法厳重被　仰付度、尤当分通新製ノ雷帽銃ノミ製作イタシ、追々御手当御全備ノ上ハ、当分出来居候御筒ハ、他国売出シ被　仰付候テ可然哉ト奉存候、

右ハ私共可申上筋ニモ無御座候得共、砲術ノ儀ハ当今御軍賦ノ根本ニ御座候間、忽ニ難仕儀ト奉存候、此段職分ニハ無御座候得共、存付ノ侭奉言上候、以上、

別紙此度鋳製方ヨリ御兵具方ヘ釼銃次渡有之、右掛見聞役共ヨリ承候趣ハ、御手当釼銃ノ惣員数右ノ通御座候間、為御見合申上候、右ノ員数ニテハ御府内ノ人体ニ比ベ候ヘハ四分ノ一位ニ御座候、兎角人体丈ハ御出来不相成候テハ、御軍賦惣鉄砲ト被　仰渡候詮不相建訳ト奉存候、前文ニ奉言上候御振合ヲ以、御買入ノ御趣法ニ被仰付候ヘハ、不遠御全備可罷成哉ト奉存候、

一燧石銃（ナポレオン式燧石機ヲ雷管機ニ改製セシ者）

九百弐拾四丁

内七拾四丁損物、
一雷帽子銃百弐拾三丁、
内四丁損物、
拾八丁矢竿無之、
右御当地御格護、
一燧石銃百弐拾七丁
右壱行江戸御手当用ニ被差登候、
一拾丁
右昇平丸御乗セ付、
一九丁
右京都并長崎へ御渡リ相成候、
一雷帽子銃拾丁
右御上下御行列為御持御用、
一右同弐拾六丁
右弐拾四間船・弐拾間船御備付、
一燧石銃百三拾丁
一雷帽子銃弐拾三丁
右諸座稽古用并御手当人数、免許人数へ拝借被
仰付置候、
合千三百八拾弐挺

内八百四拾七挺　当分御用立候筒
右ノ内
一弐百丁　急事御備方
一五拾丁　長崎援兵方
右ノ通御座候由、此段為御見合申上候、以上、
安政三年辰三月十九日
儀永孫四郎
市來正右衛門

四三六　蒸気船雛形製造事件意見上申

蒸気船雛形御製造方ノ儀ニ付、追々分テ被　仰出趣、
且又向井新兵衛（当時御側役）ヲ以
御内沙汰ノ趣謹テ奉承知、誠ニ以難有次第ニ奉存候、
依之蘭書取シラベ方ノ儀被
仰付候通、三月中旬比ヨリ混ト取掛、当分ニ至ル迄私
ハ勿論細工人頭取ノモノ共ニモ無怠、日々山田正太郎
（石川確太郎旧名）方へ差越、終日夜分迄モシラベ方仕、
図形取仕立、尤此度ハ都テ原書・原図ノ法則ヲ違ヘス、
毫髪モ粗略ノ廉無之様精々研究仕候、右ハ専ラ原書ポ（マ脱カ）
イケンスノ内ニ有之、マウドスライノバランスシーネ

ノ法規ニ基キ、初ハ西洋現尺度ノ図面取仕建、万端無漏泄細ニ相糺シ、其上当分ノ御船并ケーテルニ応用仕候大サニ縮割（枚カ）仕、御取建ノ賦ニ仕候、右ノ図形惣数三拾余数ニモ相及可申候、且原書ニモ機器要用ノ部ノミ尺度記シ有之、其外瑣細ニハ相知不申ニ付、無致方処ヨリ原図ニ比較シ、尺度ハ西洋諸般工芸相用候法則ノ尺度ヲ拵ヘ、惣テ彼国ノ算法ヲ以図并尺度ノ表量取仕建、図形尺度細微ノ処迄相定メ申候、且当分御出来ニ相成居候機器ハ、ヘールラムノ法ニ則リ、至極古昔ノ法ニテ、当今是ヲワルマシーネト唱ヘ、是ヲ訳スレハ陸機又ハ土提（堤カ）機ト申名義ニテ、全ク海船ニ相用候機器ニハ無御座由、勿論ボイケンスニモ一座ノ機器ハ、海船ニハ難用トノ趣記シ有之、右ノ機器ヲ原書ニ比較仕候処、第一シリンドルノ面積、蒸気ノ賦バランス并キユルツクノ動法規則ヲ失ヒ候ニ付、至極可也ノ取直ニテモ仕度、段々吟味仕候得共、右通算法ニ合ヒ不申候ニ付、迚モ御用立候程無覚束、右通ノ儀ニ御座候間、何程御入費何程心力ヲ尽シ候共、無益ノ儀ニ可有御座候間、正太郎ニモ申出候、殊ニ一座ノ機器ハ海用ノ船ニハ不相用トノ趣原書ニモ記シ有之、私出崎ノ時（安政元甲寅夏汽船スウビング将官「ハアーヒス」）分和蘭人ヨリ承候処モ其通ニ御座候間、兎角法規ニ不違二座ノ機器、新ニ御製造被

仰出度奉存候、当分ノ機器ニ今一座相加候テモ、全体法則ヲ失ヒ候儀ニ御座候間、終ニハ廃物ト相成ハ無疑儀ト奉存候間、乍恐

御英断被遊、右ノ機器ハ都テ被捨置、此節取シラヘ仕候図形ノ通御改製被

仰付度奉存候、尤蒸気船ノ儀ハ、

皇国御創業ノ御事ニ御座候得ハ、度々仕損シ候テハ人心ノ信不信ニモ相拘リ、且ハ他藩御響合モ如何敷御座候、尤当分ノ御船并ケーテルノ分ハ此涯可也御用立可申哉、然シ御船ノ儀ハ弥御用立候程ニ慥ニ難申上御座候間、否ノ儀ハ来春迄ノ間ニ何分吟味仕可奉窺候、依之機器ノ儀ハ当分御改製ノ方ニ振向ケ、専ラ取調可仕候ニ付、何分被

仰出奉願上候、

一右通取調方仕候ニ付、船ノ間数、蒸気ノ圧力、機器ノ格恰等ハ追テ図形ヲ以可奉窺候、且正太郎事ハ新参ノモノ（元来和州植村ノ藩臣、蘭学ヲ以テ御抱トナル）ニハ御座候

得共、元来謹密正直ノ者ニテ、就中此節ノ儀ハ厚キ御趣意拝承仕、昼夜心力ヲ尽シ相勤申候、全体謹重篤実ノモノ御座候間、御懸念ニハ不被為及儀ト奉存候、且御改製於被仰付ハ万端御厳重被仰出、左様無御座候テハ、諸役場ニヲヒテ取扱振粗略ニ有之、頑愚ノ諸役人共御用急埒不仕候ニ付、此段ハ肝要ノ御事ト奉存候、将又御船奉行等掛於被仰付候ハ、人物至極御シラベ有御座度、尤篤実ノモノニテ御趣意忘却不仕、

皇国発起ノ御創業ト差ハマリ相勤候モノニ無御座候テハ、奸佞ノ輩ニ欺惑セラレ可申ハ、差見得申候儀ト奉存候、

一御製造場ノ儀ハ此以前、磯土橋涯海辺ヘ被召建置候得共、御差支ノ訳有之、早々御引払相成、当分下町津畑ヘ仮木屋被召建置候、此後右場所ニテハ第一火用慎念遣敷御座候間、大門口御造立場（御船手造船場、現今料理屋等ノ在ル地）ヘ被召建候ハ、御弁利可宜哉ト奉存候、

一諸細工人共日用賃銭ノ儀ハ、昨卯年（安政二乙卯年）一統御減少被仰付候、然処細工人共儀ハ、別テ困窮モノ勝ニテ、日々ノ被下方ノミヲ以家内養育仕候、此度御減少ニ付テハ甚難渋仕候由、右ハ天明比ノ御規則ヲ引出シ申渡ニ相成候由御座候、其時分ハ米穀ヲ初諸品別テ下直ニ有之、白米壱升五拾六文位、味噌壱斤三拾弐文程ノ定価ノ由、当分ハ白米壱升百三拾弐文位、味噌壱斤六拾四文程ニテ、倍々ノ直組ニ御座候、然ルニ諸品ノ直段ニ不拘、古昔ノ被下ニ相成候得ハ、如何シテ今日ノ営可仕哉、甚不勘弁ノイタシ方ニテ、実ニ聚斂ノ名難免儀ニ御座候、左候ヘハ終ニハ

御聖徳ノ闕典ニ罷成リ、別テ嘆ケ敷次第ニ御座候、当今御本丸御休息所開キ御終甫（修カ）ニ付、余多ノ細工人共被召仕候ニ付、今日ノ渡世難儀ナル所ヨリ、御用細工相勤候儀相否ミ方々田舎抔ヘ迯去リ、諸人頼ノ細工イタシ候由、左候得ハ御作事奉行ヨリ行先相糺シ、召捕ヘ牢込等ノ数拾人ニヲヨヒ候由、右通被下方減少ノ取計仕候ハ、御家老ニハ末川近江、御趣法掛御用人ニハ三原藤五郎・中村新介此三人ニテ取扱仕候由、夫旨市中其外ニテ専風説イタシ、剰ヘ流行歌ニ拵ヘ、民ノ苦ヲ不顧ト申ヨウニ市巷ニ謡ヒハヤシ申候、誠ニ嘆ケ敷次

第、実ニ聚斂ノ臣アランヨリ、寧ロ盗臣アレト申儀的中ト奉存候、依之蒸気船御製造方并反射竈御造立方ノ儀ハ、都テ以前通ノ賃銭被成下度奉存候、左候得ハ諸向ノ儀モ随テ同様可罷成哉ト奉存候、此儀ニヲイテハ御政道ノ第一ナル事ト奉存候間、重役ノ名目等風分ノ侭聊不相憚有体奉言上候、

一山田正太郎事ハ前ニ奉申上通、至極正道精勤仕候ニ付、此後折フシ苦労ノ訳御賞シ、御心附等品克ク被成下度奉存候、且私共江吟味ヲ以奉窺儀モ可有御座候間、何卒新参ノ御取訳被為在度奉存候、且又諸細工人共モ、夫々精務ノモノヘハ同様被　仰付度、左様御座候ハヽ、御創業ノ儀故、イツレモ身命ヲ抛チ、御奉公仕候モノ輩出可仕ト奉存候、

一前ニ奉申上候通御改製於被　仰付ハ、第一主宰ノ役人私曲無之人物御撰用有御座度奉存候、当分通ノ御所置ニテハ掛役中親和一致イタシ候モノ無御座候間、多人数ノ工人召仕候場ニ相成候得ハ、末々ノモノ共賞罰厳重ニイタシ不申候テハ不相済、左候得ハ主宰ノ人物并掛役々ノ精粗ニ依テ、令ノ行ハルト不行ニ至リ可相成ト奉存候、

一当分売上人吉田宗次郎ト申町人、元来垂水素姓ノモノニ御座候処、段々所縁ヲ以御小納戸井上庄太郎ヘ取入リ売上イタシ、当今モ相勤居候、右モノ至極奸佞ノモノニテ、御船奉行橋口杢左衛門・折田八郎兵衛等ヘ過分ノ賄賂ヲ遣ヒ、売上品ニハ粗品ヲ欺キ、誰々（唯カ）過分ノ利ヲ得候テ、御上ノ御損亡莫大ノ儀ニ御座候、依之右モノ事ハ不日ニ不正ノ手数相糺シ、売上人差免申度奉存候間、此段被聞召　上置被下度、左候テ追テ其罪状詳ニ言上可仕候、

右通万端御改革被　仰付、御製造不被　仰付候テハ、御創業ノ儀故、通例ノ事ニテハ御成業無覚束儀ト奉存候、且又蒸気機器并船ノ間数等ハ、追テ図面ヲ以可奉窺候、此等ノ趣存慮ノ侭奉言上候、以上、

安政三年丙辰五月廿九日

市來正右衛門

右ノ通定式飛脚便ヨリ、江戸ヘ言上イタシ候事、（薩藩海軍史にて校訂）

四三七　磯永孫四郎上申

先度ヨリ磯ニテ御取建相成候蒸気船ノ儀ニ付、此節御旨意御達相成候哉ニ伝承候、右ニ付テハ去年肥後七左

衞門・市來正右衞門出崎ノ節、於彼表精微ニ見聞仕、召列候細工人共江モ心得サセ罷帰候ニ付、於御用屋敷蒸汽船雛形製作方仕候処出来上候ニ付、御家老初成田正右衞門・田原直助其外皆共拝見仕致感心候、七左衞門儀ハ先比出府被　仰付候間、其節ノ成行等委細奉申上候由御座候処、如何様

御聞通被為遊候哉、却テ不都合ノ向ニ相聞得、本ノ侭ニテ取直シニ不及、差急製造方相仕廻候様被　仰付越候由、有志ノ面々至極残念奉存候事ニ御座候、前ニモ奉申上候通於長崎ニ段々見聞探索仕候趣、且ハ御願済ノ上伝習ノ訳モ有之候ニ付、何卒此御方ニハ無申分蒸汽船御造立ニテ江戸ヘ御差廻相成度無余念奉存、市來正右衞門・中原猶介両人ヨリ、折田八郎兵衞ヘ熟談仕候得共、何分不和合ノ向故、慷慨ノ余ニハ激論ニモヲヨヒ候儀御座候間、畢竟此度水府軍艦ノ儀ニ付、

景山様（水戸公）ニモ、余程日本国中御失策ノ御響合モ有之、万一其通不宜時ハ即チ眼前ノ事ト別テ心痛仕、於御当地ハ御充分ノ蒸気船御製造ニテ、御差廻シ相成候テ、弥以

御英名ヲ耀シ申度、忠憤ヨリ壮年ノモノ共、手強ク論談イタシ候儀モ有之哉ニ承及申候、殊ニ当分ノ蒸気船ハ発端井上庄太郎・宇宿彦右衞門抔取建候儀ニテ、其後追々発明改正ノ儀ハ、絵図面等ヲ以彦右衞門ヘハ正右衞門・猶介ヨリ申遣シ、七左衞門ニハ直ニ承リ為申筈御座候処、如何齟齬イタシ候哉、若モ不宜儀ハ尋問イタシ、便利ノ儀ハ直ニ取用ヒ候社当然ノ事ト奉存候処、何分ニモ実用ノ意味私憤ヲ以通リ兼候筋ニ相見得申候、尤右江ハ江夏十郎ヨリ御船奉行ヘ差図等為申訳少シモ無之候得共、是以彼是ト響合相違イタシ候哉ニ承及申候、此儀ハ奸曲ノ輩ヨリ毛頭無之儀抔ト、実正等敷巧ミ出シタル事ニ相違無御座候、善悪共有之侭真実御聞通相成候得ハ、至テ其身共ニモ本意ニ可有御座候処、於中途ニ閉塞ノ次第誠ニ難堪嘆息仕候由、先度モ奉申上通、十郎并正右衞門・猶介ニハ少シモ御疑被為

在間敷者共ト奉存候ニ付、此度ノ否名ハ何卒御安堵被為遊候様、幾重ニモ私共ヨリ相考候処ハ如斯奉申上候、偏ニ奉仰

御聖德候、誠惶謹言、

安政三年丙辰七月廿九日

磯永孫四郎

右通上書七月廿九日ノ飛脚ヨリ、清水養正取次ヲ以被申上置候段、跡以被聞、草稿被見ラレ候間、写置モノ也、

四三八　砲術号令改定意見上申

砲術号令ノ儀ハ、嘉永丑十二月（嘉永六年）従公義分テ被仰渡趣ハ、彼方ノ利器要術ヲ取リ、此方ノ武備ニ相用候儀ハ聊不苦候得共、号令ノ儀ハ都テ国語ニ和解イタシ、難釈分ハ別段唱呼相建、蛮夷ノ挙動ニ不押移様可致旨被仰渡、猶又厚以思召号令被相定候、御領国中初生ノ人ニ至迄聞易ク難有奉存、別ニ号令ノ示教ニ不及、初ヨリ挙動ノ次第粗相弁ヘ、至此頃呼習ヒ候処、進退周旋最易ク相成、蛮語相用候時分ハ、初ニ号令ノ詞ヲ和解イタシ相示シ、次ニ業合ノ稽古ニ取掛候儀ニ御座候処、国語ニ被相替候ヨリ、其儀ニ不及、殊ニ右詞ハ御国ノミ通シ候詞ニ無御座、何方ヘモ通シ候詞ニ御座候処、当分間ニハ御国ノミ通シ候詞ノ様心得違候モノモ有之、都テ蛮語ニ被復候欤、又ハ江戸同様蛮語ニ邦言相交ヘ候欤、且ハ漢語ニ字音ノ詞相交用度、左候ハ簡易ニ可有之抔吟味イタシ、御改革相成候様申出候賦ノ内定ニ御座候由、右ハ易簡ノ語相用候ハ、宜キ訳モ可有御座候得共、元米号令ノ儀ハ愚夫痴蒙ノ兵卒共ノ耳ニ触易クシテ、隊列ノ変化聚散ヲ自在ニイタス為ニテ、何ソ易簡ヲ旨トシ、余国ノ風ヲ承ルニヲヨハサル儀、殊ニ御定ニ相成候詞ヲ専皇国固有之五十音ヲ本トシ、八田喜左衛門（知紀）ヘ厚ク勘考為致候詞ニ御座候間、是ヲ廃棄仕ハ誠ニ歎ケ敷次第ニ御座候、其上　公辺ノ被仰渡ニモ、彼方ノ利器要術ヲ取リ、此方ノ武備ニ相用候儀ハ不苦候得共、言語マテ蛮夷ノ挙動ニ慣候テハ不相済トノ趣ニテ、全ク異邦ノ情意ニ拘泥仕候テハ、　御国体ニモ相拘リ、且ハ　公辺ノ令ニモ違ヒ、夫ノミナラス厚以思召被定置候儀、屢々御改相成候テハ、人心疑惑ノ基、又ハ是迄稽古イタシ来候故、此後新ニ教導仕直シニ相成候訳、尤御流儀ノ儀ハ専ラ西洋ノ法則御取用ノ事ニ候得共、第一御先代様ノ御軍法ヲ基本ニ被建置、和漢古今ノ良法御

大成ノ御流儀ニ御座候ヘハ、号令ノ儀ハ軍法ノ専一ナルモノニ御座候間、蛮語又ハ他国ノ風ニ拘リ、今日ノ華麗簡易ヲ不求、一般ノ御家法被建置度御事ニ御座候、西洋ノ軍書ヲ閲シ候ニ、数拾万ノ兵卒、歩・騎・砲ノ三兵共ニ号令ヲ以、進退離合ノ駈引仕筋ニ相見得、其詞何レモ常俗ノ語ニ相異儀無御座候、尤西洋ニ限ラス、和漢共ニ軍事ノ眼目ニ御座候間、江戸風又ハ蛮語等相用ニヲヨハス、殊ニ衆人信用致候御国流被建置度、今更ニ相成蛮語等又々相用候テハ、

公辺ノ令ニ対シテモ如何敷、人心ノ疑惑ヲ生シ候基、殊ニ砲術ノ儀ハ、於西洋モ日ニ新ニ発明イタシ候ニ付、此方ニモ業合丈ハ新法御取用可相成事候得共、是サヘ人々ハ狐疑仕候モノ不少砌ニ、号令マテ折々変革仕候テハ不染付ノ媒ニテ、終ニハ御世話難被届可罷成哉、且又追々他藩ヨリ入来リ、御入門（伝習ノ通語）奉願モノ許多有之候ニ付、当分ノ号令ニテハ如何敷ト申族モ間々御座候得共、御入門奉願候モノハ、第一御聖徳ヲ感戴仕、次ニ御流儀ノ尊大ナルヲ慕（マヽ）リ候訳ニテ、号令ノ易簡不弁利ニ拘リ候儀ハ枝葉ノ事ニテ、可恥訳ハ少シモ無御座候、他藩ノ人ヘ対シ候儀ハ、人才ノ有無、軍ノ調不調トノ儀ニテ、兼テ被仰出候通、礼義廉恥ノ道理ニ不昏、律義ヲ嗜候テ、四方ニ使シテ君命ヲ恥シメサルノ事共、確守仕候儀ニ御座候、右ノ趣私共苦心仕罷在候ニ付、若哉前文通御改正奉伺儀モ難計奉存候間、前広極内奉言上置候、以上、

但当分ノ号令ハ、宇和島并土佐其外ニテモ相用候由御座候間、此段モ奉言上候、

安政三年丙辰三月九日

市來正右衛門
磯永孫四郎

四三九　藩吏ノ悪弊建言

愚昧ノ小臣甚不敬至極多罪ノ至奉存候得共、聊存詰メ候浅慮ノ趣奉言上候、

御政事万端御盛大被為行届候御所置追々被仰出、就中窮民御救助ノ為、常平倉御取建ノ儀ヲ初、文武御充実御軍事御手当向ノ儀共、其外一々誠ニ以難有次第、愚夫愚婦ニ至迄感戴仕、追々風俗モ正敷罷成リ候向ニ御座候、然ルニ微賤ノ身トシテ別テ恐入儀ニ御座候得トモ、右通不容易　御趣意被為在候ニ、当時諸役場ノ情

態且所置振窃ニ相窺候ニ、万端ノ御政道都テ御親敷
御指揮被為遊候得ハ、夫ニ随テ一弊相起リ、何事モ御
下知次第、御沙汰次第ト善悪精粗ノ差別ナク、御下知
ニ洩候儀ハ、手ヲ附ケスシテ不叶事物モ捨置、御下知
相成候儀モ細ニ手ヲ付ケ候向ニ無之、表通リノ取計ノ
ミニテ打過シ、夫故益因循固滞ノ陋風差起リ、万端手
後レノ儀而已有之候、畢竟重役其外諸役人共、自己ノ
後栄ヲノミ心掛、御政道ノ大切ナルヲ軽々敷相考ヘ、
遅逗被
仰渡候難有
御趣意モ下ニ流達不仕、
御前ノ御都合ヲ只管取繕候、実情奉告ノ儀十ニシテ二
三、先ツ其第一ヲ挙テ奉申上候ニ、士風御取直シノ儀、
分テ御手厚ク被
仰渡候得共、一ト通書面ヲ以申渡シ、士気奮発仕候様
ノ所置教法モ無之、悪ヲ退ケ善ヲ挙ケ候向毛頭無御座、
賞罰モ不明、軽薄邪姦ノ輩出頭超過イタシ、威権ヲ張
リ、御政道ノ重ヲ担ヒ、勝手我侭ノ所置不相止、正直
篤厚ノ人ハ却テ軽侮仕、賄賂進物ノ筋益陰悪ノ手筋取
計、当分ハ白昼ニ進物品持運ヒ（フカ）儀ハ無之、夜分窃ニ持
入レ、剰ヘ反却スル等重立候品ハ、同様ヲ以申入置、
跡以反物屋手伝等売用ノ姿ニ取拵ヘ為持入、且ハ金子
懐中イタシ、内証妻女等ノ手ニ為取候様ノ手数相用ヒ
候由、如何卑劣貪慾ノ輩要路ノ重役相勤居候ニ付、自
然人心安堵不致、重役共ヲ軽蔑イタシ、識慮有之慷慨
ノ人ハ大ニ嘆息仕候、此等ノ儀ハ格別御手ヲ不被為付
候テ、折々被
仰出モ有之砌ニ、甚以不届ノ輩ニ御座候、如斯ノ族ハ
速ニ御退ニ相成当然ノ事候処、畢竟要路ニ人才無之訳
御座候、依之要路ニ罷在候邪曲奸佞ノ輩、都テ御退ケ
ニ相成リ、至誠篤厚忠良人望有之モノ御撰用無御座候
テハ、是迄被
仰出候難有
御趣意、且追々御世話被為在候御事共、流達仕候義無
疑儀ト奉存候、尤士風ノ善悪ニ依テ御政道ノ善悪ハ相
知レ、実ニ御国政ノ根本ニ御座候、其源流ハ至誠純一
ノ人才要路ニ御撰用ニ御座候、又当分モ一ト通リ正直
ノモノ御用ノ儀モ御座候得共、正直一扁ニテ器量無之、
邪曲ノ人ヲ退ケ候テ人才ヲ進候程ノ働無御座、時ノ柄
権ヲ握リ候モノハ悉ク奸佞ノ族勝ニテ、

御上ノ御機嫌ヲノミ相謀リ、軽薄ノ所置誠ニ以嘆ヶ敷
次第ニ御座候、当分ノ向ニテハ
御上ニハ別テ御心痛被為遊候得共、要路ノ輩ハ其程ノ
考ハ不仕候、是小臣等甚憂嘆ノ第一ニ御座候、依之愚
考仕候ニ、兎角一癖有之モノニテモ、至誠ノ人御撰用
ノ儀御急務ト奉存候間、存詰候儀奉申上候、其人物迄
奉申上候、別テ不敬ノ至奉存候得共、御膝辺ニ被召仕、
人心ノ善悪邪正等ハ勿論、下民ノ情事等奉告、
御聖慮閉塞不仕様、御奉公可仕者ハ關勇助・郡山一介・
江夏十郎、此両三人ニ限リ候事ト奉存候、右ノモノ共
人品ノ儀ハ被知召
上候事故、別段奉申上ニハ不及事ニ御座候間、何卒此
涯早々出府被　仰付、下情ハ勿論、要路ノ悪弊等詳ニ
言上被　仰付候ハ、乍恐当今ノ次第ハ
御驚愕モ可被為在哉ト奉存候、尤右モノ共ハ御親敷被
召仕候ハ、一廉ノ御補佐可仕モノ共ト奉存候、此等ノ
儀不束ノ私甚不届ノ至奉存候得共、前ニ奉申上通難有
御尊慮ノ趣下々ニ流兼候ノミナラス、人心甚疑惑仕候
ニ付、実ニ慷慨ニ不堪処ヨリ犯多罪、廟堂ノ情態并人
物迄モ井蛙ノ管見ヲ憚ラス、存詰候儀不残奉言上候、
素ヨリ一己ノ浅慮ニテ、万々一モ御見合ノ片端ニモ罷
成候得ハ、大幸奉存候、誠惶誠恐、謹言、

安政三年辰三月廿八日

市來正右衛門

右飛脚便ヨリ清水ウチヘ頼差上候処、慥ニ御受取被成
トノ趣、五月廿九日ノ飛脚ヨリ申来事、

四四〇　蒸気船製造届書

蒸汽船雛形御造立ノ儀ニ付テハ、追々分テ被　仰渡趣
謹テ奉承知、先達テヨリ蘭書シラベ方山田正太郎江西
洋法規ニ則リ、図形并尺度為相定、此節御小納戸伊集
院藤九郎ヘ差出候ニ付、井上庄太郎方ヘ差廻ニテ可有
御座、庄太郎ヨリ御披露可申上ト奉存候、且当分御出
来相成居候機器ハ、御取直シ相成候テモ御用立程無覚
束御座候間、其段モ委敷申出置候ニ付、何卒此度取シ
ラヘ通、新ニ御造立被
仰付度奉存候、右ニ付テハ御造立場、其外掛役々ノ風
俗等ノ儀ハ、先々月末奉申上置通、是迄ノ陋俗屹ト相
改候様、稠敷
御沙汰被為遊被下度奉存候、余多ノ職人共召仕候故、

掛役正直ニ無之候テハ、制令難被行御座候、乍恐奉申上候、当今ノ御仕向ニテ御造建被　仰出候共、御成功ハ無覚束御座候間、只今通ニテ被　仰付候ハ、私ニハ迚モ御用掛ハ相勤間敷奉存候、此等ノ趣甚苦心仕候ニ付、聊相含候趣、不顧恐奉言上候、以上、

安政三年丙辰七月廿九日

市來正右衛門

右飛脚ヨリ江戸へ申上候、伊集院へ差出候書面ハ略之、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政四年

安政四年丁巳（清暦咸豊七年 西暦千八百五十七年）

神武天皇御即位紀元二千五百十七年

孝明天皇（統仁第百二十代）御即位（弘化四年丁未九月）十一年（御宝算二十七）

将軍家定公（第十三世）襲職（嘉永六年癸丑十月）五年

藩主齊彬公（第二十八世当時薩摩守ト称ス）知政（嘉永四年辛亥二月）七年（年四十八実八四十九）

藩主忠久公（薩隅日三州及琉球国受封（人皇八十二代後鳥羽天皇寿永五年即チ文治二年）六百七拾二年）

関白左大臣九條尚忠公（正月左大臣ヲ辞ス）

左大臣近衛忠熙公（正月進）

右大臣大炊御門經久公（二月辞職）

同　鷹司輔熙公

内大臣鷹司輔熙公

同　廣幡基豐公（四月辞職）

同　三條實萬公

老中

阿部伊勢守正弘（福山藩主）（六月逝）

堀田備中守正篤（佐倉藩主）

牧野備前守忠雅（長岡藩主）（八月罷免）

松平伊賀守忠優（上田藩主）

久世大和守廣周（関宿藩主）

内藤紀伊守信親（村上藩主）

若年寄

本多豐後（ママ）守助賢（飯山藩主）

本多越中守忠德（泉藩主）

遠藤但馬守胤統（三上藩主）

本庄伊勢守道貫（高富藩主）

酒井右京亮忠毗（敦賀藩主）

鳥居丹波守忠擧（壬生藩主）（九月逝）

本郷丹後守泰固（川越藩主）

所司代
脇坂淡路守安宅（龍野藩主）八月西丸老中ニ転ス
本多中務大輔忠民（岡崎藩主）

京都町奉行
浅野中務少輔長祚
岡部備後守豐常

伏見奉行
内藤豐後守正縄（岩村田藩主）

国老
○島津石見久浮
○島津豐後久寳
○島津（ママ）將曹久德（嘉永四年七月免）
○末川（ママ）近江久平（安政三年七月免）
○喜入安房久通
樺山伊織久成
新納駿河久仰
鎌田出雲正純
島津左衛門久徴
島津伯耆久福
島津　登久包

以上十一名前代ヨリ勤続ノモノハ○印ヲ付ス

目録

水戸前中納言殿国事尽力ノ概略及ヒ猜疑ノ一班（既）
德島侯国事尽力ノ概略
橋本左内西郷隆盛ヘ与ル書翰
福井侯及ヒ齊彬公国事鞅掌ノ概要
齊彬公水軍創設ノ概要
齊彬公造士・演武ノ二館名号更正之内定
齊彬公瓦斯燈創試ノ事実
御下国間モナク磯邸ヘ被為入造船又ハ軍備ノ諸事指揮シ玉ヒシ事実
谷山郷和田村ノ海浜ヨリ荒田村海浜ニ干寄地着手之事実
福井侯齊彬公ヘ与ル御書簡及ヒ齊彬公御返翰
米国使節幕府ニ贈ル本込新銃模形借用セラレムトノ御書翰
当時ノ形勢米国人ノ意思要略
水戸前納言殿堀田備中守ニ与フル書
昨夢紀事抄
西郷隆盛中根靱負ト密話（昨夢紀事ニモ記ス）

齊彬公福井侯ニ与フル密書及ヒ御建言書
〔齊彬公米国使節登営事件建言〕(脱カ)
鎌田正純小野寺庸齋ニ質問書
永井玄蕃等魯西亜布恬廷ト応接之趣上申書
阿部伊勢守死去及ヒ事蹟概略
非蔵人日記抄
当時ノ実況
橋本左内西郷吉兵衛ニ与ル書
彦根藩士宇津木六之丞長野主膳ニ与ル書
中山忠能其他六卿上書
竹内半右衛門覚書鈔
造船方ノ吏田原明章記事鈔
黒岩堅藏記事抜萃
山川港ニ外国人接待所建設御目論見之事実
島津折烏帽子ヲ用ラレシ事実
風俗矯正御汰汰之趣布達
拝借金被下切ノ布達及ヒ事実
御家宝ノ刀剣朝廷ヘ御内献之事実及ヒ内勅
丁巳閏五月御下国之事実
鹿兒島府下ニ書肆開カレタル事実
和蘭領事官上申書（佐賀侯密贈）
英人廣東攻撃ノ始末
二月五日永持享次郎御徒目付ヘカピタン申上候
英人廣東攻撃ノ事実報告
集成館紀事鈔（市來廣貫紀事、石室秘稿）
以上四十条

四四一　総攬

正月

元日

齊彬公御在府（本年四十九）
齊興公御在国（城北玉里ノ別邸御棲居）
年首ノ佳儀江戸邸ニ於テ御執行、先規ノ如シ、城中ニ於テモ先規ノ如ク、御一門四家大身分其他登城、御家老ニ謁シ先規ノ如シ、尋テ玉里邸参賀、

二日

齊彬公御登営、先規ノ如シ、

三日

神明御社参、尋テ大圓寺御参詣、

六日

鹿兒島砲術館開場、大小砲銃隊及ヒ歩騎砲兵操練、先規ノ如シ、御名代島津周防（忠教）

十一日

諸役人昇級及地頭職転換、先規ノ如シ、

御小姓組番頭兼御用人高橋縫殿（種）琉球国在番奉行被命、来午春渡海、郷原轉ヘ交替奉命、

御小姓組番頭島津帶刀久直琉球国守衛奉行被命、来午春渡海、諏訪數馬兼ヘ交替奉命、

御小納戸東郷彌十郎示現流師範ヲ御納戸奉行ニ、御同朋頭重玄蹟（久脱カ）ヲ御小納戸頭取ニ進メラル、此日江戸西向邸内西筑右衛（頭）門長屋出火、差扣御伺、

十八日

大信公廿五代重豪公二十五回忌ヲ福昌寺ニ行ハル、

廿三日

齊興公騎兵隊ヲ天保山ニ覧玉フ、実況後巻ニ記ス、

廿五日

国老新納駿河久仰、齊興公御参府御首途御代参式事、先規ノ如シ、

廿八日

齊興公玉里邸ヲ発シ御参府ノ途ニ就セ玉フ、三月十八日江戸高輪邸ニ御着、扈従人名及ヒ御道中御休泊等後巻ニ記ス、

四月

朔日

番頭御側役兼務竪山武兵衛ヲ御勘定奉行御側役勤ニ進メラル、

此日齊彬公江戸邸ヲ発シ、御帰国ノ途ニ就セラル、

五月

二十四日

公御着城、竪山武兵衛等扈従ス、扈従人名及ヒ伏見駅御滞在中近衛家（近衛家奥表日記参照）参殿、皇居御遙拝、嵐山御遊覧等ノ事実後巻ニ記ス、

閏五月

十五日

御目付役梅田九左衛門ヲ鏡知流槍術師範ヲ（衍カ）御小納戸ニ進メラル、

十六日

磯邸御滞留、集成館ヘ日々御親臨、大小銃砲製造ヲ指揮シ玉フ、

七月

朔日

御庭奉行御鳥預頭取江夏十郎ヲ御小納戸御加役(伽カ)兼務ニ進メ玉フ、

十九日

市來正右衞門(四郎旧名)ヲ御広敷番頭御庭奉行務兼御徒目付勤ニ進メ、琉球ヘ御内用ノ儀ヲ以テ渡海命セラル(事実後巻ニ記ス)

八月

十三日

琉球人恩河親方ヲ磯邸ニ召シ、在留英佛人ノ処分其外密用ヲ命セラル(事実後巻ニ記ス)

此日地雷・水雷ヲ試ミ玉フ(事実後巻ニ記ス)

十六日

御写真ヲ御手自ラ試ミ玉フ(事実後巻ニ記ス)

十九日

市來ニ写真ヲ玉フ(事実後巻ニ記ス)

此月ヨリシテ動植物館ニ金銀分析ヲ為サシム(事実後巻ニ記ス)

廿一日

小銃師範ノ輩ヲ磯邸ヘ召サレ射的命セラル、其時従来ノ火縄銃ヲ雷管機ニ改製ノ御持筒(御手銃ヲ御持筒ト通称ス)各一挺ヲ賜イ、実用ニ於テ雷管機ハ風雨ノ憂ナク是レニ若クモノナシ、故ニ習練スヘシトノ御言ナリシト、元来小銃家ノ輩ハ固陋頑癖ニシテ、雷管機ノ弁利ナルヲ識別セズ、火縄銃ノ古式ヲ主張シ、実用適否ニ心ヲ注サリシ故、如此訓諭セラレタリトナム、是ヨリシテ稍々開悟セリト云フ、当時小銃師範ハ種子島次郎右衞門・末川近江久平・郷原轉寛久・和田乗介ノ四家ナリキ、此雷管機銃ハ洋製ニ倣ヒ、従来ノ火縄銃ヲ折衷改良シタルモノニシテ、命中モ能ク且軽便猟用ニ尤モ宜シ、是レ本藩ニ於テノ発明ナリキ、其他許多ノ御手銃モ多ハ改製セラレタリ、

九月

八日

御小納戸見習三原藤十郎ヲ御小納戸ニ進メラル、

九日

申ノ刻第六公子御誕生、哲丸公ト称ス、生母伊集院氏(名ハ須摩)、此日二ノ丸ニ於テ重陽ノ宴ヲ開カル、御一門四家及ヒ御三役其他君側ノ輩ヲ召サレ、酒饌ヲ賜ヒ、詩歌ヲ催シ玉フ(御歌集参看)

十日

二ノ丸演武場ニ発火操練、毎ノ如シ、若君御生誕、国老等発火演習停止ヲ請願ス、同月十五日竪山武兵衛ヲシテ尊旨ヲ懇諭シ玉フ、

十五日

若君ニ哲丸君ト命名セラル、

十月

朔日

玄猪ノ佳式ヲ行ハル、先規ノ如シ、

七日

学制改革ノ訓令ヲ発シ普ク布達セシム（後巻第〔ママ〕号参看）

九日

御城下諸士ヲ各組頭宅ニ召集シ、学制訓諭令ヲ拝読セシメ、及ヒ封内一般布〔頒カ〕領ス、

十一月

二日

造士館教授及ヒ助教ノ両役ヲ召シテ、曩キニ訓諭セラレシ趣ニ対シ、時勢変遷・文学ノ必用・国威揚墜ノ大事ナルヲ親諭シ玉フ、

三日

先規ノ如ク稲荷社大祭鏑流馬ノ祭式ヲ行ハル、御代拝島津讃岐（貴敦）

此月税所敦子ヲシテ哲丸君御付ヲ命セラル（税所龍右衛門カ未亡人）

十二月

十三日

煤払式ヲ城中ニ行ハル、

十五日

御一門四家及ヒ三重役ニ歳暮ノ宴ヲ大奥ニ開キ玉フ、

廿八日

歳暮ノ賀儀ヲ城中ニ執行シ玉フ、先規ノ如シ、畢テ福昌寺・浄光明寺ノ先塋ニ詣シ玉フ、

四四二　水戸前中納言殿国事尽力ノ概略及ヒ猜疑ノ一班〔斑〕

〔水戸斉昭〕前納言某侯〔松平慶永〕ニ与ヘシ書ニ、拙老事防禦御用向ハ伺候ヘ共、大方ハ表発イタシ候跡ニテノミ承リ候云々相達候故、心得ノ為見セ候ト申儀多ク、タトヘ愚慮ニ相違ノ事有之候トテモ、表発相成後彼是ハ申兼、〔脱カ〕又申候迚モ御取上ニ不相成候ヘバ〕毎度ソレ切ニ致シ候、政事ノ方伺候様ニトノ仰

ハ承リ候ヘトモ、閣老ノ出来候事サヘ相談無之、此度再勤之者ナトハ（堀田ヲサス）兼々ランヘキ（蘭僻乎）故、下官モ不好、阿（阿部）モ不好候処、何レヨリノ建白ニテ相成候ヤ云々（再勤ヲ云フナラン）、右サヘ御相談モ無之上ハ、全クノ案山子ニ罷出候儀故、度々御免ヲ奉願候ヘハ、ソレハ相済不申、是迄之所ハ全ク人見セ看板同様ノカ、シニ候ヘバトアリ、以テ此情ヲ察スベシ云々、

（備中守正篤、老中、佐倉藩主）（僻）（伊勢守正弘、老中、福山藩主）（其カ）

当時営中ノ事情是ヲ以テ察スヘシ、

四四三　徳島侯国事尽力ノ概略

松平阿波守（蜂須賀斉裕、徳島藩主）ハ上書シテ、乱ニ臨ンテ京ヲ守リ、又自カラ上京シテ、禁裏ヲ守護スルノ意ヲ陳ス云々、以下略ス、

四四四　橋本左内西郷隆盛ヘ与ル書翰〔安政五年〕

御直展

拝呈、然ハ過日ハ毎々御苦労相成、御陰ヲ以テ内廷ノ御都合（継嗣ヲ云フ）逐々宜御模様、千万御同慶ニ奉存候、逐一言上（慶永公ヘ）仕候処、小拙ヨリ宜可得御意旨モ被申付候、偖尓后例件御都合別ニ相変候事ハ無御座（候脱カ）、不相替世評ハ紛々ニ候ヘトモ、所要大本（将軍）ハ動揺不申塩梅、実ニ頼母敷存居候ヘトモ、何分大切ノ事故、寸歩モ見放ハ出来兼候、殊更人情反覆可恐義ト存候間、此上トモ厚御尽力為国家奉願候、且又今般弊国内用ニ付、国元早駆ニテ罷越、来月下旬迄留守ニ相成申候、留守中ハ中根覈負ト申候同志ヨリ、万端御掛合可申上候、此人ニハ小拙同様御打明ケ被下聊仔細無御座候、此段出立前以参、御頼談可申上存居候ヘトモ、迚モ其暇ナク、不能已以書中得御意候、尤国元行他ヘハ秘居候ヘトモ、御同志（極脱カ）ノ中故、乍密々相洩置申候（此脱カ）条御含置可被下候、尚委細帰府之上万緒可申上候、乍憚堀兄（仲左衛門）ヘハ宜御伝声奉願上候、右得貴意候、（為脱カ）早々頓首、

（脱カ）（包）

正月廿六日夜認

追テ中根ハ万事貴兄ノ事相咄置候、寡君（慶永公）モ承知ノ義ニ御座候間、呉々御労心ナキ様奉願候、扨今朝下部兄（伊三次）（日下部）御光臨ノ由、然処外向ヘハ不快ト申、相断候様取次ヘ申付置候故、御人柄モ不弁、無訳御断申上候由、実以赤面恐怖之至、何レ他日面謝可仕候ヘトモ、此義貴兄ヨリモ宜被仰上候様相願申置候、実以同志中ハ不抱（包）相語度事ニ候ヘハ、必小

拙虚ヲ設御断ハ不申上候条、御陳告可被下候、何分時候御厭御精勤ノ程奉希上候、以上、

已上西郷吉兵衛氏ヘノ書簡　〔橋本景岳全集にて校訂〕

四四五　福井侯及ヒ齊彬公国事掌ノ概要

〔慶永、福井藩主〕松平越前守ハ将軍ノ親藩ニシテ賢明ノ聞ヘアリ、深ク天下ノ事ヲ憂ヘ、内訌外患昏弱ノ主（将軍ヲ云フ）能ク制スル所ニ非ルヲ憂ヘ、嘗テ一橋刑部卿〔慶喜〕ヲ引テ、以テ西丸ニ立テントスルノ意アリ、松平薩摩守〔島津斉彬〕モ亦夙ニ此意ヲ同フス、初メ其女〔斉彬養女敏子〕ヲ将軍ニ嫁スル、因テ一橋ヲ立テ、西城トスルノ議ヲ賛セント欲ス、然レトモ未タ発スルコト能ハス（昨夢紀事及ヒ再夢紀事・逸史補〔事脱カ〕・対話書等参照シテ其事実ヲ証スヘシ）

四四六　齊彬公水軍創設ノ概要

薩隅日ノ三州ハ、東南西悉ナ海ニ面シタル国ナルカ故、船艦ヲ備ヘ水軍ノ設必要ナルヲ以テ、水兵創設予定セラレ、其模範ハ英国式ニ則ラレタリ、同国ハ世界第一ニ海軍整備ノ由ナレハ、彼ノ国ノ制ニ則リ、取捨折衷シ調査スヘキ旨、石川確太郎ヘ命セラレタルハ、天下ニ率先開設セラレ、模範タランノ尊慮ナリシ由、其時分石川ヘ御命シノ御言ニ、英国ハ日本ト稍同様ノ国ニシテ、唯天度異ナリ、寒暖ノ差アルノミニシテ、同シク島国ナレハ海軍ヲ整理シ、世界中各所ニ属地ヲ弘メ、亜細亜州中ニモ手ヲ延シ、印度過半ノ地ハ所領トナレリ、日本モ船艦ノ製ヲ開キ、水軍ヲ強大ニシ、英国ニ戻ラサル様国威ヲ張ラサレハ、皇威ヲ張ルノ備足レリト云フヘカラス、出テ制スル程ノ勢ニ至ラサレハ、自国ノ守備モ充分ナルヘカラス、其目的ヲ以テ船艦ヲ製造シ、水軍ヲ設ケテ、国威ヲ張ルノ手初メトスルノ見込ナリ、船艦ハ既ニ手初ナシタレトモ、其製未タ未熟ナリ、尚ホ此上研究シ、日本中ノ造船ハ悉ナ我レニ引受ルノ見込ナリ、水軍モ双ンテ精練シ、航海術モ日本中ノ模範トスル迄ニ練修ノ見込ナルソ、トノ御言ナリシト、石川ハ這御言拝承シ、感発勉強他事ナク取調タリ（石川ハ元来蘭学者ナリシカ、這ノ命ヲ奉シタルニ因リ、英学ヲ研究シタリト云フ）、右御沙汰アリシハ安政四年六月、集成館ニ於テ同人拝承セルヲ、廣貫モ親シク傍承セリ、公ノ遠図深謀測リ知ルヘカラスト雖モ、宇内雄飛ノ基ヲ開カレンノ御志素知ルヘキナリ（石室秘稿）

四四七　齊彬公造士・演武ノ二館名号更正之内定

学風矯正ノ御趣意ハ、御書取ニ明ナリ、然ルニ其際　御沙汰之趣ニ、造士ノ文字其出処モアルコトナレトモ、俗ニ見ル処ニテハ、士ヲ造ル迄ノ様、心得違ノ者ナキニアラサルベシ、館名ハ雅俗ニ通シ、一聞其意ヲ解シ、誤マラサル様ニコソアラマホシトノ御言ニテ、關廣國・江夏直義ヘ取調命セラレタリト、両人ハ種々取調、江戸昇平（昌カ）館、水戸ノ弘道館、長門ノ明倫館、熊本ノ時習館等、其外各藩有名ノ館号ヲ集メ、而シテ文武双通ノ義ニ因リテ、明道館ト名付ラレテハ如何ント窺ヒ奉リシニ、御意ニ適ヒ、来年参府ノ上、

高輪様（齊興公）ヘ窺ヒ発令スヘシトノ御事（言カ）ナリシト、演武館ハ相当ニテ雅俗ニ通シ、誤リハナカルベシ、然レトモ弓馬槍剣ノミノ演武ハ、其要ヲ欠キタルカ如シ、因テ是ノ後ハ兵隊ノ調練ヲ開キ、大小砲修練ヲモナサシムヘシ、二ノ丸ニ取建タルハ、手許ニテ日々見分ニ出ル場所トスヘシ、ナト、ノ　御言ナリシト、之レ安政四年丁巳六月ノ事ナリシト云フ、

四四八　齊彬公瓦斯燈創試ノ事実

凡斯燈創試ハ安政四年丁巳七月、集成館内大砲鑽開場ニ創試スヘキ旨命セラレタリ、是ヨリ先キ、松木弘安・八木稱平ヘ瓦斯燈ノ用法ヲ記シタル蘭書ノ翻訳命セラレ、其記スル処ニ則リ、簡略ノ器械ヲ製シ、試ムルニ容易ニ其功ヲ見タリ、而シテ後チ磯御茶屋御浴室ノ側ニ小室ヲ装置シ、御庭中ニ在ル石燈籠毎ニ気管ヲ通シ点火セラレタリ、是レ同年八月初ノコトナリキ、是レ日本ニ於テノ嚆矢ナリシト云フ、是ヨリ府下上下市街ニ開設ノ御目論見ニテ、先ツ市中ニ於テ費ス処ノ大小各戸燈油ノ蕪青種ノ数ヲ量リ、瓦斯器械建設ノ費用、補償ノ予算ヲ立ツヘキ旨、三原藤五郎及ヒ廣貫等ニ命セラレ、器械ハ和蘭人ヘ誂ノ積ナリキ、

四四九　御下国間モナク磯邸ヘ被為入造船又ハ軍備ノ諸事指揮シ玉ヒシ事実

四四九の一　集成館

右磯御茶屋御囲内ヘ御取建相成候反射竈・高竈・鑽開台（洋名ボーレンバング）、其外諸製作等致候場所、総名右之通相唱候様被　仰付候条、此旨向々ヘ可致通達候、

但右製作方へ被掛置候面々ヲ、反射炉掛ナト、、
其場所ヲ差テ被　仰付候得共、以来集成館掛ト
相唱、諸書付等ニモ其通相認候様被　仰付候、
八月　駿河新納久仰

四四九の二
丁巳閏五月十六日磯邸へ入ラセラレ、御滞在数日、集成館ニ於テハ大小砲製造ノ御指揮、或ハ造船場（現今紡績場又ハ砲台ノ辺）ニテハ製造方ノ御下知アラセラレタル事実前記ノ如ン、略ス、

四四九の三
当時掛役員左ノ人々ナリ、

御家老御軍役掛	新納駿河守久仰
御側御用人御軍役掛	三原藤五郎経
御側役御趣法方掛	福崎助八
御小納戸	井上庄太郎
御小納戸兼御伽役	江夏十郎義直
物奉行兼御徒目付	市來正右衛門広貫
御庭奉行兼御徒目付	宇宿彦右衛門
御徒目付	清水源兵衛
仝	郡山一助無隠
御徒目付兼御庭方	中原猶介
御庭方兼務	鎌田五左衛門政
仝	磯永喜之助周毅
洋学者	石川確太郎
職工頭取	濱田平右衛門
仝	千葉助十郎
御作事方下目付	福山半太夫
仝	土持半兵衛

右外筆者三名、会計ヲ兼タリ、

四五〇　谷山郷和田村ノ海浜ヨリ荒田村海浜ニ干寄地着手之事実

谷山郷和田村ノ海浜彎崎ヨリ、鹿兒島荒田村沙〔砂〕揚場ノ海浜（一名天保山）迄直線百余丁ノ海中ニ、棒杭ヲ打チ、干寄ヲ付ケ、埋築シ、水陸田開発ノ御見込ニテ、陸ヨリ沖手ノ方ヘ大凡ソ五・六町乃至三・四町ノ所ニ、棒杭ヲ打ツヘキ旨命セラレタリ（沖手ノ方ハ直線ニ棒杭ヲ打チ、陸手ハ自然地形出入シタル故、間数ノ多少アリ、脇田村ノ如キハ稍突出セル地形故、沖ノ方ヘ間数二・三町ニモ足ラサル地形ナリ）、安政四年ノ冬ヨリ同五年ノ夏ニ至リテ、数多ノ杭ヲ打チ

終レリ、其時分ノ御言ニ、斯ク棒杭ヲ打チ置クトキハ、年ナラスシテ干寄リニ埋リ、労費寡フシテ田畑トナルベシ、其時石垣ヲ築キ、波濤侵入ノ堤防ヲ築キ、而シテ水利ヲ通シ、田地トナスノ見込ナリ、霖雨或ハ大雨ヲ俟チ、各所ノ川々（此間三・四ノ川アリ）溝筋、其外雨水ノ流レ来ルケ所ヲ予メ見計ヒ、人夫ヲ掛ケ、川底ヲ堀リ、或ハ山岳等ヲ崩シ、雨水ノ力ヲ以テ流シ入レ、干寄ノ中ニ流レ止ル様ノ仕掛ケヲナシ置クトキハ、人力ヲ減シ入費ヲ省クヤ疑ナシ、昔熊澤（蕃山）カ岡山ニテ此法ヲ以テ埋築シタリト聞及ヘリ、佐藤信淵カ説モ同様ナリ、良法ト思ヘリ、此ノ仕方ヲ四・五年モ行ヒナハ、其功ヲ見ルヤ疑ナシ、此ノ新田ハ何ソ急成ノ趣意ニ非ラス、徐々ト成功ノ見込ナリトノ御言ナリシト、棒杭ヲ打チタル棒打モ戊午（安政五年）ノ夏御逝去ノ頃迄ニハ打チ終リタリ、御逝去後ハ其侭ニテ別ニ手入レモナク、放擲シタルヲ、明治四・五年ノ頃、大山綱良遺志ヲ継紹シテ、水田数百丁（町）歩ヲ開墾セリ（公ノ御企画凡十分一位ナリシモ、石高ノ丁（町）歩ニ積リ凡五千余石ニ及ヘリト云フ、公御企画ノ大ナル、之ヲ以テ知ル可ナリ）、則チ谷山郷和田村沖七ツ島嶋崎ヨリ、同郷柏原川尻ノ海浜ニ止マレリ、而シテ二・三年間試耕セシニ、稍熟田ニ等シキ収穫アリシト云フ、惜哉、明治十年八月大風ノ際、海面ノ堤防ヲ破壊シ、尓後之ヲ修築スルモノナシ（大山ハ之レヲ埋築シテ、鹿児島無産士族ニ分与セムノ思込ナリシト云フ）

四五一　福井侯齊彬公ヘ与ル御書簡及ヒ齊彬公御返翰（昨夢紀事抄）

四五一の一

十月十六日

同日薩摩守（齊彬公）ヘ被遣候御密啓、左ノ通、但此侯予テ仰セ残サレシ御事モアリシカト、時勢止ヲ得給ハス、今日ノ御運ヒトナリニシ事ヲ、何トモ御沙汰ニ及ハレテハ、御交誼ニモ不相適筋故、唯其荒増ヲ仰セ越サレテ、態ト御書（御建議）御書面等ハ御廻シナカリシナリ、

兼々御心配御座候建儲（将軍継嗣）ノ一件、今般墨吏登城拝礼被仰付候ニ付、

上様（将軍家定公）ハ御換ヘ魂ニテ（一橋公ヲ）（徳川慶喜）御待受ニ可相成風聞、一時相起候故、篤ト相考候処、愈右ニ相違無之候ハヽ、自然時宜ニヨリ実ハ世子ナリト御名乗無之候テハ、墨吏承引不致場合可有之モ難計、且万々一他日御誕生（杯カ）様御達（遅レカ）シ被遊候節ハ、其御方ヲ遂ニ世子ト御

定ニ可相成ハ、此亦自然ノ勢、此ト云、彼ト申シ、目前コソ借物ナレ、其実ハ後々全クノ関係不軽、左スレハ英明ニモ春秋折盛（鼎カ）ノ御方（力カ）御借用可然、併シ又考候得ハ、堂々タル神州

将軍家ノ贋物ニテ、墨吏ヲ欺キタルト申事、後日発露致候テハ、

御国辱ニモ可相成、是コソ臣子痛苦ニ不堪ノ義、畢竟最初ヨリ公然

上様ハ御指支有之故、　世子ニテ御名代ト申事、分明ニ告諭シテ、御待撰（後）御座候ハヽ、　将軍家ノ御都合ハ不及申、乍恐　天朝ノ御瑕瑾ニモ不相成義ト奉恐察候ニ付、兼々貴兄御遣誠モ（何等ノ事柄乎今知ルニ由ナシト雖モ、稽フルニ継嗣ニ関スルナラン）有之義ニハ候得共、精々愚衷ヲ竭シ、東西ヘ手配致候、建儲一条頗ル心配致試候処、未タ時節到来不申義欤、右野子周旋其道ヲ不得故ニ欤（也カ）、兎角先行兼（致脱カ）申候、既ニ先頃佐閣（堀田備中守（佐倉藩主））闕閣（久世大和守廣周（関宿藩主））ヘハ直ニ咄合候得共、両人トモ却テ佐ニ譲ルト申意気込ニテ、担当シテ決議可申ト云景況モ見極メ不申候、併シ佐倉ハ此迄ニナク受宜、建儲ノ事ニ注意致居事ト申事、何某ヨリ内々伝聞モ仕候得共、此以信聴難致奉存候、扨又只今ニテハ御換魂モ愈相止候故、此上ハ兼テノ御示教ニ随ヒ火急ニ周旋ハ不致、又復沈静ニ機会ヲ相俟可申考ニ御座候、貴兄（齊彬公）何ソ御良猷モ御座候ハヽ、何卒御助力被下候様奉希上候、当年ハ御在国ノ処、折節墨吏登　営ノ事抔重大ノ事件出来仕、野子モ色々心配仕候得共、如何ニモ孤立独力可奈手段モナク、別テ前文一条ニ付テハ、誰ニ可語人モ無之困リ切申候、若哉御相談モ申上候ハヽ、今一層ノ奇策モ可生候半乎ト焦思（甚脱カ）罷在候、此処御推慮可被下候、呉々御気附モ御座候ハヽ、為天下乍御面働（綱）遙ニ御筆投（授カ）被下候様奉願上候、

（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂）

四五一の二

右御返翰、追テ被進タリシヲ因ニ爰ニ記ス（齊彬公御返翰）

極内々御別紙奉拝見候、亜奴登城ニ付云々ノ評判有之候間、無御拠樓・闕（堀田・久世）両閣ヘ御示談被成候処、引受ハ宜ク候得共詮立兼候由、至極御尤ニ奉存候、此節ハ先御目見モ相済候間、又々様子御覧可被成旨、是亦御同意ニ奉存候、夫ニ付御懇書ノ趣委細拝見仕候処、御忠志ノ程奉感心候、極内々ノ事

ニ御座候得共、猶又此節雲上（近衛家数多ノ御書翰参看）ノ御様子伺越候間、知レ次第早々可申上、尤此節ハ少々ハ御様子可相分存候間、早速申上候様可仕候、此間亜奴登城ノ義ニ付、御様子伺候得共、（ハカ）御心配ナカラ先例モ有之候間、登城被仰付候由、深キ尊慮モ御座候得共、先ツ閣老共ノ評儀ニ御任セニ相成候トノ事、内々多ニ見候（夢カ）間、少シモ早ク尊慮出候様致度段、又々申込置候、誠ニ極密申上候、御覧後早々丙丁奉希候、扨又亜人色々申出候由、今度ノ御所置実ニ一大事ト奉存候、武備益御世話無之テハ不相成ト奉存候事ニ御座候、御評議ノ様子何卒早ク伺度奉存候、此節仙臺始ヨリ所存書差出候趣申来候、武備十分ニ被仰出度トノ事、定テ立花（柳川侯）・川越ヨリ申上候義ト奉存候、実ニ武備第一ノ御時節ト奉存候得共、当今ノ様子ニテハ甚タ心配ニ奉存候、扨鈴木藤吉（幕ノ小吏）ト申スモノ、事、色々悪評承リ申候、能々御サグリ御座候様奉存候、長崎水野（長崎奉行水野筑後守）ノ所置不宜、色々不都合ノ様子ニ承申候、先ハ貴答旁奉申上度、如此御座候、頓首、

十一月廿九日

猶々、反射炉此節十分ニ出来仕、大悦罷在候間、御吹聴申上候、色々鋳試候処、ヤスリモ能掛リ、鉄色申分無之候、以上、

以上、越前家所蔵原書借写ス、（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）ならびに照国公文書にて校訂）

四五二　米国使節幕府ニ贈ル本込新銃模形借用セラレムトノ御書翰（昨夢紀事抄）

（安政四年十一月二十七日の松平慶永直書抄なり（松平忠優宛））

一当春中薩州ヨリ人ヲ以テ被相頼候ハヽ、亜墨利加ヨリ献貢相成候ライフールト申鉄炮（本込銃トモ通唱ス）、公辺御物ニ御座候由伝承ニ付、拝見仕度段、先達テ閣老勢州（阿部伊勢守）迄内談申入候処、御筒ハ御深秘ニテ御三卿方ハ格別、御三家方ヘモ御拝見御下ケハ難相成旨、同人ヨリ断ニテ、不本意ニ候間、可相成ハ　公ヨリ御拝借被仰上、御覧済之上、御内々拝借仕度ト懇願之処、　公御挨拶ニハ、厚相含可申ト計リ有之候由、其後右御答之御趣意相伺候処、右ライフール御深秘ノ義合点不参、其子細ハイカ成精功奇品ニ候トモ、　徳川家御伝来之御秘器ニテモ無之、已ニ夷人ハ敵国ニモ可相成日本ヘ相渡シ不秘品、却テ公辺ニハ外様・御三家迄御秘シ被為在候ハヽ、如何之御

儀ニ候哉、外様ノ内ニハ薩摩守事ハ、当時
公辺御縁続（将軍家定夫人、斉彬養女（天璋院殿ヲ云フ））ニモ相成、且諸侯中人物之聞ヘモ有之候モノ、鉄炮一挺位ノ義ニテ内心不快ヲ懐キ候テハ、
公辺御為筋不宜候、一体右ライフール実用重宝ノ品ニ候ハヽ、
公辺ニ於テ御模造被仰付、御三家始国持衆其外ヘモ、一挺ツヽ被下候事ニ仕度モノニ候、然ル処二百年来（余脱カ）御恩沢ニ浴シ候諸侯ヘ、御気遣被為在、一挺ノ鉄炮サヘ御隠シ被成候テハ、御規模御狭小之様ニ相当リ、薩摩守心底モ察入候、三卿ノ場合扨々気ノ毒ニ思召候旨、其後御家老ヘ御相談之上、無急度阿閣ヘ御内話被為在、思召ノ如ク
公辺ヨリ直ニ薩州家ヘ御下ケニ相成、薩摩守願意相貫候様御周旋有之、同人大ニ喜悦候由、右等之御所置至当之御義ニ有之由（集成館ニ於テ製造ノ条ニ参照スベシ）（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂）

四五三　当時ノ形勢米国人ノ意思要略

当時ノ公文ヲ見ルニ其要ニ云ク、
日本ハ早ク米国ト交際ヲ結ヒテ、公使ヲ都府ニ駐在セシメラルヘシ、又日本ノ諸港ヲ開キテ両国ノ貿易ヲ許サルヘシ、是レ日本カ西洋諸国ヨリ蒙ルヘキ危難ヲ免カルヽノ道ニテ、然ラサル時ハ畏ルベキノ患害アルヘシトテ、夫ヨリ清国廣東兵乱ノ事、印度ノ英領トナリシ事、英・佛両国ハ清国ニ事アルヲ以テ遅延スレトモ、其中ニハ日本ニ来ルヘキ事、此両国ノ要求ヲ聞カサル時ハ、直ニ戦争トナルノ畏アル事等ヲ説キ、此患ヲ免カルヽニハ、早ク米国ト条約ヲ結ハルヘシ、然ル時ハ英・佛来ルト雖モ、其上ニ加フル事アルヘカラス、而シテ米国モ亦力ヲ尽シテ日本ノ為ニ周旋スヘシ、米国ハ東方ニ於テ領地ヲ広ムルノ望ナキモノニテ、唯タ両国ノ幸福ヲ謀ルニ外ナラストノ趣意ナリキ（米人ハ初ヨリ土地併呑ノ意ナキヲ示シ、全ク貿易通交ヲ主トシタルハ、今ニ至リ始終一貫セリ）

四五四　参考　水戸前納言殿堀田備中守ニ与フル書

本文記ス所、前納言堀田備中守ニ与フル書ハ、前納言自カラ緘シテ、之ヲ篋中ニ蔵スルコト久シクシテ、始テ龍駕ノ臨幸ニ及ンテ、大久保参議コレヲ披読シタルモノナ

レバ、世上ニ洩レ伝フベキニアラサレドモ、幕府之内史局等ニテ伝写シタルニヤ、或有司ノ日記ニ見ヘタレバ、今之ヲ抄出シテ考証ニ供ス、

〔墨夷使之者より天〕墨夷使節申立候趣ニ付、過日拙老父子ヘ存意之趣、早々申上候様御達ニ付、相談之上不取敢奉申上候処、右ハ如何之尊慮ニテ存意御下問ニ相成候哉、難奉測候ヘ共、万一苟安之尊慮ニテ、江戸ヘ商館等夫々御立ニ可相成哉ト、甚心配仕候、只今〔墨夷使計〕墨夷事件ニテサヘ、於公辺品々御配慮モ被為在候事ト奉恐察候処、尚此上闇夷・〔相脱〕佛夷・魯夷等追々参リ、江戸ヘ商館ヲ立候様ノ事ニナ〔カ〕リ、時々刻々閣老方ヘ直応接有之様ニテハ、各方ニモ被指支可申、夫ノミナラズ各方ヘ直応接ニテ不整品ニ相成候ハヾ、必ス将軍家ヘ御直ニ応接ト可申ハ如見ニテ、各方ニテサヘ被指支候程ノ義ニテハ、何程〔御賢明将軍家ニテモ、下情並金銭等之品々御答ニ指支無之ニ大〕御英明ノ義ニ付テハ、品々指支無之ト計リハ難申上候ヘバ、何レ之道、江戸ヘ商館等御立ニ相成〔候カ〕ル尊慮ニモ候ハヾ、決テ御不為ト奉存候、実ハ何レ之湊ヘナリ共、夷狄ヲ〔被カ〕御指置ハ、不可然義ニ候ヘ共、右ハ是迄為御済ノ事故、三港ノ義ハ暫クヤムコトナク、彼モ人類ニテ御懇切ヲ表シ、御為ノ由ニテ申上候ヘバ、一円ニ御断リモ被遊兼候ハヾ、聊好事ニハ無之候ヘ共、拙老事ハ今公辺ヨリハ退隠ノ身分ニ候ヘバ、公辺御親属ニテ身柄ノ者ト、墨夷ヘ御申聞有之候テモ不苦身分ニ候故、御親属ノ拙老ヲ墨国ニツカハサレ候ヘバ、此上ノ御懇意ハ有之間敷候、拙老モ二百余年ノ御厚恩ヲ不奉報、此侭朽果候〔墨カ〕ヨリハ、日本ノ御為異国ヘ被遣、其代リニ此方ハ、〔ヘカ〕商館等取立候義ハ不可〔相カ〕成ヨシ、〔ウカ〕厳重御達ニ仕度候、

但願之通リ拙老墨国ヘ被遣候義ニ候ハヾ、参リタキ者ハ〔誰カ〕唯ニテモ参候様御達ニ相成、浪士并百姓・町人之二・三男等三・四万人モ被下、重キ追放・軽キ死刑之者迄モ御免ニテ被下ニ相成、召連参リ、墨国ニテ交易致度品ハ、拙老扱中次ニテ致候ハヽ、仮令拙老初於彼地被殺候共、日本ノ御不為ニハ相成マシク、又中納言此地ニ居候ヘバ、水戸ニ障リモ無之、又百姓等モ、元ヨリ不好者ハ不参、二・三男ヲ被下候故、是亦イカヨウニ相成候迚、其家元ハ此地ニ無恙有之候ヘバ、不厭事ニ御座候、

扨箇様之事ニ可相成トハ、二十年前ヨリ先見仕候所故、去ル天保午年（天保十五甲辰年弘化ト改ム、午年ハ弘化三年ニ当ル）ヨリ数十度、松前・蝦夷一円被下、統テ為御任

ニ相成候様願候へ共其節願整候ハバ、蝦夷モ如今危クハ、成間敷所、甚残念ノコトニゴザ候　御取上無之ノミナラズ、去ル甲辰（天保十五年五月）ニハ右願迄モ御疑心ノカドニ入リ、厳重被仰付候程ニ候へバ、況ンヤ墨夷（国カ）へ参リ候儀、彼国ニテハ致承知テモ、公辺ニ於テハ御決断如何可有之哉ト存候、御決断ニサへ相成事ニ候ハヾ、墨国へ拙老ヲ被遣、又他夷ヨリ云々申出候ハヾ、又被遣（難カ脱カ）ト申ス如ク、先々ヘ此方之者ヲ被遣候、（テ脱カ）御懇意ノ振ニ被遊候ハヾ可然、夷狄ヲ江戸ヘ被差置候ハ、公辺之御為以之外危ク奉存候、

一夷狄ヲ湊々ヘ被差置候ハ、防禦之備無之候テハ不相成、拙老儀先年ヨリ夷狄ヲ防禦候ハ、大艦大砲ノ二ツニ止リ候ト見ヌキ（海外ニテ防禦イタシ候ハヾ内地ハ静ニ候処、内地ニテ事出来候ヘハ大ニ混雑致シ、其内ニハ内地ノ商人（姦カ）等騒立候ヘバ、海外ニテ致防禦候外無之ト、先年ヨリ見抜キ居候事ニ御座候）居候故、小金御鹿狩以前ニ、火打袋ヲ作リ候テ、

浦安の国守るものはいくさ艦
飛火のつゝの外なかりけり

ト相認メ、又其根付ニ致候鎌ヘハ、

異国の船打つけに払はんも
石と鎌とをはじめにぞする

ト認メ、故阿部伊勢守等ヘモ遣ハシ申候ヒキ、其節ヨリ只今ハ大艦・大砲ノ工夫モ付候故、近頃相願、公辺ヨリ大艦御雛形并御書物等、御懇篤ニ拝見モ被仰付候ヘバ、色々致発明候事ニテ、難有仕合ニ御座候ヘハ、御時節柄願候ハ恐入候ヘ共、湊々ヘ夷狄被指置候上ハ、遅速ハ格別、何レ事ハ出来候ヘハ、（申脱カ）何卒早ク拙老ヘ百万両被下候ハヾ、年来存込候通リノ大艦・大砲製シ候テ、日本ノ為（御脱カ）ニ仕度奉存候、

但右申候テ、一時ニ百万両拝領仕度ト願候義ニハ無之、三度ニモ相願候、尚木材之義、（柄カ）御領之分ハ願ニ任セ被下置、其他ハ拙者買上候ハヾ、無滞出候様ニト、公辺ヨリ御触ニ相成度候、

拙老兼々所存之通リナル大艦・大砲出来候ヘバ、非常ノ節ハ勿論、命ニカケ自身出帆、二百余年公辺之御厚恩奉報度奉存候、

右大艦・大砲製候義、大坂ニ候ヘバ御運送ヨロシク便利ニ候ヘ共、前ニモ認候、（通脱カ）先年松前蝦夷ノ地願候テサヘ御疑心ニ相成候ヘバ、マシテ大坂抔申候ハヾ、又如何様ニカ姦人共ヨリ讒ヲ出シ、御疑心モ可有之ト奉存候ヘ共、一体拙老義、去ル甲辰公辺ヨリハ退隠被仰付候ヘ共、御所ヨリノ位記口宣ハ其侭ニテ、

解由〔状脱カ〕モ不被下候ヘバ、御所向ヨリ退隠ト申スニモ無之候ヘバ、拙者〔老カ〕大坂ニテ大艦・大砲ヲ製シ居ル内ニ、非常ノ事モ御座候節ハ、御所向ノ御警衛ヲモ心懸候様被仰付候テモ、宜シキ程ノコトニ候（但只今ハ公辺ヨリ退隠被仰付、水戸領ハ中納言ヘ譲リ候ヘバ、年々二万両位ヅツ、御城代ハカモ不被下候テハ、逗留中ハサシツカヘ申シ候、）、御城代ハカリ被指置候ヨリハ、京地御尊敬ノ廉ト奉存候ヘトモ、又姦人等讒説出候ハ必定ニテ、夫レニ御動キ有之様ニテハ、公辺ノ御為ト存候事モ半ニシテ出来不申、諺ニアブモトラズ蜂モトラズトヤラン申ス如ク相成可申候ヘバ、外湊々ニテモ運送ヨロシキ湊ニ参居候テ、時々刻々自身指図仕候テ製造致度、モシ先年願ノ通リ、松前蝦夷一円拙老ヘ被下、別家ニ御立ニテ（先年ト違ヒ、只今ニテハ敵目前ニ居候ヘバ、前文墨国ヘ召連候程ノ人、不被下候テハ指支申候）、右港ノ内ヲ撰ヒ、右ニテ製造仕候テモ宜シク候ヘ共、大坂抔ト違ヒ不便ノ地ニ候ヘハ、別テ製造モ遅ク相成候事ト奉存候、

右願之通リ百万金被下、大砲・大艦製造致候ニモ致セ、苟安之尊慮ニテ、万ニ一モ江戸ヘ諸夷ノ商館御建ハ、何レノ道御宜シカラズト奉存候、何トカ品能御断ニ相成候様致度、前文認候通リ、御親属之拙老ヲ墨国ヘ被遣、夫レヲ以テ懇切之廉ニテ止候事ニ候ハヾ、一切御厭ニ不及候故、拙老ヲ遣〔被脱カ〕候テモ、商館御立無之様ニ致度候、彼人頻リニ懇切御為ニ交易々々申候ヘ共、交易ニテ一切御国益ニ成候事ハナク、最初ハ御国益之様ニ存候ヘトモ、皆人馴候上ニテ、終ニハ不残御国ヲ可奪計策ニ御座候（博奕打共初心ノ人ヲ引入候ニテモ御承知ナサルヘク）、日本ハ他ノ品ヲ不用、国中ノ品ニテ事ヲ欠候義ハ有之間敷、且墨夷ノミナラズ諸夷江戸ヘ集マリ候上ハ、如何ニモ御指支ト成候事、只今ヨリ見ヘ申候、扨一度御集メ之上ニテ、人々〔又カ〕御攘可被遊ト申時ハ皆敵トナリ、余程御六ケ敷ト推察仕候、御武備整候迄、一時之御計策ニテ開港被遊候ト、夷狄ヲ江戸ヘ被指置候トハ、大ニ相違ヒ、乍憚征夷ノ御名〔目脱カ〕ニモ拘リ候事故、大小名マテ公辺ヲ軽蔑致候迚モ、御察当モ被遊兼候様相成可申奉恐察候、内ヲ外ニシ、外ヲ内ニ被遊候様相成候ヘバ、終ニ姦人其間ニ出テ、夷狄ヘ内通ノ程モ難計、左様相成時ハ、御大城ヲ始メ江戸中焼払候モイトヤスキ事ト奉存候、僅ニ四・五年前ヨリ来リ、初テ拝謁致候人類、何程口上ニテ御懇切ニ御為太切ニ存上候迚、二百余年御厚恩ヲ蒙リ、御懇切ニ御為太切ニ存上候トハ、墨夷カ御為ト申

ストハ、一日ノ論ニハ有之間敷候ヘバ、嫌疑ヲモ不厭、此段存分各方迄御咄申候、此迄追々建白モ致候上、別段此度申進ニモ不及候ヘトモ、江戸ヘ諸夷ノ商館御立ニモ相成候ヘハ、決テ公辺ノ御不為ト奉存候義、乍心付不申進候ハ、二百余年御厚恩ヲ蒙リ候詮モ無之候ヘバ、不顧恐懼此段各方迄御相談旁申進候、面晤ト違ヒ書ハ言ヲ不尽、書中之趣御分ニモ相成兼候ハヾ、何時ニテモ御談可申候也、

十一月十五日認　　水隠士烈公

堀田殿（備中守正睦）

初

此建白書老中見之、愕然ノ余水戸家老ニ内諭シテ、尓後如此ノ建白アリテハ、甚タ御為ヨロシカルマジトイヒタルガ、大奥ナドニテハ水戸反逆ノ企アリト唱ヘタルハ、此書中ノ言ヲ以テ誣構シタルモノ也ト云ヘリ、前納言素ヨリ大志アリ、尋常人ノ能ハサル所ニシテ、其患ヲ慮ル亦遠シ、僅カニ数十年ノ事ニトヾマラズ、必数百年ノ後ヲ慮ル、昔ハ水戸義公日本史ヲ著シテ、百七十年ノ後竟ニ明治中興ノ運ヲ開ク、水戸前納言ノ言、亦安ンゾ百年ノ後ニ験アラザルコトヲシランヤ、

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

四五五　参考　昨夢紀事抄

齊彬公西郷隆盛ヲンテ、福井公ニ西丸建儲ノコトヲ告ケシメ玉フ、

一十二月九日、去ル十月　西城ノ御事ニ付、薩摩殿（守脱カ）ヘ被遣タル　御内書ヲ、侯鹿兒島表ニテ御覧アリテ、關東ノ形勢危気ナルヲ驚キ憂ヒ玉ヒケレトモ、数百里ヲ隔テ座セハ、思召ニ任セラレヌ事ノミナレハ、侯ノ腹心ノ臣西郷吉兵衛（隆盛旧名）トイヘル者ヲ被遣テ、今日兼テ相シレル橋本左内カ許ヘ来レリ、サテ吉兵衛カ申ハ、寡君ノ淵底ハ、疾ヨリ御館ニモ知ロシメサレタル事ニ侍レハ、別ニ御（命カ）含ラレシ事モ候ハス、關東ノ事ハ御館ニ任セ奉レハ、御力ノ限リ尽サセ玉ハン事ヲ企望シ玉ヘルヨシ、在国ニテハ助ケ参ラス（クモ侍ラネト、西城ノ御事ハ、予テヨリ　御臺様（将軍家定夫人）（天璋院殿）ヘモ仰含メ置レタル事モ侍リテ、スヘテ大奥ノ事手番ヒモヨク侍レハ、此筋ニヨリタル事ハ御力ニモナリ侍ルヘシ、夫等ヲ周旋ノ為ニ、御存ノ吉兵衛ヲ遣ハサレ候ヘハ、御家臣ト思召レ、御心ヲキナク召使ハセ玉フヘク、又吉兵衛モ我君トオモヒ奉リテ、忠節仕レト仰セ付ラレタルムネナリ、此由申上タリシニ、　公モ薩摩殿ノ深

キ思召ノ程ヲイタク感動シ玉ヒ、吉兵衛ヘカツケ物ナト賜ハリテ、此後ハ後宮ノ事ニツキテハ、吉兵衛ヲ使ハセ玉フ事モ多カリキ、

師質窃ニ按スルニ、　公兼テ薩州ハ当時諸侯ノ雄ナリ、此人ヲ背カセテハ、事ムツカシト仰セラレテ、西城ノ御事ナトモ専ラ申合サセ玉フニ、此度薩侯ノ密使ヲモテ、〔ノ脱カ〕關東ノ事ヲ　公ニ委任シ玉ヘルモ、薩侯ノ公ヲ見玉フ事、　公ノ薩侯ヲ見玉フニヒトシキナラン欤、互ニ英雄ノ心ヲ攬ルトヤ申スヘキ（安政元年十一月御結婚前夜御餞別会ノ部御密示ノ条、第〔ママ〕巻参照スヘシ）

〔昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂〕

四五六　西郷隆盛中根靱負ト密話（昨夢紀事ニモ記ス）

〔安政四年十二月十四日〕吉兵衛ノ密ニ語ルハ、薩ノ夫人恒姫ノ一橋斉敦公御女ニテ公ト御実方ノ従父妹女ナリ御方ヨリハ、

御臺所（天璋院殿）ヘ御文通ハセ玉フニ、何ノサワリモナク、

御臺所ハ頗ル怜悧ニ座シテ、下サマノ事モヨク知リ座スナリ、予テノ御密約ニテ、薩摩殿ヨリ仰セ入ラル、事ハ、何事ニヨラス、御心カヽリナクトリハカラヒ玉フヘク、外ヨリ仰セ入ラレタル事ハ、薩摩殿ヘ一ワタリ御相談ノ上ナラテハ、御手出シナキヤウニトノ御事ナルヨシ、サレト恒姫ノ御方ハ御温順ニテ、下サマノ事ナトハサラニシラセ玉ハネハ、　西城ノ御事ナトモ、スヘテ御書取ニテ御表ヨリ相迫リ、ソレヲ取次カセ玉ヒテ、

御臺所ヘ指上ラル、御事ノ由、此度モ薩摩殿ノ思召ノ旨ニテ、第一ニ水土州（〔忠央、新宮藩士〕水野土佐守）ノケシカラヌ事共ヲ飽迄ニ認メ、サテ田安・一橋・紀州ト御三家ノ伺ニナリタリトモ、（〔徳川慶喜〕一橋ナラテハカナヒカタキヤウノ御指図ナサルヤウ、一橋ハ英明ノミナラス、尾州ヲハシメ大諸侯ノ面々モ信服イタシアレハ、一橋サヘ御立ニ相成候ヘハ、大名之落着ヨケレハ、　台慮モ安カルヘシ、紀州様ノ御幼年ニテハ、御苦労ノ絶ヘカタキ旨ヲ、上様ヘ仰セ上ラルヘクト、白地ナル御認ナルヨシ、本壽院（家定公生母）ノ御方ニハ、

上様ノ御長寿ヲ祈ラセラルトノ御事故、此御方ヘモ英明ノ　世嗣ヲ立ラレ、　御安慮被為在候間、御寿長カルヘキ御薬ナルヘシト、甘言ヲモテ進メラレ候御事ノ

由ナリ、

一十二月廿三日、此比刑部卿殿（一橋慶喜公）ニハ異ナル事モ座サヌニヤ、尓後ノ御消息モ被為聞度ト、左内（一橋本）ヲ圓四郎（一橋家臣平岡）カ許ヘ被遣タリ、圓四郎カ云ルハ、卿ノ御様子、其後ハ何トナク変ラセラレ、圓四郎抔ヘハ、トモスレハ我等不肖ニシテ、大任ニハ堪ヘカラス、且我等ヲ　西城ナト、申沙汰モアリトカ聞シ、左アランニハ、唯我等カ命期ヲ短フスル迄ノ事ニテ、天下ノ為何ノ益カアラン、我等カ如キ不才ニテ、カク傾キカタナル天下ノ如何カハナルヘキ、心ヲクルシメ、思ヲ焦シテ死スルヨリ外ハアルヘカラス抔トモ仰セラレ、又我等ノ才力、改革位ノ事ハ出来モスヘケレト、撥乱反正ノ方ハ及フヘキモアラネハ、天下方今ノ大議ニハ関リカタシ抔モ仰セン（ラレカ）、又因循苟且ニモ老練ナル閣老・諸有司ヲ駕馭スヘキ才ナシ、是ハ大諸侯ノ内薩州（齊彬公）抔ハ然ルヘケレト、腹心知カタシ、我等ノ信スルハ越前（松平慶永、福井藩主）ナレト、此ニ任セタレハトテ、一人ニテハ覚束ナシ、越前ニ薩州ヲ副タランニハ、一ト通リ見詰タル事モ出来ナンカトナトノ、御評論モ伺ヒタリ、アレコレヲ考ヘ合スルニ、去月廿八日ノ御談判ハ、外事ナラストオモヒハカラレス、又当月朔（日脱カ）ノ御登城ニモ、御側衆平岡石見守殿御逢ヲ願ハレ、良久御談ナリキ、コレハ御帰殿ノ上伺ヒタリシニ、御館ニテ御能興行ノ事ヲ御相談アリシ由ニテ、機密ハ更ニ明シ聞ヘ玉ハス、九日ニハ又々、御側衆一統ニ御逢ノ事ヲ願ヒ居ラレシ処、是ハ御気元御勝レナキノ間、御家老ヘ申テ済事ナラハ、左様ニイタセトノ御返事ニテ、御逢ハナカリシナリ、兎角下タ心アル者ノ承リテハ、唯事ナラスオモハル、ナト物語リシ由、罷帰テ申上タリ、（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂）

四五七　齊彬公福井侯ニ与フル密書及ヒ御建言書

（昨夢紀事抄）

一此日（安政五年正月十九日）薩摩守殿ヨリ（安政四年十二月）旧臘二十六日、薩州発ノ御内書并御建白　御到来、如左、

御内書

別紙申上候、先比粗申上置候建儲ノ一条、先日後宮ヘ御模様相伺越置候処、イマタ音ヲ（しかと）御返事無之候得共、此節亜人応接等ノ書面拝見被　仰付、所存可申立段、従仙臺廻達有之、依テ幸ノ機会ト存居候間、（十二月十五日の建白書）別紙ノ通堀田ヘ差出申候間、内々入貴覧申候（後葉ニ

記ス）、

貴公ニモ折角御働専一ト奉存候、左候テ大奥ヘモ御直ニ御都合御見計ニテ、内々被仰上候様、総女中ヘ不響様ニトノ事、細事申上候事ニ御座候、此段極内々申上奉リ候、已上、

十二月二十六日

（昨夢紀事（日本史籍協会叢書）にて校訂）

四五八　齊彬公米国使節登営事件建言（昨夢紀事抄）

今度亜米利加官吏登城被仰付、追々応接等ノ次第、同席中為心得御達ニ相成、存寄有之候ハヽ、申上候様被仰出候趣、（伊達慶邦）陸奥守（奥州仙臺）ヨリ委曲申越、難有奉承知候、応接ノ書面、一々不容易御国家ノ御大事ノミニテ、卒忽ニ所存等難申上事ニ御座候得共、戦争ニ及ヒ御勝利被為在候テモ、御国家ノ御損亡莫大ノ御事ト奉存候間、申立候ヶ条ノ内、実ニ御差支ノ廉ハ格別、其外ノ儀ハ、速ニ御差許ニ相成候方、当時ノ　御良策欽ト奉存候、左候テ異人都下ヘ被差置、商道十分ニ御開ニ相成候上ハ、諸外国ヘモ通船等被　仰付、五大州ヲ御随意ニ御制御相成申候様、　御処置当然ノ御事ト奉存候、就テハ右外夷入込候様成行候ヘハ、人心ヲ致固結候儀専要ニテ、第一ニハ西丸　建儲ノ御事ト奉存候、乍恐是迄世子不被為在ハ、人心不安ニ奉存候折柄故、少モ早ク御養君御治定被仰出候ハヽ、上下一同人心安緒仕、

皇国ノ御鎮護モ弥根深ニ相成可申、勿論御血筋御近キ御方当然ノ御事ニハ御座候ヘ共、斯ル御時節ニ御座候ヘハ、少モ御年増ノ御方、天下人心ノ固メニモ可相成、然ハ一橋殿（徳川慶喜）御事、御器量・御年輩、旁人望ニ相叶可被成奉存候間、第一ニ此儀被仰出度、尤　御臺様（天璋院殿）御入輿被為在候御事故、偏ニ　御出生可奉待上儀当然ニ御座候得共、当時ノ形勢ニテハ、一日モ早ク御養君不被仰出候テハ、難相済御時節ト奉存候、且亦御軍制十分ニ（脱カ）（被仰出、諸大名ヘモ奢侈之習俗ヲ一洗仕、武備十分ニ）手当仕候様（敷脱カ）厳被仰出度、無左候テハ兎角人心弛ミ勝ニ相成、外夷ノ蔑如ヨリハ、人心苟安姑息ニ堕リ候儀、最可怖奉存候、此儀厳密ニ被仰付、且　建儲之御事モ被仰出（候脱カ）ハヽ、上ハ被奉安叡慮、下ハ諸侯已下万民ノ心ヲ御固メ被遊候御儀、征夷ノ御当務ト奉存候、此等ノ趣、外様ノ身分申上候儀、幾重ニモ恐入奉存候得共、御由緒柄（天璋院殿ノ御父ナ

ルノ意）旁

御国家ノ御為ト（ヨカ）奉存、日夜心痛罷在候折柄、存寄言上仕候様被　仰出候ニ付、不顧恐此段奉申上候、以上、

十二月廿五日　　松平薩摩守

〔昨夢紀事（日本史籍協会叢書）ならびに大日本古文書（幕末外国関係文書書）にて校訂〕

四五九　鎌田正純小野寺庸斎ニ質問書

拙問浅識之ケ条御尋問申上候義、甚軽卒汗顔之至ニ御座候得共、主家之為ハ乍恐天下ノ御為、下聞（ママ）ヲ恥差扣候テハ、却テ国家ノ大事ヲ誤リ候半ト、拝顔以来御懇篤ニスカリ、薩藩ノ為、左之通御尋問ニ及ヒ候、尤至極ノ拙問、御評論ノ外ニ可有御座候得共、ヒタ打ニ御打付被下候ヘハ、無此上多幸奉存候、

一兵ノ根本ハ君仁政ヲ行ヒ、四民其所ヲ得、何レモ職分ヲ励精イタシ、士分以上格位ノ品ニ寄リ、食禄等ニ至迄急度名実相備、平常ノ政事・軍律悉ク相立、実場ニ臨ミ働（動）揺不致様、兼テ人気一和ノ処ニテハ有之間敷哉之事、

一上ヨリ一度令ヲ降候儀ハ、端々末々迄モ信服イタシ、万事ノ制度易簡ニシテ、上下信義ヲ不失、義ヲ見テ利ヲ忘レ、礼義廉恥ノ士風ニ候ヘハ、博学多才之士少ク候テモ、可相済哉之事、

一倹素ヲ専ニシテ国家ヲ富シ、武士タルモノ格位ヲ失ハス、兵食ヲ足シ、常ニ艱苦ヲ不厭、弓馬・刀槍・銃砲等研究ハ勿論、山・川・海之険難ニ心身ヲ錬リ、操錬ノ組立ニハ銃砲ヲ専ニシ、中ニ弓馬刀槍其為長所ヲ以手詰ニ相備、座作進退ノ相図モ一度耳目ニ触候時ハ、衆勇奮撃ノ品相用可然哉之事、

一海岸江相備候大砲并ニ野戦砲、専西洋伝ヲ相用候内、坂元天山工夫ノ百目・二百目ノ車台ハ、前後左右・高下別テ実地利用ノ器ニ付、野戦砲江相交、且荻野・天山両流ノ拾匁筒ヲ一隊ニ組、拾匁以下ノ小筒モ又其一隊ニ組、当時流行ノ剣銃ハ又別隊ニイタシ、尤海軍ハ専ラ剣銃相用候ハヾ、第一火難ノ憂少ク、旁利用可有之哉ノ事（正純ハ天山流ヲ学ヒタリ）

一国中海岸相抱候場所ハ、土着之士江其所ノ地頭・領主指揮イタシ、互ニ援兵ト相成、容易ニ城下備不繰出、軍監ノ役場而已差出置、第一人馬ノ奔走ヲ省キ、却テ彼ヲ奔命ニ労シ候様ノ計策、肝要ニテハ有之間敷哉之

事、

一西洋伝ノ剣銃且騎歩兵陣列等、利害得失如何相心得可然哉ノ事（当時識見アル人モ、多クハ和洋折衷説ヲ主張セリ）

一当節流行ノ西洋銃陣ハ、専平場ノ備立ト相見得、山川険阻ニ臨ミ候テハ、何等ノ活法可有之哉、不審難晴候事（識見皆如此、洋式ヲ詳ニセサルニ依レリ）

一彼ハ連年戦争ニ馴試ノ銃隊ニテ、尚又追々相開、不絶新工夫相渡可申、右ヲ其後此方ヘ相用候テハ、一向彼カ跡ヲ追候様ニテ、近年中必勝ノ利可有之哉、不審難晴候事（井蛙ノ見）

一当今ノ勢ニテハ、鉄砲袖（当時一般如此）壱ツニテ、甲冑モ不用ト申位砲術開候処ヨリ、右通兵勢モ盛ン成様ニ候得共、不思不知異俗ニ変シ、果ハ彼カ意中ニ陥リ、再興ノ期無覚束候半、利害得失不審之事、

右条々御明弁伏テ所希御座候、以上、

安政四年巳六月　　鎌田出雲正純

小野寺先生

玉机下

四六〇　永井玄蕃等魯西亜布恬廷ト応接之趣上申書〔安政五年〕

四六〇の一

永井玄蕃頭（尚志）
堀織部正（利熙）
津田半三郎（正路）

神奈川沖江渡来ノ魯西亜船江、今朝支配向ノモノ為案内差遣候処、直様彼船江可相越旨申入候処、船中支度モ有之候ニ付、暫時猶予有之様致度申聞候、四半時比案内有之、支配向ノ者召連罷越候処、致渡来候段ハ、甚推参ノ義相当ニ候得共、唐国英・佛トノ戦争モ相平キ、十分ノ条約取極メ、直ニ御国江相廻候趣ニ相聞、尤御国ト戦争致候存念無之様子ニ候得共、詰リ唐国同様条約取結度内含ト相決、無程唐国引払ヒ、御国江相廻可申候、其内ニモ佛蘭西ハ多分先江参可申候、イツレ遅々致兼、殊ニ亜国軍艦モ神奈川江相廻候趣ニ付、旁相越候間、此段ハ宜敷御承知被下度、アメリカ官吏モ出府拝礼被　仰付候上ハ、同様拝礼被　仰付度、右申立候間、右ハ早ク江戸表ヘ申上、可及挨拶、尤条約ハ、拙者共三人江取扱被　仰付候間、右否申越候内ニ、此処ニテ条約談判致候共、差支無之旨申聞候処、其通

相願候趣ニ付、委任状持参候哉ト相尋候処、此度改テ持参不致候得共、唐国ト条約取結ノ委任状ハ持参致、殊ニ昨年取結ノ〔脱カ〕〔本条約可為取替等之政府之書状ヲモ差越、是迄条約取結候〕振合ヲモ申立候ニ付テハ、別人共違候間、此度アメリカトノ条約ケ条大意申聞候処、右ハ十分ニ御尽シ、〔斬カ〕期迄ニ御処置有之候テハ、外国トノ不和ハ生シ申間敷、魯国トテモ少々ノ異同ハ可有之〔草カ〕候得共、大意ハ此通ニテ、大分宜敷旨ニテ、何レ考案ヲ以談判仕度旨相願、無余儀筋ニ付、先年ペルリ渡来ノ節ハ、神奈川横濱等江休息所設候旨、支配御代官ヨリ申聞候趣モ有之候間、其節ノ休息所相成候横濱村名主〔行カ〕ニハ徳左衛門方ヲ、暫時休息所ニ申付、士官以下ハ病人ノミ上陸為致候様〔積カ〕ニ御座候、渡来ハ国書等持参不仕候得共、是迄度々為使節致渡来布恬廷〔フーチヤチン〕ノ儀、出府拝礼等差拒候ハバ、又々何様ノ害ヲ生シ可申モ難計候間、御許容相成候方、御都合宜可然哉ト存候、〔奉脱カ〕尤右御許容ニモ相成候ハヾ、神奈川ヨリ陸地、至テ小勢ニテ旅宿ヘ罷越候様、精々ニ〔可カ〕申談候心得ニ御座候、依之別紙対話書相添、此段申上候、右ハ下田ヨリ書翰ヲ以申立、〔上カ〕今日談判ノ趣モ有之候間、急速御下知御座候様仕度奉存候、以上、

六月廿一日

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

四六〇の一〔安政五年〕六月廿一日魯国船将対話書

一ト通挨拶畢テ

布恬廷

下田ヨリ差出シ候書翰御覧ニテ、委細御承知被成義ニ御座候哉、

此方

大意ハ書翰ニテ相分リ申候、

〔布恬廷〕右書面ノ儀御沙汰相成候哉、

〔此方〕〔儀カ〕書面之通ニ付、何レ及談判積ニテ候、

〔布恬廷〕御沙汰之趣伺度候、

〔此方〕此度罷越候ニ付テハ、〔全カ〕令権状持参致候哉、

〔布恬廷〕此度改テ委任状ハ持参不仕候得共、唐国ト条約取極候委任状ハ所持罷在候、尤魯西亜文ニテ、御分リ相成間敷候得共、御覧被成下候ハヾ、掛御目可申候、

且先達テ長崎ニテ為取替候仮条約書〔ヲカ〕モ、本国ヘ遣候処、本条約可致旨本国政府ヨリ書翰モ相届、所持致居候、一体唐国江罷越候主意ハ、唐国ニテ英・佛ト戦争致、其次第〔ニ脱カ〕ヨリ条約モ取結候趣ニ付、右様ノ節

ハ、魯国モ同様条約致候様、政府ヨリ被申付、御国江英・佛等参リ、条約致候趣モ相聞ヘ候付、左候ハヾ、同様ニ可被計ト被申付罷越候、然処魯国官吏、疾ニ本国出立、疑トハ難申立候得共、最早箱館ヘハ参リ可申候、夫ヨリ下田ヘ相越積リニ候処、兼テ申上候通リ、下田ハ不宜港ニ付、代リ港御開ノ上ハ、官吏ノ居所モ相定候間、右ノ御談判ニ及度、一旦長崎ヘ立寄候処、和蘭カツテーレーキ「カピテンレーキ」ヲ天モ罷在、彼事官（領カ）江戸表ヘ参府ノ儀并下田御閉、神奈川御開ヲモ承リ、（之儀脱カ）又下田ヘ参リ候得ハ、アメリカモ神奈川江参ルト申趣モ承リ、旁此所ヘ入津致候、其代リ港御開ノ事ノミニ無之、運上ノ事抔取極仕レト「ハキト」ヲ不致候テハ不宜候間、今般夫是御談判申度候、（亜脱カ）墨利加・和蘭江モ、江戸表拝礼相叶候由、私モ右同様誉ヲ得申度奉願候、

（此方）江戸拝礼ノ儀ハ、精々力ヲ尽シ取計可申候、尤条約ノ儀ハ、此三人ニテ取計候様命ヲ蒙リ罷越候間、十分及談判候、

（布恬廷）他国江許ス事ハ、魯国ヘモ御許ノ御条約ニ付、アメリカ・英吉利御許容ノ分、論モ無之候間、別府タルモノヲ（アメリカハルリスノ儀指候哉）、江戸表御差置ノ振合モ候間、私共出（罷カ）候儀モ、御老中方ヘ被仰上可被下候、御許容無之候得ハ、魯国ヲ外ヨリ疎遠（国脱カ）ニ被成ト政府モ可存候、

（此方）夫等ノ処ハ分リ居候間、厚政府ヘ可申立候、尤否相分リ候迄、少々日合モ有之候間、其内可（致脱カ）条約談判候、

（布恬廷）左様ニ相頼候、

（此方）此度アメリカトノ条約書御座候哉、

（布恬廷）未一覧不致、尤昨年下田ノ規定書ハ一覧致候、

（此方）甚見苦敷廉有之、分リ兼可申候得共、致一覧度候ハヾ為見可申候、尤大意ハ一通可申聞候、

（布恬廷）何卒拝借仕タク、且只今ケ条愈（毎カ）大意丈ケ伺度候（此時多吉郎ヨリ条約書為貸聞申候）、キリユトミケ条ハ、双方宗門（キリストノカ）争ヲ不致ト申訳ニ候哉、且軍艦御誂ノ廉ハ、条約ニ乗リ不申候（載カ）共、各国歓テ持渡可申、其外一応承リ候処ニテハ、此条約十分ニ御尽シ被成候、此通リ候ヘハ、外国トノ不和ハ出来不申ト存候、魯国トテモ、是ニテ別段ノ存念無之候得共、併一々此通ニモ出来兼候間、少々取捨致、草案取調御談判可仕候、

右ケ条之通リ、イツヨリ神奈川御開相成候共宜候得

共、官吏渡来、一旦住居ヲ構ヘ、又候外ヘ引越候テハ、再度ノ手数ニ付、直ニ神奈川ヘ参度候間、住居ノ場所何処被下処、御取極被下度候、

〔此方〕元来下田ヘ参候積ニ付、此処ニテ取極カネ候、

〔布恬廷〕条約下案出来ノ上、宜候得ハ御居リ、若思召相叶不申候ハヾ、其廉々ハ御談判可仕候、

〔此方〕其通ニテ宜候、

〔布恬廷〕和蘭トノ御条約モ此御振合ニテ、〔候哉脱カ〕

〔此方〕〔此振合ニテ、〕少々ノ取捨ハ有之候、

〔布恬廷〕私迚モ少々ノ取捨可仕義御座候、

〔此方〕和蘭モ既ニ軍艦御誂ノ廉ハ、削ニ相成候事ニ候、

〔布恬廷〕魯国迚モ其通ニテ御座候、

神奈川条約ノ内、最早条約中此条ノ者齟齬致セル廉ハ取用ス等ノ処、少々相分リ兼候、

〔此方〕譬ヘハ、昨年ノ条約ヲ居置、猶又条約ヲ致断共、〔候カ〕都合三度ニ相成煩敷候間、最早〔初カ〕ノ分ハ指置、不用ノ廉ハ此度ノ条約ニテ削候テ、昨年ノ条約書ハ廃候積ノ取計ニテ候此時和蘭ノ振合ヲ多吉郎ヨリ申聞候

〔布恬廷〕最早〔初カ〕ニ、〔初ケ条ニカ〕ミニストル江戸ヘ差置レ候義、御免被為在候間、私今般江戸表ヘ拝礼被　仰付候テモ、敢テ不相当ノ儀ハ為在間敷、殊ニ下田〔吉田カ〕ニテハ、格別御恩ヲモ蒙リ候間、右御礼モ申上度、旁相願度義ニ付、厚被仰上被下度候、

〔此方〕何レ政府ヘ厚申立之上、可及挨拶候、

〔布恬廷〕別段相願候義御座候、湿気ノ時節船中病人多ニ付、右為養生、滞舟中士官以下ノ病院様ノ者〔御修理天〕御理補被下、〔度脱カ〕其囲丈ケ歩行為致候、

〔此方〕士官以上ハ不致歩行候哉、是又病者ノミ取計可申候哉、

〔布恬廷〕士官以上ハ、右ニ不拘場所ヲ御取極遊歩御免願度、

〔此方〕〔衍カ〕併右ハイツレモ昼ノ内ニ限リ候儀ニテ、夜ハ決テ上陸為致不申、夕方ニハ必船中江為引取申候、

〔及脱カ〕何レノ場所モ致勘弁、是ヨリ可挨拶候、

〔布恬廷〕此義ハ何分相願候、

アメリカ参府之節ハ、陸ヲ罷越候哉、船ニテ参リ候哉、

〔此方〕下田ヨリ陸通リ参、帰リノ節ハ、則今般乗込参候観音〔光カ〕丸ニテ帰申候、尤是ヨリ内ハ、外国船ハ乗込ノ義無之候、

〔布恬廷〕素ヨリ魯国ニ於テモ、其段ハ相心得申候、

右畢テ一同引取申候、

六月廿五日魯西亜類船入津ニ付、来定相尋ノ儀申上候書付、

永井玄蕃頭
堀　織部正
津田半三郎

〔大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂〕

四六一　阿部伊勢守死去及ヒ事蹟概略

六月

老中阿部伊勢守〔正弘、福山藩主〕病ニ臥ス、同十七日卒ス、職ニ在ルコト久シク、人材ヲ挙用シ、政事ヲ更張ス、寛猛宜シキヲ得、措置人心ヲ失ハズ、又後庭婦女ノ驩ヲ結ヒ、本郷〔奈良、若年寄、丹後等川成島藩主〕ト相善シ、コレヲ以テ名望威権一時ニ隆赫ス、外国ノ事起ルニ及ンテ、水戸納言ヲ擁シテ内外ヲ鎮定シ、時難ヲ匡済スト雖モ、一ニ其言ヲ用ルヲ得ス、而シテ其議論大抵三変セリ、始メ墨艦ノ来ル、水戸納言ヲ仰テ謀主トナシ、以テ人望ヲ繫キ、異議ヲ抑ントス、然レトモ悉ク其言ニ従フヲ得ス、内陰ニ之ヲ猜防ス、是一変ナリ、外人益迫テヤマズ、其シガタキニ苦ミ、且同僚忌嫉アルニ及ヒ、又納言ヲ引テ後援トシ、政事ヲ釐革スルヲ名トシテ、内忌嫉者ヲ除キ、外墨英諸国ヲ制セントス、是二変ナリ、終リニ外事遂ニ古格ヲ守ルベカラサルヲ悟リ、諸有司ト謀リテ堀田備州ヲ進メ、之ヲ己カ上ニ置テ、以テ納言ノ論ヲ裁抑セントス、是三変ナリ、云々（正弘事蹟考証）

四六二　非蔵人日記抄〔安政四年・安政五年〕

安政四年七月十八日

一議奏当番萬里小路中納言〔正房〕殿宿退出、番加勢久世三位〔通熙〕殿

其余惣参裏松殿、伝奏両卿参侍、

一所司代脇坂淡路守〔安宅、龍野藩主〕帰府ニ付賜御暇、参　内巳刻、自車寄参着于鶴間、両役出会後有　御対面、於小御所賜　天盃、終テ於鶴杉戸西有拝領物〔御末広一箱、絹十疋〕、伝奏衆誘引、臺所口ヨリ候所ヘ通、賜酒饌云々〔但拝領物役送六位侍中并同列勤之拝領物、諸太夫間ニテ伝奏衆・雑掌ヘ相渡事、同列商量也、〕

七月廿三日

一大閤殿〔九条尚忠〕左大臣殿〔近衛忠熙〕　右大臣殿〔鷹司輔熙〕　中務卿宮　帥宮

近衛大納言〔忠房〕殿　中納言中将殿等御参、其余摂家方丞相

方御不参、有御使、

八月一日

午後日蝕也〔蝕一分、京都ニテ不見、西国ニテ見ユル〕、当番議奏萬里小路大納言殿宿退出、番加勢久世三位殿伝奏両卿参侍、

一依蝕参賀被止御馬献上明二日也
一六位侍中為御殿覆細川新蔵人参仕、
一暁天内侍所神饌、早朝朝餉、女房寒如例但依蝕ナリ
〔安政五年〕九月四日
一近衛左大臣殿忠凞公　内覧　宣下ニ付、自今八景間江
御通、御参御退出等、関白殿之通可心得、議奏徳大寺
殿被申渡之事、
一左大臣殿御参、
〔安政五年〕十月二日
一所司代酒井若狭守若狭侍従忠義朝臣再役初参　内也、着鶴間、両
役昵近等出会内見無之、未半刻出　御于小御所、有　御対面
賜　天盃、
一献物御太刀一腰、綿百把品奏者所へ廻ル、御馬代黄金拾両一匹、右献
物刻限自伝奏雑掌案内在之、於鶴間番頭受取之目録台撤之、
伝奏衆江申入内覧無之、可為例之通被命、太刀・折紙露台
代階下廊下南方東側江并置以屏風囲之、黄金附台議奏衆前廊
下江令運送、其段議奏衆江申入、御塞被解之後、自分
披露、太刀・折紙在鶴杉戸内、各議奏衆前廊下江操付、
其段始末議奏衆江申入置、此時献物写杉原四折議奏衆江附進
番頭代へ切紙写渡
一小御所御構殿奉行衆沙汰、円座敷設如例、
一退出之節　天盃御対面頂戴之御礼、議奏衆へ申入之事、
伝奏衆番頭へ被命、

〔非蔵人日記抄（宮内庁書陵部所蔵）にて校訂〕

四六三　当時ノ実況

安政四年七月迄ハ、東西ノ間ニ一ノ機関アリテ、隠微ノ際ニ運旋シ、阿部勢州〔正弘、老中、福山藩主〕ノ内意ハ水戸納言ニ達シ、其機要ハ納言ヨリ家臣石河徳五郎ニ達シテ、之ヲ伝奏三條〔実万〕公ニ通ス、故ニ東西ノ間、情意自ラ浹洽シテ、齟齬間隔ノ患ナシ、然ルニ此年五月ニ三條公武家伝奏ヲヤメラレ、七月十六日ニ徳五郎ハ病死シ、十七日ニ勢州卒シ、七月二十三日ニ納言ヤメラレ、是ニ於テ東西ノ道絶シ、機関忽ニ破レテ復通セズ、コレヨリ東西ノ間大ニ乖離シテ間隙百出、亦補苴スベカラザルニ至レリ、石河公恕伝ニ、天子叡聖意ヲ外攘ニ鋭ニシテ、幕府ノ有司ハ素ヨリ外攘スベカラザルヲ知リ、深ク其釁ヲ啓キ禍ヲ招ンコトヲ懼ル、議論合ハズ、猜忌日ニ積マバ禍殆測ラレズ、好事ノ徒、間ニ乗シテ煽惑、上下相疑フニ至ラン、公大ニ之ヲ憂フ、其東西沮隔シテ、或ハ大変ヲ生センコトヲ慮リ、人ヲ遣

シテ、西上間ニ居テ調護セシメント欲ス、其人ヲ得ルニ難シ、意ヲ公恕ニ属ス、戸田・藤田モ亦之ヲ賛ス、公、公恕カ年老ヲ憫レミ、之ヲ言ハス、公恕奮然其任ニ当ラント請フ、意将ニ身ヲ以テ国ニ徇ントス、公大ニ喜ヒ、乃命シテ、鷹司公夫人ノ伝用人トナシ、発ニ臨ンテ密命アリ、且手カラ佩刀ヲ賜フ、公恕感激、既ニ西上シ、交ヲ名公鉅卿ニ納レ、特ニ知ヲ三條内府ニ受、関説スル所アリ、東西情意始テ通シ、三條公大ニ公恕ノ忠誠ヲ称シ、名辱ク

天聴ニ達ス、安政乙卯戸田・藤田二臣暴歿、公恕独重任ニ膺リ、尽瘁斡旋心ヲ用ルコト尤苦ム云々、

四六四　橋本左内西郷吉兵衛ニ与ル書

昨日ハ乍例失敬ノミ相働、多罪奉万謝候、小拙不快ハ逐々宜方ニ御座候間、乍憚御休情可被下候、偖橋公御行状記略認出来仕候間、貴价ヘ附托仕候、余ハ明夕迄ニ呈書可(上カ)申候、左様御含置被下候様希度候、草々拝復、

臘(十二月)月十四日　　橋本左内

西郷吉兵衛様

一小冊添

四六五　彦根藩士宇津木六之丞長野主膳ニ与ル書

八月廿四日付之御書付、同晦日ニ着、拝見仕候、秋冷弥増ニ相成候処、先以

御上益御機嫌克被為遊御座、御同意恐悦至極ニ奉存候、然ハ十七日付ニテ差出候紙面、大津ヨリ御帰藩之御途中ニテ相届、水府ヨリ之隠密使、京并彦根ヘ忍入候一条御承知、京都ニテハ間部(下総守詮勝、鯖江藩主)候之隠密ト思ヒ候様仕懸ケ、数多忍ヒ居候由、貴兄両度迄御面会候ハ、六十計之小男ニテ、眼疾之様御見受、表ハ柔和ニ相見ヘ候得トモ、弁舌ハ至テ一物有之様御見受被成、杉浦・濱田両人之内ニ無之哉ト被仰越、杉浦仁右衛門ハ眼疾有之、人体符合致シ、油断不相成義ト奉存候、

一廣幡殿御下向、御忠心ト相聞ヘ候得トモ、水府両君ヨリ御文通モ御座候故、油断不成トノ事、御尤ニ御承知被遊候、

一島田氏(左近、九条家家士)ヨリ貴兄ヘ之紙面拝見、扨々隠謀方様強ク、殿(関白九条尚忠)下御配慮(眼カ)奉恐入候、島田之心配察入候事ニ御座候、梅田(雲浜)初隠謀方ニテ手強ク相働候五人之者共ハ、品ニ寄御召捕ニ相成不申テハ治リ申間敷、イツレ上方近キ御旅館

〈貴兄御出迎、委細ハ御申上被成候旨、間部様へ申上置候、御同人様火急ニ御上京ニ付テハ、隠謀方手筈相違致シ可申、御上京之上ハ迅速ニ御取計、兼テ御見込之通、

殿下ヨリ直ニ被達

叡聞、速ニ御埒済ニ相成候様、御丹精可被下候、併余リ据〈膳之様相成候テハ、間部様御気付如何ニ付、随分下總守様御手柄ニ相成候様御心得、御取計被成候様ニトノ御沙汰ニ御座候、

一此度〔酒井忠義、若狭守、京都所司代〕若州様御上着ニテ、彼ノ梅田ヲ召捕之上ニテモ、弥悪謀方強ク、　殿下之一大事ニモ可相成時ハ、時宜ニ寄、彼投書ニ付御疑トシテ、表向貴兄京都へ被召出、御吟味之筋ニ相成候様可被成モ難計、其期ニ至リ太閤方之悪謀ハ御取押〈可被成、其節御所司代腰ヲ折可被成様、兼テ御心得之一書御下ケ之義、御尤ニ奉存候、乍去間部侯急発ト相成候ニ付テハ、右様之御計策被成居候テハ、御手後ト可相成ニ付、御下ケ之義ハ不奉願候、程ナク間部侯へ御逢之節、何角之義被仰上、御取計可然ト奉存候、右御報旁如此御座候、以上、

九月二日　　宇津木六之丞

長野主膳様

四六六　中山忠能其他六卿上書〔安政五年〕

○この文書は、第三一七号文書と同文により略す。

四六七　参考　竹内半右衛門覚書鈔〔安政五年〕

筑前国上座郡大庭村ニ寓シ居タル薩摩人、竹内五百都重任覚書鈔録（今ハ東京ニ在テ葛城彦一ト称ス）

〔安政五年〕午年九月十八日ノ朝、北條右門〔薩摩藩士木村仲之丞、後村山松根〕ノ書翰ヲ持来テ面会ヲ乞フ者アリ、其書ヲ披見スレハ、京地云々ノ都合故、清水寺成就院前住忍向師同伴致シ、西郷・有村〔俊斎〕等ト浪花出帆、下關竹崎白石〔正一郎〕方ヘ着ノ所、イマタ宰相公（齊興）御道中肥後辺ノ由ニ付、西郷ハ御跡ヲ追大急ニテ出立シ、御途中ニテ成行申上候ヘハ、早速引返シ来ルヘシ、若シ其都合ニ至ラサル時ハ、国許ヨリ誰ナリトモ迎ヘ遣スヘケレバ、忍向師ハ我等方ニ潜マセ置ケト申サレシニ、京地ヨリ追捕ノ人、馬關ニ来リ、白石方ヘ立寄、船ニテ博多ヘ着候、是迄ハ忍向師ヲ中ノ番平高ノ隠宅ニ潜マセ置ト雖トモ、イマタ迎人モ来ラス、其上京都中座等当地ニ来リ、其筋

へ申出探索厳ク、盗賊方中以下ノ所ハ御互知音故、如何様ニモ可取計手段有之候へ共、幕追従ノ殿達多キ故、迚モ当地ニハ潜マセ置難ク、止ムヲ得ス夜ニ乗シ、下人重助ト両人、貴方ニ向ケ出発相成候、工藤（薩摩藩士井上出雲、後藤井良蔵）ト拙者ト両人ノ内一人、同道致スヘキ筈ナレトモ、我々参候テハ直ニ手カ付候故、其義ヲ能セス、四、五日ハ矢ハリ、此辺ニ居ラレ候フリニ計ラヒ置ヘキ間、薩ノ案内存候者御雇下サレ、足弱ノコトナレハ、山駕ニテ間道ヨリノ所、然ルヘキ様頼入候、余ハ忍向師ニ御面会ニテ御聞取下サルヘク、何モ貴兄ニ御依頼申故、万々可然御取計可被下トノ旨ナレハ、忍向師ニ面会シ、水戸老公ノ一件、京都ハ近衛殿・鷹司殿其余ノ変遷、同方京地発足浪花乗船、西郷・有村・吉井（幸輔）等ノ挙動、馬關迄船路ノ成行等ヲ、昼ヨリ夜半ニ及迄物語シテ感慨ニ堪ヘサリキ、此上ハ不肖ナカラ、私御引受申入薩成ラセ申ヘク、御心ヲ安シテ緩々休息有ヘシ、明後日ハ柳川表ニ用向有テ罷越筈ナレハ御同道申、同所ヨリ船ニテ御送申ヘシト云ニ、忍向師ハ大ニ歓ハレタリ、翌十九日ハ一瓢ヲ携ヘ、近所ノ小松原ニ同行ス、大庭村ハ名ニ負フ清水ノ所故、五百都往年此所ノ溝川ヲ、肥後（ニカ）ノ水泉寺（前）苔ヲ蒔付シカ、大ニ繁茂シケレハ、水泉寺苔ノ如ク製シタルヲ、サマ々々ニ調理シテ今日ノサカナニ持出シケレハ、忍向師ハ水中ニ在ル生苔ヲ見ラレ、取上テ其侭給ラレ、生ハ初テニテ一段ノ味ナリト賞セラレタリ、此日福岡ヨリ平野次郎来リ云、京都清水寺ノ忍向法師ヲ此方ヘ頼越、一昨夜発足ト雖トモイマタ逗留有ヘケレハ、吾ニ薩州迄随行致シ呉ヨト、北條君ヨリ頼マレ参リタル由ナレハ、疑念ナク呼入テ、忍向師ニモ其旨ヲ通シテ面会サセタリ、又秋月藩ノ坂田九郎右衛門ト、同人ノ子息ノ十三・四才計ナルヲモ伴ヒ来リ、是ハ次郎懇意ノ人ニテ、今日次郎ヲ訪ント来ル途中ニテ行逢ヒ云々ノ由ヲ語レハ、同伴致シ呉ヨト懇ニ請ハル、ニ任セ伴ヒタリ、懸念スヘキ人ニ非スト次郎ノ云ニ任テ是ニモ面会シ、今夜ハ四人一所ニ寝所ヲ構ヘ、終夜物語シ、廿日朝五百都云、今日柳川表ヘ御同道申ニ於テハ、薩州ノ山伏帰国掛立寄ラレシ故、若津迄見送ルト云唱ニスヘケレハ、其心得ニテ中途ハ余人ニ言語ヲ慎ミ玉ヘ、忍向師ハ御法体、次郎殿ハ総髪故髪ヲ結ヒ、末ハ後ニ撫付、弟子ノサマニテ出立有タシト云ヘハ、両人共ニ承諾故、次郎ノ髪ヲ娘ニ結ハセ、忍向ハ静溪院鑽水、次郎ハ臺嶽院雲外房ト変名シ、五百都ハ娘ノ十三ナルヲ具シテ、下座郡長田村ヨリ舟ヲ

雇ヒ、千歳川ヲ下リ、久留米城手前ノ渡場ヨリ上陸シ、水天宮ニ参詣シ、此夜ハ同社鳥居前ノ宿ニ泊ル、翌朝同所ニテ川舟ヲ雇ヒ、乗舟スル時町人体ノ者来リ、私ハ若津ノ者ニテ帰邑致シ度、只今此所ニ来リタルニ、御借切ノ舟出ル由承リ候、願クハ便舟ニ御乗セ玉リ度ト云ニ、透タル所モ有レハ拒ミ難ク、其意ニ任セタルニ、其者歓テ乗舟シ、舟中ニテノ話ニ、私ハ先年故有テ所構申付ラレ、柳川領ヘ参リ居リ、妻子ハ猶若津ニ在シニ、城下ヨリ御用トテ、昨日町役所ニ出タルニ、追放免サレ、帰邑ノ上目明役ヲ故ノ如ク申付ラレ、此上モ無ク有難ク存申故、一刻モ早ク帰リ、家内ニ為歓度存スルニ、御蔭ニテ今日ハ早着可仕ト語ルヲ聞テ、初テ目明ナルヲ知リ、此節柄ノ事故、探索ノ為ニ事馴タル者ヲ撰ミ出シタルニモ有ラント怪シマルレトモ、今更為ン方無ク、然アラヌ体ニテ、四方山ノ話シテ舟場ニ着ノ所、其者ハ直ニ己ノ家ニ人ヲ走ラセタルニ、番頭ラシキ人下部三・四人ヲ連テ迎ニ来ル、其者共ニ云ヤウ、此御旦那方ノ御蔭ニテ今日早ク帰リタレハ、我家ニ御案内申御茶一ツ指上度故、御荷物モ我家ニ揚ヨ、我等御供申故、其手宛（当）致シ置ケト云付ルサマナリ、扨申ニ柳川小保ニ御宿リ遊ハサルレハ、私方ヨリハ僅七・八町コソアレ、唯一ツノ河アルノミニテ、我家ノ前ヲ御通行ノ路次ナレハ、是非トモ御立寄下サレヨト云、爰ニ至テ避テハ、猶怪シマルヘシト忍向師ニモ其由ヲ私語キ、孰モ皆此家ニ至レハ、家内ノ人々出迎ヒ二階ニ請シ、便船借シタル由ヲ謝シ、緩々御休ミ有レト云、扨此家ハ娼妓屋ノサマニ見ユルニ、頓テ亭主出テ、今夜ハ家内限ニテ祝酒ヲ催シ、明日ハ親類中ヲ招キ、明後日ハ町内中ヲ招キ申配ナリ、御蔭ニテ今夜家内共祝酒ノ都合ニ至候故、一献指上度ト云、折柄茶ノ給士ニ出タル女五百都ヲ見テ、何方ハ五百都様ニテ入ラセラル、カ、御久シフリト云ニ、主人不審カリ、其方ノ御知人カト云ヘハ、其女云、福岡中ノ番ノ高橋屋ニテ、先年毎々御目通リ致シ、殿ハ薩摩ノ御方ナルカ、私共稚キ時ヨリ御出ナリシ御方ヨト云ヘハ、亭主云、高橋屋平右衛門ハ私同役ニテ、至テ懇ニ致ス者ニテ候トテ、サマサマノ話シナトシテ怪敷サマモ無レハ、漸ク心ヲ安ンス、頓テ吸物取肴等饗応有テ、夜半ニ膳部モ出テ一泊セヨト乞ルレハ、次郎ハ爰ニ宿リ、柳川小保町ノ薩摩問屋ハ素ヨリ五百都ノ知人ナレハ、忍向師ト僕重助ヲ爰ニ頼ミ、五百都ハ娘ヲ具シテ別宿シ、翌朝次郎来レハ是モ忍向師ト同宿

セシメ、夫ヨリ柳川役人ニ談シ、薩摩行ノ船ヲ雇ヒ入レトモ、日コトニ風波ノ荒ク出帆成難ク、漸ク十月朔日柳川湊ヲ出帆ス、其前夜忍向師ト枕ヲ双ヘテ臥ナカラ話シ明シキ、其時重任「埋火ノモトツ思ヒヲカキ起シカキアラハシテ語ル夜半カモ」、明朝船出ル時ニ「梓弓柳川海ヲイワタラス君カ舟路ニ浪立ナユメ」、忍向ヌシ「年経トモ忘ルヘシヤハ知ラヌ火ノツクシニ尽ス君カナサケヲ」、

明治十二年五月写　　小河一敏

四六八　造船方ノ吏田原明章記事鈔

鹿兒島ニテ順聖公（斉彬）ノ命ニ依リテ、外国形ノ大船ヲ造タルヲ日本ノ創業トス、之レ嘉永三、四年ノコトナリ、其手初ニハ磯ノ海浜ニ於テ、いろは丸（琉大砲船ト名ツク）ト唱ル三本柱ノ船ヲ造レリ、長凡二十間程ナリキ、其後櫻島瀬戸村・有村ノ両所ニテ、一緒ニ四艘ヲ製造ス、琉大砲船ト通唱ス、大砲廿門又ハ十二門備二艘ツヽナリキ、船名左ノ如シ、

昇平丸、大玄丸ト名ケ、此二艘幕府ニ献セラレ、江戸海ニ乗廻シタリ、二艘ハ島々運用ニ供ス、又蒸気船モ日本創製ナリ、磯海辺ニテ雛形ヲ製ス、長十余間ナリ云々、

（石室秘稿参看）

四六九　黑岩堅藏記事抜粋

御同君様（齊彬公）揖宿御光越中、折角御釣ノ思召立被為在、御釣船等鹿兒島ヨリ御召寄ニ相成、知林島方限松瀬入方数ケ所、　御沙汰私江（指宿郷多良浦々人黑岩政右衞門、後鹿兒島士トナリ堅藏ト唱フ）拝命、則チ其辺取計申候処、無程諸魚集附右形行御届申上候処、其時分大旱魃数日打続、農民一同雨乞祈念祭ニ立至リ、右折柄ニ付御沙汰之趣ニハ、ケ様一同困苦之砌御釣之儀ハ御取止被為在、松瀬之儀ハ漁民一統ヘ施与候様御沙汰被為在、殊ニ雨乞ニ付、太鼓・鐘等二月田近旁ニテハ、御遠慮打止メ相成候処、是又御沙汰之趣、第一御前ニモ御同様雨乞可被遊候間、鐘金等ノ儀ハ不相変打鳴シ候様御沙汰被為在、一同恐縮無限、殊ニ漁民一同ニハ、一入謝スル言葉モ無之、難有次第御座候云々、

四七〇　山川港ニ外国人接待所建設御目論見之事実

安政四年丁巳ノ冬指宿郷二月田温泉ニ御入湯、其折同所ニ幕府ノ蒸気艦觀光丸航海伝習ノ為来港、和蘭人及ヒ幕役ヘモ御対顔、懇叮ニ御優遇、和蘭人モ頗ル感戴セリト（当時ノ事実ハ後巻勝氏ノ書牘ヲ以テ了知スヘシ）、其時鹿兒島湾内外守備見込ヲモ質問セシメ玉ヘリ、和蘭人ハ懇問ニ対シ、当港及近傍沿岸ハ鹿兒島府ノ咽喉ナルカ故、守防砲台ノ図ヲ製シ奉呈セリ、且ツ同港ニ於テ追々遠大ノ尊慮アラセラレ、和蘭人ヘ　御内意ヲ含メラレシコトモアリシニ依リ、以来屢渡来ノ計画アリシト、故ニ接待所創建セラル、内定ナリシト云フ、当時附従ノ井上庄太郎・山田壮右衛門其密旨ヲ奉シタリトナム、其御密旨トハ則チ開市ニアリト、其為メ先ツ接待所建設ノ御内定ナリシト云フ、此事ハ安政六年ノ春井上庄太郎ヨリ聞ク処ナリ、同五年ノ夏頃ハ、同人ト共ニ琉球大島ニ於テ貿易取組ノコトニ従事シ、山川港ニ於テモ臨機開カル、予定ナリシト、然ルニ同年七月遽病ニ罹リ玉ヒ逝セラレシ故、全ク水泡ニ帰シタリ、

四七一　島津折烏帽子ヲ用ラレシ事実〔安政元年〕

島津折烏帽子十五頭

但此節ハ奥下リニテ（御手許ノ通唱）被相下候得共、以来新出来修復等表計（奥表ノ区別アリ、奥トハ御手元ヲ云フ）被仰付候、

右ハ年頭其外御行列ニ被相用候御供廻リ烏帽子、是迄観世折被相用来候得共、此節ヨリ本行ノ通御家折（島津折烏帽子ノ制ハ種々ノ説アリト雖モ、製式ハ八文字廣言ノ画像越前国岩船神社ニ納メアルヲ、木脇啓四郎ナル者発見シ、其画像ニ依リ製造命セラレタリ、其画像ハ廣貫蔵ス）ニ被相替候条、以来無間違様於向々相心得、御進物蔵（江戸邸ニアル倉庫、幕府及ヒ諸大名方等ヘ御贈答用ノ品物ヲ掌ル、故ニ進物蔵ト通唱ス）御格護ノ義ハ、物奉行並ニ見聞役受持ニテ、取始末急度行届候様被　仰付候、左候テ相用ヒ候節々、烏帽子ノ義ハ致拭方、素袍ハ干シ方ノ上、仕立屋雇入レ候ニ付、旁綿密ニ取計、物奉行・見聞役相切封ニテ（相切封トハ両人ニテ封印スルヲ云フ）致格護候様被　仰付候、就テハ烏帽子ノ義ハ、外向ヘ無之品柄ノ事候間、痛損等有之候ヲ其侭召置候テハ、急速ノ御用相欠候ハ差見得候ニ付、右体ノ節ハ早速修復ヲ加ヘ候様可取計候、尤モ御趣法掛御用人（金穀出入ヲ掌ル）時々気ヲ付、取扱被仰付候、

但是迄御格護向不始末ノ義有之、御進物蔵御格護ノ場ニテ、御供目付（一名御供頭）・新番（一名御駕籠脇トモ唱フ）ヘハ、右御役所預為相成居由候得共、此節ヨリ前文通御格護向等分テ被　仰付候ニ付、乍此上不行届ノ義共有之候ハ、向々ヨリ御趣法掛御用人ヘ可申出候、左候テ自分調ヘノ面々モ島津折タルヘク候、御能方烏帽子ノ義ハ、是迄ノ観世折可相用候、尤御当地（鹿児島ヲ云フ）ノ義モ追々御家折ニ可被相替候得共、此節ハ先ツ江戸ニ於テ御行列迄被相替候、

右通　御沙汰被為　在候段申来候条、此旨可承向々ヘ可申渡候、

（安政元年）閏七月　　筑後川上久封

右ノ如ク島津折烏帽子用フヘキ旨令セラレ、年首又ハ重キ礼式ノ際、登営又ハ神社仏閣御参拝等ニハ束帯セラルヽカ故、扈従ノ輩モ正服ナルハ皆人知ルカ如シ、従来観世折ヲ用ヒ来リ、御家折烏帽子ノ製ハ、忠久公剏テ頼朝公ヘ御対顔ノ時左折リヲ用ヒラレ、是ヨリシテ一種御家折ノ製剏レリト云フ、詳ナル石室秘稿ニ記ス、

公ハ国体姓民ヲ尊ヒ玉ヒ、古来ノ習慣人情ノ奈何ンヲ観察セラレ、施政ノ寛急軽重ヲ稽ヘ玉フコト篤キカ故、斯ノ如ク復旧セラレシコト寡ラス、俗人ノ思考ニハ些事タルカ如シト雖モ、衣冠ハ礼ノ本ナルカ故、其出所ニ拠リテ斯ク改正セラレタルハ、一美事ト云フヘシ、

四七二　風俗矯正御沙汰之趣布達（安政元年）

諸士之風義不立直候ニ付、学問武道ノ心掛ハ勿論、行義正シク士道ノ本体ヲ不失様、左候テ万事質素節倹行届候様ニトノ趣ハ、当春　御発駕前（安政元年正月二十一日鹿児島発）（御参府）御沙汰被為在、猶亦御書取ヲ以テ細々被　仰出、其段ハ一統奉承知通ニ候、然処士風不立直哉ニ被　聞召通候ニ付、急度士風立直候様可致旨被　仰付越、何トモ奉恐入次第之事候間、御趣意誠実ニ奉汲受、被　仰出之通第一学問武芸相励、折角律義相嗜、質素節倹相用ヒ、御奉公方無滞相勤、急度風俗一変致候様可心掛候、乍此上御沙汰被為　在候義共有之候テハ、申訳モ無之事候条、難有　御趣意無忘却堅可相守候、

（安政元年）九月　　筑後川上久封
近江末川久平
駿河新納久仰

伊織樺山久成

風俗矯正・文武勧奨ハ、御知政涯ヨリ数回訓諭厳令セラレシニ依リ、壮年ノ輩ハ正路ニ赴キタリト雖トモ、中年以上ノ者ハ旧弊ヲ脱セス、不品行ノモノ寡カラサルカ故、重ネテ如此御沙汰アラセラレシナリ、

四七三　拝借金被下切ノ布達及ヒ事実

一御勘定所取込拝借
一御納戸銀株々之拝借
一諸郷拝借
一諸浦々拝借
一金山方拝借

右ハ往古ヨリ至近代依願拝借被仰付置、軽キ年賦上納等ニテ追々返上ニモ相成候得共、当時諸人一統困窮之折柄ニテ、中ニハ生業難立行向モ有之、諸士迚モ同様、就中浦方之儀ハ別テ及疲弊、水主立（従来浦々舟乗営業ノ者ハ、無税免租等ニテ臨時航海ノ水夫ニ仕役ス、之ヲ水主立ト唱ヘタリ）等之専務モ不行届程ニ相労候段被聞召通、別段之　御仁慈ヲ以テ拝借銀米銭等、諸品共ニ都テ被下切被仰付候条、文武之心掛第一ニ致シ候様、厚可申聞旨御沙汰被為　在候条、銘々難有可奉承知候、此旨向々ヘ不洩様可申渡候、

但御勘定所取込拝借（俸給金穀）帳五冊、金山方拝借帳壱冊、御納戸拝借帳九冊、御趣法方諸郷並ニ浦方拝借帳壱冊

惣合三万七千六百六十壱両弐歩弐朱
銀四千三百七十九貫四百九匁八分五毛
米弐万二千九百七十五石四斗五升六合余
銭五万五千九百七十貫六百二十壱文

其外右帳内ニ有之候諸品迄モ、都テ被下切被仰付候ニ付、向々ヘ可申渡候、

閏五月廿四日　駿河新納久仰

拝借金銀銭或ハ米穀ハ、勤務中何乎ノ事ニ付テ拝借、或ハ商工ニハ営業資本等、浦々ハ造船等ノ為メ拝借シ、返納及滞、年賦返上ハ寛恕ノ方法ナリシト雖トモ、拝借者ハ疲弊困窮ニ迫レル者十中ノ八九ナルカ故、悉皆棄捨セラレタリ、其拝借者ハ士民倶ニ大ニ感戴シ、深ク恩恤ニ浴シタリ、布令ノ如ク各局ニ於テ担当シ、月々年々督促甚タ手数ニ渉リ、毎局取扱ノ吏員アリテ多忙ノモノナリキ（布令中浦々水夫立云々トアルハ、従来官用船舶ノ水夫ハ各浦々ノ義務ニシテ、

其費途ハ戸口ニ課シ傭役セシ者ナリ、仍テ津浦共ニ疲労シ、其課役モ調ハサルニ立到レルヲ云フ）

四七四　御家宝ノ刀剣朝廷ヘ御内献之事実及ヒ内勅

安政四年丁巳五月、近衛殿ヲ以テ忝モ御護身ノ為メ、所有ノ刀剣御所望ノ　密勅ヲ奉セラレタリ、公ハ　天意ノ忝シケナキ一家万世ノ栄誉、一身ノ面目之ニ勝ルナシト、御伝来ノ宝刀数百ノ中ヨリ、最一ナル新藤五國光ノ短刀・保昌五郎正宗ノ長刀各一口奉献セラレタリ、御小納戸竪山八郎護送上京シ、近衛殿御取伝ニテ内献セラレシニ、　叡感斜ナラサリシト、而シテ粧飾シテ奉ラムト願ヒ玉ヒ、錦街ノ藩邸ニ職工ヲ置ヒテ製造セシメ献納セラレシニ、殊更ニ　叡感浅カラス、常ニ玉座ノホトリニ置セラレタリトナム、然シテ後チ国詩ト宸翰ヲ賜ヒタリ、這ノ宸翰ハ逸ス、其逸シタル所以ハ、公御臨終山田壮右衛門等ニ遺命セラレ、焼キ棄タル御秘函中ニアリシナラム、詳ナルハ御遺言ノ条ニ記スカ如シ、

○正宗ノ刀・國光ノ短刀及ヒ御箪笥、或ハ古笙（古笙・御小箪笥献上ノ事実ハ別巻ニ記ス）ハ、現今京都御所内ノ御宝蔵ニ保存セラレシト云フ（廿五年三月大原重朝・宮路巌夫ノ両氏ヨリ聞ク処ナリ、近衛家古笙鑑定書ハ内献ノ部ニ記ス）

四七五　丁巳閏五月御下国之事実

四七五の一

安政二年乙卯ノ春ハ御下国ノ御例規ナリシカトモ、幕府特旨御用アリトテ御滞府御奉命、本年閏五月二十五日御下国アリタリ、布告左ノ如シ、

太守様益御機嫌能二十四日苗代川御仮屋ヘ　御光着、今日公辺御日柄（徳川家代々ノ死日ヲ云フ）ニ候得共、今暁七ツ半時同所御立、御行形リニ　御着城可被　遊旨被　仰出候云々、

五月廿四日　　駿河仝上

四七五の二

去ル安政元年甲寅正月二十一日麗城御発駕、三月六日江戸御着、同二年乙卯ノ春ハ御下国ノ御例年ナリシカトモ、異国船渡来天下多事、或ハ篤姫君御結婚等旁ノ訳ヲ以テ御滞府ノ特命アリシハ、当時御名誉ノ御事ナリキ、殊ニ異国船処分上ニ就テ、閣老其他川路（左衛門尉）・筒井（紀伊守）等ヨリ御内談ノ趣モ尠ナカラサリシトナム、

此回ノ御下国ハ御家督後第三回目ニテ、満三ケ年間御滞

府ナリシ故、国中上下共大旱ノ雲霓ヲ望ムカ如ク待チ奉リ、如何ナル仁政ヲ発セラルヽヤト、恰モ赤子ノ慈母ヲ慕フカ如シ、　御着城ノ当日晩景ヨリ二ノ丸文武講習所ヘ臨マセラレ、構造ノ一切御巡視、而シテ同月（日詳カナラス）該館開業ノ式行ハレタリ、当日ハ正服ヲ着ケ玉ヒ（麻上下）、正午時分ヨリ御着座、造士館生徒ノ読書講解等ノ試業終テ、剣槍術ヲモ　御覧、優等ノ者ハ特ニ褒賞セラレ、一般ヘ酒肴ヲ賜ヒタリ、是ヲ初トシテ毎月調練ヲ開カレ、小銃ハ発砲ヲ允サレ、其響山岳モ崩ルヽカ如シ、御城内ニ於テ放発調練ハ是ヲ嚆矢トス、実ニ前代未聞ノ盛事ナリ、夫ヨリ連日親臨シ玉ヒ、文武講習　御親覧、或ハ親シク指揮シ玉フニ依リ、人気大ニ振ヒ、老若倶ニ奮励セリ、

丁巳閏五月　御下国ノ際ヨリ文武共殊更ニ勧奨セラレ、中ニモ調練ハ日々二ノ丸演武場、又ハ各所砲台、或ハ砂揚場（一名天保山）等ニ於テ催サレ、其度毎ニ　御出馬指揮セラレシハ衆人知ルカ如シ、如此御躬ラ勉メ玉フハ、世運漸ク切迫乱兆顕然タル故ナレハナリ、実ニ　皇室ノ御為竭シ玉ヒシニ、悲ヒ哉天年ヲ仮サス、深図遠大ノ御大志モ中道ニシテ廃阻シタルハ、痛惜ニ堪ヘサルナリ、

此年八月、琉球王ハ家定公将軍宣下賀慶使ヲ従ヘラレ御参府ノ予定ニテ、既ニ伊江王使ハ六月中旬上着、七月十二日登城、謁見式モ行ハレタリ、当日ヨリ御病気加ハリ御伏蓐ナリシト云フ、〇琉球王使ヲ従ヘ参勤シ玉フニハ、鹿兒島ヨリ川内向田駅マテ薩摩ニ従ヒ、同地ヨリ公ハ肥後ニ入リ玉ヒ、九州・中國路ヲ経、大坂ニ出ラレ藩邸ニ入リ、琉使カ海路着坂ヲ待セ玉フコト、凡ソ二十日乃至三十日ニモ及ヘリ、

〇琉使ハ前記ノ如ク向田駅ヨリ川内川ヲ下リ、久見崎港ヨリ乗船、大坂ニ向テ航スルヲ例規トス、各港ニ碇泊、順風ヲ得テ航スルカ故、数十日ヲ経テ大坂ニ到ル、従来此ノ如シ、故ニ公ハ大坂伏見ノ間ニ滞在セラレ、而シテ東海道ハ薩藩ニ従テ江戸ニ入ルノ例規ナリ、然ルニ此回ハ朝廷ノ密命ヲ奉セラレ、其実ハ御滞京、大ニ為スコトアラセラレムノ御計画ナリシト、其事実ハ吉井友實カ秘記及ヒ岩下方平親話記、或ハ旧米澤藩士宮島誠一郎カ記事等ニ詳ナリ（去年四月御下国ノ際御所御遙拝ノ条ト参照スヘシ）

四七六　鹿兒島府下ニ書肆開カレタル事実

安政四年丁巳六月鹿兒島府下ニ書肆開カレタリ、従来書店

ハ僅ニ一廛アリテ（下町広小路ニ易者桑原白山ノ店アリタリ）、通俗ノ節用書ニ類スルモノヽミ仕入レ、四書五經等必要ノ書ハ、大坂又ハ江戸ヘ注文スル等甚タ不弁ナリキ、畢竟文学ニ疎ク武断ノミノ風習ナルカ故、売買不益ナルヨリシテ僅ニ一書店ニ過キサリキ、布告左ノ如シ、

新納駿河守家来　又木元右衛門
島津主計家来　青木靜左衛門

右者共、今般書籍売支配人被　仰付候ニ付、持合之書籍相当ノ代料ヲ以テ無差支手広ニ売渡候様可致候、左候テ諸士等之内、是迄持合ノ書籍類致熟覧、用弁之後ハ先々不用ノ品モ可有之候ニ付、右両人方ヘ差遣、相当ノ直引ヲ以テ当用之書物引替候乎、又ハ代銀相請取、於他所懇望ノ書物買入候儀、少シモ不苦候、其段支配人共ヘ兼テ申付置、彼是難渋ケ間敷儀不申立様申付候、

一御用之節ハ、右支配人御納戸（御手許ヲ云フ）ヘ呼出、写本其外被　仰付儀モ可有之候、

一写本ノ内、要用之書物ハ勝手次第兼テ写本可致置候、

一御蔵板四書五經、是迄御納戸奉行取扱ニテ、諸向ヘ申受被　仰付来候得共、以来右両人ヘ兼テ相下ケ置、懇望之者ヘハ勝手次第可売渡候、左候テ両人申受等ノ儀ハ是迄通ニテ、支配人ヨリ売出之節ハ、四書一部代銀九百二十四文（寛永通寶ヲ以テ算ス）、五經一部代金壱歩弐朱ト銭七十二文（此四書五經ハ弘化二年御部屋栖ノ内上墨セラレタル者ナリ）、右通ニテ売出、其外四書五經ニテモ一二冊ヅヽ、懇望ノ者ヘハ、右直成ヲ以テ無滞可売渡候、尤代銭ハ右通一切致増減間敷候、且又末々之者、万一代金相滞候儀モ有之候ハヽ、名前御納戸ヘ可申出候、

一困窮之者共、懇望之書物類買入候儀不相成、其者共ヘハ、古本之内一冊ニ付一ケ月何程ヅヽト申ス軽キ見料ヲ以テ、無滞貸渡シ、三十日限リニ可為差返候、万一右日限相過キ不首尾之者モ候ハヽ、名前御納戸ヘ可申出候、

一兼テ不見馴古本、又ハ写本之類、書店共買入候ハヽ、其段御納戸ヘ可申出候、

右通被　仰付候間、御納戸奉行・造士館御役々ヘモ、掛被仰付候ニ付、御国中之者共、手広ニ書見相調候様被　仰付候、此旨向々ヘ不洩様可申渡候、

六月　伯耆島津久福

右之方法ヲ以テ下町ヘ開店（御春屋角松原通）命セラレ、中ニモ貸シ本モ創設セシ故、衆人弁利ヲ得、種々ノ書籍ヲ置

テ貸与シ、識見ヲ弘フスルコト、ハナレリ、当時翻刻ヲ命セラレタルハ、孝經・大學・四書五經及ヒ左傳集解等ナリ、尚追々皇朝ノ史類六國志、或ハ康熙字典等モ翻刻スヘキ旨命セラレシト云（従来文學ニ疎ナリシハ、則チ書店僅ニ一店アリシヲ以テ知ルベキナリ）

鹿兒島府下ニ従来書店僅ニ一ケ所アリ、有名ナル易断者桑原紋次郎（白山）ナル者カ一小店ナリキ、此回新ニ命セラレタルハ、又木元右衛門・青木静左衛門ノ二名ナリ、各才識アリテ篤実ノ商賈ナリ、

因ニ記ス、又木ハ志布志郷大慈寺境内ニ産スル砂鉄鉱ヲ以テ、製鉄ノ営業ヲモナセリ、当時各所製鉄所アリト雖モ、又木カ製出第一等ニ位セリ、中ニモ刀鎗製銃ノ料ニ充テタルハ、皆此ノ産ヲ用ヒタリ、

四七七　和蘭領事官上申書（佐賀侯密贈）

四七七の一

於出島千八百五十七年第二月廿四日安政四年巳二月朔日

和蘭領事官申上候、当節渡来ノ和蘭商船「ウイルレミナエンカ」ウイルレーナエンカウ大号船ヲ以、別段風説書送越不申候、拙者へ送越候評判記ニ、廣東ニ於テ英人唐人ト「唐人之間ニ」天間々闘争差起リ候儀書載御座候、数ケ所之砦等英人奪取リ、アトミラール官名セイムル人名、一手之軍艦ヲ以テ廣東ヲ焼払申候、右争端ハ英人之条約ヲ、唐国高官之モノニテ相守不申候事ヨリ差起リ候儀ニ有之候、

右恭敬申上候、

和蘭領事官

トンクル、キユルシユス

右之通和解仕候、以上、

巳二月

岩瀬彌十郎
西　慶太郎
本木昌造

長崎御奉行
荒尾石見守様

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

四七七の二

於出島千八百五十七年第二月廿六日安政四年巳二月三日

和蘭領事官儀、通詞昌造ヲ以御口上御談ニ付申上候ハ、廣東ニ於ヒテ、アドミラール官名セイムール人名ト、唐国「高官之者之間ニ」天高官之者ト間々戦争差起リ候儀ハ、拙者思慮ニテハ、日本政府ニ至極御大切之儀ニ可有之、右争端差起リ候次第且ハ事情、日本之為メ至極肝要之儀可有之、右始末ニ至リ候事情、拙者見込之次第、書面ニテハ難申上、

乍去口達ヲ以委細無腹臓申上候儀ハ、差支無御座候、
右恭敬申上候、
和蘭領事官　トンクル、キュルシユス
右之通和解仕候、以上、
巳二月（三日）
小川慶右衛門
西　慶太郎
本木昌造
（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

四七八　英人廣東攻撃ノ始末

昨九月頃、廣東ニ於テ唐人ト英人ト争端ヲ開キ、英国船将セイムール名人廣東ヲ焼払、亜墨利加並佛蘭察モ、右船将ヲ相悩（援ケカ）メ候由、右趣意ハ、兼テ条約書ヲ以箇条取極有之候処、唐国ニテ兎角嫌拒アリテ、悖候儀抔有之（「条約ニ悖候儀抔」天）、右之始末ニ至リ候趣、就テハ、御当地（国カ）ニ於テ、能々御勘弁不相成候テハ、些細ノ事ヨリ争端ヲ開キ候様相成候テハ、以之外之儀ニ有之、右戦争之儀ハ、別段以書面可申上候得共、評判記書抜申上候迄ニテ、右様ノ内情ハ難申上候旨、御内々御含ニテ、口達可申上旨、カピタン申出候ニ付、此段申上候、以上、
巳二月
本木昌造
長崎御奉行
荒尾石見守様
（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

四七九　二月五日永持享次郎・御徒目付ヘカピタン申上候

十ヶ年許リ前英国戦争差起リ、唐国ヨリ和ヲ乞、条約取結ノ上、和睦相調、唐国之外（内カ）五港、則廣東・厦門・寧波・福州・上海ヲ、英人其他国（外脱カ）人之為ニ相開、居住居（並カ）住家地所勝手ニ借貸売買出来、万事唐人外国人之無差別、右五港滞在之外国官吏、唐国奉行職之（トカ）書翰往復、面会等無差支、其応接・書翰之文言等、都テ尊卑ノ別ナク、右五港之内厦門ハ一円英国ニ譲リ、全ク英国ト相成、同所ニ居住之唐人、其外土地之仕置ハ、英国ニテ支配イタシ、廣東ハ、初条約取結之砌、外四港相開候後、二ヶ年ヲ経テ開ク条約之所、年限相立候テモ兎角相開キ不申、諸事条約ニ悖候事共有之、今ニ開不申山、然ル処厦門英領ト相成候以来、唐人仕置抔モ以前唐国仕置ト事変リ、万事緩ヤカニ有之候ニ付、諸方之唐人厦門ニ移住者相増、土地之繁昌古ニ倍シ、外国人モ兎角同所ニ而已集リ候様相成、唐国ノ交易日ヲ追テ

繁昌シ、別テ薬品・絹布ノ商法盛ニ成行、居住イタシ、国力大ニ相増シ候由、初条約取結之砌ハ、唐国ニテ余程危踏候得共、漸ク交易事馴、当時ニテハ唐国政府ニテモ、交易ノ肝要タル事ヲ怡（倍カ）、専ラ手広ニ相成候様心掛候由、且厦門ニテハ唐船之借貸売買自在ニテ、英国其他之記旗ニテ、唐人外国人一同乗組、唐国諸州江交易之為通航イタシ候由、然ル所、此節唐国英国之旗ヲ建、船頭英人、外ニ唐人十二人乗組、廣東ヘ交易ノタメ渡来候処、廣東之唐国奉行職ニテ、右船乗組之唐人十二人ヲ召捕、英国記旗ヲ引卸捨候由、右召捕候次第ハ、十二人之唐人共、前方一揆荷担之者之由風聞有之候ニ付、右之始末ニ至リ候由、然ル所英国支配ノ唐人罪科有之節ハ、毎港滞在之英国官吏ヘ掛合、其手ニテ相糺シ引渡シ候事ニ、条約取極有之候処、無其儀ニ付、右船頭英人官吏ヘ訴出、依之官吏ヨリ書面ヲ以奉行職江掛合候処、右始末手違之致方、全ク事ノ行違ニ可有之候間、面会談判之上、召捕候唐人ヲ返シ、英国記旗ヲ建候様相成候ハヽ、事穏便ニ可相済ト申遣候得共、有無ノ返答無之、猶其折廣東港碇泊ノ英国軍艦惣督セイムール、日夜掛合候得共、是以返答ニ不及候ニ付、セイムール并官吏ヨリ厳敷掛合候ヘハヽ、条約面之通全ク心得違ニ付、右唐人差返シ記旗ヲ建候儀差支無之旨、猶面談ノ有無、四十八時間ノ内ニ返答無之候ハヽ、厳重之可及沙汰旨、再応掛合候得共、有無之返答無之候ニ付、無拠セイムール組下ノ軍兵ヲ上陸セシメ、砦等数ケ所乗取、大砲モ打（釘脱カ）、砦ヘ籠居候唐国軍兵ハ逃去候由、其上ニテ亦々面談之有無并返答承知イタシ度、右返答無之候ハヽ、猶厳重之手当可致旨掛合候得共、返答無之候ニ付、セイムール一手軍艦之内、蒸気船「ハルラコウタ」ヨリ奉行所ヘ一丸ヲ発シ、其上ニテ亦々同様掛合、此上ニモ返答無之候ハヽ、廣東一円焼払可申旨掛合候得共、又々取合不申候ニ付、軍艦弐艘ヨリ数丸ヲ発シ、廣東内外曲輪ヲ打崩シ候由、セイムール并官吏其外士官五・六輩ヲ引纏、奉行所ヘ押テ参リ候処、奉行職ハ役人不残召連立去居候ニ付、面会不相叶引取候上、乗取候砦数ケ所ヨリ放発イタシ、奉行所并役人ノ居宅ヲ焼払、其上ニテ亦々同様掛合、若返答無之候ハヽ、事実廣東ヲ焼払可申、然ル上ハ老幼男女之死亡モ有之、実ニ不仁之義ニ付、是非返答有之度掛合候処、其節漸ク返答有之候ヘトモ、至極不相当ノ事ニ

付、殊ニ面会許諾致サヽルニ付、無是非軍艦・砲ヨリ十四日ノ間放発致シ、廣東所々焼払候趣、其砌亜墨利加・佛良察軍艦モ廣東港碇泊イタシ居、其軍兵ヲモ上陸セシメ候由、是ハ廣東乱放(妨)ノ為ニ無之、廣東ニ有之候其国之商館并人民警衛之為ニ候由、評判仕候記ニ書載有之、其余此度之一件ハ、唐国奉行職之不明ヨリ事発シ、英人理不尽之致方ニ無之、多分此度モ唐国ヨリ和ヲ乞、英人ノ存寄相立可申候、廣東之居民風説イタシ候由書載有之候、扨日本亜墨利加ノ御条約相済、下田・箱館御開ニ相成、交易ハ未タ御免相成居不申候得共、金銀銭ヲ以品物相調、或ハ品替、亦ハ官吏滞在モ御免有之候得ハ、先ツ交易之道相開ケ候ト申モノニモ有之、亦英国モ御条約相済、是ハ下田・箱館・長崎三箇所御免ニ相成、下田・箱館ハ亜墨利加ト相変候事モ無之、就テハ長崎ニテノ御所置、内港ニ入帆不相成、高(鋒カ)鋒辺ニ碇泊可致、端船ヲ以乗廻リ并上陸不相成、其外廉々些細之御規定有之、右様有之候テハ、英人ニテ条約相結候詮ハ無之候、亦魯西亜トノ御条約相済、三箇所御免相成、長崎江外国異人ハ御免許之通御召置可有之旨、然ル処、魯西亜船長崎港渡来之節御所置、魯人至極不満之由承知仕候、尤沈没ノチイマナ(ヤカ)船下向(面カ)ニテノ御所置、并難民御救助之次第ハ、至極感伏致候由承リ申候、右三箇国ハ世界中之強国ニテ、別テ魯西亜ハ世界中最大国、殊ニ御隣国ニテ、味方ニ有之候(上ハ脱カ)無此上御後楯ニ可相成、敵ニ取候テハ至極之大患ニ可有之候間、別テ御懇情被遊候ハヽ、御安全之御良策ニ可有之、右三国ノ外、佛蘭察ト御条約可相済事モ近ク(々カ)可有之、然ハ世界中ノ強国ト唱候四箇国不残御条約相済候間、此上ハ是迄之御国法御変革相成、世界普通之御法ニ御改相成度、左モ無之、是迄ノ御法ニテハ、諸国ニテ承伏不仕、正法ノ国トハ相唱不申候、尤未タ条約不相済国々、箱館ニ於テ病没人御手当被成候分ハ、西洋之人情ニ被協、至極御良善之御所置ト可申候、元来日本ハ世界東方諸国之内、一箇之富饒強国ニテ、其人民英力(オカ)有之、唐国抔ノ及所ニアラス、但東国之国民ハ、自分ヲ尊ミ他ヲ卑ムル癖アリト、西洋人評判仕候、拙者久敷日本ニ罷在見聞仕候ニ、其説ニ不違、日本モ其癖有之様相見候、折々外国船渡来之節、右船ニ被遣候御書翰之内、御文言等心附ノ義ハ可申上旨ニテ、為御見ニ相成候処、兎角御命令相成候様ノ御文言有之、御頼ト申

御文言曾テ見請不申、御国内限之儀ハ、兎モ角モ可申上様モ無御座候得共、外国人江ノ御文言ハ、御改メ相成候様有之度、和蘭人ハ年久敷渡来、御国風モ粗相弁候間、左程ニハ不申候得共、外異国人ハ至極不悦義ニ御座候、斯ク申上候迚、日本ニテハ、他ヲ賤メラレ候ト申上候ニハ無之候得共、外国人之思フ所、我モ人彼〔ヲカ〕モ人ト申事、其本意ニ候ヘトモ、御書翰・御文言ト初、御応対其外一体自他尊卑ナキ様之御所置、御肝要ニ奉存候、一旦条約御取結ニ相成候上ハ、御大切之儀ニ候間、御粗略不相成、能々御勘弁相成度奉存候、元来条約之趣意ハ、只親睦ヲ旨ト致シ候儀ニテ、紙上細事書載不能候間、万事些細之儀、可相成丈御沙汰不相成コト可然、向々御糺之上、可相成程ハ狭ク相成候様之御所置ハ不可然、只親睦之処御心掛相成、万事広ク相成候様、緩々御沙汰御為可然奉存候、和蘭「フアービュス」下田・箱館一見トシテ罷越、下田滞在之亜墨利加官吏江面談仕候処、日本ハ兎角小事ニ拘リ、些細ノ事申立候テモ返答埒明不申、無益之小事而已申聞ケ、実ニ煩敷候間、亜墨利加政府ヘ申立、別段可及談判抔噂イタシ候ヨシ、右様之事ヨリ漸々可及混雑候間、篤ト御思推〔推カ〕相成度、猶渡来之外国船申立候廉有之節ハ、可相成丈速ニ御返答相成度、遅々ノ儀ハ、外国之風儀ニカナイ不申候間、是亦御含相成度、御免許可相成程之事ハ、速ニ御免相成候方可然、初御免許難成旨御申聞ケニ相成候儀ヲ、強テ申ニ任セ被差免候様ニテハ、強テサヘ申乞候ヘハ、被差免候様心得、事実御免許難成儀モ、強テ申立候様相成可申候、御免許可相成程之儀ハ、速ニ被差免候ハヽ、御国威モ相立可申、強テ乞ニ任セ被差免候テハ、威儀ウスク、御免許之名モ薄ク、御国威モ相減、夫丈ケ申上者之外〔カカ〕計国威相増可申候、兎角兵端ハ小事ヨリ起候モノニテ、此度唐国之弊モ右等ノ小事ヨリヲコリ、自分弱ヲ知ラサルハ智ト難申、御国ニテモ能々御勘弁有之度、尤御国唐国程弱クト申スニハ無之候得共、久敷太平打続、欧羅巴ホド軍事ニ不被為馴、唐国ハ其地連続仕居候得共、御国ハ四方海岸ニテ、一度兵端ヲ開キ候テハ、至極御大切ニ可及候間、能々御勘弁相成度、唐国之一件只外国之事ト御聞捨ナク、事情得ト御賢察御所置御座候様仕度旨、甲比丹申出候、

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

四八〇　英人廣東攻撃ノ事実報告

巳二月廿四日備中守殿（堀田）御直達、左之通

評定所一座海防掛リヘ

長崎奉行

下田奉行

箱館奉行

覚

英人廣東ヲ焼払候一条、和蘭甲比丹話説之趣、再応熟考致候処、蘭人之申立、今更之事ニハ無之、追々差廻候儀ニ相聞ヘ、右ハ彼国情願ヲ可遂ト、強テ牽合附会イタシ候儀共不相聞、実ニ当時外国人御取扱振、事情不慮儀ハ、我国人ヘモ粗相分リ候程ノ儀ニ付、彼ノ怒ヲ積候テハ、廣東之覆轍ヲ踏レ候儀モ難計、尤以（御カ）警戒可致儀ニ有之、既ニ寛永以来之御祖法ヲ御変通被遊、和親御取結ニモ相成候上ハ、寛永以前之御振合モ有之、御扱方モ亦随テ御改革無之テハ相成（間敷カ）兼候、然ル処兎角仕来リニ拘泥イタシ、瑣末之儀迄事六ヶ敷差拒、近来外夷ノ怒リヲ醸シ候ハ、無算之至ニテ、万々一炮声一響候ハヽ、最早御取戻シモ難相成候間、外国人御取扱、（外国人緩優之御取扱、大カ）且長崎・下田・箱館之三港ハ、諸事同様ノ取計振ニ相成、文書之往復・応対ノ礼等ハ、都テ外国人共信服イタシ候様、御所置無之候テハ、難相叶時勢ニ有之、既ニ英吉利評判記・亜墨利加（是カ）官吏申立、尚又今般蘭人之申立等、一々差廻（追カ）居、此上之御仕法ニテハ、永々可取扱様無之ハ顕然ノ儀ニ付、無事ノ内ニ早々是迄ノ御法御変革有之、其上ノ御取締相立候様取計候方、長策ニ可有之候間、右ノ心得ヲ以、向来ノ御所置振等之勘（筭トカ）弁熟慮致シ、早速取調可被申聞候事、

巳二月

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

以上五通ハ、肥前佐賀侯ヨリ御送リニナリタリト、当時幕府ハ外国ニ関スル事柄ハ、大小トナク秘密ニシ、容易ニ聞キ知ルコト能ハス、佐賀・福岡ノ二藩ハ、長崎警衛ノ御任ナル故、他藩ト異リテ、機密ニ罹ル書モ特別ニ示サレタリト、両侯ハ御近親且御懇交ナルカ故、窃ニ示サレタル事柄勘カラス、這書モ則チ其一ナリト、廣貫密命ヲ奉シ渡琉ノ前頃、二ノ丸御茶屋ニ於テ、前記蒸気船御訛書御下ケ種々御親命拝聴ノ際、心得ノ為メニ御手自ラ拝戴シタルモノナリ（第（マ）巻参看）

四八一　集成館紀事鈔（市來廣貫紀事石室秘稿）

安政四年丁巳五月二十四日御着城、同閏五月十六日磯邸ニ被入（御下国後初メテ被為入タリ、此日天気晴朗南風穏ナリ）、程ナク反射竈等ノ場所ニ被為入（本館落成刱テ被為入）国老新納駿河久仰・御側役三原藤五郎・福崎助八・竪山武兵衛等扈従ス（新納・三原・福崎ハ建築掛ナリ）、初メ反射竈ノ熔鉄鋳砲等（二十四斤・十八斤・六斤ノ台場砲各一門及ヒ二十拇臼砲一門ヲ鋳造ス）御覧畢テ、製鉄熔鉱又ハ大砲鑽開台等（廿四斤・十二斤・六斤ノ台場砲四門ヲ鑽台ニ架シテ鑽開ス）其他館内悉ク御巡覧、御喜色ニ被窺、御言ニ斯ク迄整ヒシトハ思ハサリシトノ御褒詞、掛員一同拝承ス、而シテ役所ヘ被為入、新納・三原等ヘ御沙汰之趣ハ、此ノ造営ニハ多クノ入費ニ及ヒシ故、定テ心配セシナラン、然シ深キ見込アリテ、入費ヲ厭ハス造営シタルハ他事ニアラス、方今軍備ハ国役専要ノコトナルハ、無論先年来宰相様（齊興公）分テ御手ヲ被為付タルコト故、益々手厚ク備向不整テハ不相済時節ト成レリ、殊ニ日本ノ形勢モ日ニ月ニ差逼リ、四・五年乎六・七年ノ後ニハ、必ス乱世トナルニ疑ナシ、就テ軍備厳整第一、京都ノ御警衛充分ニ無クテハ相済マス、又是迄通ノ手当ニテハ、非常ノ用ニ足スラ、三ケ国海陸ノ備大砲一千挺モアラハ、差支アルマシト思ヘリ、夫レ丈ケ備リタル上ハ、支那其外ヘ売出ス見込モアリ、支那モ今ノ有様ニテハ内外ノ患アレハ、必ス大小砲必用ナルヘシ、又日本国中大小名中ヘモ売出スヘシ、其外深キ見込アリテ造営セリ、是迄ノ入費勘定シテ差出スヘシ、以来ハ今迄ノ通リ、心配ハアルマシトノ御沙汰被為在、新納初伺公ノ人々低頭拝承シ、新納言上ニ、誠ニ恐入厚キ　思召ノ程難有次第、掛リノ者共ヘモ尚亦精勤可為仕旨上申セリ（其時掛員一同御次ノ間ニ罷在親シク拝承ス）、而シテ掛員御呼出シ、館名取調上申スヘキ旨拝承ス、引続キ蒸気船雛形製造場ヘ被為入候（製造場ハ旧龍洞院ノ海浜ニシテ、現今紡績器械ノ近地、砲台ノ在ル辺ナリ、雛形船ノ長十二間三尺、蒸気十馬力ナリ）、詳ニ御覧遊ハサレ、速ク船卸シテ試乗可致旨承知セリ、此時新納・三原等モ伺公ス、又新納ヘ御沙汰ニ、蒸気船ハ万里ノ波濤モ風順ニ拘ラズ日ヲ期シテ往来シ、治乱共ニ必要ノ者ナリ、殊ニ此ノ方ハ日本第一ノ海国ニテ、琉球島々等ノ往来ハ勿論、江戸・大坂辺非常ノ時兵隊繰リ出シニ、陸道ハ急変ノ間ニ合ハサルカ故、日本ニテ第一ニ備フヘキ国柄ナレハ、天下ニ先ンシテ手ヲ付タリ、軍事ハ古ト違ヒ、

大小砲等ノ運転一方ナラサル事ニテ、古弓・槍・刀剣ノミノ時節ト同様ノ心得ニテハ相済マス、殊ニ蒸気船ハ公義ヨリノ誂モアリシ故、軽カラサル訳ナレハ入費ヲ厭フヘキコトニ非ス、追々大蒸気船ノ造営モ申付クヘシ、其入費ハ見込付ケ置キタリトノ　御言トモナリキ、夜入前御茶屋ノ様被為入候、而シテ新納・三原・福崎ハ集成館ヘ引取リ、其時新納掛員ニ向テ曰ク、先刻御沙汰之趣、寔ニ恐入広大ナル御趣意ナリ、就テハ掛ノ人々厚ク相心得精勤可致旨、一同ヘ申達シ、尋テ三原ヘ向テ曰ク、此ノ入費ハ御見込被為在トノ御言ハ、如何ナル処ニ御目ヲ被為付候哉、推量ハナキ哉ト云フ、三原曰ク、実ニ御同然御深意窺ヒ知ルコト能ハス、然レトモ此内ノ御沙汰ニ、蒸気船造建ノ費用ハ公義ヨリ御下ケ渡シ相成ル様、御取計ヒノ　思召有之、其外公義御軍備大小砲ノ製造、又ハ軍艦造建等ノ一切、此御方ニ御引受遊ハサレ、三ケ国中ノ海陸御備向ハ、夫レ是ノ余計ヲ以テ、充分ニ調フヘシトノ御内慮窺候コトモ有之候、又御軍備ノ為メ、鋳銭御願済ノ御内慮モ被為在、既ニ西村（茶釜鋳造匠道弥）ト申者ヨリ伝習ニモ相成リ、旁々容易ナラサル広大ナル御趣意ニ被為入、恐入次第ナリト云フ、新納大ニ驚キ、是迄其様広大ナル御趣意トハ、存セサリシト云ヘリ（此日ヨリ数日御滞在、毎日反射竈試験等御覧、種々御下知被為在タリ）、館名ハ大成・集成・興成・興業・開成・開物等ノ数名ヲ選ンテ呈ス、其中集成ヲ御採用相成リ、製造所ヲ集成館、御花園製煉所ヲ開物館ト名ツケラレ、安政四年丁巳閏五月十九日発令セラレタリ（布告巻末ニ記ス）

右通リ嘉永五年壬子ノ秋ヨリ、安政五年戊午ノ夏御逝去迄ニ、集成館・開物館ノ両所ニ於テ開カレタル諸種ノ品目、凡ソ左ノ如シ（廣貫ハ安政四年丁巳十月琉球ヘ渡海、御逝去迄凡ソ七・八ケ月間ノ事業ハ、親シク取扱セサリキ）

反射竈（一基二竈ヲ連築ス、二基ニテ四竈トナレリ、初築ノ一基ハ用ニ堪ヘス、毀テ改築シ都合三基ニ及ヘリ）

製鉄熔鉱炉一基（洋名キーグオーヘン）

大小砲鑄開台一基（洋名ボーレンバング）

銅鉄製造場（和洋両法）

紅瓦羅斯（ガラス）製煉竈四基（二基ハ殷紅色竈、即チ現今船舶ノ舷燈ニ用ル紅色ナリ、銅粉ヲ以テ紅色ヲ発ス、二基ハ透明紅色竈、即チ黄金ヲ以テ紫金ヲ製シ、紅色ヲ発ス）

水晶瓦羅斯（キリスタルガラス）製造竈一基

板瓦羅斯製造竈一基
鉛瓦羅斯製造竈大小数基（普通ノ瓦羅斯）
磁器製造竈一基（和洋折衷）
陶器製造竈一基（和漢洋法折衷）
抄紙場一ケ所（越前又ハ美濃伝）
胡粉製造所（西洋又ハ支那法）
洋法搾油器械（ワートルペルス）一基（水力ヲ以テ搾ル）
農具製造場一ケ所（和漢洋種々）
刀剣製造場一ケ所（熔鉱炉製ノ鉄、又ハ諸縣郡吉田産ノ厳鉄ヲ以テ製造ス、刀工義純、通唱谷山城四郎ト云フ）
工匠器械製造場一ケ所（泉州堺伝大工道具ヲ専ラ製造ス）
鉛粉製造所一ケ所（和洋両法）
氷白糖製造所一ケ所（漢洋両法）
地雷水雷製造所一ケ所
獣皮消軟一ケ所（洋法）
皮革器械製造所一ケ所（和洋両法）
膠製造所一ケ所

此ノ外安政四年十月ヨリ、同五年七月御逝去迄ノ間ニ開レタル事業ハ、琉球渡海中ニテ、詳シク記スコト能ハス、如此種々ノ事業、職工人足等ニ至ルマテ、日々千二百余名ヲ仕役ス、掛リ役員ニハ江夏十郎・清水源兵衛・郡山一介・竹下覺之丞・中原尚介・宇宿彦右衛門・磯永喜之介・鎌田郷左衛門及ヒ廣貫、其他筆者出納掛等四、五名、或ハ洋学者石川確太郎等ノ数名ナリ（石室秘稿抄）

○右外製鉄器械或ハ鉱山器械、或ハ小銃製造器械等外国ヘ御誂ノ御目論見ニテ、蒸気ニ換ルニ水車ヲ用ラル、積ナリキ（蒸気ニ換ルニ水力ヲ用ムトノ計画ハ、石炭坑ノ条ニ記ス）、稲荷川河上ヨリ墜道ヲ穿チ、磯御茶屋ヘノ水道ヲ開穿セラル、ニハ、専ラ各製造器械建築ノ為ナリ、然ルニ安政五年戊午七月御逝去後、中道ニシテ廃棄セリ、

○同局創設ノ顚末ハ、嘉永四年七月ノ部ニ連続ス、

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政四年

目録

國學館並洋學所開設關八田後醍院石川等へ取調御内命
諸郷士格式復旧ノ尊慮
禁闕警衛ノ策關勇助へ取調ノ御密命
海防論策ヲ求メラレシ事実
参考　聖堂・造士館・演武館・神農殿
幕府学制訓論
昌平国学之記
黒田清綱建言御弁論
島津豐後へ賜書
長崎事情
日州去川山柞灰製御取弘
和蘭船長崎ヨリ来琉御附人ヨリ在番奉行ヘノ書状持参及ヒ戊午ノ春井上庄太郎其他守衛人員数十名大島ヘ渡海ノ顚末
三司官座喜味親方退役ノ顚末
国老島津豐後へ賜書
江夏十郎へ御親話
下ノ關ヲ長州ニ与ヘタルハ幕府ノ拙策
軍制改革洋式砲術奨勧ノ事実
〔ママ、本文中にはなし〕齊彬公島津豐後へ与ル書
山本藤助家記抄
御家老座其外諸局ノ悪弊ヲ矯正シ玉フ
外国形ノ風帆船創製ノ事実
齊彬公撮影術（一名写真）御開キ御真影ヲ写サシメ玉ヒシ事実
書生遊学御勧奨及ヒ学風匡正ノ訓令
士商ノ名分ヲ正サレシ事実
和蘭国ニ箱館長崎ノ通商ヲ允ス
琉球国王賀慶使出府ノ費用ヲ貸与ス

島津久徴家記抄

国老島津豐後（ママ）へ賜書

以上十二条

四八二　國學館並洋學書開設關・八田・後醍院・石川等へ取調御内命

國學館並洋學所開設セラレムト、關勇助廣國・八田喜左衛門知紀・後醍院彦次郎眞桂（ママ）へ学制課目等ノ一切取調言上スヘキ旨、江夏十郎直義ヲ以テ内命セラレタリ、其節江夏ヘ　御沙汰ノ趣ニ、造士館ノ学風ハ程朱ノ学ノミヲ講習シ、我生国ノ史籍ハ度外ニ措キ、人ニ依リテハ却テ我国ヲ賤メ唐土ヲ尊重シ、何モ彼モ唐風ニセント唱フルモアリト聞及ヘリ、甚タ心得違ナリ、儒学ハ人道教訓ニ於テハ欠クヘカラサルハ無論、学問ハ為政ノ規範ナレハ、人情風土ニ従テ日本ハ日本ニ適シ、取捨斟酌シテ施スヲ眼目トス、故ニ日本ニ於テ、唐土同様ノ政ヲナサントスレハ、人気風土ニ適セサルモ多シ、漢学者ノ癖、何モ彼モ唐土ト同様ニセント主張シ、我国聖帝賢相ノ言行等ニハ疎キモノモアリ、適マ知レルモノアリト雖モ、唯物知リトモ云フヘキ行為ニシテ用ヲナサス、我国ハ二千有余年ノ久シキ

皇統一系綿々タル宇内比肩ナキ芽出度国柄ナレハ、国人タル者ハ幾万歳ノ末迄モ

皇統ノ動カサルヲ祈ルヘキハ勿論ノコトニシテ、他言ヲ要セス、仍テ教ノ道ハ夫ヲ目的トシ、國學館ヲ設ケ、生国ノ道ヲ弁ヘ、而シテ漢洋ノ学ヲ以テ補ヒ、本末先後明弁スルノ学規ヲ設ケムト思ヘリ、宜シク其辺ノ事ヲ古今ニ照シ、諸国学校ノ体裁ヲモ斟酌シ取調ヘシトノ

御言ナリシト、此　御言ヲ關・八田・後醍院等拝承感佩極リ、各冀望スル処ノ要領ヲ尽サレタル御言ナレハ、日夜勉々上申シタト云フ、洋學所ノ調査ハ、石川確太郎佛朗斯・和蘭ノ大中小校ノ制ニ基キ取調タリト云フ、其際ノ御言ニモ、近代外国船毎々渡来、通信・貿易ヲ請ヒ、稍暴慢ノ挙動ニモ及ヘリ、畢竟我国ノ武備ノ整ハサルヲ侮リ、暴威ヲ以テ迫リ、素志ヲ達セントス、兎角彼ヲ知リ己ヲ弁シ、彼ノ長ヲ取リ己ノ短ヲ補フノ目的ヲ以テ、学校ヲ設ケ、人材ヲ育成シ、護国ノ道ヲ講スル、教導スルヲ急務トス、就テハ第一ニ彼ノ国語通弁ヲ開キ、彼ノ情意ヲ詳ニスルニアリ云々ノ趣ヲ以テ調査ヲ命セラレタリトナム、是レ安政四年丁巳六月中旬ノ御言ナリシトソ、

四八三　諸郷士格式復旧ノ尊慮

薩隅日ノ三州ハ六百年来ノ古俗良風今ニ存シ、海内無比ナルハ悉ナ人知ルカ如シ、中ニモ諸郷ニ士分土着ノ制ハ、則チ屯田ノ法ニシテ、非常ノ時寛急ニ応シ、治世ニハ耕耘ニ従事シ、妻子ヲ養育シ、治乱弁利ノ制ナリ、元龜・天正・慶長ノ頃ハ諸所ニ御居城ヲ遷サレシモ、土着ノ士ハ依然在住シ、僅々御近習ノ者ノミ引移サレタリ、如此ナリシ故、御先代ニハ重役ヲモ勤メタル者ノ子孫、今ハ郷士トナリ、城下士ト一段格式ヲ下ケタルハ他藩新家ノ制ニ習ヒタルモノナラン、或時江夏十郎ニ命セラル、ニ、方今乱階既ニ顕ワレ、士気振作ヲ必要トス、士気振作ノ要ハ上下ノ別ナク、人材登用ヲ第一トス、因テ城下諸郷ノ差別ナク、古制ニ復シ、親疎ナク人材ヲ撰ヒ、召仕フノ趣意ナリ、且ツ城下士モ貧窮ノ者ハ諸郷ニ土地ヲ与ヘ、屯田ノ制ヲ拡張シ、生計差支サル様ニ致シ遣シ度、今ノ様城下ニ屯集シ、書役勤等扶持米ノミヲ以テ生活スル法ニテハ、自然柔弱ニ流レ身体モ強カラス、臨時ノ用ニ立チ難シト思ヘリ、各篤ク時勢ニ対シ、利害得失ヲ勘ヘ、無遠慮存分上申スヘシトノ御言ナリシト、關・江夏素ヨリ冀望スル処ナリシ故、速ニ復旧ノ御沙汰、及ヒ屯田法尚ホ御拡張ノ法ヲ布カレムコトヲ懇請セリトナム、之レ安政四年丁巳ノ夏七月頃ノ事ナリシトソ、

四八四　禁闕警衛ノ策關勇助ヘ取調ノ御密命

公カ尊王ノ御志篤カリシハ咸人知ル処ニシテ、今更多言ヲ要セス、然リト雖モ莫然其事実ヲ挙ケサレハ、感覚ノ浅深ナシトモ謂ヒ難シ、故ニ聞得タル処ノ一二ヲ記サン（誤カ、関勇助ハ安政二年六月十六日逝去ニ新納立夫日記）ニ、安政四年ノ夏關勇助ヘ密命セラレ、京都御警衛堂上方ノ御意志ヲ探クラレ、而シテ之ヲ幕府ヘ建言セラレムト、其草稿ヲ奉ラシメ玉ヘリ（御密命ヲ伝達セルハ侍医川畑魯水ナリシト云）、密命ノ御言ニ、今ヤ極盛至治ノ世モ末ニナリテ、幕府ヲ初メ諸大名モ尊王ノ大義ヲ忘レ、稍王室ヲ軽蔑スルノ形ニ立至レリ、真ニ歎息ノ至ナリ、京都ノ御有様ヲ伝聞スルニ、第一御続料少ク、御不如意ノ由、実ニ臣タル者ノ忍ヒサル処ニシテ、黙止スヘカラサル次第ナリ、加之天子ハ御所内ニ押籠メ奉ルモ同様ノコトニテ、尊ンテ遠ケ奉レリトモ謂フベシ、其他事毎ニ御不如意ノ御コトナルハ近衛家ヨリモ伺フ処ナリ、仍テ　公義

へ御建言ナサレムノ御内旨ナリトテ御ケ条書ヲ下ラレ、尚ホ思考ヲ凝ラシ、上申スヘシト密命セラレタリト、關ハ元来尊王憂国ノ老成者ナルカ故、尊慮ノ厚キニ感激シ、夙夜黽勉、御ケ条ヲ修成シ奉呈セシトナム、其御ケ条ノ第一ハ、将軍家五六年ニ一回参内ノ事、三代家光公ノ先縦ヲ採テ説ヲ立テ、君臣ノ分紊乱シテハ治乱ノ政事統纏スルコト能ハサルニ立到ラン云々、第二、外夷屢渡来、武備不整人心稍離反ノ際、攝・泉海ニ来寇若シ暴慢横行スルトキハ、京都ハ纔一日路ノ事ナレハ、禁闕ノ御守護寔ニ危殆ナルカ故、行宮ヲ奈良ノ旧都ニ離宮ヲ新築セラレ、平生ハ御保養ノ御為メ毎々御幸被為　在候様、是レ差向キ時勢ヲ慮リ、不虞ノ変ニ臨ミ御動揺ナキノ御予備云々、第三、禁中ハ勿論宮堂上方御充行薄ク、御不如意ノ由ハ悉ナ人憂歎スル処ニシテ、将軍家ノ御立場ニ於テ済セラレス、京都ノ御振合ト江戸ノ御形勢ニ比シテハ同日ニ語ルヘカラサルカ故、御加増充分ノ御仕向相立候ハ大小名ヨリモ必ス多少進献志望ノモノモ可有之云々、第四、大坂・京都ノ両所ニハ大中藩輪番御守護命セラレ、宸襟ヲ安ンシ奉ル云々、第六、御政事重立タルケ条ハ天裁ヲ仰カレ、将軍家ヘ御委任ノケ条モ定ラレ度、然ラサレハ大義名分ヲ弁シタル世ニ赴キタル故、人心ノ折合付マシク云々、第七、宮堂上方武芸御修練、銃砲ノ業モ御研究、文弱ノ弊ヲ矯メラル云々、第八、攝・泉・播ノ海岸ニ堅固ノ砲台建築守防厳重、宸襟ヲ安ンセラレ度等ノ数ケ条ヲ撰ハレ、而シテ尾・水・越ノ諸侯ヘモ御談合セノ上、御建言云々ノ御趣向ナリシト、關ハ御ケ条ニ基キ稿案ヲ作リ奉呈セリト、右取調ニ干預セシハ八田喜左衛門・後醍院彦次郎・大久保次右衛門等ノ数名ナリシト云フ（此三四名ハ元来勤王無二ノ者ニテ、此ノ密命拝承、寝食ヲ忘レテ喜ヒタリト、關ハ京師ニ在ル梁川星巌ト交リ、同人ヲ以テ宮堂上方ヘ声息ヲ通スル道モアリシト云フ、詳ナルハ同人カ小伝ニ記ス）

四八五　海防論策ヲ求メラレシ事実及ヒ諸建言

安政四五年ノ頃ニ至リテハ、外国ノ通信或ハ開港ヲ瀕請シ、稍威嚇ノ挙動ニ出ントスルノ形勢ニ立到リ、紛々擾々、実ニ危急存亡ノ秋トモ謂フヘクシテ、内ニハ憂国ノ人士掃攘ヲ謀リ、或ハ和戦ノ両端是非得失ヲ痛論シ、或ハ壮年客気ノ輩ハ四方ニ奔走シ、党ヲ聚メ、類ヲ募リ、喧々擾々、幕

府ノ狼狽一方ナラス、故ニ天下ニ令シテ、海防又ハ和戦得失ノ論ヲ求ム、

公ニモ御意見・御建言、或ハ要路ニ向テ口述セラレタルコト数回ナリキ、此時御国中ニモ意見論策スヘキ旨布達セラレタリ、左ノ如シ、

当時海防急務論、

右造士館ノ面々、其外所存有之人々ハ、和文・漢文無差別、当十四日迄ニ差出候様被　仰出候、此旨早々向々ヘ不洩様、諸郷・私領ヘモ可申渡候、

二月朔日　　下總（島津久徵）

右布達ヲ聞ヒテ、一般大ニ喜色ヲ顕シ、各々意見・所論ヲ述ルノ機会ヲ得タリト、建言者無量（慮カ）七百余名ニ及ヒタリト、論策ノ精粗、文章ノ巧拙ハ漏聞ニ由ナシ、奉呈ノ手続ハ御側御用人、或ハ各自組頭ノ手ヲ経タルモアリシトソ、其書ハ御手許ニ取リ玉ヒ、他ニ漏ルヽコトナシ、

御知政ノ頃ヨリ、言路洞開セラレタリト雖モ、公然開カレタルハ、之ヲ初メトス（言道開洞セラレ、貴賤ノ別ナク意見言上スルニハ、御近習人ノ紹介何人モ献言スルヲ允サレタルニ依リ、公然洞開ニ勝レリ、皆人知ルカ如シ、斯ク密ニ言語ヲ開レタルモ、公然開カレサルハ、齊興公ニ憚ラルヽ旨アリシナラム、如何ニモ其事情内ニ存スルアリシナラム）

四八六　参考　聖堂・造士館・演武館・神農殿（第五（ママ）巻学風匡正御訓示ニ対ス）

四八六の一　犬追物稽古場

馬場

弓場

鎗術場

剣術場

右ハ別紙ノ通諸稽古場ニ被仰付、右場所ヘ相建筈候間、聖堂一囲ノ境ヨリ新小路マテ、竪横間数相究、亀絵図可差出候、此旨御普請奉行ヘ可申渡候、

安永二年巳二月　　左京（樺山久智）

四八六の二　御下屋敷下空地ノ内（二ノ丸ト御台所トノ間、新橋通芝生ノ地アリシヲ云フ、則御台所門通ト唱ヘタリ○御下屋鋪ハ則二丸ナリ）

聖堂屋敷一囲

但御下屋敷下通六拾五間

南泉院通四拾七間余

〔以下二行、「藩旧記雑録（追録）」には、「枡形ヨリ新橋通折廻シ二拾五間余、拾壱間余、三拾九間余」とあり〕
枡形ヨリ新橋通折廻シ二拾五間余
横一町三十九間余

稽古場境通五十八間余

右ノ通聖堂地面ニ被仰付候、

右同空地ノ内、聖堂屋敷境ヨリ新小路マテ、諸稽古場一囲（仝前）

右ノ通御勘定奉行ヘ申渡、御普請奉行其外可承面々ヘ可申渡候、

〔安永二年〕仝年二月　左京（仝前）

四八六の三
今度聖堂・講堂其外諸稽古場マテモ被相建候、此儀ハ諸人学文・芸術一涯改テ相励出精仕、猶以往々御用相立、尤風俗モ正敷方ニ相成候様被　思召上、畢竟　御領国中為教学、右ノ通御造立被　仰付思召ニ候間、難有承知可仕旨被仰渡候、

〔安永二年三月六日〕仝年三月　左京（仝前）

四八六の四
張番所詰物頭

締方御目付

右同横目

御名代方勤表御小姓

右同御茶道

御家老方勤表坊主

御供所詰御包丁人頭

右同御包丁人

右同御料理役

右於聖堂、当秋ヨリ毎年春秋釈菜ノ節、右ノ通勤方被仰付候、

安永二巳七月十二日　左京

四八六の五
聖堂成就ニ付、来ル二十九日ヨリ釈菜ノ規式被仰付候旨被仰渡候云々、

安永二年巳八月十二日　左京

四八六の六
此節御建立ノ聖堂成就ニ付、来ル二十九日御遷座（孔子・文宣王等ノ木像ヲ安置セラレタリ）、釈菜ノ規式被仰付候間、右相済候以後平日御領国中面々不依貴賤、勝手次第参詣御免被仰付候、然トモ到テ凡下体ノ者ハ参詣不相成候旨被仰渡候、

聖堂ヘ平日諸人参詣ノ次第

参詣ノ人ハ入徳門小門外ニ刀ヲ為持置、小門入口ニハキ物抜置、参詣可有之候、

但御一門ハ小門入口ニ刀ヲ可為持置候、

御一門以下諸士ト堂内於拝席拝礼有之、外城衆中（此後郷士ト唱ヘタリ）ノ儀モ同断拝礼可致候、

士ノ外ハ杏壇門外ニ脇指乍置、堂外唐戸板敷ニテ拝礼可仕候、

但大小帯候者ハ刀門番所ヘ可差置候、

琉球人並旅人参詣不相成候、

服忌・穢ノ人参詣不相成候旨被仰渡候、

安永二巳八月十六日　　左京

四八六の七

来ル二十九日釈菜ニ付、仰高門（聖堂ノ正門ナリ）内ヨリ敷付等有之、家来・下人召入候義不相成候条、仰高門外ニ刀持タセ置参詣可有之候、以来釈菜ノ節モ右ノ通可被相心得候旨被仰渡候、

安永二年巳八月二十二日　　左中（市來政方）

四八六の八

組方講釈講堂ヘ被相直、来月ヨリ隔日四ツ後講釈被仰付候、

小林中太兵衛

与頭三四人ツ、此内ノ通可罷出候（各組頭宅ニ於テ講釈アリシヲ云フ）

士ハ勿論、外城衆中ノ儀モ聴聞罷出、其外家来・寺社家マテ志厚ノ者ハ末席ヨリ聴聞申付候、

士ノ子共於講堂素読等致度所存ノ人ハ、勝手次第可罷出旨被仰渡、

安永二年巳八月　　左中

四八六の九

一銀二両ツ、　御一門

一同一両ツ、　大身分

一同一両ツ、　大御目付格以上

一青銅二百疋　寺社奉行ヨリ御近習役マテ

一青銅二百文　御留守居ヨリ納殿役人マテ相中

一同三百文　御普請奉行以下御役人相中

右二八月初ノ丁日釈菜ニ付、以来右通献納被仰付候間、当八月釈菜ノ節ノ通納方可有之候、

無役ノ一所持・一所持格・寄合・寄合並致献納度存候人ハ、不依多少、心落次第講堂ヘ可被致献納候、

諸士以下町家マテ致献納度存候者ハ、不依多少、心落

次第是又講堂へ可致献納候、
外城衆中、又ハ町浜ノモノニテモ致献納度存候者ハ右同断、二八月初ノヒノトノ日釈菜、以来右ノ通可相心得候、
右之通被仰付候旨被仰渡候、
安永二巳十二月　左中

四八六の一〇
此節御造立ノ諸武芸稽古場成就ニ付、来月朔日ヨリ別紙日賦通夫々師匠家へ相付罷出可致稽古、外城衆中致稽古度所存ノモノハ、是又師匠家へ相付罷出可致稽古候、
右之通被仰渡候間、与中・諸外城へ不洩様被申渡候、
安永二年巳十月　左中

四八六の一一
一初日　川上庄八郎鎌倉流
一二日目　川田彦七高麗流
菱刈新五兵衛新当流
一三日目　川上庄八郎高麗流
一四日目　町田佐次右衛門大坪流
右人数馬

一鎚　梅田九左衛門鏡知流
一長刀　佐久間勘左衛門後白尾藤五左衛門ニ命セラル
右両家隔日
一初日　東郷長左衛門日置流
一二日目　高田茂太夫大蔵流
一三日目　伊集院理安日置流
右人数弓
一初日　東郷藤右衛門示現流
一二日目　田中喜助（外カ）傑山流
一三日目　大山角四郎太刀流
一四日目　木藤太郎右衛門飛弾流
一五日目　和田源太兵衛示現流
右人数剣術並居合前稽古所
一初日　大脇主右衛門示現流
野崎次郎左衛門仝上
小野郷右衛門大刀流
一二日目　有川彦左衛門水野流居合
一三日目　東次郎左衛門仝上
一四日目　鈴木彌藤次眞心影乃流
右人数右同断

以上

四八六の一二
此節聖堂并諸武芸稽古場被相建候ニ付、諸御役人ノ儀モ御用ノ透有之節ハ、講堂講釈ノ席ヘ罷出、諸稽古場ヘ差越、師匠家ヘ相付、致稽古候様被仰付候、

右之通可申渡候、
（安永二年）
巳十月　　左中

四八六の一三
師匠家ノ面々・諸武芸稽古場御役人ハ、八ツ後ヨリ可罷出候、
御番人御番当日ハ、御番頭ヘ申出置可罷出候、
勤方有之人ハ御用不差支様同役申談、頭人ヘ申出置可罷出候、
小番・新番ノ儀ハ、上下致着候様被仰付候、

右ノ通被仰渡候条如例可申渡候、
安永二巳十一月　　左中

四八六の一四
諸武芸稽古人数稽古所ヘ罷出候節ハ、師匠家ヘ星帳取仕立致星合、翌月初武芸掛御目付ヘ差出候様可致候、師匠家ニモ罷出候ニ付テハ、諸稽古人数同前星帳ニ相載可申出候、
師匠家他行ノ節ハ、跡差引人何某ヘ相頼置候段、武芸掛御目付ヘ首尾可申出候、尤式日当日何ソニ付差支候節ハ、差引人ヨリ星帳ニ可記置候、
星帳ノ儀ハ、武芸方掛御目付ヨリ、時々可差出候、

右之趣、大御目付衆大炊殿ヨリ口達覚書ヲ以、諸師匠家ヘ被仰渡、
安永二巳九月神農堂御造立ノ儀被仰渡候、
神農堂成就ニ付、来ル十七日　太守様被遊御参詣候旨被仰渡候、
安永三午三月

四八六の一五
此節神農殿御造立有之、且醫學院迄モ被相建、医書講談被仰付、往々医術精密相成、御領国中諸人療養ノ益ニ相成候様ニト、御憐愍ノ思召ヲ以テ被　仰出事候、
然ハ医道修業ノ面々、専心掛出精不致候テ不叶事候、
当分講釈聴聞ニハ致出席筈候ヘ共、聴聞ノミニテ差置候テハ、古書ノ意味致会得候儀不厚筈候間、自今ハ初心ノ面々式日相立、於醫學院講習・討論・会読等可致候、其節ハ当分講談医師ノ内ヨリ一両人ツヽ繰廻致出

席、意味判断可致候、尤作法正敷礼譲ヲ以テ相交、猥無之様可相心得候、右会席ヘ致出席候者ハ、御城下士ノ儀ハ勿論、外城衆中・足軽・家来・町人ニ至リ候テモ、志有之面々ハ出席可致旨被仰渡候、

安永三午四月

四八六の一六
六月聖堂釈菜ニ付、寺社奉行以下御役人並無役ノ中通マテ、御物御取替ヲ以テ献納銀ノ首尾物奉行受込ニ候ヘトモ、御用多取込候間、聖堂方首尾被仰付度物奉行申出趣有之、物奉行方ニテ致首尾候通、聖堂方受込ニテ被仰付候、此旨可承御役々ヘ可致通達旨市正殿（山岡久容）御差図ニテ候、以上、

安永六年酉

四八六の一七
武芸致見分候節、稽古人数ノ内勉方有之面々ハ、当日別星帳ニテ罷出候様被仰渡、

安永七戌八月二十一日

四八六の一八
聖堂釈菜ノ節、寺社奉行以下諸御役人・無役ノ御近習通マテ、献納物目録認方並名書取揃方ノ儀共、御使番受込ニ候ヘトモ、以来聖堂方受込被仰付候、

安永九子二月二十一日　　高橋縫殿

四八六の一九
講堂学業ノ次第、
講堂ニテ式日ノ講談、又ハ会読等出席ノ面々、以来聖堂奉行ヨリ致星合、翌月初星帳諸稽古所係御目付方ヘ差出候様被仰渡候、

天明二寅七月

四八六の二〇
聖堂掛ノ儀、御国ノ学校所ニ候処、未名目無之、是マテ惣名ヲ聖堂ト唱来候ヘトモ、造士館ト可相唱候、
諸稽古場ノ儀、演武館ト可相唱候、
聖堂・諸稽古場御差分銀ノ儀、府学料ト可相唱候旨被仰渡候、

天明六午九月　　安房喜入

四八六の二一
林家ヘ諸士学文入塾ノ儀、是マテ其身ヨリ願出来候ヘトモ、向後聖堂ヘ願出、吟味ノ上、聖堂奉行ヨリ可申出候、其外他国ノ学講所ヘ入学ノ儀モ、同断可相心得

旨被　仰出候段申来候条、此旨聖堂奉行へ申渡、可承向々へ不洩様可申渡候、

天明五巳九月二十二日

四八六の二二

聖堂方銀銭首尾方ノ儀ニ付、此節左ノ通吟味仕候、

一春秋釈奠ノ節　御献納白銀三枚・御目録相添、以御使番受込ニテ取仕立、聖堂方係ノ内御使番役所へ前日呼出、御目録並銀子マテモ聖堂方へ受取来候、然レトモ已来ハ御目録マテモ御使番ヨリ聖堂方へ引渡、銀子ノ義ハ、物奉行受込ニテ、金蔵へ入付候筋被仰付、其段被仰渡度奉存候、

一大番頭ヨリ御役人　引札有之、同断ノ節、寺社奉行ヨリ御側役並マテ相中青銅二百疋、御留守居ヨリ御敷頭マテ相中青銅二百疋、御普請奉行以下御役人限相中青銅三百疋、献納被仰付、釈菜前日聖堂方へ納方有之候様被仰渡置候ニ付、目録並現銭マテモ聖堂方へ受取来候、尤右現銭ノ儀、最初ハ御物方御取替御使番取仕立ニテ聖堂方へ受取、追テ物奉行所引付ヲ以、銘々人別返銀上納有之候処、其後聖堂御差分銀方首尾方都テ聖堂方受込被仰付候ニ付、右献納銀銭ノ儀モ、聖堂方御取替ノ筋ニテ、金蔵ヨリ聖堂方へ取入、追テ聖堂方引付ヲ以テ、銘々ヨリ金蔵へ上納有之事ニ候、然トモ是又以来ハ金蔵ヨリ聖堂方へ現銭取入方ニ不及、先目録マテヲ聖堂方へ受取、現銭ノ義ハ当分有来通聖堂方引付ヲ以テ、銘々ヨリ上納有之候様被仰付候段、被仰渡度奉存候、

但本行献納銀ノ儀被仰渡候已後ニ、大御番頭聖堂奉行御役被相建候ニ付、当分ハ大御番頭ヨリ御側役並マテ、御留守居ヨリ聖堂奉行マテ相中、献納二百疋ツヽニテ御座候、

一外城郷士、其外御城下並外城ノ町浜マテハ引札有之、同断ノ節、外城郷士、其外御城下並外城ノ町浜マテモ、心落献納ノ儀ハ銘々支配ノ所へ取揃、聖堂方へ相納候筋被仰渡置候ニ付、郷士献納銭ノ儀ハ地頭所次書ヲ以聖堂方へ差出、聖堂方ヨリ受取書相認致割印候テ相渡候様仕来候、已来ハ是又献納目録相認、聖堂方へ差出、現銭ノ儀ハ聖堂方引付ヲ以、夫々ヨリ直ニ金蔵へ上納致候様被仰付、其段被仰渡度奉存候、

但家来町浜ヨリノ心落献納有之候ハヽ、皆共本文

ノ例ニ準候様被仰付度奉存候、

右之通聖堂方ヘ現銀銭献納有之候ニ付、釈菜献納銀銭ノ儀ハ、銘々員数相改候テ受取置、以後都合員数相改筋、又ハ櫃ニ入付、聖堂奉行覚悟、又ハ聖堂方文庫ヘ格護仕候、釈菜外ノ節、献納銀銭ノ儀モ右同様ノ例ニ仕来候、尤釈菜献納銀銭員数ノ首尾ハ、早晩釈菜後ニ申出置、且又両釈菜外ノ節ノ献納銀マテモ惣合員数相記、翌年ノ初首尾申出候様ニ仕来候、左候テ聖堂方文庫格護ノ銀、時々出入ヲ以金蔵ヘ預置、五六年ニモ及候節、屯ノ献納銀銭惣合イタシ、御物ヘ御借入ニ相成候様仕来候、右通ノ仕向ニテ首尾方少モ無相違、只今マテ済来候ヘトモ、右通銀銭出入致取扱候儀ハ畢竟蔵方勤向同様ナル筋ニテ、通例諸座仕向ニモ不相並候ニ付、何レ往々当分ノ仕向ニテハ相済不申筈ノ儀ニ御座候ニ付、此節ヨリ銘々右ケ条ノ通被仰付度儀ト吟味仕候、尤釈菜ノ節御献納銀並御一門家已下郷士等マテ献納ノ儀ハ、御目録並目録ヲ聖堂ヘ相備、規式相済申事候故、現銀銭ノ儀ハ追テ金蔵ヘ納方有之候テモ、差支ノ儀ハ無御座候、弥右吟味之通被仰付儀ニ御座候ハ、、釈菜後首尾ノ儀ハ、早晩献納目録面マテノ員数ヲ申出置、翌年初ニ相成候節金蔵納ノ現銭員数ヲ相記、首尾申出候様被仰付度奉存候、右ニ付テ、去ル子年（安永九庚子）ヨリ当年マテ三ケ年献納銀銭、聖堂方文庫格護又ハ金蔵ヘ預置候銀銭、此節都テ引付ヲ以聖堂方ヨリ金蔵ヘ入付、何程入付候段首尾申出候様可仕候、此段申上候、以上、

天明二年壬寅八月二十一日

聖堂奉行（後教授ト改ム）
山本傳蔵（正誼）

四八六の二二
張紙

本文御女中様方ヨリ御進納銀有之候節、御広敷頭ヨリハ、分達テ首尾申出ニ不及、其外都テ申出ノ通申付候条此旨申渡首尾懸ヘモ可申渡候、

子九月

主馬（町田）
取次
平田平太左衛門
早水孫次郎
木脇權一兵衛

川上彌三太
小林四郎左衛門

四八七　幕府学制訓諭〔寛政三年〕

寛政三年亥五月二十四日松平越中守様被成御渡、京極備前守ヲ以被仰渡候御書付、

四八七の一
林大學頭ヘ朱書ノ儀ハ慶長以来

御代ノ御信用ノ御事ニ候、已ニ其方家代々右学風維持ノ事被　仰付置御儀候ヘハ、無油断正学相励、門人共取立可申筈ニ候、然ル処近キ頃世上種々新規ノ説ヲナシ、異学流行、風俗ヲ破候類有之、全ク正学衰微ノ故ニ候哉、甚不相済事ニ候、其方門人共ノ内ニモ、右体学術純正ナラサルモ、折節ハ有之候様ニモ相聞ヘ、如何ニ候、此度聖堂御取締厳重ニ被　仰出、柴野善助・岡田清介儀モ右御用被　仰付事ニ候ヘハ、此旨申談、急度門人共異学相禁之、尚又不限自門、他門申合、正学講究イタシ、人材取建候様相心掛可申事、

一示諭

御当家開国ノ砌、大學御取立被成、続テ聖堂御建立有之候儀、全ク風俗正敷相成、人材致成就候様ニトノ御美意ニ有之候、然ル処追々種々新規ノ学派起リ、我等門人ニモ右体ノ学致シ候モノ有之候様相聞、今度蒙御察度候段、於我等モ恐入、失面目候仕合ニ候、此後ハ門下一統正学致出精、毎物相慎候様急度相心得可申儀ト存候、修行方ノ儀ハ追々可申聞候、

亥五月　　大學頭

四八七の二
先日申達候通、弥申合、正学相励可申儀勿論ノ事候、乍去面々見込モ有之物ニ候ヘハ、我等家学存念ニ不叶儀モ有之間敷トモ難申候間、人々ノ内左様存込候者モ有之候ハヽ、勝手次第門人名面相除可遣候間、無遠慮可申出候、尤此儀ニ付、聊隔意有之儀ニハ無之候、

但当時ノ侭ニテ罷在、内々異学ヲモイタシ候様追テ於相聞テハ、屹ト取扱方有之候間、兼テ其旨申聞置候、

亥五月　　大學頭

四八七の三
聖堂御創立ノ意趣ハ人々承知ノ前ニ候、学問ハ究理ニヨリ知識ヲ開発致事候ヘハ、程朱ノ学ヨリ外無他事候処、間ニハ偽学ノ者モ有之由相聞得不可然候、依之講

釈人ハ勿論入学ノ徒、実ニ程朱ノ正学ヲ相崇メ、一切異説ヲ不可交旨先年被　仰出申渡置通ニ候、今度従公義林家へ被　仰渡、門人中へ申渡ノ趣、別紙ノ通ニ候間、弥先年被　仰渡候　御趣意、聊無忘却堅可相守候、右之通聖堂掛ノ面々へ申渡、向々へモ可申渡候、

寛政三年亥六月三日　　要人（比志島範音）

四八八　昌平国学之記

四八八の一

天下之本在国、国之本在家、家之本在身、身不脩而家斉、家不斉国治、国不治而天下平者未之有也、故欲平天下者先治其国、欲治其国者先斉其家、欲斉其家者先脩其身、脩其身之要蓋本於正心誠意而自致和（知カ）格物始、此大学之所以不可不説也、今　尊大君幕下当国之十有一祀為元禄三年秋七月大降　台命、新営聖堂殿、算月者六算日者百有余旬、至臘告成、改其地曰昌、名其殿曰大成、別設学舎、博延生徒、講習討論常々而在、咿唔之声琅璨之響不舎昼夜、負笈担箋重爾接踵往来絡繹、更天下之耳目恢日域之風化、於往古、於来今、於本朝於異邦赫々焉、照々焉、尽美矣、尽善矣、五教於是乎敷於是乎成、国子監林公草創之中大夫柳公潤色之、雖有大君之明微二公之力則未必至此、雖有二公而不遇太君則亦莫能為之、上下相交天人相合蓋千載而一時也、至人之道不行於今則亦未如之何也、已矣搏之弗類也、謬辱　師命抽在群書生之上、十目所視十指所指不任其任矣、力推　上之心挙師之命質以至堅之言掲示于衆、天下何為而平、国何為而治、家何為而斉、身何為而脩、心何如則可以正、意何如則可以誠矣、有致知而已、致知之方何如、在即物而窮其理也、蓋人心之霊莫不有知、而天下之物莫不有理、惟於理有未窮故其知有不尽也、父子之親、君臣之義・夫婦之別・長幼之序・朋友之信物之理也、知父子之親・君臣之義・夫婦之別・長幼之序・朋友之信知之事也、親何如而親、義何如而義、別何如而別、序何如而序、信何如而信、知之而窮之、推之而尽之則所謂物格而知至也、知既至而後存其所知之理於中、而於一念之発無一点之志則意誠而心可得而正矣、所謂忿懥恐懼好楽憂患者心之用而人所不能無者也、一有之而不能察則欲動情勝而其用之所行或不能不失其正矣、於此察之而不失其正則身之所処不至陥於所偏而無不脩矣、身既勝則於家於国於天下、斉之治之平之其亦挙而措之耳、此古之大学所以教人之法也、而聖経賢

伝之文粲然明白、言之長也姑舎之、今之学者多事訓詁記誦之習、或経旨未明或躬行未粋者有之而不足取焉、間有離訓詁記誦之域者、或談禅或譏聖謂至学為浅近謂禅理為高明亦有之矣非我徒也、我何論之、又有自許其身以至人処之者其言曰、学膺非正経也、濂洛非本原也、我能得我至人之心也、我能承我至人之統、遂至以孟子為縦横之士以文公為迂濶之老、如是乃至門不可容之罪人也、国有典刑将不免之悲矣、若夫師文詞事薄絵者山川之砂礫・粟米之粃糠間実二理則不与焉、正味則無在焉、彼哉彼哉、然則大学之道何在哉、経曰在明明徳、在新民、在止於至善、夫格物致知誠意正心者所以脩身而明明徳之事也、斉家治国平天下者推脩身之方以新民之事也、格致誠正而心脩者明々之止於至善也、身脩而家斉国治天下平者新民之止於至善也、豈有他哉、従事於斯而無少間断学而習強不息、言之則可行之則可、言愚者足其不及智者損其過言必本於大中至正之理行必進、於至公無我之道以明其徳新其民、則至善之地将以履之得以処之、而上則不負

大君之志、下則不虚　二公之功乎、此国学之所由説也、故曰天下之本在国、国之本在家、家之本在身、自天子以至於庶人、一是皆以脩身為本、其本乱而末治者未之有也、嗚哉自西自東自南自北与其進也不与其退也、蓋今日之言則天下之公言也

元祿四年辛未五月十五日

昌平学職　菊池九萬記

四八八の二

一講堂学規ノ次第ハ、先年被定置趣有之候処、猶又此節別紙ノ通　御沙汰被為在、学校中ヘ申渡候、依之致学問候方向等ヲ始メ、何レニモ承知仕候様、諸向ヘ可申渡置候、

寛政七卯正月　　勘解由（市田教國）

伯　耆（山田有儀）

四八八の三

別紙

学校中ヘ

一学文ハ人ノ人タル職分ヲ尽ス儀ニ候、臣子トシテ忠孝ノ実ヲ好ミ、節義ヲ嗜候ヲ真ノ学問ト可心得候、仮令数万巻ノ経史ヲ博覧強記シ、講説イカホト巧ミニ有之候テモ、其実行ニ薄キモノハ却テ風俗ヲ破候間、其段能々弁別致シ可相慎候、

一文芸モ学問科中ノ一端ニ候ヘトモ、夫レノミニフケリ候モノハ、多ク本業ヲワスレ、浮靡軽薄ニ陥リ、其害不少候、

但文芸ヲ学文ト心得、実行無之モノハ、タトヒ才学スクレ候テモ、擢用有之間敷候、

一学校ハ礼儀第一ノ場ニ候、長ヲ崇敬候ハ勿論、等輩モ互ニ遜譲ヲ先トシテ可相交候、師員専ラ此旨ヲ以テ能々可致教導候、

一師員ハ子弟ノ教育ヲ専トシ可致事ニ候、若自己ノ読書作文ニフケリ、其職ヲユルカセニイタスモノハ可被退候、

一学問等相進ミ、行儀正敷、才幹有之モノハ、自其身相当ニ擢用可有之候、

右学規ノ次第ニ付、先年被定置候ヘトモ、猶ホ又此節前条ノ通　御沙汰被為在候間、何レモ慎テ可相守者也、

寛政八年辰正月

四八九　黒田清綱建言御弁論〔安政五年〕

四八九の一　去ル巳年（安政四年丁巳九月九日御本丸ニ於テ御誕生）　御当地御出生ノ御男子様奉称　哲丸様ト、追々御丈夫被為成候ニ付、此節御前様御養　御嫡子御願被仰上候処、御願通御嫡子被　仰付候旨、先月二十三日戊午三月二十三日　御用番様ヨリ被　仰渡候、右ニ付テハ無程可被遊御出府之処、未御幼少之御事候ニ付、暫時御国許ヘ可被遊御座候段、是又御用番様ヘ御届書被差出候処、御承知被成候段被　仰渡候旨御到来候、依之御祝儀云々、

〔安政五年〕四月廿四日　〔新納久仰、家老〕駿河

哲丸公御誕生ハ安政四年ノ秋九月九日ナリ、其前頃ヨリ二ノ丸文武講習場ニ於テ、砲術操練ヲ開カレ、大小ノ砲声山岳モ崩ル、ハカリナリシカ故、僅ノ隔リナル御部屋ナレハ、驚風症御発シハ必定ナリト、僉人痛心セシコトナリキ、御家老島津下總ニモ御小納戸山田壮右衛門ヲ以テ、此涯放発ハ別所ニ遷サレ、陣太鼓ヲモ停メラレンコトヲ懇願セシニ、公仰ニ心入厚キ申分ナリ、然レトモ元来驚風ト云フ病ハ、文字ノ如ク物音ニ驚イテ発スル病ニアラス、漢医ノ説ニハ、驚イテ発スル症ト唱フレトモ、西医ノ説ニハ左様ノ訳ニハアラサルナリ、驚風ノ源因ハ胎内ヨリ受ル処ノ一種ノ病毒ニ因リテ起ルモノナル由、文字ノ如ク物音ヤ風ナトニ驚イキ発スル者ニ非スト、西洋医家ノ実験スル処ナリト聞及ヘ

リ、理ニ於テ尤ト思ヘリ、又方今乱階漸ク顕ハレ、危急存亡ノ秋ト謂フヘシ、因テ武事ハ片時モ怠ルヘカラサルノ時ナリ、武士タル身ハ砲丸ノ中ニ立タサレハ叶ハサル世トナリタレハ、生レ出テヽヨリ、砲声モ耳ニ慣レサレハ相済マサルナリ、女中共ヨリモ同様願出タレトモ、驚風ノ起ル理合ヲ知ラサルノ説ナリ、何レモ心入ノ程ハ宜シケレトモ、此ノ旨申シ聞ケヨトノ御言ナリ、　洵ニ恐入タル　尊慮ナルノミナラス、漢洋医説ヲモ御通暁、俗説ニ御拘リナキヲ伝承シ、心アルモノハ感戴シ、俗人ハ時世切迫ナル故ニ斯ノ如キ　仰アリシナラン、ト私語キタルコトナリキ、

四八九の二

却説哲丸公御誕生ノ涯砲声ニ驚風御発シ云々、其際心アル輩ハ大ヒニ憂ヒ、御晩年ニ二ツナキ御継子、若シ驚風ニテモ御発シアリテハト、百方苦心セリ、中ニ就テ黒田嘉右衛門（今元老院幹事黒田清綱）ハ杞憂措クコト能ハス、左ニ記シタル建白書ヲ作リ、御側役竪山武兵衛カ宅ニ至リ、憂フル処ノ心意ヲ演ヘ、建白書取伝ヲ依頼セシニ、竪山云ク、其事ニ就テハ、過日来御家老方ヲ初メ我々トモヨリモ調練砲発ヲ他所ニ御引遷アランコトヲ懇願セリト雖トモ御許諾アラセラレス、誠ニ恐レ入リタル次第ナリ、其通リノ事ナレハ、建白セラル、モ無益ニ属スヘシト説諭セリト雖トモ、黒田ハ安ンスルコト能ハスシテ曰ク、仮令ヒ無益ニ属シ、或ハ忌諱ニ触レ、御譴責ヲ蒙ルモ尤モ辞セサル処、不束ノ心思上聞ニ達セムノ本意ナルカ故、願クハ取伝アランコトヲ頻請セシカハ、竪山モ已ムコトヲ得ス受領シ、本日上呈スヘシ、明朝来ラレヨ、御都合ノ程相分ルヘシトノ事ナリシ故、翌朝竪山ノ宅ニ至リ、上達否ヲ問ヒシニ、竪山曰ク、預リタル建白書奉呈セシニ、篤ト御覧セラレ、而シテ　仰ニ心入レノ程殊勝ナリ、然レトモ此事ニ就テハ過日来家老中又ハ其方共ヨリモ申出タルニ依テ、趣意ノアル処、其他細ニ申聞タル通ノ事ナリ、就テ黒田カ書面ニ調練砲発ヲ磯邸ノ方ニ引遷セトノ趣ナリ、就テ考フルニヲレ（已）カ子ナリトテ、二ノ丸ハ部屋ト間近キ故懸念ナリトテ放発ヲ引キ遷シタランニ、磯邸モ近辺ニ人家モ多シ、又ハ吉野村等モ程近キコトナレハ、生レ子モ必スアルヘシ、然ルニヲレカ子ノ驚風ノ起ランヲ避ケントテ、諸士末々ノ生レ子ハ驚風ノ起ルヲ顧ミスト云フ訳ニ当ル、是レハ我等ニ於テ相済マサル措置ナリ、我等ノ心得ハ我カ子モ諸士末々ノ子モ同様ニ思ヘリ、殊ニ当時世一日モ怱セニスヘカラサル調練、殊ニ驚風ノ起ルノ理ハ過日モ申シ聞ケタル通リノ訳ナレハ、是等ノ趣ヲ以テ心入レハ宜シク存スレトモ、我等心得ノ程厚ク申聞クヘシ、尚ホ申出ル趣意モアラハ、幾回モ如何様

ノ事柄モ不差置可申立トノ御言ナリシト、黒田拝承シ、我等ノ子モ諸士末々ノ子モ同様ニ思召ス云々ノ御言、実ニ感泣ノ外ナク、重テ上言スヘキ言ナク、一視同仁ノ尊意ニ銘感シタリトソ（黒田親話）、建言書左ノ如シ、

四八九の二　謹テ言上

此節於大奥
御男子様御出生、幾久敷恭悦ノ御儀、士民挙テ雀躍仕次第ニ御座候、然ルニ御産所近キ二ノ丸御庭ニ於テ、砲術調練、尚不被為止被　仰付候御儀、是ハ畢竟皇国ノ御為メ当時ノ大急務ニ御座候間、暫クモ不被為捨置被　仰付候御儀ト奉恐察、乍憚御当然ノ御事ト深奉感服候、殊ニ
御出生様ニハ自ラ主将ノ御任被為備候御身柄、聊ノ事ニ御驚愕ノ御容子等可被為　在トハ、更ニ不奉存候ヘトモ、凡臣下ノ身ヨリハ遠慮不仕候テ不叶訳、子細ハ御主人世子ノ御降誕涯ニ　御身辺近クニテ銃砲打鳴シ候儀、第一君主ヲ崇敬シ奉ルノ礼則ニ背キ、次ニハ世俗一統ノ人気モ不安、何レニモ臣子ノ至情難忍事ニ御座候、因茲近頃恐多奉存候ヘトモ、御国中士民ノ情意ヲ被為汲、二ノ丸ニ於テノ砲術稽古ハ、暫ク御宥恕被為加、此涯磯御仮屋ニテ被　仰付候様仕度、此儀　御許容被　仰付被下候ハ、皆人難有一入勉励可仕、左候ヘハ御国家ノ為メ武備ノ御世話モ不被為緩、下ハ臣子敬畏ノ道モ相立、乍両闕如不仕儀ニ御座候間、幾重ニモ士民敬畏ノ意相伸候様　御処置被為成下候処、臣清綱乍不肖衆ニ代リ遮テ奉願上候、小臣微賤ノ身ニテ分位ヲ犯シ上書仕候儀、誠ニ僭踰ノ罪奉恐入候ヘトモ、左様士民一統ノ情実徹上不仕候テハ、乍恐人気ノ動静ニモ相拘リ、不容易事柄ト奉存、衷情難黙止、敢テ微臣ノ賤愚ヲ不顧奉言上候、誠惶謹言、

安政四年丁巳九月十九日　　黒田嘉右衛門
清綱稽首

上

四九〇　島津豊後ヘ賜書〔嘉永四年〕

○この文書は、「鹿児島県史料　斉彬公史料」第一巻の第四三六号文書の嘉永四年夏頃島津斉彬書翰と同文重複により略す。

四九一　長崎事情（長崎聞役届書）

備中守内達書中、蘭人ノ申立云々ト云、今当時ノ書類中、

爰ニ選抜シテ、以テ後証ニ備フ、我伝習ノ余暇出島ニ到ル、無虚日ヲ以テ是等ノ事、蘭領事并教頭ノ密話ヲ聞ク、手記シテ以テ江戸要路ノ官ニ呈スルモノ不少、

安政四丁巳年

和蘭人風説ニヨリ御為筋口上ノ趣

○以下の文書は、本文第四七八号文書の安政四年二月和蘭通詞本木昌造上申書（長崎奉行宛）と同文により略す。

四九二　日州去川山柞灰製御取弘

日州諸縣郡高城・高岡郷ニ跨ル去川山ニ陶磁器製造用ノ柞灰製ヲ開カレ、以前ヨリ同所、其他各所ニ於テ製シ、肥前今里・有田、或ハ尾張、或ハ京都等ノ各製陶器場ヘ売出シタルモ、年ニ幾千函ト制限アリテ、需要ニ充ツルニ足ラス、御国製ハ上品ニテ、肥豐ノ産ハ下品ナリトテ、御国産ヲ渇望スルコト切ナリ、特ニ肥前ハ彼ノ藩庁ヨリ冀望セラルヽコト毎々ナリシトソ、故ニ其制限ヲ拡メ、肥前ヘハ米穀ト交換シ、尾張等ハ陶磁器其他必要ノ品ト貿易ノ方法ヲ開カレタリ、其際三原藤五郎ヘ御沙汰ノ趣ニ、柞灰ハ当国ノ名産ニテ、肥前其外大ニ渇望ノ品ナレハ、年々売出ノ制限ヲ定メタルモ悪シキニハアラスト雖モ、望ムニマカセ、産額ヲ増シ、肥前ニハ米穀・大豆ト交易スルトキハ、此方不足ノ穀類山中ヨリ生スルモ同シク、一統饑餓ノ憂ナク幸ナリ、柞灰ニテ飢ヲ凌クコトハ出来サル訳ナレハ、此方ノ大益ナリ、尾張其外ハ品物ノ貿易弁利ニ従フヘシ、是迄肥前・尾張ノ陶磁器輸入ヲ禁シタルハ（売買ノ為メ輸入ヲ禁ス）経済ノ道ニ違ヘリ、以来此ノ禁ヲ解キ、勝手ノ商法ニ允スヘシ、経済ノ本旨ハ有余不足ヲ融通スルニアリ、仮令ヘハ北国ノ昆布・数ノ子等ハ天度気候ノ異ナルニ依リテ、西南ノ暖地ニ生スル者ニアラス、又砂糖ノ如キハ東北ノ寒地ニ生スル者ニアラス、由テ互ニ交通貿易シ、用ヲ足ラスヲ経済ノ本意トス、経済ハ一国・一郡内ニ為シ得ヘキモノニアラス、日本一国ニテモ為シ得サルカ故、支那・和蘭・朝鮮トモ通交スルニアラスヤ、然ルニ聊カ柞灰位ヲ制限シ、或ハ焼物ノ輸入ヲ禁スルハ、経済ノ道ニ背ケリトノ仰ナリシトソ、実ニ経国ノ道ヲ得ラレタル御説ナリト（三原藤五郎親話）

四九三　和蘭船長崎ヨリ来琉、御附人ヨリ在番奉行ヘノ書状持参及ヒ戊午ノ春井上庄太郎其他守衛人員数十名大島ヘ渡海ノ顛末（市來上申書鈔）

安政四年丁巳十一月（八日）初長崎ヨリ帰帆（ジャガタラヘ）ノ和蘭商船一艘那覇（琉球）ヘ来航、長崎御附人染川喜三左衛門及ヒ井上庄太郎（御小納戸）ヨリ、在番奉行郷原轉久寛ヘノ書翰持来リ、琉官吏ノ手ヲ経テ伝達、三四日間滞船、先島ヘ漂流ノ和蘭人数名ヲ受取リ出帆ス（此ノ漂流和蘭人ハ、安政三年丙辰ノ夏、先島ノ内宮古島ニ於テ、難風ノ為メ破船、其後那覇ヘ護送シタリ）、例規ニ拠レハ、長崎ニ送ルノ法ナレトモ、此節ハ開商御目論見故、依然那覇ヘ留メ置、幕府ノ手ヲ経ス、直接引渡シヲ命セラレ、右受取リノ序ニ開商場見定メ候様、長崎ニ於テ井上等談判ニ及ヒタリト、故ニ和蘭船ハ大島ノ各港及ヒ琉球運天・那覇等ノ諸港ヲ巡視シタリト、井上及ヒ相良彌兵衛（御軍役方筆者）ノ両人ハ、丁巳九月中旬ヨリ長崎ヘ被差出、琉球大島開市ノ手続ヲ和蘭人ヘ内談シタリト、仍テ開市場見立ノ本旨ニテ、名ヲ漂流人受取リニ托シ、渡来シタルモノナリ、其時琉官吏ハ御附人ノ書翰ヲ受取リ、或ハ交易ノ事件斯クマテ速ナル御着手ニハアラサルヘシト思ヒ居タリシニ、図ラサリキ卒然来港シタルニ驚キタリト雖モ、今更如何ントモスルコト能ハス、通弁官牧志親雲上応接スルニ、蘭語ニ通セス、英語・支那ノ二国語ノミ通スルカ故、蘭人ハ英語ヲ知ル者アリシモ、未熟ノ様子ニテ分明ナラス、已ムコトヲ得ス在琉佛人ヲ以テ、渡来ノ仔細尋問ニ及ヒシニ、漂流人受取リ、或ハ開市ノ見込アリテ港ノ善悪見定メノ為メナル趣、且ツ漂流人撫育謝恩ノ為メ、今ヨリ十ケ月許リノ後運天港ニ来舶スヘキ趣トモ申立、長崎ニ於テ井上等ト談定ノ趣ハ全ク申出テス、素ヨリ御附人ヨリノ書状ニハ、漂流人引渡シ、懇ニ取扱フヘシトノミ記シタルニ由リ、在琉佛人共ニハ、這ノ船ヨリ本国ヘ書状遣シタル由ナレトモ、琉人共ニハ御目論見ノ趣粗窺ヒ居、如何ナル次第ニ立到ルヘキ乎ト苦心中ノ処ニ、和蘭船卒然渡来、加之御附人ノ書状持参セシ故、大ニ驚愕セリ、之ヲ琉球大島ニ於テ、和蘭人ト貿易御開キノ叛メトス、而シテ井上・相良ハ丁巳十二月長崎ヨリ帰麗、開商ノ手当ヲナシ、戊午ノ春三月初大島守衛人数ト前後ニ渡海（守衛ノ名ヲ以テ、廿余名ヲ出サシタリ、之レ全ク開商取締ノ為メニシテ、琉球ヘモ此内ヨリ分遣ノ筈ナリキ）、一向ラ開市ノ準備ヲナシ、琉球ヘモ渡来、条約取結ヒ（幕府ノ許可ヲ得ラレタル始末、後巻ニ記スカ如シ）ノ手順等、井上等ヨリ照会ニモ相成リ、琉官吏ニ議シ、準備モ粗調成シ、和蘭船渡来ハ戊午ノ冬（マヽ）、九月中旬ヨリ十月初マテノ

予定ニテ、琉球ニ於テハ佛国トノ取組蒸気船誂等ノ談判滞ナク運ヒタリシニ、豈図ラム、戊午ノ九月二日御凶報ノ飛舟到来、剰ヘ御停止ノ趣、御家老島津左衛門・新納駿河ヨリ達シ、重テ御側役名越彦大夫・堅山武兵衛・町田主馬及ヒ山田壮右衛門・堅山八郎・江夏十郎等ヨリモ細詳御停止ノ趣ヲ照会シ（御停止ノ始末ハ各条ニ詳記ス）、井上・相良ハ御計音ニ接シ、直ニ帰麗、長崎ヘ出、和蘭人ヘ停止ノ談判ニ及ヒタリト、琉球ヘハ九月二日御計音到来、夫ヨリ数日間琉官吏ト評議シ、佛人共ヘ停止変約ノ談判ニ及ヒタリ、如斯多日ニ渉リシ計画、其実効頭ハレントスルニ及ンテ御逝去、水泡ニ帰シタルハ実ニ千載ノ遺憾ト謂ハサルヲ得ン哉（違約談判ハ後巻ニ記ス、安政五年九月ノ部ニ記スヘキナレトモ、一貫シテ茲ニ記ス）

四九四　三司官座喜味親方退役ノ顚末（市來上申書鈔）

三司官座喜味親方ハ、多年当職ニアリテ、上席ノ者ニ候処、元来性質驕謾ニシテ、恣欲威権ヲ以テ施政シ、国王幼沖故、摂政官（伊家王子）アリト雖モ軽侮シ、我意ニ募リ、已レニ佞媚ノ徒ヲ進メ、弁難スルモノアレハ、無辜ニ黜罰擯斥スル等ノ事少ナカラス、従テ人望離散シ、佞媚党ト正論党ト府中稍両立、甚タ混雑ニ相成リ、剰ヘ同人ハ外国ノ措置専断ノ所為少カラス、種々取繕ヒタル御届（藩庁ヘ）等申出、実況不分明ノ廉多ク、其段被聞食上、夷情見聞ノ為メ、園田仁右衛門・大久保八太郎ノ両人ヲ琉恣（姿カ）ニ変シ、渡琉外国人応接ノ場ニ列リ、実情見聞ヲ命セラレタリ（斯ク琉姿ニ変シタルハ、日本所属ナルヲ秘シタルカ故ナリ）、是ヨリシテ稍実況ヲ被聞食ニ至レリ、然レトモ処分上曖昧タル儀少カラス、多クハ座喜味ナル者ノ我意ニ出タリ（鑑督者ヲ欺キタリ）、其専断ノ条一二ヲ左ニ相記シ供御参考候、安政二年乙卯ノ夏米国ノ軍艦渡来、碇泊中水夫上陸ノ節、那覇ニ於テ、琉婦某ヲ強姦ス、其子ナル者忍ヒサル処ヨリ、強姦者水夫ヲ殴打シ、遂ニ死ニ至ラシメ、其顚末ヲ琉官庁ニ訴出候処、座喜味ナル者ノ専断ヲ以テ、窃ニ琉吏ニ命シテ海中ニ投セシメ、溺死ノ姿ニ取扱ハシメタリ（当時在番奉行谷川次郎兵衛武久・守衛方番頭川上式部久美ナリ）、素ヨリ座喜味カ専断ナルカ故、在番奉行等全ク其始末ヲ知ラサリシトソ、而シテ米艦ニハ、水夫一名帰艦セサルヲ以テ、百方捜索シ、遂ニ其屍ヲ発見シ、解体シテ殴打ノ証ヲ得タルカ故、直ニ兵隊ヲ上陸セ

シメ、大小砲ヲ海岸三重城（ミヘクスク）ト云ヘル処ニ備ヘ、米官琉官吏ニ向テ殴打死ニ至ラシメタル旨ヲ責問スルコト甚タ厳ナリ、琉官吏ハ溺没ナルヲ以テ答フ、其談判凡ソ一昼夜、遂ニ兵隊談判所ヲ囲ミ、或ハ庭中ニ屯シ、其勢猖獗ニシテ、布政太夫馬克承（外国掛野村親方）・通弁官牧志親雲上二名ヵ髻ヲ攫ミ、庭上ニ引卸シ、剣ヲ抜テ胸ニ当テ、脅迫セシニ、両名ハ只管ラ哀歎宥恕ヲ乞フノミナリシカハ、其侭引立先導セシメ、兵隊ハ大小砲ヲ携ヘ、首里城ニ向テ押シ出シタルニ、談判席ニアリシ琉官ハ悉ク遁逃シ、那覇・首里ノ両所ハ勿論、近村騒駭一方ナラス、幼ヲ携ヘ、老ヲ扶ケ、各所ニ逃迷フニ至リ、而シテ米人ハ兵ヲ引キテ、首里城ニ入ラントセシニ、城門閉チタルヲ、大砲ヲ発シテ（二発シタリト）門扉ヲ破リ、突入セントスルニ依リ、摂政其外高官ノ輩数名、兵隊ノ前路ニ跪キ合掌、哀ヲ乞フコト切ナリ、故ニ米ノ軍官等突入ヲ止メタリト、茲ニ於テ布政太夫馬克承・通弁官牧志等哀嘆シ、尚ホ殴死人ヲ捜索シテ出サンコトヲ限ルニ、廿四時間ヲ以シ、而シテ兵ヲ那覇ニ退ケタリ（馬克承及ヒ牧志等ハ初ヨリ其実ヲ告ルヲ善シトスルノ論ナリシカトモ、座喜味及ヒ其他同人ニ阿媚ノ賈、溺死ノ姿ニ処分スルヲ主張シタリトソ）、如此騒動ヲ惹キ起シタルカ故、在番奉行初メ苦心一方ナラス、琉官等ヲ集メ、鎮和ノ策ヲ議シ、遂ニ其実ヲ告ルニ決シタリ、此際在番奉行谷川・守衛奉行川上等決死シタリト云フ、馬克承及ヒ牧志等ハ暴辱ヲ忍ヒ、如何ニモシテ米人ノ怒ヲ和ラケント百方苦心スト雖モ、策略ナキカ故、強姦ノ実ヲ告ケ、窃ニ海ニ投シタルヲ白陳スヘキヲ婦人并其子ニ示諭シ、談判所ニ引キ出シ、米軍官ノ目前ニ於テ糺弾ヲ開キ、示諭ノ如ク白陳セシカハ、米軍官等忽チ面貌ヲ変シ、慙愧ノ姿ニ相成リ、暫時同軍官等ト議スルコトアルカ如クニ見タリシカ、長官ハ次官ト共ニ其婦人及ヒ致死者ノ縛縄ヲ切断解放シ、背ヲ撫シ手ヲ引キ、己レカ机側ニ置キ、而シテ馬克承并牧志ニ向テ曰、始メヨリ実蹟ヲ告クルニ於テハ、斯クマテノ事ニ及ハサル旨ヲ述ヘ、殺人ヲ罪スルコト勿レ、婦人ヲ愛撫セヨト、尚ホ馬克承（野村親方）等ニ無礼ヲ働（総理官ヲ捕ヘ、庭上ニ引キ卸シタルヲ云フ）キタルヲ謝シ、強姦者存命ナルニ於テハ、其罪尤モ重シト雖モ、死者ヲ罪セサル国法ナル旨ヲ告ケ、兵隊ヲ軍艦ニ引キ揚ケシメ、長官等モ一時退艦シ、而シテ数刻ニシテ、長・次官等数名公館ニ来リ（公館トハ談判所ヲ云フ、那覇若狭町ニ在リ）、重テ馬克承等ニ無礼及ヒ

人民ヲ驚シタル事ヲ謝シ、婦人ヘハ洋銀二千枚ヲ償養料ニ与ンコトヲ乞ヒ、殺人ハ厚遇センコトヲ依頼シ、後チ強姦セシ水夫ヲ泊村ノ墓地ニ埋葬セシメ、次日抜錨シ去リタリトソ、実ニ一時ノ騒動ハ言語ニ尽サレサル次第ナリシ由、如此溺死ノ姿ニ処分シタルモ、全ク座喜味ナルモノ、専断ニ出タルヲ被　聞食、琉人ヘ委ネ置キテハ不都合ナル廉渉カラス、種々禍端ヲ惹キ起サンコトヲ　御憂慮、且ツ今後貿易御開キ等ニ付、此者在職障碍ヲ生シ、其ノミナラス、人望モ尽キタルヨリシテ、退職願ヒ出候様取計可致トノ旨、新納駿河ヘ御達相成リ、駿河取調ニハ押付ケ退役ノ御達シ相成度、先例ヲ引キ奉窺シニ、免役ニハ不及、多年在職中山王ヘハ功労モアリシナラン、功ト罪ト比較スルトキハ功果シテ多カラン、免役ハ罪スルニアリ、退役願ハセ老ヲ楽マシムヘシトノ沙汰被為在、故ニ諭達シテ退役願ヒ出シタル者ナリ、然シテ跡役ハ例規ノ如ク入札ヲナサシメ、其投票ヲ当地ヘ差上、開札多数ノ者ヘ御命シノ先規ナルカ故（三司官ニ限リ、国中一般ノ投票ニテ、多数ノ者ヘ命スヘキ旨御下知　被遊ノ例規ナリ、然ルニ投票ニ種々ノ弊アリシカトモ、御内達ノ旨アリテ、公平ノ入札ト相成リ、小〔禄〕親方多票ニテ奉命セリ）、旧弊ヲ一洗シ、公平ノ入札可為致御達ノ趣アリテ、小〔禄〕親方多数票ニテ奉命セリ、是レ安政四年丁巳十一月ノ事ナリキ、

四九五　国老島津豊後ヘ賜書

書面及披見候、愈無事珍重存候、然ハ御心願ノ義（齊興公御官位御昇進御拝任）上々ノ御都合ニテ、十五日ノヨシ、誠ニ以テ恐悦ノ義奉存候、サゾ〳〵御満足ノ事ト存候、御吉事相知レ候ハヽ、日合相考候テ、側役差出シ、京ヘ御礼、御城奥（近衛家日記参看）ヘモ御礼可申上ト存候、夫ニ付、其方ニモ高輪御使ニ京ヘ参候ヤ、（豊後御礼使否）如何承度候、サテ御礼ノ進物等無手抜様可取計候、美濃（福岡侯）・聰徳院（阿部家未亡人）等迄モ有之候方可然ト存申候、兼テ御入輿ノ義、高輪ヘ窺中ニ候ヘトモ、此節ハ詮立候カト存候、夫ニ付、極内高輪ヨリ千両、辰〔肩カ〕（阿部伊勢守）ヘモ五百程、極々内々被進候ハヽ、万事ニ宜敷ト存申候、心付ノ侭内々申入候、先ハ不取敢此段申入候、来早春ハ御吉左右（近衛家所蔵御書翰参看）可伺ト相楽シミ申候、呉々モ大安心致シ候、以上、

十二月二十八日

用事返答

豐後へ

（斉彬公書翰影写（東大史料編纂所所蔵）にて校訂）

四九六　江夏十郎へ御親話（石室秘稿鈔）

磯御邸御滞在中（安政四年ノ夏）少シ御不例ニ被為　在候時分、江夏十郎伺ヒ事アリテ罷出、伺中ニ不図ト御沙汰ニ　大信院様（篤姫）御在世中種々御創造、或ハ御改革被遊、且造上館・演武館・明時館・醫學院等御取建アリ、御隠居後秩父・樺山ナトカ不都合致シタルヲ、御立腹被　遊、白金様（齊宣公）御隠居、　高輪様（齊興公）御相続御介助ノ御願相成リタル始末、委シク存居候哉トノ御尋ニ付、江夏御答ニ　大信院様ヘハ纔三四年ノ間相勤メ、若年ノ時ニテ、其辺ノ事能ク承モ不仕旨申上候処、　御沙汰ニ大信院様ニハ御英邁ニテ、何事モ意表ニ出ルコトヲ遊ハサレ、今時ニモ御在世ナラハ、格別ナル御見込モ付セラルヘシ、御事蹟ヲ考フルニ非常ノ世ニアラサルカ故、御存分ノ御事ハ得成レサリシナラム、是等既往ノ事ヲ鑑ミテ、前途ノ工夫ニ渉ル趣意ナリトノ御事ナリシ由、如何様深キ御勘考ノ訳被為在テノ御話ナラン、何乎御配慮中ノ御事故カト江夏モ推量奉リ候由（江夏親話）

四九七　下ノ關ヲ長州ニ与ヘタルハ幕府ノ拙策（石室秘稿鈔）

或ル時、日本絵図御覧被　遊候節、侍医川畑魯水ヘ御話ニ、此ノ様外国ヨリ日本ニ望ヲ掛クルニ付テハ、兎角望ヲ絶ツト云フハ出来サルナリ、然レトモ取締ノ道厳重ナラサレハ、国民ニ害ヲ与フルノ憂アリ、通交ヲ開タル上ハ取締肝要ナリ、地ノ利ヲ考フルニ、兵庫・大阪モ望ヲ掛ケタル由ナレハ、此処ハ心配ナル場所ナリ、次ニ下ノ關ハ九州ノ咽喉ニテ、開市場ニ宜シキ地ナリ、長崎ハ不弁ナルノミナラス、取締ニハ不都合ナリ、長崎ヲ措テ、下ノ關ヲ開クトキハ、中國ノ半ハ、四國ノ半ハ、北国ハ一円、九州ハ勿論、咸此地ニ開市スルヲ宜シトスルノ見込ナリ、昔時長崎ヲ外国開市ヲ允シタルハ、人隠レナルヲ肝要トシタルナリ、今ノ世ハ其心得ニテハ取締モ行届カサルナリ、又公義カ下ノ關ヲ長州ノ領分ニ与ヘタルハ拙策ナリ、公義ハ今ノ世振ヲ考フルニ、長崎、其外九州ノ諸所ニ少シツヽノ公領アランヨリ、下ノ關・小倉ノ二ケ所ハ公領トシ、取締ヲナサハ、咽ヲ占メル訳ニテ、九州ノ諸大名ハ進退動クコト難キ場所ナリ、中國・四國モ

半バ此所ヨリノ取締ニ羅ルヘシ、然シテ兵庫・大坂・堺等ニテ取締ルモノナラハ厳重ナルヘシ、乱世トナリタラハ、必ス下ノ關ハ九州ノ咽喉ニテ、要所ナルヘシトノ御話被為在シ由、其時分心アル者ハ御卓見ヲ感セシコトナリキ、之レ安政四年夏頃ノ御話ナリシト云、

四九八　軍制改革洋式砲術奨励ノ事実

軍制改革セラレムト、大小砲及ヒ銃隊ノ進退駈引ハ西洋近代実践ノ法ニ習ヒ、号令或ハ旌旗等固有ニ折衷シ用ラレ、洋式砲術号令ハ其頃迄蘭語ヲ用ヒシヲ、日本語ニ改革スヘシト、成田正右衛門・松木弘安（寺島宗則旧名）・八田喜左衛門（知紀）・高木孫左衛門及廣貫等ニ取調命セラレ、松木カ宅ニ於テ、調査上申セシニ、尚ホ御取捨発令セラレタリ、実ニ嘉永六年癸丑十一月ノコトナリキ、隊伍編制ノ式ハ成田正右衛門ヘ見込言上スヘシト内命セラレ、或ハ嘉永七年甲寅正月吉野原ニ於テ大調練ノ前頃備組ノ図（此ノ隊制図ハ同年正月六日三原藤五郎ヲ以テ被下、此節ノ調練ヨリ、此ノ人数組ニ可改旨令セラレタリ）御軍役方又ハ砲術館ヘ下ケラレ（図面ノ内諸所御自筆ノ張紙ヲ付ス、隊伍ノ図ハ吉野原ニ於テ操練ノ条ニ詳ナリ）、其時大隊主将ハ島津登久包ヘ命セラレ（当時若年寄）、下ケラレタル図式ニ則リ、人数組ヲ定メ、大砲ハ玉目不同現在ノ砲仮用シテ操練セリ（大砲ハ以来此図ニ記サレタル玉目ニ、此涯十大隊分鋳造スヘキ旨命セラレシト、一大隊分八門、十大隊分八十門ナリ）、全体改制ノ御趣意ハ御書取（嘉永七年甲寅正月十四日新納駿河ヘ下ケラレタリ）ノ通ニテ、騎兵モ加ヘラル、旨、島津登ヘ命セラレ、同人一向ラ研究セリ（御書取写ニアリ、洋式ノ騎兵日本ニ於テノ開基ナリ、後チ幕府又ハ各藩ニモ開ケタリ）、如此洋法実践ノ式斟酌改革セラレタルハ、咸人知ルカ如シ、其時分迄ハ幕府ヲ初メ、各藩モ弓・槍・銃錯雑ノ隊制ナルノミナラス（正保ノ頃幕府ノ諭令ニ依リ、甲州流ノ五段備弓・槍・銃・刀・騎ノ制ヲ用ヒタリ）、大小砲モ和洋混淆ナリシニ、本藩ハ洋式ノ隊伍ニ組織シ、砲銃モ悉ク新式ヲ用ラレタリ、当時各藩ニ於テ大ニ称讃シタルコトナリキ、

○因ニ記ス、西洋式ノ砲術ハ　齊興公、鳥居平八・同平七兄弟ヲ高島四郎太夫（高島ハ長崎ノ人、荻野流砲術ノ師範ナリシカ、旧法ノ実用ニ充ツヘカラサルヲ覚リ、和蘭人ニ就テ新式伝習シタリ、其顚末ハ高島カ天地砲伝或ハ高島伝ニ詳ナリ）ニ入門命セラレ（鳥居ハ従来荻野流ノ砲術師範ナリシカ

高島ハ幕府ノ嫌疑ニ罹リ、幽囚セラレタル嫌疑ニ関係アリテ、鳥居ノ苗字ヲ成田ト改メタリ）、而シテ伝習スル処ノ銃陳（庫カ）燧石機銃（通唱剣筒、洋名「ゲベール」）或ハ野戦砲、或ハ天砲（通唱ボンベン筒、又ハ臼砲、洋名「モルチール」）或ハ地砲（通唱忽砲、洋名「ホーイツル」）等従来日本各流ト同年ニ語ルヘカラサル新式ノ要器ナルヲ以テ、御流儀ニ採用セラレ、成田正右衛門ヘ指南命セラレタリ、是ヲ洋式砲術本藩ニ於テ開基トス、実ニ　齊興公ノ卓見ト謂フヘシ、其時分迄ハ高島ノ門ニ学ヒタルハ佐賀・熊本ノ二藩ニ止リタリ、而シテ高島カ洋法砲術ノ演習ヲ、武州徳丸ケ原ニ於テ閣老ノ見ル処トナリ、後江川太郎左衛門・井上左太夫・下曾根金三郎ノ三名ニ伝授シ、他ニ教授ヲ禁セラレタリ、而シテ弘化二年ニ及ンテ、琉球・長崎又ハ浦賀其他ニ外国船屢々渡来、通信・貿易ヲ請フニ至リテ、幕府悚然、海岸守防ヲ各藩ニ令スルニ及ンテ、兵制ハ勿論、大小砲器ノ功拙（巧カ）モ弁セサルニ、我藩ハ洋式ニアラサレハ、用ニ堪ヘサルヲ、既ニ弁知シタルカ故、大砲鋳造場及ヒ砲術館ヲモ創建セラレ、海岸ノ守備モ拡張シ、而シテ　齊彬公継続セラレ、当時海内独歩ノ整備トモ謂フヘキカ故、各藩ヨリ伝習ニ来ルモノ続々、嘉永六年癸丑六月合衆国ノ軍艦浦賀ニ渡来、通信互市ヲ乞フ、幕府諸藩ニ警衛ヲ命ス、其時隣藩熊本ヨリ、海防ニ充ツヘキ砲器ノ備ナキヲ告テ、大砲数門ヲ借ラムト使ヲ鹿兒島ニ遣ハサレタリ、（使者徳富太助外二名、其事実及ヒ書翰ハ嘉永六年ノ部ニ記ス）如此当時比肩ナキ名声アルハ、全ク公ノ卓見ニアリ、

○島津登ハ西洋砲術熱心家ナリ、外夷防禦ハ洋式ニアラサレハ、用ニ適セサルヲ弁知シ、弘化三、四年ノ頃ヨリ、私邸ニ練習所ヲ設ケ、御流儀門人ヲシテ研究セシメタリ、其時分迄ハ砲術館モ未タ建設セラレス、成田カ一小邸ニ於テ、許多ノ人員ヲ訓練セリ、然ルニ島津カ自ラ勉強スルニ至リテ、一層盛大ニ赴キタリ、

安政四年ノ夏、二ノ丸内ヘ文武演習場ヲ開カレ（島津久包ハ当時御小姓組番頭ノ職ニ在テ、率先シテ洋式砲術ヲ学ヒ、自邸ニ操練場ヲ設ケ、毀誉ニ関セス自ラ奮フテ研究セリ、之ヲ三州一般ニ及ホシタル恤ナルハ、一般知ルカ如シ）、廣貫モ砲術館又ハ騎兵隊訓導兼勤拝命、隊制編伍ノ取調等ニ従事セリ、其ノ際御軍役奉行ヘ命セラレタル趣ハ、日本古制ノ人数組ハ陪卒ヲ設ケ、実場ニ於テ益ナキノミナラス、虚飾ニ流レ、却テ障碍トナルヘシ、加之訓練セサル兵ハ用ニ堪

サルハ無論ナルカ故、銃砲ノ打方西洋ノ式ニ習ヒ、隊伍ニ編入スヘシ、中ニモ砲隊ハ（日本ニ於テ砲隊編制ノ権輿トス、而シテ普ク全国ニモ開ケタリ）運転ニ人足ヲ用ヒス、兵士自ラ駈引ヲナス様ニシ、馬ヲ以テ挽運ノ調練、或ハ土工兵ヲ設ケ、野戦、胸壁等築造ノ法ヲモ訓練シ、西洋ニ於テハ近代兵制一変シタルカ故、之レニ当ラムニハ旧制ヲ変セサレハ必勝ノ利アルヘカラス、古法ニ泥マス、汎ク折衷スルコソ、肝要ナラメトノ御言ナリシト、

四九九　参考　山本藤助家記抄

安政四年十一月

一御船開運丸五百石積

一仝大順丸八百石積

右二艘、日州御手山御産物江戸運漕船トシテ、於江戸

安政四年巳十月御買入相成候、

一御手山御産物ノ外、御国産硫黄・煙草・陶器・織物、其外ノ品類江戸ヘ御積登相成、築地御屋敷ニ於テ御売捌相成候事、

一高岡去川山　御通行ノ節、往還最寄ヘ立居候「ホサ」大樹一本　御目ニ被為付、是ハ当時大砲船御造立ノ際ニテ、右御用材ニ適当ノ木柄ニ付、至急御取下シ方ノ儀　御沙汰被為在、十二月五日杣子相掛伐木致シ、早速ヨリ村口ノ加勢人夫夥敷打寄、牛四五十疋ヲ掛ケ、夜中二里余ノ難場ノ山道ヲ経テ、去川山下ヘ容易ニ出シ方相成候儀ハ、実ニ御名君ノ御威勢奉感服、夜中多数ノ明松ヲ相用ヒ、一統競立出精致シ、賑々敷盛ナル次第ニテ御座候、左候テ去川山下ヨリ高岡町迄川下シ、マヽ迄神速ニ相運ヒ御駐在ヘ御届相成候、尤此材木ハ直ニ鹿兒島ヘ御積廻相成候事、

一御手山御産物柞灰ノ儀、嘉永五子年ヨリ肥前表ヘ御商法御開相成候処、安政四巳年ヨリ御手許御計ヲ以テ、肥前佐賀御藩主様ト彼方産物米ト御交易ヲ被始候事、

（佐賀藩ト交易ヲ開レタル事実ハ前巻集成館ノ条ニ詳記ス）

○山本藤助ナル者ハ鹿兒島下町商賈ニシテ、尋常ノ商賈ニアラス、佛学ヲ芦谷無山ニ学ヒ、貧民ヲ憐恤スル等、士人ニ優レル事跡アル者ナリキ、

五〇〇　御家老座其他諸局ノ悪弊ヲ矯正シ玉フ

御家老座御用部屋、其他要路諸局ノ筆者、威権ヲ振ヒ賄

賂苞苴ヲ貪リ、或ハ諸願事ノ或否ニ関スル宿弊甚シキヲ聞召サレ、御家老中ヘ厳シク　仰達セラレシト云フ、因テ御家老中ハ厚ク議スル旨アリテ、洗除スルニ至レリ、之レ安政三年丙辰三月ノ事ナリキ、元来御家老座ハ御国政ノ庶事総括シ、中ニモ役員ノ進退黜陟ヲ掌リ、枢機ノ局ナルカ故、従テ威権アリ、治世ノ余弊、頭役（御家老等）多クハ門葉ノ輩ニシテ、悉ク其職務ニ堪ヘタリトハ謂ヒ難シ、中ニハ木偶人ニ等シキモノナキニ非ラサルカ故、自然筆吏ノ意見所論ニ依頼シ、権柄ヲ握ルニ至レリ、筆吏等ノ習風ハ目前ノ利害ニノミ拘ハリ、政務ノ大体ヲ弁セサル俗吏ノ巣窟、其弊害挙テ謂ヒ難シ、御用部屋モ同シク威権ヲ振ヒ、動モスレハ御膝辺御都合ノ如何ンヲ荷ヒ、抑圧ノ弊甚シク、其他財務ノ諸局或ハ監察局等モ一種ノ悪弊アルヲ　聞召サレ、一々其点ヲ挙ケテ厳責セラレタリト云フ、

五〇一　外国形ノ風帆船創製ノ事実

鹿兒島ニ於テ外国形ノ大船ヲ製造シタルハ実ニ日本ノ嚆矢トス、之レ嘉永三年ノコトナリキ、其手初ニハ磯ノ海浜ニ於テ、いろは丸ト唱ル三本柱ノ船ヲ造レリ、長凡二十間程ナリキ、其後櫻島瀬戸村・有村、牛根郷ノ各所ニ於テ製造ス、名ケテ琉大砲船ト通唱ス、大砲十二門、又ハ八門備等ノ大小ナリキ、〔頭注〕「幕府ヘ進献ハ昇平丸・大玄・鳳瑞二船号ハ昇平丸・大玄丸ト命名」鰒ハ注文ニ拠リテ造進セラル」ス、此二鰒ハ幕府ニ献セラレ、二鰒ハ琉球及ヒ各島ノ運用ニ拱セラレタリ、又蒸気船モ磯海辺、又ハ江戸田町邸ニ於テ、雛形ヲ造ラシメ玉ヘリ、○外国形大船ノ創製ハ文政ノ初廣貫カ実父寺師正容、皆吉鳳徳等ニアリ、其事実第（ママ）巻ニ記スカ如シ、

五〇二　齊彬公撮影術（一名写真）御開キ御真影ヲ写サシメ玉ヒシ事実

〔頭注〕「写真術ハ公ニハ嘉永二年ノ頃ヨリ研究アリ、印影鏡ノ名ニテ水戸公ヘノ書翰ニモ又其方法サヘ書キ贈ラレタル見ユ」

撮影術ハ日本ニ於テノ創起ニシテ、安政四年丁巳ノ春器械及ヒ薬品等和蘭人ヨリ御買入、写術ハ松木弘安（寺島宗則旧名）・川本幸民等ヘ蘭書訳述命セラレ、現術ハ宇宿彦右衛門及ヒ廣貫等奉命研究セリ（後福岡侯ヨリ一具ヲ送ラル、寺島宗則自記参看）、其時分ハ西洋ニ於テモ紙写ノ法充分ニ相開ケス、銀板又ハ玉板ニ写スノ法専ナリキ、其施術教師モナク、飜訳書ニ則リ研究シ、数百回ノ試験ヲ経テ、漸ク写シ得ルニ至リシカトモ、聊カ形状ヲ弁スルノミナリシ故、毎々試験場ニ御臨ミ、御手自モ試ミ玉ヘリ、

然シテ写術少シク熟シタルニ依リ、或ル日（安政四年丁巳九月初頃）試験場（御親臨、仰ニ外国人カ斯ノ妙術ヲ発明シタルハ、其労苦如何ハカリカ知ルヘカラス、今其法ニ則リ研究スルモ容易ノコトニアラズ、然レトモ其労苦ハ労苦ト云フヘキニ非ラズ、斯ノ術ハ遊戯翫物ノ如ク思フ者モアラン乎、ナレトモ父母ノ姿ヲモ百年ノ後ニ残ス貴重ノ術ナリ、尚ホ研究シテ其術ニ熟習スヘシトノ特命ヲ蒙レリ、同年九月十六日天気晴朗、写術ニ適シタル好天気ナリシニ、正午前ヨリ御親臨、御手自モ試ミ玉ヒ、這日公ヲ写シ奉リシニ、三四回ニシテ可ナリニ写シ得タリ、終テ当日ハ二ノ丸演武場ヘ被為入、例ノ如ク操練御指揮、夕景御帰殿、翌十七日モ前日ニ同シク清朗、午前ヨリ御休息所御庭ニ於テ（此日ハ御上下御着服ナリ）、三枚奉写、即時ニ留彩ヲ施シ、昨日奉写ノ数枚ト一緒ニ御熟覧、或ハ御側ニアル者トモヘモ拝見允サレ、其内三枚御意ニ適ヒ、余ハ消滅スヘシト命セラレ、其三枚ハ山田壮右衛門ヘ渡サレタリ、是レ安政四年丁巳九月十七日ノ事ナリキ、其後モ尚ホ研究シ、稍其功ヲ顕セリ、是レヲ本藩ニ於テ、撮影術ノ嚆矢トス、今ヤ全国一般所トシテ開ケサルハナシト雖トモ、当時ハ舶齎ノミニシテ、其術ヲ怪ミタリシカ、日ヲ逐フテ開ケ、今日ノ盛ナルニ至レリ、公ノ言ノ如ク父母ノ遺影ヲ百載ノ後ニ見ル貴重ノ術ナル、多言ヲ要セス、

聞処ニ憑レハ、這ノ三個ノ御写真ノ其一個ハ御臺様（天璋院殿）、一個ハ御前様（公御夫人）ニ、一個ハ御手許ニ置レタリト、御逝去後ハ大奥御仏間ニ安置セラレタルヲ、其後照國神社ニ納ラレシカ、漸次御影消滅スル故、画家稲富豊麿其他数名ニ摸写命セラレシモ、其真ヲ得サルカ故、明治十八年外国人キヨソネヘ依頼セラレ、此御真影ニ則リ、大キク複写セシメ、而シテ照國神社ニ納メラレタリ（写真ノ部ニ参照スヘシ）

因ニ記ス、前記ノ如ク撮影術御開ノ時分、則チ安政五年（西九）七月廣貫渡琉奉命ノ後、勤植館ニ於テ御手自写術御試ノ折、廣貫カ総髪トナレル頃、異貌ナリシヲ御写被丁拝戴セリ、其事実ハ後日重野安繹ニ依頼シテ、納函ニ記シ置ス、左ノ如シ（安政四丁巳年ヨリ現今明治廿七年ニ至リ、殆ント四十年ノ久シキモ可也其影ヲ存ス）

丁巳九月二十八日　　市來正右衛門惟宗廣和敬書記

安政四年丁巳秋七月二十四日、廣和蒙　命以御徒目付奉　内旨将赴琉球、越九月十六日朝、参于勤植館製練

所
公臨焉江夏直義侍、
公命直義以印影鏡製廣和肖像、授之廣和、且諭曰、爾于役中託之爾家人、廣和拜　命之辱受而退、窃以謂廣和啣旨赴異郷、意固不在家眷、而
公之　恩顧及至此、誠不任感激之至也、及韞之於函以蔵于謹叙其由如此、

五〇三　書生遊学勧奨及ヒ学風匡正ノ訓令

造士館及一般之学風、程朱ノ学ヲノミ主張シ、或ハ記誦詩章ノミニ心ヲ用ヒ、国史ノ類ハ度外ニ措キ、名分ノ如何ヲ弁識セサルカ故ニ、左ニ訓令セラレタリ、

江戸其外ヘ学問為稽古罷越度向ハ、造士館ヘ相付願出候様被　仰付置候ニ付、以来迚モ其通ニテ、教授請持ニテ、吟味行届候様被　仰付候、尤是迄造士館之学風計ニテ吟味致候テハ、造士館ヘ出席無之者ハ、館中吟味ニハ相違モ可有之候得共、基ヒ稽古修行之為他国ヘ出候事故、学問功拙ノ吟味ヨリ、学問未熟ニ候共、弥真実ニ修行致シ候乎、又ハ当座困窮凌キノ為メ、願出候乎ト申処ノ人撰之儀、第一ト存候間、心得違無之様可致吟味旨ヲモ、教授初メヘ可申達候、折衷学水戸風ノ学風ニテモ立入候テ、其上弥朱子道徳之学風相分リ候事乎ト存候、何学ニテモ名儀正敷キコソ学問ノ本意ト存候、詩・文章達者ニ候トモ、今日之道理ニ闇ク候テハ、修行之詮無之、一生俗儒ノ唱難免事ト存候、心得違無之様、修行志之者ヘ申聞候様可致旨、御書取ヲ以テ被　仰出、乍恐御尤之御事候条、以来　御趣意之程深ク奉汲受、手厚吟味行届候様可取計、此旨教授ヘ申渡、向々ヘモ不洩様可申渡候、

九月　駿河新納久仰

如斯遊学冀望ノ者ハ、造士館ヘ就テ請願スヘシトノ事ナリシ故、館中ノ役員担当シテ、学材ノ有無、亦ハ行状ヲ吟味シ、藩庁ヘ具申、許可ヲ得ルノ手順ナリシカ、従来該館ノ学風ハ程朱ノ糟粕ヲ嘗メ、加之漢土ヲノミ尊重シ、国史ノ閲読嫌忌スルノ弊寡カラス、剰ヘ水戸学ト蔑唱シ、遊学生等カ這ノ学風ニ立入ラサル様厳誡シ、或ハ造士館ニ出席セサル者ハ、請願ノ具申ヲ拒マレタルモアリシ故、壮年志望ノ輩ハ憤激、物議ニ亘レルヲ聞召レ、右通訓令セラレタリ、是ヨリ館中ノ輩恐縮シテ、冀望者志ヲ伸フルコトヲ得タリ、

○当時造士館ニ於テハ、皇朝ノ史類ヲ嫌忌シ、或ハ水戸風

ノ学問ハ夷端邪説ト唱フルカ如キノ習風ナリ、館中ノ者ハ漢土ノ事ノミヲ知リ、国史ヲ弁識セサル者ノミノ如シ、茲ヲ以テ右ノ如ク沙汰セラレタルモノナリ（此令ヲ布カル、ハ伊地知龍右衛門正治旧名・森新兵衛・板鼻俊蔵等カ請願ヲ拒ミタルヲ聞召サレタルニ因レリト云フ）

五〇四　士商ノ名分ヲ正サノシ事実

一名分不正ハ政務第一之大害ニ候旨、経書ニモ相見得、（以下、異本には「通鑑書出シニモ第一周室ニテ名分ヲ乱リタルヲ歎キ云々」とあ）通鑑書ニモ、周室衰、名分ノ乱レタルヲ歎キ、記シタ（始メ）リル哉ニ相見得、名分之儀ハ不容易事ニ候、過去之儀ハ（脱カ）致シ方モ無之候共（得脱カ）、以来士商之差別ハ格別ニ有之度、其上当時従公辺士道之儀、分テ被　仰出候時節ニ候間、是迄之仕来相改メ、名分ヲ正シ度存候（事ト脱カ）、右ニ付、今度町人共両人身分沙汰之儀吟味申出趣、尤ノ事ニハ候得共、年数格別ニモ無之、其上前文之趣意有之候間、町年寄格ニ申付、米銭等之物（品カ）ヲ為褒美遣シ、勤功賞美致シ候テハ如何可有之哉、左候テ以来急度名分ヲ正シ度候間、勤功有之節（候脱カ）ハ、此迄之格式ニ階級ヲ立、伺候方可然ト存候、右之趣新規ノ事ニハ（テカ）候得共、　公辺ニ於テハ如何様勤功候トモ、町年寄上席ヨリ上ニ町人ノ身分引上ケ被　仰付候例ハ無之、且ツ名ト器トハ不可以仮人旨、聖語ニモ有之候間、右様名分ヲ正シ候ハ、以来士気振興之一助ニモ可相成哉、昔ヨリ乱世ニハ、金銀ヲ以テ身分立身ノ儀有之候得共、聖代無事之御代ニハ、先ツ無之様ニ被存候間、所存之趣相談旁申達候条、同列中厚及評議、以来治定有之度存候事、

九月

天明ノ末頃ヨリ天保ノ末頃マテハ、（照国公文書ならびに薩藩旧記雑録（追録）にて校訂）御蔵方ノ疲弊甚シク種々理財ノ法ヲ設ケラレタリト雖モ、兎角出入相贖フコト能ハス、已ムヲ得サルヨリシテ、戸口ニ課シ、金穀ヲ納メシムル等ノ事ニモ及ヒ、或ハ余裕アル商賈等ハ米金ヲ献呈スル者モ寡カラス、其褒賞トシテ、士分ノ格式（御小姓組及ヒ与力ヲ士分ト通唱ス）ニ昇進セシメ、其余習近代ニ流レ、商賈ヨリ士分ニ昇リ、或ハ役員ニ出頭セルモ少ナカラス、是ヲ従来ノ士分ハ蔑唱シテナリアガリ（方言）、又ハ銅臭家トモ云ヘリ、素ヨリ身代ハ富メリト雖トモ、元来ノ士分ニ疎外セラレ、交際モ区域アリテ、結婚或ハ交際スル者モ、元来ノ士分ナル者ハ忌避スルノ風習ナリキ、当時ノ諺ニ、金銭ヲ以テ士分ノ格位ヲ賈フトモ蔑唱セリ、然ルニ近代狡黠ナル一法ヲ以テ、幾千両・幾万貫文ヲ以テ士分ニ出頭セリト云フニ至レリ、其黠法ハ旧来ノ御貸シ上ケ金御借状ト唱フ

ルモノアリ、今時ノ公債証書類似ノモノニテ、利金幾千或ハ幾年ニシテ返下ノ証書ナルカ故、抵当或ハ売買スルモアリタリ、之ヲ黠商等低価ニ買取リ、而シテ借状差上切リヲ願フトキハ、御蔵方ハ則チ献金ノ場ニ当レルカ故、其篤志ヲ賞セラレ、士分ニ昇等セシ者寡カラス、又低価ニ買ヒ取レリトハ、喩ヘハ壱万両ノ借状ナレハ、僅ニ三四千両ニモ買取リ、御蔵方ノ帳簿上ニハ、証書面壱万両ノ巨額献納ノ姿ナリ、如此士分ノ格式売買ニ等シキ故、大ニ風俗ヲ害シ、廉恥頽敗ノ媒トナレリ、元来ノ士分ハ、祖先カ鋒鏑ニ触レ、兵馬ノ功アル者ノ子孫ト同格式ナルハ、人情忍ヒサルノミナラス、当時外夷覬覦乱兆顕ハレタル世態ナルカ故、幕府ヲ初メ、各藩ニ於テモ、士気振興ヲ一向ラ主務トセラル、際ナルカ故、更ニ　御心ヲ用ヒラレ、名分ヲ正サル、ノ御趣意専ラナル折ニ、下町商人某（岡部與兵衛、魚住源蔵二名）等琉球産物売捌キ、又ハ三島砂糖商法等ニ功労少ナカラス、或ハ献金ノ特別ナルヲ以テ、代々御小姓与ノ格式ニ御登用ノ伺書ヲ御家老中ヨリ窺ヒ出タリト、仍テ右御書取ヲ以テ、　仰セ達セラレ、旧弊一洗セラレタリ（藩庁ノ規定トセラレタルカ故、御文書トシテ御記録所ニ保存ス、別巻御文書ノ中ニ記ス）

因ニ記ス、実際金穀ヲ献シ、或ハ上文ノ如ク借状ヲ差上、献金ノ名ヲ仮リ、士分ニ昇等セシ者、往々尠カラス、文化・文政・天保・弘化ノ初頃迄ニハ数十家ニ及ベリ、其人名ノ概略ヲ記シテ、参考ニ供ス、重久佐次右衛門・同圓右衛門・酒匂孫太郎・池田十次郎・同勘助・島名勘右衛門・川畑清右衛門・川井田藤助・森山新蔵・松村孫太郎・千田金助・弓削次助・加藤平八・桑原次郎左衛門等ノ数十名、又郷士・御小人等ニ出頭ノモノ数十名ニ及、悉ク金穀ヲ献シテ其資格ヲ与ヘタルモノナリ、一般之ヲナリアガリト蔑唱シ、元来ノ士分ハ其伍ヲ同フセサリキ、

五〇五　和蘭国ニ箱館長崎ノ通商ヲ允ス

大目附江

今般長崎表阿蘭陀通商御仕法替相成、向後長崎并箱館両所ニ於テ、交易御差許有之、魯西亜ニモ同様之振合相成候、右ニ付、外条約相済候国々モ、追々右之御所置可相成候間、可被得其意候、

右之趣向々ヘ可被相触候、

十一月（三日）

五〇六　琉球国王賀慶使出府ノ費用ヲ貸与ス

五〇六の一
安政四巳年十二月十五日

従三位松平大隅守
名代島津淡路守忠寛

右被　仰付旨、於御白書院縁頰、老中列座大和守申渡シ、

五〇六の二
四月廿六日

松平薩摩守
名代遠山美濃守

来秋琉人召連参府ニ付テハ、彼国旱損其外等ニテ、手当難及国力候付、救遣候由ノ処、其方儀モ勝手向難渋ノ上品々用途相嵩候付、御米并御金拝借ノ儀被相願候趣達　御聴、当時御事多ノ折柄、願ノ通ニハ難相整候得共、別段ノ訳ヲ以、金壱万両拝借被　仰付候、

右於御白書院縁頰、老中列座大和守申渡候、

将軍家吉凶、又ハ中山王継統等ニ就テ、賀弔謝恩ノ使江戸ニ臻ルノ例規ニシテ、其際毎ニ金穀下与セラレタリ、茲ニ記スモ先規ニ則ラレシモノナリ、

五〇七　参考　島津久徴家記抄

天璋院殿御結婚〔安政三年十二月十八日〕

姫君様御婚礼被為整、御当日ヨリ、御臺様ト可被奉称旨被仰渡候、御祝儀且従御臺様初テ　御使古山善一郎殿ヲ以干鯛一箱宛、御両殿様（齊興・齊彬二公）被遊御拝顔候御祝儀、被仰上候様昨日御通達有之候得共、御父子様（島津久徴・久明父子）ニハ前条同断也、奥方様ニハ御忌掛ニテハ不被為在候付、宰相様（齊興公）ヘ御使者ヲ以、御祝詞被仰上筈御座候得共、六ノ助様ニモ御家内中ノ儀、殊ニ　且那様（久徴）御忌中ノ儀ニ付テハ、今日被仰上候テモ如何ノ儀ト致吟味、御用達ヲ以テ、御家老座御書役上村休介殿江内分相尋候処、御座中御吟味有之候由ニテ、　奥方様ニハ申出通御忌掛ニテハ無之候得共、　下總様御忌中ニ付テハ御慎モ有之筈、就テハ御忌明ノ上被仰上候方可然旨御吟味ノ段承、猶又御用人座御書役大久保林左衛門殿江モ右ノ形行ヲ以相伺候処、丁渡御家老座御吟味通ニテ可宜旨致承知、御忌明ノ上被仰上候筋　御

前へモ申上置候事、

五〇八　国老島津豊後へ賜書

五〇八の一　安政四年丁巳十月廿七日、鹿児島ヨリ、

去ル十一日之書面、昨廿六日相達候、京都之一条（何等ノ事柄ナリヤ、知ルニ由ナシ）委細致承知候、宜敷取計候事ト存候、実ハ頓不心付候、金先々ヨキ都合ニテ御座候、大坂蔵総（〔考カ〕）（大坂蔵屋敷統計）其外濱村（館入商人、此者ノ履歴ハ調所笑左衛門事蹟記ニ詳記ス）ノ事モ致承知候、江戸金操之義、大元丸（第二軍艦）長引候テハ如何ト存候、若差掛リ差支モ候ハヽ、宜敷取計可申候、当地ハ先ツ差支ハ無之ト存候、其内ニハ金山前借願出候（出産金ヲ以返上ノ願旨）都合ニモ可相成ト存候、琉人参府表向拝借モ相済候ハヽ、江戸入用ニ振向ケ可然ト存申候、静甫（戸塚）之儀申遣候通リ、重富（久光公）之事的例ト被存候、何分都合ヨロシク可取計候、取締之儀ハ宜敷可申付候、黒川（〔ママ〕）事乱心、庭方屋敷預リ等差支候間、伊集院（宗甫）・富田（覺之助）等此節申付候、来年引移リ候後ハ、西筑（筑右衛門）ヲ屋敷預リニテ頭役申付可然ト、武兵衛（堅山）ト申談候、イツレ来年之事ト存候、其地ノ様子、調練等以前ヨリ薄ラキ候哉、様子可申遣候、夫次第守衛人数（江戸邸）半方ハ交代之節、不目立様引取候テモ可然、様子承リ合可申越候、先ハ返事旁早々申入候、不備、

十月二十七日

返事

豐後江

（〔斉彬公書翰影写〕東大史料編纂所所蔵）にて校訂）

五〇八の二　仝前

安政四年丁巳十月二十九日、鹿児島ヨリ、

一筆申入候、道中無滞通行之事（豊後出府）ト珍重存候、当地其後何モ静謐ニ有之候、扨御心願之義（齊興公官位御昇進）如何ニ候哉、辰之口被居候ヘハ（阿部正弘死去ヲ云）都合モ宜敷候所、此節之処如何ト甚タ心配ニ存候、無手抜十分ニ取計専一ニ存候、且京都之義（近衛家日記参看）如何之都合ニ候哉承リ度候、若々様子次第ニテハ、又々追願之為、誰ソ出府等申付候テモ可然、当暮六ケシク候ハヽ、来春ハ誰ソ差出候テ、今一往追願等可申上ト存申候、其地之光景早々可申越候、大奥（天璋院殿）江此度又々文ニテ申入候、式日ニテハ延着

難計候間、急便ニテ申上候考ニ御座候、伊賀（松平伊賀守）再勤ユヘ、別テ如何ト存申候、

一玉里（齊興公）之事、御都合第一ニ候間、休之丞（永江）申談シ宜敷可申上候トテモ御六ケシキ事哉、御様子可申越候、

一川上（川上筑後）江門出入等之事、此節又々申遣候、

一高山・串良辺、始羅郡山田之辺、色々郷士等不宜聞得モ有之候、追々取締可申付、新介（中村、当時郡事掛）ヲ近々差廻シ候筈ニ候、

一大元丸（第二献上軍艦）出来候ハヽ早々相納、代金請取候様可取計候、

一長崎鼈甲代（唐物商法品中）之事、案外之下落ニ候、見当大相違ニ相成申候、八千九百両余ニ有之候、一万ニ不相成、扨々困リ入申候、先ハ要用申入候、以上、

十月二十九日

用事

豐後江

（斉彬公書翰影写（東大史料編纂所所蔵）にて校訂）

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編
安政四年

目録〔目録は本文中の史料の収載順序と異なるが底本のまま収める。〕

有馬新七建言
寺嶋宗則自記鈔
非蔵人日記抄
三條内府公ヘノ建言（無名氏）
学習所掲示
箱館通寳鋳造
所司代脇坂中務大輔出立諸家其外見立云々達書
米国使節登営布告
外国形船通航浦触停止国旗云々布令
御黒書院出礼ノ面々其外不時登営ヲ命ス
橋本左内書翰
七卿西竄始末初篇三條實美公記抄
将軍閣老ノ精勤ヲ賞シ物ヲ賜フ
阿部家記
薪炭高価云々諭達
金貨両替云々布達
江田平藏日記抄
所司代本多美濃守殿ヨリ伝奏ヘ御達
十二月十六日叙任
当時流行俚謡
白石正一郎日記摘要
函館通寳
薩摩朝鮮人種
天明天保度饑饉之際甘藷里芋等救急有益譚（市來廣貫紀事）
加治木郷銭作ノ説（慶長頃）
鹿兒島大火之記事
橋本左内ノ書翰

水戸侯鷹司関白へ奉呈書

五〇九　函館通寶

安政四年丁巳閏五月六日（吹塵錄）

令於函館府鋳鉄銭以行本府及松前蝦夷地文曰、箱館通寶固非以行内地、上下一体知悉勿誤用犯禁、此銭円孔以別内地物銭之方孔、倭漢所未有也、

五一〇　薩摩朝鮮人種

五一〇の一

薩摩国日置郡伊集院之内苗代川俗壺屋ト云フト申所、朝鮮人子孫召置候、是ハ　兵庫頭義弘入道惟新慶長三年之冬帰朝之節、朝鮮人多人数召捕致帰国、同郡串木野郷之内本壺屋ト申所ヘ召置、同八年之冬苗代川江召移、夫ヨリ当分迄召置候故子孫相栄、弐百五拾家也、男女惣人数千弐百七拾余人ニ罷成候、勿論他之姓ヲ不離、他郷江嫁候儀モ無之、都テ朝鮮人子孫容体、朝鮮人之姿無カニテ百姓同、近年右人数内、伸・朴之四家之者郷士同格ニ申付置、諸事苗代川村中取計申事候、最朝鮮国ヨリ捕来之者之内、茶碗其外□（磁カ）器之類焼物細工仕候、于今子孫致伝来、右細工等仕居申候、一在所取立、苗代川ヨリ朝鮮人子孫数十家内召移置候、

右御目付様御尋モ御座候ハヽ、右之趣ヲ以大概申上候（巡見使応答心得書）

五一〇の二

星山仲右衞門高祖父星山仲次郎、高麗釜星ト申所ニ罷居、焼物細工候処、　惟新様高麗御渡海之節被召列、御帰朝後於飯野焼物細工被仰付、御腰物大小拝領被仰付、星山仲次ト改名仕候、其後瀬戸焼茶入等稽古被仰付、上方江罷上稽古仕、御用細工被仰付、御高三拾石被置下、其已後加治木江被召列、順々御用細工仕差上候、　家久公御代御当地（鹿児島）江被召移、御切米拾五石被成下候（御茶道部屋記抄）

五一一　天明・天保度饑饉之際甘藷・里芋等救急有益譚（市來廣貫紀事）

前文欠失、

世ニ近キハ天明・天保度ノ饑饉ヲ云フ、其非常ノ困窮惨状ハ当時ノ記事口碑ヲ聞ニモ、凄然タルハ、実ニ平時ノ貯蓄ニ力ヲ用ヒサルヲ、悟覚スルノ戒ナリ、殊更東北国々・畿内・中國等ハ其甚シキヲ究メテ、適々金銭ヲ懐ニ

シテ、食料ヲ得ルニ道ナクシテ、看々餓斃スル者多ク、一村一部殆（脱カ）ント掃死スル所アリシト云フ、前代未曾（有脱カ）ノ天災ト謂フヘシ、然ルニ西国ニ於テハ、其究（窮）災東国等ノ比ニ至ラス、餓死スル者極メテ尠シトス、是則チ他ナシ、甘藷・里芋・野畑ノ陸稲ヲ耕作スルニ拠リテ、是カ為メニ田作物不実ナルニモ拘ラス、自然救急ノ資ヲ以テ、餓死ヲ免レシト云フ、中ニモ薩摩・大隅・日向ノ国々ハ暖国ニシテ、特ニ甘藷・里芋及ヒ菜菓ノ産ニ、豊熟適当ノ地タルコトハ、世ニ普知スルカ如シ、固ヨリ山海ヲ兼ネテ、田地寡少ニシテ、常ニ国中ノ産米ニテハ四分不足ノ国ナルヲ以テ、山間ノ畑穀ヲ以テ、専ト為ル故、常ニ甘藷・里芋、或ハ粟・稗・黍等ノ畑作物ヲ以テ、民間ノ常食トスル所多シ、然ルニ是ニ反シテ、田作ノ場所ニハ、却テ饑民多カリシト云フ、此レヲ以テ穀物払底ト雖トモ、全ク無収ニ至ラスシテ、幾分ノ採収アリテ、為メニ餓死スル者稀ナリシ所以ナリ、猶山家ニ至テハ、今ニ里芋ヲ作ル盛ニシテ、甘藷ハ只食料ニ供スルニ足ルヲ以テセリ、コレ一ハ猪・猿・兎等ノ山獣ノ為メニ侵荒セラル、ヲ以テナリ、蓋シ里芋ハ甘藷未開以前、上代ヨリ民間ノ食料ニシテ、殊更戦国ノ時分ハ盛ニ作式為セシモノニテ、今ハ甘藷開ケテ以降、此作式ヲ専務トシ、且ツ作式ニ渉テ簡易ニシテ、労作肥料少ク、収実容易ナルヲ以テス、故ニ農家ハ則チ此二種ノ作式ハ、勉メテ備荒ニ闕ヘカラサル要品ナリ、且是ニ次ヒテ、夷瓜（カボチヤ）・唐瓜・茄子・大根・蕪等ノ蔬菜ノ食品ニ資ケヲ為スヤ偉ナリ、由ツテ今薩摩ニ於テハ、田地少ク、畑地多キ処ヲ以テ、農家ノ生計上ニハ利便多シト謂フハ無理ノ論ナラス、蓋シ天明度ト天保度ト、記事ヲ以テ比較スルニ、天明ノ度ハ一層甚シキヲ極ム、今此ニ天保（七八ノ両年ニ渉（カ）ル）度ノ記事、当時ノ米価（苞作リ二二種アリ、三斗五升入ヲ蔵米ト、二斗三升四合入ヲ諸人ノ取納米トス）白米一升（二百文ヨリ二百五十文）、粟一升（搗キ）（百七十文ヨリ二百文）、麦一升（百六十文）、甘藷一升（二十四五文ヨリ三十文）、里芋一升（三十文ヨリ三十四五文）、凡ソ斯ノ如クナリシト云フ、常ニハ三斗五升入一苞ノ価、壱貫四五百文位ノ相場ナルニ、饑饉ニ際シテハ、非常ノ価値ニ、人皆困究ヲ極メ、日々ノ稼業ノ者等ハ世上事業ヲ停止シテ、是カ為ニ困ムニ至ル、東国等ノ如ク、全尽スルニアラスシテ、只高価乏シキノミ、故ニ秋穀ノ実収マテ、彼是三ケ月、百日間位ノ困難ニシテ、一時皆山野ニ就イテ食物ヲ稼キタルト云フ、野百合・野蒜・スミレ菜・山薬・トロロ芋・竹ノ子・蕨・センマヒ・艾等ノ草根草葉ノ食スル限リノ者ハ採リテ、

生活セシト云フ、此ノ如ク農家ハ兎ニ角飢ヲ凌クノ方術アレトモ、都会市商ニ至テハ、商買ハ廃絶シテ、生活ノ方ヲ得スシテ、此レニ飢斃スル者アリト云フ、浦方ニ至テハ、漁魚・採藻・貝類ヲ以テ救急ヲ済スト云フ、然ルニ大人(天カ)ヲ殺サスノ理ニテ、其秋冬ニ至テ、甘藷・里芋・大根等ノ作物殊ニ実収多カリシト云フ、天明・天保ノ両度、共ニ斯クノ如クナリシト古老ノ藷ニ伝フ所ナリ、今甘藷ノ利用挙記スルニ、左ノ能効アリ、

乾粉冬月中之ヲ剪片ト為シ乾シ、苞ニ為テ貯フ、夏月ヲ経ルトモ損敗ノ患ヒナシ、之ヲ以テ草子(葉カ)ヲ製シ、炊ヒテ朝夕ノ食ニ宛ツ、亦醤油及ヒ焼酎ヲ製シ、或ハ味噌ヲ造ル等、百般ノ用アリ、澱粉(冬月ヨリ早春迄ノ間砕破シテ澱粉ヲ采ル)、此ノ屑粕ヲ日乾シテ苞ニ作リ貯フ、皆ノ製品ニ使用ス、

或ハ尋常飯ニ混シテ炊キ、或ハ餅団子ニ作ル、或ハ飴ト為ス等、種々ノ供用宏クシテ、味甘淡ニシテ口ニカナヒテ、皆好望スル所ノ者ナリ、

斯ノ如ク甘藷ハ利徳多端ナルヲ以テ、此時ヨリ日本国中甘藷ヲ移栽シテ、大ニ播殖ヲ勉ルコトトハ成ケルト云フ、幕府ヨリ藩ニ命シテ、甘藷種子ヲ出テシメ、此レヲ当時郡代・代官支配地ヘ分配シテ、普ク栽殖(栽植)ノ事ヲ令セラレシト云フ（市來廣貫カ甘藷舶来記参看）

五一二　加治木郷銭作ノ説（慶長頃）

銭作リ之儀ニ付、加治木役人ヨリ、加世田衆中是枝利助殿ト申人、為銭作加治木江罷出、二木ト名乗被罷居、子孫加治木町人ニ罷成、当分清右衛門ト申候、利助殿事寛文九年五月被相果候、清右衛門迄五代罷成候由、町役ヨリ承候、丸石体二ノ石ニ壱き壱(元ノママ)タ右銭作リ道具ノ由ニ候、清右衛門今ニ格護仕候由、先年出火之節類焼ニ失付無之、銭作之儀何仕候事哉、不相知候由申出候事、

五一三　鹿兒島大火之記事

延寳八年庚申正月十二日八ツ時分ヨリ鹿兒島大火事、焼屋敷家数死人帳、火元田尻八兵衛、

惣合屋敷数三百七十八ヶ所半、

内

壱ヶ所ハ天神屋敷（萩原ト唱フ）、一ヶ所ハ客屋、一ヶ所（御搗屋）ハ屋久島蔵、拾一ヶ所ハ南林寺脇寺、八ヶ所ハ御小者中間細工人屋敷、三百五拾六ヶ所半士屋敷、

惣合家数弐千弐百七ツ、
士男三人　士女五人　下女六人　下人九人
右之分焼死人
町方
惣合屋敷三百九十一軒、残屋敷四軒、
惣合家数九百拾四軒、残家四軒、
焼土蔵九ツ、外ニ残蔵四拾、
右正月十四日ノ改也、死人ハ皆カクシ候故、究テ不知、平野馬場ハ上二番目ノ馬場ヨリ堀ノ面ヘ焼ケ出シ、客屋ノ松方（枡形ノ誤）ヨリ町ヘ焼出シ、島津帯刀殿裏ノ門ヨリ浜ニ焼出シ、下ノ本薬師堂馬場ノ左手ヲ千石馬場ヘ焼出シ、喜入久右衛門上ノ屋敷ヨリ天神下リ焼ヲトシ、三官橋ヨリノンボリ（上リノ誤）焼、屋久島蔵迄ニテトマリ也、誠ニ古今珍敷大火事ト世間沙汰也云々、

五一四　橋本左内ノ書翰

此書ハ安政四年丁巳十一月村田氏壽ニ贈リシモノナリ、此時橋本ハ江戸ニ居リ、村田ハ福井ニ居レリ、（景嶽ハ橋本ノ号、戇堂ハ村田ノ号、嶽ヲ鄂ト書キシハ戯ナルヘシ）

本月十一日発之御翰相達、厳寒ノ節御座候処、先以奉恐悦候、随テ奉拝賀候、次ニ御休情可被下候、井上（剛介）・埴原（三十郎）着ノ由云々拝承、助教被仰付之一条、此亦拝承、外塾ヘ出張之事、此又拝承、何レモ逐（々カ）ニ御都合可宜ト奉同慶候、今便ハ殊之外取込候間、一々祥（詳乎）答不仕候、偖西城一件ハ（将軍継嗣）、過日石原（甚十郎）罷越、大半御瞭然ト奉存候、昨廿七日朝始上田（松平伊賀守）ヘ御逢対被為入候処、誠ニ御都合宜、先ヨリ今日ハ西城ノ義ニテ被為入候哉ト被尋、偖夫ニ付テハ段々ノ御懇志誠ニ感服ニ候、何分今度亜墨利加一条相済候ハヽ、直ニ
上様思召ヲモ伺、何トカ趣向相付候積ニ御座候、過日来堀田（備中守）、久世（大和守）ヘモ御咄之趣、実以感心云々クリカヘシ被申述候、因テ橋公（一橋）御様子御咄御座候処、此モ貴慮ノ如ク、水老公（老公ハ癖アル云々当時ノ評）トハ模様相違之由、如何ニモ御温順ナリト、御気象ハ御卓立ノ由ニ候得共、至極御尤ナル御見込ニ候、扨老公トハ如何様ノ御交ニ候哉ト被問候ニ付、至テ懇意ニ候得共、老公ハ一寸時世ニ暗キ御人カト奉存候、夫故議論不合事共モ数々有之、乍去中々御英物ニハ相

違ナク存スル由被仰候処、上田被申候ハ、如何ニモ左様、此方モ老公ニハ毎々困切リ申候、全ク時勢ハ御了解ナキ御方ニテ、御果断ハ格別ナル御方ニ候、此節モ大船御作御願被成度旨御願有之候得共、此モ只沿海警衛ト申迄ニテ、為差御見留ハ無之塩梅ニ付、何分橋公トハ大御相違ニ御座候、且又貴兄亜墨利加エノ御返答、御相談ノ御返答未無之、外ニハ(々カ)逐々相済、貴兄御一人遅延(脱カ)致候故、若哉御時態ニ不合無理論被仰立候ニテハ無之哉抔、御懇話有之候由、依テ御答ニ、小拙ハ別段見詰有之、態ト晩レテ指出申候、即廿六日指出申候、其趣意ハ云々被仰述候処、誠ニ御同意之由、其趣ナラハ安(安心ニ候カ)心々々ト被仰聞候旨ニ御座候、先右之御様子御同慶之至ニ御座候、偖又去十三日夕、亜墨利加使節申立并応対書和解二通御渡ニ相成候、直ニ拝見被仰付、依例事理分明、其中英夷トハ段々内談モ有之塩梅、且ハ虚喝(恐カ)モ可有御座候得共、何分一々我弊ニ中候処、可立々々、此義ハ実ニ神州之御大事、今度彼二ケ条御許ニ相成候ハ、即御国体変遷之姿ニ候、乍去只今ト相成候ハ、鎖国独立不可致ハ、固ヨリ識者ニ於テハ瞭然ニ可有之候得共、固ヨリ拒絶不相成ハ不俟論候得共、如何セン、廟(廟)堂上之小児輩、迚モ其辺ノ咄出来候者一人モナシ、就テハ責テ我君ナリトモト奉存候故、参政(中根)ト共種々苦言直論毎々高聴ニ奉入、逐々御工夫モ被為在候処、流石ニ粗御考モ相立候、乍去兎角柔怠之御旧弊、未タ霍然御脱却被成兼、只管参政并小拙辺申上候処ノミ、御手寄被遊御嘉納ト申迄ニテ、御自身様ヨリ御発出薄姿ニ御座候故、近来一切此方ヨリ申上ハ相止、頻リニ御難話(話カ)ノミ申上居候、併此迄ヨリハ一段御工夫ハ不断被遊候御塩梅、御策之程ハ実ニ奉感入候、尤モ御上書モ十ガ九ハ御自身様ニテ被遊候(ダケカ)コトニテ、当日迄ニハ凡四五度御草稿相替リ、色々御推敲御座候故、御当日ニ到リ小拙聊御添削申上、今般之運ニ相成候、此ハ執政ヨリ御内見可被成候、定テ御地執政方モ、御上書ニハ一寸御退(意)可被成奉存候、君上ニハ、其辺之御勇断ハ充分被為在候得共、天下之奸雄豪傑ヲモ籠絡被遊候御手段ニ御乏、唯御誠心一片ニ帰シ、仁柔之風勝、撥乱之御器量ニ不相成欤存シ、其処ヲ不足ニ奉存候、扨海外之御所置ニ付テハ、君上ニモ種々御考被為在候得共、近来ハ先小拙之所見ト御同様ニ被為成候故、先小拙之存申上候(元ノママ)、御賢判之上御可否可被仰下候、当今之勢、

日本之事務、国内之御所置ト、外蕃御待遇トノ二件ニ可帰奉存候、外蕃御待遇ニ付テハ、海外之事情第一之御推察有之度候、方今之勢ハ行々ハ五大州一図ニ同盟国ニ相成、盟主相立候テ、四方之干戈相休可申相運候半ト奉存候、右盟主ハ先英・魯之内ニ可有之候、英ハ慓悍貪欲、魯ハ沈鷙厳整、何レ後ニハ魯ヘ人望可帰奉存候、偖日本ハ迚モ独立難相叶候、独立ニ致シ候ニハ山丹・満州之辺・朝鮮国ヲ併セ、且亜墨利加州或ハ印度地内ニ領ヲ不持シテハ、迚モ望ノ如クナラズ候、此ハ当今ハ甚六ケ敷候、其訳ハ印度ハ西洋ニ被領、山丹辺ハ魯国ニテ手ヲ附掛居候、其上今ハ力不足、迚モ西洋諸国之兵ニ敵対シテ、比年連戦ハ無覚束候間、却テ今ノ内ニ同盟国ニ相成可然候、然処西国（亜）其外諸国ハ交至（亟カ）候モ不苦候得トモ、英・魯ハ両雄不並立国故甚以扱兼申候、其意ハ既ニハリルス（ハルレス）口上ニモ歴然、其上近来争闘之迹ニテ明白ニ御座候、依之後日英ヨリ魯ヲ伐、先手ヲ頼候欤、又ハ蝦夷・箱館借呉候旨可願出候、其時断然英ヲ断候欤、又ハ従候欤、定策可有之事、小拙ハ是非魯ニ従ヒ度奉存候、其訳ハ魯ハ信アリ、隣境ナリ、且魯ト我トハ唇歯之国、我魯ニ従候ハヽ、魯我ヲ徳トスベク候、左スレバ英怒リテ伐（可脱カ）我、此我願ナリ、我孤立ニテ西洋同盟之諸国ニ敵対ハ難致、魯之後援アレハ、仮令敗ルヽモ皆滅ニ不至ハ了然ニ候、然レハ此一戦我弱ヲ強ニ転シ、危ヲ安ニ変候大機会ニ御座候テ、此ヨリ我日本モ真之強国ト可相成候、其上其戦争迄ニハ是非魯国并亜国ヨリ人ヲ傭ヒテ、我国之大改革ヲ始メ、水軍、陸戦共精励可為致事ト奉存候、偖右様魯之我眤ヲ得候ニハ、所謂難報之恩無之シテハ不相済候、魯国ヘ我ヨリ使節ヲ以テ和親ヲ乞候積、其段ニハ種々心算有之候得共、筆ニテハ難述候、扨魯ニ国ヲ托シ候迄ニ、外ヨリ擾乱被致候テハ不相成候故、其迄ハ何分亜墨利加ヲ頼付、英夷之跋扈強梁等ハ成丈拒貰ヒ候事、此亦色々之工夫モ御座候得トモ、何モ応答言辞之間ニナクシテハ、口ニモ難述奉存候事、依之交易ミニストル指置之二ケ条相許、其中交易ハ矢張官府交易ニ致度候間、勝手交易ハ相断申度候事、阿片并借地之事ハ断リ、港ハ堺・神奈川・箱館・長崎之四ケ処位ニ極置度事、何分亜ヲ一ケ之本藩（東）ト見、西洋ヲ我所属ト思ヒ、魯ヲ兄弟唇歯トナシ、近国ヲ掠略スル事、緊要第一ト奉存候、偖右様大変革相始候ニ付テハ、内地之御処置

此迄之旧套ニテハ不相済、第一建儲、第二我公・水老公・薩公位ヲ国内事務宰相ノ専権ニシテ、肥前公（鍋島斉正）ヲ外国事務宰相ノ専権ニシ、夫々川路（ニカ）（左衛門尉聖謨・玄蕃頭崗志）・永井・岩瀬（忠震）位ヲ指添、其外天下有名達識ノ士ヲ御儒者ト申名目ニテ、陪臣処士ニ不拘選挙致シ、此モ右専権ノ宰相ニ派別ニ致シ附置、尾張（徳川慶恕）・因州（池田慶徳）ヲ京師之守護ニ、其指添ニ彦根（井伊直弼）・戸田（妥女正氏彬）位、蝦夷ヘハ伊達（宗城）遠州（山内豊信）・土州侯位相遣シ、其外小名有志之向ヲ挙用候ハヽ、今ノ勢ニテモ随分一芝居出来候半欤ト奉存候、其上魯西亜・亜墨利加ヨリ諸芸術之師役五十人（計）斗借受、諸国ヘ学術稽古所相起、物産之道ヲ手広ニ始メ、内地之乞児・雲介之類ニ頭ヲ立、相応之賄遣シ、蝦夷ヘ遣シ、山海之営為致、往来ハ重々海路ヨリ致シ候ハヽ、忽開懇（蝦夷モ脱カ）可相成、航海術モ直ニ可熟奉存候、因テ一句ヲ吟申候、人間自有適用士、天下何無可為時、嗚呼此等之事夢ニモ難見奉存候、其中薩之事ハ御不同意ニモ可有之候得共、此ハ小拙大ニ所見有之事ニ御座候、畢竟日本国中ヲ一家ト見候上ハ、小嫌猜疑ニハ不可拘ハ勿論ニ御座候、昨日モ川路ノ咄聞候処、此モ右迄ノ見ハ不参候（承カ）得共、何分日本ニ於テ、遠大之処置無之シテハ不相済、就テハ魯ト和親ヲ結ヒ、且建儲ヲ致シ、根本ヲ固メ候腹ハ有之塩梅ニ御座候、乍去全ク風波ヲ恐居候由、其内実ニ難渋ナル咄共有之、不斗（計）感慨落涙仕候、何分此後何等ノ辺ヘ落付可申哉、頓ト不被斗、実ニ志士憤腕（可脱カ）之秋ニ御座候、因州・土州二侯ニハ不容易御感慨、土州抔ハ御国政一変之思召候由、此間中我君上ト頻ニ御高論御座候、小拙モ乍蔭周旋仕、折角我君ヲ正鵠ニ仕掛申候、此聊賤臣ノ微忠ニテ、此ニテ何卒御英果御憤慨之御覚相立、以後如何様ノ大事落来候共、御踏堪ラヘ出来候様致度心得ニ御座候、出立前御用立申置候回天詩史、御廻シ被下候様奉願候、相成候ハヽ、次鴻ニ願度候、野史之事逐々相調ラヘ候処、此地ニテハ一向無之候、水府モ全断、熊本一条縷々御示諭之趣致承知候、如何様御尤ニ奉存候、併此表之御評義唯見込過ト申候ニモ無之候得共、過日彼方ヨリノ返書之趣ニテハ、先別段一応御往復御座候方可然奉存候、此節西城ヤラ、亜墨利加ヤラ、一橋公之御講究ヤラ、列侯之御研究ヤラニテ御暇無之候、小拙分外取込居（候脱カ）故、此ニ閣筆仕候、

十一月廿八日　　景鄂

戇堂兄

再伸、御国ハ雪モ少々（ケカ）候由、此表ハ異常暖気、此間ハ日々降雨、寒暖計四十七八度五十度位ニ御座候、以上、

（橋本景岳全集（日本史籍協会叢書）にて校訂）

五一五　水戸侯鷹司関白へ奉呈書

此度夷情切迫之義ニ付、存寄申上候次第

乍恐以書附言上仕候、昨年来亜墨利加之コモトールト申者、豆州下田湊へ来航之節、コンシュールト申者連参候ニ付、此方官吏ヨリ相断候得共、不聞入留居帰帆不仕候故、無拠下田柿崎玉泉寺ト申所へ、右之者差置候処、其節ヨリ度々官吏ト及応接、或ハ剣ヲ抜テ奉行ヲ赫シ、或ハ通詞ノ佩刀ヲ踏候抔、其外種々驕傲無礼ノ言ヲ吐、是非々々江戸へ参リ、　将軍ニ対面致シ度ト申張、如何様理解致候得共不相用、不許ニ於テハ直ニ兵端ヲモ可開体ヲ示シ、此方ヲ劫候故、官吏ハ恐怖致シ、此節ニ至テ弥其望ニマカセ、江戸へ引入登城可為致由、評議決着之処、右ハ誠ニ不容易之義故、大名中モ有志之族ハ異議有之由承リ申候、一体西洋諸夷之吾国ヲ伺ヒ候ハ、数十年前ヨリノ事ニテ、近頃ニ始リ候事ニハ無之候得共、亜墨利加之吾国ヲ望候ハ、近年阿蘭陀風説書ヨリ初テ相見ヘ、既ニ弘化年中ボストン（アメリカ三十一州ノ一）人浦賀へ来航、交易相願候抔ヲ始トシ、其後嘉永丑年ニ至リ、不意ニ江戸内海へ乗込、天下大ニ騒動シ、遂ニ其書翰ヲ栗濱（久里）ニテ請取候始末、国体ヲ汚シ候事、有志之士皆々致切歯候処、其翌年又候内海へ乗入、此度ハ遂ニ横濱ニ応接ト相成、吾国開闢以来未曾有之大恥辱ヲ請候次第ニ御座候、此両年之事ニテ夷狄吾国之衰ヘタル事ヲ推察シ、打続魯西亜・暎吉利等諸夷長崎へ入、大坂ニ入、下田へ入、箱館へ入、津之（々）浦（カ）々測量上陸等、乱妨狼籍之至ニ御座候、一昨年ノ件ノコモトール下田へ参候節、沿海之地測量致度義ヲ願出、未挨拶モ無之内ニ出帆、東北諸国之沿岸ヲ不残測量致シ、此度ニ至リ、竟ニ江戸ニ入候様ニ相成候事之始末ヲ考候ニ、最初ハ書翰ヲ渡候而已ニテ、次ニ両国和好ヲ取極、互市場ヲ相開、其次ニ測量ヲ願ヒ、今度江戸へ押入候事、皆彼カ徐（深カ）謀遠慮ニテ、此等之事ヲ不残一度ニ此方へ懸合候テハ承知不致、手切ニ相成、一国必至ニ相成候半ヲ察シ、段々ト浅キヨリ深キニ至リ、遂ニ其大ニ欲スル所ヲ存候心術明ニ御座候、都テ西洋夷之気質、事ヲ気長ク謀リ、火急ニ事ヲ破候事無之、敵人終ニハ怠リ我ヲ忘ル、様ニ仕掛、常々是ヲ以世界

中ノ諸所ヲ呑併シ来候事、吾国一国之事ニ無之候、先第一ニ和議ヲ結ヒ、交易ヲ始、其内自国ニ利潤ヲ得、遂釁端ヲ求、其国ヲ覆ス、其計策誠ニ悪ムベキノ至ニ御座候、然ハ今幕府之諸役人皆和議ヲ主トシ候次第ハ、一ツハ天下安逸ニ掲リ、苦労ヲイトヒ、自分之役目ヲ大切ニ致シ、無難ニ取計、永ク利禄ヲ保チ、事ヲ斗リ、一ツニハ近頃流行仕候蘭学者ト申者、大底皆無識之徒ニテ、彼カナス所目眩心酔、遂ニ彼ハ至テ好国、我ハ至テ愚智者之様ニ心得、弐百年来国ヲ鎖シ、外夷之通路絶シ候事抔、誠ニ固陋之至リニテ、公平之道ニ非ス、彼ヨリ和ヲ求ルハ、全公平之道ニテ、必シモ人国ヲ奪ハムトノ意ニテハ無之ト申説起リ、諸役人共是ニマトヒ、自身ト苦難ナク役目ヲ永ク保チ度心ト符合致シ、遂ニ戦ニ成ト申事ハ戯ニモ不言、唯和議而已致主張、今日之次第ニ至候事ニ御座候、併是ハ全庸俗之見ナル者ニテ、古今之形勢彼我之情態ヲ洞見シ候人物ヨリ見候得ハ、其利害判然タル事ニ御座候、昔ヨリケ様成事外夷之患成時ニ当リ、国内議論当時之様成事数多有之、其時之役人共皆々和議ヲ主トシ、国ヲアヤマリ候主意ト大体是ヲ以一時之危難ヲ救ヒ、時ヲ待ヨリ外ニ計策ハナク、戦ヲ説候者之論ハ、粗暴ニシテ事ヲ破ルト申、国ヲ大切ニ致シ候心得ニモ可有之候得共、畢竟庸人之見ニシテ、人情ハ安逸ヲ好ミ、苦労ヲイトヒ、万人之欲スル処ニテ、一旦ハ落付候得共、仮令国ノ恥ニテモ、国之讐ニテモ、遂ニ其侭ニ成行、国次第ニ衰微シ、滅亡ニ至ル事自然之勢ニ御座候、又諸役人恐ル、事ハ、彼ハ大国、我ハ小国、彼ハ戦ニナレ、我ハ太平久敷武ヲ廃シ、彼ハ財用ニ富ミ、我ハ国用窮乏之等之事ニ候得共、是等ハ憂ルニ足ラサル事ニテ、国々強弱ハ必シモ大国小国ニハカヽワラス、当時暎吉利ノ如キ吾国ニモ及ハサル小国ニ有之処、海上ニハ無敵ト申程之強勢ニ有之、印度之蒙臥兒(モゴル)抔(ムガールカ)ハ世界中之大国、帯甲百万ト申国ニ候得共、暎吉利之為ニ蚕食セラレ滅亡ニ及ヒ、満清ノ如キ大国モマタ彼カ為ニ敗衂ヲトリ、是等ヲ以見候得ハ、国之強弱ハ政事次第ニテ、大小ニハ拘ハラス、且亦古来風俗之強弱ニモヨリ可申ト奉存候、一体吾国古来之風気、勇猛果悍成事万国畏レ候事、外国之書ニモ見ヘ申候、当時武之廃トハ申候ヘ共、夫ハ畢竟以前太平ヲ致スカ為、ワサ々人心ヲ和ラケ弱ル事故、強勇之人気モ不得止事属シ候事ニテ、古来之風気全消失ト申ニ

ハ無之候、廟堂之議論サヘ一決致シ候ヘハ、皆々奮発シ、占来勇悍之気ニ立帰リ、身命ヲ抛チ、御国恩ヲ報シ奉ル事無疑義、前書ニモ申上候通、皇神之深キ御霊ニテ、吾国古来武ヲ尚ヒ、忠義ヲ専ラニ致シ候風俗、実ニ他国ニハ無之事ニテ御座候、当時人心怠リ居候事決シテ御憂ニ相成間敷奉存候、且又当時財用不足ト申事ハ、畢竟諸役人之輩、太平之酔醒ヌ故、太平之儀式ヲモ是迄通リ行ヒ、軍モ出来候様、用意イタサセ候旨申様成事ニテ、此上サヘ不足之処、又々新ニ武備ヲ張候様相成候テハ、別テ窮迫ニ相成候事必定ニ御座候、只今之勢ニテ、如何様生民之膏血ヲ絞リ候手段ヲ尽シ候テモ、只人心ヲ失ヒ候而已ニテ、富豪ニ成候事決シテ有之間敷存候、右等之処ヲ申訳トテ、当時夷狄ト和ヲ結ヒ候事情ヲ推考候ニ、畢竟戦ヲ好マス、利禄ヲ全クシ、無事ニ済候ヲ幸トシ候心ヨリ起リ候事無疑候、一人一家之為ニハ可宜候得共、天下国家ニハ大害ヲ残シ、必前古之覆轍通ニ相成可申、実ニ深憂之至ニ御座候、只今之役人共只事之生シ候ヲ恐レ候ノミニテ、大勢之機会ト申事ヲシラズ、只今其危キ故、彼ニ和ヲ結ヒ、其内武備ヲ立可申ト存候得共、天下之大勢ト申モノハ右様成モノニハ無之、既ニ前件ニモ申上候通、和議一致定候得ハ、彼ハ益其策ヲ施事ヲ得、吾億万之衆弥皆和ニ安ンシ落付候得ハ、最早以前激シ候勢ヒハ消失、辱ヲモ仇ヲモ不顧様ニ相成候事必然ニ御座候、機会之来レハ、間ニ髪ヲ不容ト申、豎臣秀吉カ濃州ニ在ナガラ、賤ケ嶽之戦ヲ聞、即時ニ馬ヲ出シ、柴田勝家ヲ敗ルガ如ク、暫時之際カ大功ヲ奏シ候事モ、其機会ヲ失ヒ候得ハ、反テ無事ト相成、出来候事モ不成事ニテ、英勇（雄）豪傑之士ハ必ケ様成所ヘ心付候得共、庸俗之目ニハ見ヘ不申候、（嘉永六年・安政元年）丑・寅両年之時ニ当リ、秀吉ノ如キモノ其位ニ居リ候ハヽ、必其機会ヲハヅサズ、一挙シテ大憂ヲ除キ候事必然ト奉存候、就テハ此度夷情之事ニ付、京師ヱ申上、又三家ヘモ触有之趣書付見請申候、乍憚某藩ハ素ヨリ夷狄之事ヲ憂罷在、且

朝廷尊奉仕候事ハ、兼々心懸居候故、此度之義ニ付テハ、甚心配仕候様子ニ有之、最早内々国中用意モ仕居候趣、他之大名中ニモ余程不服之者有之、諸役人共是ニモ甚差支進退成兼候様ニ承リ申候、誠ニ危急存亡之秋トハ申ナカラ、又

皇国復興之時合ニモ可有之奉存候、愚昧之賤臣ナカラ

右危急ヲ座視シ、機会ヲ失事ヲ無念之至ニ候、仰願クハ此機会ニ乗シ早速御英断被遊、右様之儀不相成様、厳重ニ關東ヘ被仰遣候様仕度、左候ハヽ必某藩之如キ大小名力ヲ得、心ヲ合、数十年来之大憂ヲ除候事、必是ヨリ始リ候半ト奉存候、扨当時京師御警衛向不行届之義御配慮被遊候趣、下ニテモ沙汰仕、誠ニ恐入候事ニハ候得共、万一非常之節ハ、某藩之如キハ、兼テ心懸モ御座候故、遠地タリ共、早速馳登リ、御警衛為仕候心得ニ御座候、近国大名之内ニモ、有志之士数多御座候様ニモ承リ候間、強テ当時御手薄ト申義、御憂慮被遊間敷奉存候、只々天下古今形勢ヲ御洞察被遊、今日弥和議定リ、暫時太平相継候ハヽ、必御国之大憂ヒト被思召、　御英断被遊候方可然奉存候、仮令万一御主意ニ不相叶候ハヽ、此度之事ヲアヤマリ候ハヽ、全幕府之(紂カ)之諸役人共之所為ニテ、朝廷ニハ決シテ其思召ニ無之ト申候得ハ、又々天下有志之士、大小名一同致憤発、恢復仕候期モ可有之、無左候テハ

皇国之辱ヲ万国ニサラシ、国体モ不立様ニ相成、其上天下後世ヨリハ、当時幕府諸役人ノ罪ハ誠ニ数フルニ暇アラス、　朝廷モマタ無人ト見ヘ、如此変ニアタリ遂ニ一言モ無之、傍観セラレ候ト申事、実ニ残念至極ニ奉存候、当今天下有志之士、大体右之大意ニ有之、号泣ヲ旻(天カ)文ニ申志無キニハ無之候得共、他ノ偏リ国々閉ラレ誰アツテ抱言スル者ナキ次第ニ御座候、某身不肖タリトモ、今日ニテハ天下有志之士之代リニモ相成候心得ニテ言上仕候、宜鋪　御英察可被下候様奉願上候、以上、

此上書ハ安政四巳年十月頃京都

関白殿下ヘ之上書ト相見ヘ候、月日名書等無之ト雖モ、大体ハ推察スヘシ、御道理至極ニシテ恐入候事也、

五一六　有馬新七建言（朱点ハ本書ノ侭）

〔この文書は上文脱落しているが、補って掲げる〕

〔我式至愚浅陋、誠ニ以奉恐入候得共、当時　本朝之形勢ヲ窃ニ審察仕候ニ、何所モ政綱不振、学風衰墜シ、泰平之気習ニ相染ミ、文武之末流ニ溺レ、格別振立候藩迚モ無之、且彼ノ夷賊等辺隙ヲ窺窬ノ時ニ当リ、天下ノ形勢モ致一変、誠ニ不容易御時節柄御座候故、士気振起リ、御本邦堅固ニ不罷成候テハ、乍恐皇朝之興廃ニモ可相係儀欤ト窃ニ痛心仕候、且学文ノ儀、名義ヲ正候儀第一義ニテ、文武一致、政令一体罷成候事要領主本ニ

テ、只文辞章句ノ末流ニ致馳騁候テハ、書籍ヲ読覚候迄ノ事ニテ、今日　御国家ニ於テ御用立候儀、有御座間敷奉存候、然処此節別段之

思召ヲ以、造士館初メ壱統ヱ此迄ノ旧弊ヲ御一新被為遊之御趣意、誠ニ以難有、士臣何レカ御盛意ヲ奉承遵守仕リ、感発興起可不致哉、就テハ、何率御趣意之趣、天下万世ニ行キ渡リ、御国家益興隆シ、

皇朝之御楯、諸藩之模範ト罷成候様有御座度念願奉仰望候、私式至愚浅陋ノ存慮申上候テモ、御用之候儀千万有御座間敷、如何計奉恐入候得共、区々ノ本心難黙止、恐ヲ不奉顧、存分之趣左ニ申上候、

一学文ノ儀、華夏夷狄ノ分ヲ致明弁候儀勿論ニテ、

本朝ヲ尊ビ外邦ヲ賤ミ候事、固ヨリ当然ノ儀ニテ御座候得バ、彼ノ西土ノ周孔ノ教モ

本朝ニ折衷シ、風土人情ノ宜ニ随ヒテ致取捨候様有御座度、依テ造士館ニ於テモ、本朝ノ御国典ヲ読ミ、御国体ヲ致弁明候儀ヲ第一ト致シ、西土ノ経籍賢伝ヲモ致講究候様被仰付度奉存候、此レ乍恐

應神天皇儒教ヲ取ラセ賜ヘル　御本意ニテ、孔子正名ノ旨趣ニモ致契合可申欤ト奉存候、依テ士臣学文ノ標的、此ノ儀ヲ第一ノ根本ト仕候様被仰付度奉仰望候、尚モ此ノ根本ノ第一義ヲ不取失候ハヽ、学文ノ筋ハ自然正敷罷成、今日所読ノ書、所行ノ事忠義孝敬ノ実ヨリ外ニハ出申間敷欤、其中傑出ノ人、豪ハ人々ノ質性修業ノ精粗ニモ可依候得共、無用ノ空言ニハ馳騁仕間敷奉存候、

一天兒屋根命之神社学校ニ御建立有御座度、尚武敬神候事本朝当然ノ義ニテ、兒屋根命

天孫ヲ奉保護之功業、固ヨリ神代ニ赫然トシテ、忠誠盛勲万世ニ光輝シ、実ニ士臣之標準ニテ、殊ニ

兒屋根命ハ近衛家之始祖ニテ、近衛家之儀ハ御家ニ於テモ、御由緒モ有之儀ニ御座候得バ、右之神社御建立御座候テ、学文之標的主本ヲ明ニ士臣ニ示サセラレ候〔以下、「乍恐奉仰服候」まで消去線あり〕様、有御座度奉存候、

一惣裁壱人御家老之中ヨリ其人ヲ被為撰、文武之憲令ヲ掌候様被仰付、学校ハ不及申、御軍政演武館之儀御委任被為在度、窃ニ奉存候、尤人材ヲ撰挙之処、此節島津下總江造士館之掛被仰付候旨風ニ伝承仕、御的然之御事ト乍恐奉仰服候、就テハ、御家老座書役奥掛之中、且ハ御用部屋書役等ヨリモ其人ヲ被為撰、助教訓導師等江兼役被仰付度奉存候、

一学監三四人其人ヲ被為撰、御小納戸、御目付等兼務被仰付。（学政之善悪）師員之精不精、風儀之善悪等致糾察、（この「風儀之善悪等」には消去線あり）。事ニ依テ（礼義ヲ正シ有功ヲ録シ候類考、撰ヲ知リ、精々万事吟味ヲ尽シ、懲勧ノ人江ハ勿論、）ハ御直ニ上聞ニ奉達候様有御座度奉存候、

一文武ハ固ヨリ一致ニテ、殊ニ本朝ハ尚武候事主本ニ御座候得ハ、何卒其主意ヲ不取失、尚武之風盛ニ相振ヒ、（又カ）文以古今治乱興廃之機ヲ審察シ、政体之要ニ達候様、人才御養育被為在度奉存候、然処近来文ト武トハ格別之者之様相成、武人ハ学者ヲ譏リ、学者ハ武人ヲ賤ミ候風習ト成行、何共歎ケ敷儀ト奉存候、文武不相岐儀専要之事ニテ、武士ト称候者、武道ヲ廃シ候テハ不相済儀勿論ニテ御座候得ハ、演武館之儀モ学校一致ニテ、師家之面々モ其人之（器）ニ依テ学校之掛被仰付、子弟教導有之候様有御座度、左様御座候ハヾ人々性質之高下浅深ニ依テ、各其才ヲ長シ、文ニ長候者モ武ヲ廃スルニ不至、武ニ長候者モ文ニ不疎様罷成、文武之士往々輩出シ、士臣何レモ大義之筋ニ通達シ、士気振起可仕ト奉存候、

一近来学文之弊習、只書籍ヲ読覚候迄之様罷成、一向ニ面々之偏見ヲ致固執、派流門戸ヲ立テ、当世之務ニ不達、忠慮・遠図之志無之者往々不鮮、此等全ク政事学文相岐候テ、其身実地ヲ踏ミ、事故ヲ不経歴処ヨリ虚偽文飾之弊風ニ流レ、実用ニ不適様為罷成儀ニテ可有御座、依テ学校江ハ諸向御用之調、且御政事之要務ニ係リ候儀ハ御吟味被仰付、尤助教・訓導師・督講・句読師等之儀モ其器ヲ被為撰、御近習通ニテ御小納戸・御目付・御軍賦役・御徒目付・横目等之御役場江兼役被仰付、他之御役場ヨリモ学校掛ニテ助教・訓導師・督講等兼務被仰付候様有御座度、左様御座候ハヾ自然ト平生心ヲ用候所モ相替リ、各其職分ヲ供奉仕リ、諸事致錬熟、往々学風モ政体一致ト罷成、実用・実才之方江立直リ可申欤ト奉存候、

一郷学被召建度奉存候、右ニ付　御城下究（窮）士モ不相鮮候故、何卒右郷学江給田被成下、兼テ究士御救助之為ニ被仰付度奉存候、全体　御国之儀ハ他藩トハ相違ヒ、諸士モ余多罷在候故、迚モ御高割并（並）ニ被仰付、常禄被成下候儀ハ相叶申間敷欤ト奉存候間、先年（嘉永元戊申）給地高御改正之節、御取揚相成居候高五六千石余モ可有御座哉ト風ニ伝承仕候、右ヲ本ニ立テ、且一所持・寄合・其外諸士之中ニモ、給地高過分所持之者モ往々不相鮮候ニ付、右ヲ定格ヲ定（トカ）メ、兼併ヲ抑候テ、一所

持ハ一所之外ニ給地高所持不相成、寄合ハ何千石ト御規格ヲ定メ、諸士モ同断ニテ段々御減少相成候ハヾ、太概弐万弐三千石余ニモ相及可申、右ヲ　御城下伍中毎ニ被相下、義倉之意ヲ寓シ、郷学田ニ被定置度奉存候、左様御座候ハヾ貧富平均之主義（意カ）ニモ相叶ヒ、諸士困究ニ迫候程之儀ハ有御座間敷奉存候、尤右郷田ヲ掌リ候者ハ、伍中之中清潔ナル者両三人被為撰、掛被仰付、究士救助之術ヲ尽候様有御座度、左候テ郷校（学カ）之儀、幼年ヨリ素読ハ勿論ニテ、武ヲ専要ト致シ、廉恥ヲ崇ヒ、礼義ヲ厚クシ候様、年長シ候者ヨリ致教導、素読モ既ニ出来、義理之講習討論モ相調候様罷成候上ニテ、太概十八九廿比ヨリ造士館江罷出、真文・真武之学益相励ミ候様有御座度奉存候、

一右通郷学被相行候ハヽ、人才撰挙之儀、伍中ヨリ吟味之上造士館江申出、其上造士館ニテ猶亦致吟味、掛之御家老江申出、御家老ヨリ　上聞ニ奉達、敷奏以言明試以功車服以庸之主意ニ基キ、徳義・才略各其人之器能ニ依テ御撰挙有之候様有御座度奉存候、

一上下之分限分明ニ相立候様、衣服之制度ヲ被為定、染色又ハ紋所等之大小ニテ、其品格ヲ被為立度奉存候、人々驕奢ニ成行候儀、畢竟上ヲ僭冒シ、己レガ分ヲ不顧所ヨリ、華麗成ル方ニ相赴候儀、往々不鮮欤ト奉存候、夫々上下貴賤之等ニ依テ、衣服之制度相定マリ候ハヾ、自然ト質素之方ニ相赴キ、分限ヲ僭シ、華侈ヲ事ト致候者無之様罷成可申欤ト奉存候、此等之儀小事之様御座候得共、上下之心志ヲ定メ、名分ヲ正候一端ト可（モ脱カ）罷成儀欤ト奉存候、

右数ケ条之儀、私所存之趣ニテ御座候、且人才御撰挙之儀第一ニテ、貧富不均、教養無法ハ古今之通患ニテ、当時諸士困究罷居候者モ往々不相鮮候得ハ、何卒御救助之法相立、教養之道行届候様有御座度念願奉存、此段謹テ奉申上候、以上、

巳十一月廿九日　　有馬新七

右ハ江戸江罷居候節、上書仕候覚也（有馬遊学中ノ建言ナリ）

（有馬新七先生伝記及遺稿にて補訂）

五一七　寺島宗則自記鈔

安政四年丁巳

春齊彬公ノ侍医ニ転シ、六人賦、即壱ヶ月金三両・米六石ヲ賜フ、公将ニ帰国セントス、宗則ニ扈従ヲ命セ

ンカ為ニ、幕府ノ閣老阿部伊勢守ニ一時教授ノ休暇ヲ乞ハレ、医官ヲ以テ公ニ従ヒ、鹿城ニ至ル、公頻リニ物産ヲ起サント欲シ、洋書中有益ノ件ヲ訳出、或ハ試験セシム、製鉄ノ事ハ其最モナルモノニシテ、其他ハ木炭・食塩・洋酒等ナリ、又黒田長溥侯ヨリ写真器ヲ得テ、毎日人物真影ヲ写サシム（是ヨリ先、和蘭人ヨリ一揃ヲ得ラレタルモ、薬液等不良ナルニ依リ、好結果ヲ見ルコト能ハス）

公指宿温泉ニ至ル、宗則之レニ従フ、此時和蘭政府ヨリ幕府ニ贈ル所ノ汽船咸臨丸（観光ノ誤）、試航ノ為メ鹿湾ニ入ル、蘭人航海教師「カツテンデイキ」其他数人、及監察木村攝津守、生徒勝麟太郎・伊澤謹吾・榎本釜次郎・肥田濱五郎等乗込ミ、指宿海岸ニ碇泊セリ、宗則ハ公ニ附属シテ乗船ス、公始テ気船ヲ見テ大ニ其精巧ニ驚ケリ、宗則ハ乗船ノ侭、共ニ鹿城ニ至リ、其衆人ヲ客舎ニ誘キ饗応セリ、蘭人上陸シテ客舎ニ至ルマテノ途中、国人始テ洋人ヲ見、顔状猿ノ如シト詈リ、或ハ石ヲ抛チ、体後ヲ衝キ、暴行ヲ為セリ、宗則之ヲ目撃シ、遠客ニ対シテ大ニ慚チ、更ニ侵スコトアランコトヲ恐レ、卒等（足軽）ヲ以テ其客舎外ヲ警察セシメタリ、翌日発船、宗則同行シ指宿ニ至リ、公ニ暴状ヲ報ス、公大ニ怒リ、帰鹿後再航ヲ約シ、更ニ入港上陸スル時、公親ラ先導シテ、衆人ヲ磯ナル別園ニ引キ、同盤対食アリ、又砲台ニ導キ、其実用有無其他各種ノ質アリ、衆人数日淹留、皆公ノ懇親注意ヲ感シ、国人モ亦暴行ヲナスモノナシ、是ヨリ先、公汽船ノ必用ナルヲ以テ、国人ヲシテ之ヲ造ラシメントシ、大ナル模形ノ幾分成リ、汽鑵トナスヘキ銅板多数ヲ江戸ヨリ購入セリト雖トモ、咸臨丸（仝上）ヲ視テ、日本人ノ造リ得ヘカラサルヲ覚知シ、直ニ一汽船ヲ送ルヘシト蘭人ニ約シタレトモ、公薨去後破約ニ及ヘリ（此製図ニ則リ再ヒ和蘭人ニ托シ、製造セシメタルハ則チ豐瑞丸是ナリ）

五一八　参考　非蔵人日記抄

五月十六日

一議奏久我殿ヨリ書付図等被渡、写取可返却被申渡書付如左、

（挙重・禁裏附）
都筑駿河守

非常之節、火元為見届　准后御殿ヨリ仕丁共之内差出候節、御所同様目印半被為着差出候之旨、右

御殿取次共申立候ニ付、前々仕来心得方モ可有之候得共、軽者之義ニ付、御威光ヲ以ガサツケ間敷義ハ勿論、摂家宮方・堂上方并所司代・町奉行・火事場役人等、往反道筋不礼無之様、穏便ニ可相勤被申渡、右半被為被候儀ハ承届候段、取次共ヨリ申渡置候ニ付、半被雛形別紙壱枚掛御目候、此段申上置候事、

閏五月

右半被雛形　色目青色筋白二段

右之段一同心得之事被命候、

（非蔵人日記抄（宮内庁書陵部所蔵）にて校訂）

五一九　三條内府公ヘノ建言（無名氏）

目今外夷御処置ノ御義ハ、実ニ古今未曾有ノ重事

国家ノ御大議ニシテ、中々草莽微賤ノ臣等、歯牙ニ可懸トコロニハ御座ナク候ヘトモ、御趣向ニ依候テハ皇朝ノ御巨患幕府ノ御恥辱トモ相成ヘク奉存候ニ付、踰分出位奉絶言語候ヘトモ、責メテ露計ニテモ奉報国家ノ深恩厚沢度ニ付、万死ノ罪ヲ犯、斎戒沐浴シテ鄙意ヲ拝陳仕候、

一皇国尊キ万国無比ハ

主上天日嗣ニ被為在、臣子モ亦諸神ノ胤ヲ辱スルハ勿論、風俗淳美、士大夫忠義ニ厚ク、廉恥ヲ尚、農商質実尊、

上守法、下ニ不軌ヲ謀法憲ニ触ル、ノ民鮮ク、

上ニ捨軀守節ノ人多ヨリシテ、政令・法度寛大厳粛ニシテ、各其職ヲ務、其業ニ安シ、且土地ノ膏腴万邦ニ卓越シテ、物産饒多、金石草木ヨリ魚貝禽獣ニイタルマテ給足セサルモノナクシテ、今日迄衣食飽暖ニ暮来候ハ、実ニ

皇国ニ生レズンハ不叶義ニテ、此等尽ク

天恩ニ関係仕候事ト難有奉存候、

一扨此迄外寇無之義ハ、固

天神地祇冥々ノ中ニ御加護被為在候義ハ申迄モナク、

夫レ弘安ノ度北條時宗元兵二十万（通例十万ト申唱ヘ候ヘ共実ハ兵数二十万ノヨシ、十万ト申ハ元人諱大敗ノ言ニ御座有ルヘク候）ヲ鏖シ、文祿ノ度豊臣秀吉朝鮮八道ヲ蹂躪仕候義、異国マテモ伝聞仕、格別ノ武威賛称仕居候様子モ相聞、此二挙ハ頗ル

皇国尚武ノ

御稜威ヲ耀スニ足事ニ御座候ヘトモ、今日迄外患ナキハ、今此ニ限候様ニ心得候ハ、固陋ノ偏見ト奉存候、

元ヨリ

皇国ノ形勢ハ四方大海ヲ以テ際トシ、所謂天嶮ノ国ニテ、彼秦始・漢武ノ勇鷙驥武ノモノアリ候テモ、曾テ毫髪モ手指不相成位ノ事ニ御座候処、近来西洋ノ諸蛮風習・芸術日新ヲ勧候ヨリ、奇器ヲ制、巧術ヲ創、且日々干戈ヲ動、隣国ノ攻撃仕候ヘトモ（ママ）ノ頃一統同盟仕、欧羅巴丈ノ乱ハ過半鎮靖仕候、彼ノ国風

皇国并ニ漢土ナトヽハ大ニ相違仕、元来我一国ニテ事給物足ト申訳ニハ不参、鉱山多キ国ハ専ラ掘採ヲ事トシ、之レヲ各器什ニ製作シテ諸方ヘ鬻（売）キ、材木ニ富ハ木器、毛獣ニ富ハ職工、平原曠野ハ植芸ヲ務、沿海島嶼ハ漁猟ヲ業トシテ、皆各相互ニ交換貿易シテ、生涯ヲ送リ候様ニ相見ヘ申候、依之自国ノ物ヲ自国ニテ売候ヘハ利益モ不夥、且右様ノ国柄ユヘ自分有余・不足ノ者モ御座候ニ付キ、遂ニ他邦、他州ヘ齎鬻候事トハ相成申候処、何レノ国ニテモ無故シテ、不図外国人来リ候テ商売ヲ乞候トモ、速ニ許可イタサスニ依テ、先堅艦ニ乗シ、国信ヲ持シ、所欲ノ国々ヘ罷越、各国人民ノ為有無相通度事申込候事、恰モ先年墨使浦賀ニ渡来仕候如クニシテ、種々利害ヲ論シ、慇懃ヲ示シ、天地公共ノワケヲ諭シ、之レヲ説倒仕、其国未タ蒙昧ニ候ヘハ彼奇器・巧術ヲ教テ其民ヲ誘、物産ヲ起サシメ、其国ノ物ヲ我ニ引受、他国ヘ売付候事、西洋一体ノ通習ニテ、唯交易ヲ乞、和親ヲ結候ニ付テ、強チ奸計悪謀有之ト申事モ無御座候、今日道路ニテ承及候ヘハ、長崎・箱館両所ノ外開港不相成、下田ノ義ハ彼ヨリ不便ヲ申立候事ニ候ヘハ幸ヒノ義ユヘ、閉港可致旨

廷議御決ニ相成候趣、元来私共窃ニ伝承罷在候ニハ、御役人様方ニハ（ママ）ニ御存ニ御座候ヘトモ、

叡慮ハ初ヨリ通商御好不被遊事、御堅確ニ被為　在候ヨシ、然ル処果シテ十分ノ

御英断実以

皇統ノ御基礎万古不動ノ御義ニ可有御座、草莽同様ノ賤臣ニ於テモ、感泣仕難有拝承仕、右様

御英断御座候ニ付ヒテハ、不容易御事カラ等モ出来仕リ、

皇国御安危ノ界トモ可相成奉存候一件、兼テ心配仕居候ニ付キ、出位踰分ノ罪奉恐入候ヘトモ、万死ヲ冒奉言上候、右前文之通リ、開港御断ニテハ、西洋諸夷モ自然ト

皇感ニ屈シ、以後事故万端御指揮ニ可奉従ハ勿論ニ御

座候ヘトモ、夷狄ノ国固利ヲ獲ニ汲々仕候風習ニテ、近来ハ万国ヲ同盟ニイタシ、盛ニ通商仕度見込ノ趣ニ相見候旨、夫英夷抔ハ悍暴軽懍ノ気甚者ニ有之、殊更墨夷ト表裡ヲ為居候者ニ御座候ヘハ、彼等其所望ヲ失候ヨリ、万一驕傲不遜ノ挙動抔仕、巨艦蒙童夥敷指上セ、關東近海ハ不申及、大坂并西北海辺迄ヘモ停舶罷在、処々ニテ発砲或ハ備ナキ処ヲ窺、上陸抔相催事、急遽ニ出候ハハ、数百年太平ニテ暖飽ニ安シ、専ラ遊戯ノミニ耽居候万民、一時騒擾散乱仕、農商各業ヲ安兼候様ニモ成行可申、其中ニハ窮民・貧丁衣食ヲ獲、飢渇ヲ免レント欲シ候ヨリ、或ハ偷窃豪奪等仕、寡婦少丁ハ不及申、尋常ノ良民為之、郷上ニ安処仕兼可申、諸大名ニ於テハ自国沿海ノ警衛ハ勿論、且

皇居ノ守護・幕府ヘノ援軍等ニテ、在国ノ兵員等減少仕、一国ノ締リカタ自然今日之如ク行届キ兼ネ候儀モ出来可仕、別シテ無頼奸悪ノ亡命者等党ヲ結、群ヲ成、山野ニ横行仕候様ノ事御座候ハヽ、強勢外寇ハ為差義無御座候共、忽

皇国一円ノ動揺紛擾ト相成可申欤ニ奉存候、其等ノ間ニ乗シ夷狄附入候ハヽ、自然

皇国ノ御恩ヲ忘却仕、応求仕候様ノ不届者出来可仕モ難計、左候ヘハ以テノ外ノ御大事ニ御座候間、何卒今日ヨリ予メ其辺ノ御手配被為在候様奉希上度候、固是等ノ義ハ必ス絶無之事柄ニ可有之候ヘトモ、事変ハ兎角倉卒不測ノ際ニ発シ候者ニ御座候ヘハ、天下ノ政務ヲ被議候御方様ニ被為在候テハ、兼テ此辺迄モ御遠謀可有御座御義ト奉愚考候、偖又右ハ至極ノ過慮ニ御座候テ、我

皇国ノ御義ハ治教清明整粛、庶民親其上死其長ノ道ヲ忘レス、士大夫節義ヲ励、廉恥ヲ重シ候義ニ御座候ヘハ、必定上下一致力戦仕、外夷撃退ノ功可奏事ト奉存候ヘトモ、近来西洋諸夷戦争ニ慣レ、兵卒精練ヲ勤メ、規律厳整ニ相成、殊ニ利器ヲ製シ、英墨ナト五大州ニ於テ頗ル強兵ノ名モ有之者共ニ御座候ヘハ、唯一概蔑視仕候テハ、却テ莫大ノ御恥辱ヲ惹出シ候義モ可有御座、固ヨリ徒ニ我所長ヲ頼ミ、彼ノ伎倆不慮ハ兵道ニ疎ナル義ニ御座候ヘハ、此等ノ義ハ兼テ御熟慮被遊、沿海警衛等ノ策分明御評決被為在、且今ノ内ニ諸大名ヘ逐一厳重ニ御申渡御座候様ノ義奉願上度、無左シテハ実以安心不仕次第ニ御座候、

一是非右等ノ処迄御見込モ被為付
御降命御座候トモ、兎角太平ノ習ニテ、優柔平弱ニ相流レ、緩急ノ御用ニ相叶申間敷哉ト心痛仕候、其訳ハ近年幕府ヨリ、追々兵備筋被仰出モ御座候ヘ共、諸大名ノ内未タ十分行届候国々ハ沢山ニモ承及不申候、今度ハ実ニ不歳ノ一時ニ御座候ヘハ、沿海ノ礮台并ニ兵備ヲ始、糧食・器械・陣営等ニ至ル迄、夫々速ニ相調、仮令一旦緩急御座候トモ、其節不指支様心掛可申旨、列侯ヘ緊シク被仰出無御座候テ、当今ノ侭ニテ、夷狄ヲ防禦仕候ハヽ、恰モ徒手空拳（拳）ニテ数頭ノ狂犬ヲ撃（ママ）仕候同様ニテ、恐クハ可惜士命ヲ夷狄ノ為取候様ニ可相成哉ト、深ク慨嘆罷在候、
一右兵備ノ事断然
御英断ニテ被仰出候ハヽ、忽天下怠惰ノ士気迄モ一振起仕、随分戦争ノ御用モ相立可申候ヘトモ、此等ノ事其号ヲ発シ、令ヲ下ノ将、勇邁英果ニアラサレハ、又乍廃格仕再三ニ及ヒ候テハ、上ノ被遊候処ニ、下不応様ニ相運、乍恐
御威光ニモ拘リ候様可相成哉ニ過慮仕居申候、殊ニ戦闘ハ銘々無二ノ身命ヲモ棄擲仕、親慕ノ父母、愛昵ノ妻子サヘモ不顧位ノ義ニ御座候ヘハ、在上ノ将仁勇ヲ不具シテ、敵ヲ滅スベカラサルハ勿論、トテモ味方ノ駕馭モ六ツケ敷可有之奉存候、此辺兼テ主人ニモ深心配仕居候ユヘ、近来痛ク尽力仕候向キ御座候ヘ共、天未タ其誠（ママ）察シ給ハス、殊ニ世上ノ迷惑、動揺ヲ辛トシテ、心ニモナキ詭言・諂辞ヲ以テ、縉紳ノ御方様ヲ奉瞞候義、実ニ言語同断ノ次第、上奉対
皇朝、次ハ徳川家ヘ被対、実ニ不忠不義ノ事共ト、微臣ニ於テモ憤激罷在候、主人義固庸劣怯懦中々不足論者ニハ御座候ヘ共、報国ノ赤心ハ誓神明、確定仕居、従来深
皇国ノ御為奉存候、於關東天下ノ大計長策肝胆ヲ吐、陳述周旋等罷在候、依此却テ奉
皇朝対候テハ、今日迄一辞片語ノ諂諛モ不奉献、只管愚（ママ）ニ向幕府
皇朝ノ御為ニモ可相成義竭尽仕置候間、此等ノ義去丑年以来ノ建言ヲ始、言上ノ事共、幕府ヘ御聞糺被下候テ、過半御暁解可被遊奉存上候、将又近来持論一転仕和義主張仕候モ深思御座候義ニテ、中々当今ノ国力形勢戦闘ニ因テ固守六ツケシク、且ツ前文ノ姿ニテ、戦

闘等断然出来候義ニ候哉、主人愚昧ニテ決断仕兼居候、
此等ノケ条尚又厚御勘考可被成ト候、畢竟戦闘申立候
トテ忠孝ノ誠ニ不発時ハ、後世ヨリ申候ヘハ、忠臣ト
モ不奉存、一旦蟄屈ノ計ニテ和議ヲ唱候トテ、行々
皇国ヲ不汚見込候ハヽ、是姦邪ニモ候マシク、且古ヨ
リ主君ヘ対シ、強断果為ノ策ヲ教置事起テ、倉皇狼狽
仕、却テ割地請和ノ術ヲ説出シ、或ハ危急ノ節ニ臨ン
テ、逃去候偽忠臣ノ例モ御座候間、此等尚又御懇慮可
被成下候様奉希上候、

一列藩ヨリ逐々手筋ヲ求、
皇朝尊崇ノ事、或ハ幕府ノ隠事ナト内訴被仕候方モ有
之候趣、密々伝承仕、此其志為
皇朝候哉如何、畢竟三百年太平ニテ、列藩無難ニテ暮
居候ハ、
御代々様御聖明ノ所致ニハ御座候ヘ共、東照宮ノ力モ
亦不少様ニ奉存候、然処近来幕府政体陵遅仕候向モ御
座候ヘトモ、未タ暴逆苛烈ノ悪政モ無之所要諸有司ノ
不得其人ニ帰候義ニテ、大樹公ニハ其過咎ナキ義乍知
右様ノ義申上候ハ全南北朝ノ古昔、反覆ノ国守モ同断
ノ所業、実ニ可悪ノ至ト奉存候、
皇朝ニテ、此等ノ軽薄ノ人ヲ御頼ミ被遊候テハ、後日
ノ御患害ニモ可相成奉存上候、乍去列藩ノ義ハ兼テ御
熟知モ無御座御義ニ被為在候ヘハ、其是非忠邪一々御
分明ニモ難被遊筋モ可有御座哉、万一左様ノ御事モ被
為在候ハヽ、是迄衆論興言ニテ忠ト申居候者、正ト申
居候者ヲ忠正ト御定被遊、今度俄ニ忠正ニ見掛候者ハ
今一応篤ト御糺シ被遊、御的証御座候上、御信用被成
下度候（以下欠失）

斯書ハ近衛家ヨリ、原田才輔ヲシテ、御手許ヘ寄送セラレタル者ニシテ、江夏十郎ヘ示サレタル者ナリシト云フ、

五二〇　学習所掲示

京都習學所聯　　履聖人之至道　崇
皇国之懿風　　不読聖経何以脩身
不通国典何以養正明弁之務行之
右文作三條大納言實萬卿作、
関白大政大臣政通公記スト云々、

此書ハ京都御留守居添役土師庄十郎所蔵書類抄出、

五二一　箱館通寶鋳造

閏五月布告

外国貿易開市ニ就テ、金銀貨濫出ヲ防ムカ為メ、鉄製銭ヲ新鋳シ、名ツクルニ、函館通寶ト唱フヘキ旨、布告セラレタリ、尤モ全国一般通用スヘシ云々、

五二二　所司代脇坂中務大輔出立諸家其外見立云々達書

巳十月十一日永井肥前守様・板倉内膳正様（肥前、福島藩主）へ被成御出仕候処、脇坂中務大輔様（安宅、老中、龍野藩主）被成御渡候由ニテ、田村（顕影、大目付）伊豫守様被成御達候左之御覚書写壱通、内膳正様ヨリ御用廻状ヲ以来、

脇坂中務大輔殿御渡

大目付

京都ヘ出立之節、見立ニ被相越候儀并諸向ヨリ附使者等之儀堅及断候、押テ被差越候得ハ、返答申達差戻可申候、尤昼休ヘ使者之儀猶更及断候事、

五二三　米国使節登営布告

五二二の

巳十月十八日為御詰日、秋元但馬守様（志朝、館林藩主）・大久保佐渡守様（忠美、島山藩主）被成御出仕候処、堀田備中守様（止陸、老中、佐倉藩主）御渡候由ニテ、遠山隼人正様（則凱、人目付）被成御達候御書付写弐通、御用廻状ヲ以テ来ル、

堀田備中守様御渡

御詰衆

大目付ヘ

来ル廿一日、亜墨利加使節登城

御目見被　仰付候ニ付、先達テ相達候面々、五半時登城候様可被相達候、

十月十七日

五二二の　大目付ヘ

来ル廿一日、亜墨利加使節登城

御目見被　仰付候節、

出御以前、使節

御目見之席致案内、為見習礼致可被申候、尤下田奉行（為脱カ）

并通詞モ附添候事、

一使節ヘ御座敷為見候前ニ、出仕之面々大広間ヘ相廻、

詰候席々ニ可罷在候事、

右之通可被得其意候、

十月

五二四　外国形船通航浦触停止国旗云々布令

巳十二月廿五日為御詰日、永井肥前守様・土井大隅守様被成御出仕候処、堀田備中守様御渡候由ニテ、土岐丹波守様被成御達候御書付写壱通、以御用廻状来ル、

（触出日）（利亨、刈谷藩）（十二月二十二日）（頼旨、大目付）

堀田備中守殿御渡

御詰衆

大目付へ

公儀御船ヲ始、諸家手船等、異国形之分通航之筋々、是迄御勘定奉行ヨリ浦触差出候処、向後ハ浦触不差出候間、兼テ被仰出候日本惣船印白帆日ノ丸幟建有之船ハ、御国船ト相心得、湊掛リ等之節、定例廻船之通可取計候、

（地カ）

右之趣、御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ、不洩様可被相触候、尤於諸家新規製造之船乗筋相伺候儀ハ、可為是迄之通候、

右之通可相触候、

十二月

五二五　御黒書院出礼ノ面々其外不時登営ヲ命ス

巳十二月廿八日只今酉中刻、大御目付遠山隼人正様ヨリ、阿部因幡守様御名之以御切紙、堀田備中守様被成御渡候御書付写壱通被成御達候間、御廻シ被成候、右ニ付、明日例刻御登城、尤御人数之儀ハ平日之通ニテ可然旨被仰越候、此段御通達被成候旨因幡守様ヨリ御用廻状ニテ申来ル、

大目付

御目付へ

明廿九日四時、加賀中納言始御黒書院へ出礼之面々、并溜詰・同格・大広間席之面々、不時登城被仰出候間、得其意、向々差支無之様可被達候事、

十二月廿八日

五二六　参考　橋本左内書翰

○この文書は、本文第五一四号文書の安政四年十一月二十八日橋本左内書翰（村田氏寿宛）と重複により略す。

五二七　参考　七卿西竄始末初篇三條實美公記抄

馬場文英編次、野口勝一・富岡政信校訂、廿四年十二月野史臺出版

安政四年丁巳公二十一歳

二月八日、忠成公兼右近衛大将ニ任ス（権大納言内教坊別当如故伝奏職中）、

右馬寮御監等宣下、

同九日、忠成公拝賀、未刻参内シ、行列ニ扈従ス、正親町三條中納言實愛卿・三條西宰相中将季知卿公モ扈従ニ列ス、各々肩輿ニ乗セリ、

同十三日、薩州大守松平薩摩守従四位上島津齊彬京ニ入リ、近衛家ニ詣ル、忠成公同家ニ在リ、齊彬ト相見ル、

島津齊彬天性聡敏活達ニシテ尊王ノ志深ク、武備充実スルモノ海内双ビナク、且ツ国政ヲ斉ヘ、士民ヲ安ンス、癸丑・甲寅以降屢々幕府ニ建言ス、幕府容レズ、遂ニ言語文辞ノ能ク救フ所ニアラザルヲ知リ、将ニ大兵ヲ率ヒテ京師ニ入リ、王室ヲ擁護シ、以テ幕府ヲ匡正セントス、是春交代ノ期満チ、将ニ発スルニ臨ミ、二十日間湯治ト称シ、参府ノ期ヲ緩フセンコトヲ請ヒ、二月二十九日帰国ノ途ニ就キ、三月十三日伏見ノ藩邸ニ至ル、京ニ入リ、近衛家ニ参シ、左府公（近衛忠熙）ニ謁ス、在京有志後之ヲ聞テ大ニ勢力ヲ得タリ、或ハ曰フ、薩侯発途後江戸三田ノ藩邸焼失スルヲ以テ、参府ノ期ヲ緩フセンコトヲ請フト（事実誤レリ）

同十五日、忠成公勅使トナリ關東ニ下ル、

三月十四日、公御楽始メニ方リ、楽人タルノ命ヲ蒙ル、（七卿西竄始末（日本史籍協会叢書）により校訂）

五二八　将軍閣老ノ精勤ヲ賞シ物ヲ賜フ（阿部正桓家記抄カ）

（安政三年）十二月廿七日、将軍家閣老ヲ引見シ、用多之処精勤、其上箱館蝦夷地開拓ノ義厚申合、始テ納米モ有之、満足トノ旨褒詞アリテ、手ツカラ各ヘ賞品アリ、而シテ正弘ヘハ別段勤労トテ手白白鞘太刀一腰（備前国義景）ヲ給フ、

五二九　参考　阿部家記

（五一九の一）二月廿六日、左ノ通大坂町奉行戸田伊豆守（氏栄）ヘ、正弘ヨリ達ス、時ニ伊豆守ハ任所ヘ発程前、同僚久須美佐渡守（祐悳）大坂在勤ナリ、

大坂御警衛之為メ、木津・安治川両川口ヘ御台場四ケ所御取建、大砲御据付相成、且又御備船モ数艘製造致シ、大砲其外仕付候筈ヲ以、彼地町奉行所ニテ

万端引請御出来相成候積ニ候、御入用積方等精々吟味致シ可申越旨、委細先達テ申遣置候事ニ候得共、全ク新規之儀、組之者共モ不案内之事共ニ可有之、就テハ其方在府中御勘定奉行始ヘ篤ト打合、仕様其外共巨細承合談判ニ及ヒ、折々ハ湯島鉄砲製作場ヘモ罷越、大砲鋳込之手続等見置、着阪之上佐渡守ト能々申談、御不丈夫無之様精々厚被心附、組之者共ヘモ申付候方可然候事、

五二九の二
三月朔日、正弘家臣三人前年蝦夷地ヲ一見セシムル者、東蝦夷大概ヲ巡視シ、客冬帰府、今春西北蝦夷ノ行ヲ申付、今日出立セシム、

五二九の三
五月十一日、左ノ書付堀田備中守ヨリ下田奉行中村出羽守（時）ヘ渡ス、此時ノ曲折、今正桓ノ家聞知伝来スル者ナシ、独リ此書付存スルノミ、

中村出羽守

亜米利加官吏申立候趣ニ付テハ、難書取次第モ有之申含候間、差急罷越、井上信濃守ヘモ打合、諸事誠実ヲ以テ、幾応モ談判可致モノ也、

安政四年巳五月

トウンセント、ハルリス江

我安政四年三月七日被贈候書翰、下田奉行ヨリ相達令落手候、返書可差遣処、書ハ言ヲ尽サヽル故ニ、此度下田奉行中村出羽守ヘ委細申含差遣候間、誠実ニ談判有之度事ニ候、

五月

（大日本古文書（幕末外国関係文書）にて校訂）

五二九の四
閏五月四日、左ノ書付大小目付ヘ、正弘并遠藤但馬守（胤統、若年寄、三上藩主）ヨリ渡ス、

此度箱館表ニ於テ、鉄銭鋳立被仰付、文字ハ箱館通寶ト相記シ、箱館・蝦夷・松前限リ、此節ヨリ通用之筈ニ候、尤右三ヶ所之外、通用難相成ハ勿論之事ニ付、心得違之モノ無之様可致候、右之趣御料ハ御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ可被相触候、

閏五月

右之通可被相触候事、

五二九の五
同月八日、左ノ書付大小目付ヘ正弘ヨリ渡ス、

海軍御取建ニ付テハ、今般築地講武所御構内ニ於テ、御軍艦教授所御開、阿蘭陀ヨリ献上之蒸気船ニテ操練相始候間、御旗本・御家人并悴・厄介等ニ至迄、有志之輩罷出、真実ニ修行可被致候、委細之儀ハ御目付永井玄蕃頭（岩之丞、海防掛）可被承合候、且又万石以上以下陪臣之儀モ、主人ニ格別見込之者ハ、稽古御差許可被成候間、是又永井玄蕃頭ヘ申立候様可被致候、

右之趣向々ヘ可被相触候、

五二九の六

六月廿七日、正弘近来多病、五月上旬以来疝積胸痛ヲ以テ屢登営ヲ欠ク、閏五月九日以来遂ニ出勤スル能ハス、今日卒去ス、七月廿三日将軍家水戸中納言ニ対顔アリテ、懇詞之上手自佩刀ヲ給ハリ、内願之通海岸防禦并軍制改正等ノ用向ヲ免セラル、

八月十三日正弘養子正教儀、養子遺領ヲ賜ヒ、帝鑑間席ヲ命セラレ、十二月十六日朝爵ヲ賜ハリ、従五位下ニ叙セラレ、伊豫守ト称ス、

五三〇　薪炭高価云々諭達

大目付ヘ

近年炭薪格別高直品少ニテ、世上難儀之趣ニ有之、右ハ山之手近之分追々伐尽、山出手重故之儀ニモ可有之候得共、近来生糸蚕之類専ラ相仕立、炭焼伐出稼之者相減、其上百姓持山等過当之山代ヲ貪候哉ニ相聞、以之外之事ニ候、此度炭薪潤沢ノ為、關東筋・伊豆・駿河・三河・遠江・甲斐国村々百姓持山、当巳年ヨリ三ケ年之間御買上、御林秣場立木共炭焼薪扱之上、江戸表ヘ相廻候積、尤山出之人足賃并運送賃等、糺之上相当ニ被下候之間、其旨可相心得、若心得違ノモノ於有之ハ、無用捨厳重可申付候、右之趣關東筋并伊豆・駿河・三河・遠江・甲斐国、御料・私領・寺社領共不洩様可触知者也、

十二月

五三一　金貨両替云々布達

此度世上為融通

御金札ニテ高金百万両江戸町中ヘ御貸渡、五ケ年目書替永々御貸附、利分ハ拾両ニ付壱匁之積ニ付、何渡世ニヨラス拝借可願出、然ル上ハ親族和合イタシ、都合繁昌之心掛ケ専要候、右ハ去々卯年地震引ツヾキ、大

風ニテ可為難渋候ニ付、ソノ段不洩様可相触モノ也、

巳四月

五三二　参考　江田平藏日記抄

安政三年辰九月十九日、豐後殿ヨリ肝付左門殿御取次ヲ以テ、御旗本下曾根金三郎殿方調練ニ付、御城下并諸郷守衛人数被差出候付、小頭被仰付候旨致承知候、尤伴鐵太郎殿・伊集院喜之助殿・種子田市兵衛殿・榎本九八郎殿・白坂郷左衛門殿・深柄仁左衛門殿・相良小矢太殿、都合八人一列ニ被仰付、二日毎ニ出張候事、毎月四九之日、於二之丸奥向砲術調練被召建候付、小頭被仰付候間可罷出、且又毎月六ノ日、御納戸・御広敷・与力調練被召建候ニ付、同様被仰付候旨、

右安政四年巳閏五月七日御軍賦役成田彦十郎殿ヨリ致承知、式日毎ニ罷出候、尤月野木藤藏殿・伊地知七左衛門殿・海老原宗之進殿・種子田市兵衛（殿脱カ）・深柄仁左衛門殿、同様承知候事、

五三三　十二月所司代本多美濃守殿ヨリ伝奏ヘ御達

航海術御開相成候ニ付テハ、航海暦無之候テハ差支候所、是迄年々和蘭ヨリ御取寄相成候ハ、英吉利王府ヲ起算之地ト相定編立候モノニテ、乗除之数相掛候而已ナラス、英暦ヲ御用ヒ相成候ハ如何ニ付、御国於ヒテハ、京都ヲ起算之地ト相定、新規航海暦編立被仰付候、尤右ハ常例之頒暦トハ訳柄モ違ヒ候得共、新規之儀ニモ候間、一応御達置申候事、

十二月（十三日）

五三四　十二月十六日（ママ）叙任

五三四の一

別段以思召従四位上　井伊掃部頭（直弼、彦根藩主）

思召ヲ以中将　松平三河守（慶倫、津山藩主）

出格之以思召従四位上　松平大膳太夫（毛利慶親、長州藩主）

別段之以思召少将　松平宮内大輔（頼聡、高松藩主）

侍従　佐竹右京大夫（義堯、久保田藩主）

四品　松平飛騨守（前田利益、大聖寺藩主）

思召有之ニ付四品　小笠原伊豫守（忠嘉、小倉藩主）

出格之以思召四品　眞田信濃守（幸教、松代藩主）

右於御白書院縁頼老中列座、大和守申渡之、（十二月十六日）

別段

従三位　　松平大隅守

名代（忠寛、佐土原藩士）
島津淡路守

右於御白書院縁頰老中列座右同人申渡、

御叙任ノ事実ハ後第〔ママ〕巻ニ詳記ス、

五三五　当時流行俚謡

伊勢　　価十万石
慢気胆　　加増ノ一万
朝間

第一胃腎（イジン）ヲ養ヒ、体千情増ストイヘトモ、我カ腹ノ痛ム事ナク、権威ハ益々強クナリ、腹ハ日々ニ肥脾胃気（コイヒイキ）ヲ引入候テ、邪魔ヲ掃ヒ、酒宴嫐楽ハホシヒマ、ニナル也、遠馬ノ足ヲ早クシ、燗ヲ能クシ、瘠ニハ朝夕新（ソウ）草ヲ用ヒ、厄害昇進（ヤクカイ）ニハ丸ヲ用ヒテ其功妙ナリ、上ミニハイカ程ノ変アリトモ少シモ頭痛ニヤムコトナシ、下モイカホド痛ムトモ更ニ構ナシ、酒ノ二日酔ニハ登城ナシ、其外目欠（メカケメン）飯ツカヘノ筋手ヲ引ツルニハ、功能アケテカゾヘガタシ、

加減
一上気仙（船）ニハ　　石炭ヲ用
一胃腎ノ渡来ニハ　武士ヲ粉ニス
一脾胃気ノ於尾ニハ黄金大棗
一水腑ノ嫐虚ニハ便舌ヲ以テカケンス

禁物

右薬法外ハ諸人ノ知ル所ナレトモ、別テ一昨年来地震大荒後御評判ニ預リ、猶此上蝦夷地ノ果マデモ御吹聴奉願上候、以上、

日本
一家　御政事所

無理非堂製

上州館林在　　茂林寺
時務作千代本くけふし　客僧　守霸造

ヤンレ〳〵抑近年世上ノ有様御ゾンジナレ共、聞テモクンネイ、阿部カ政事ヲ行フ間ニ、天下ノ凶変一二ヲアゲレバ、嘉永年中八月八日ノ大雷、此カタ西丸焼失禁裏カ炎上、神代此方聞モ及ハヌ亜米利加大船浦賀江乗込、不幸カアルヤラ、オロシヤハ長崎・唐太海岸台

場ヲ築レテ、知ラスニ居タル近眼ノ阿部サン、遠目カキカンヌト困タモノタヨ、又々凶変イクラモアリヤス、宝蔵火附ニ、金蔵ドロボウ、駿河カ地震テ、下田ガ津浪ニ、十月二日ハ於江戸ガ地震テ、間モナク大荒レ、大坂雷、イキリス又来タ、加様ノ事共アルノハ、尤小人集リ、国家ヲ治メリヤ、炎害（災カ）並ンデ至ルト云フコトムカシノ御人カ云タシヤナヒカヘ、是レ〳〵阿部サン、天下ヲ泰平国家豊ニスルノハ、目ノマヘゾウサモナヒ事、御存知ナケレハ教テ上ケヤウ、御マヘカ貫フタ加増ノ一万御上江御戻シ、本郷ノ隠居ヲナサレテ日光ヘムカツテ、オキテヲ破タ御詫ヲ申テ、御腹カイタケリヤ首テモ縊ツテ死ムタカ、マダシモ忠義シヤナケレト人間ラシヒト、御上ニアタマノ押手カナヒトテ、曲タ政事ニ我マ、一ハイ、譜代オンコノ才人ノ中ニハ、スコブル御方カ沢山有ノニ夫ヲハ見出サス、生レモ素性モ分ラヌ百姓・浪人ナンゾガ仮親拵ラヘ、御上ヲ偽リ、御徒ト出カケテ、段々ヘ上リ、諸大夫ナンソニナサルト云フノハドウシタコンダヨ、鼻モチナラネヘ、元ヨリ此等ハ御上ヲタバカル大キナ罪人、市中ヘ引出シ首切ル人物、加様ナ輩ヲ御上ノ御為ニハチツトモカマハス、諸人ノ歎キハ猶更構ハス、能ナヒ事トハ気ノ付ナカラモ、老中ヘ向テ一ト言トモ返答出来ヌハ無理トモナヒノサ、元来賤シヒ取立モノ故、己カ竈ノフヘルヲ専一心ニ掛ルハ哀レナコンダヨ、都テ役人上ヘハ弱クテ、下ヘハ強クテ、小股ヲクヾツテ、仁心ナクツテ、一同ツマツテ、了簡ナクツテ、異船ニ泡喰テ、老中シクツテ、御台場作ツテ、鉄砲ナクツテ、寺院ヲセンツテ、半鐘ヲ引タシテ、大砲造テ、因果カ廻ツテ、勇気カナクツテ、軍ニヨハクツテ、御尻カ軽クテ、御馬カハヤクテ、地ノ中モグツテ、御尻ヲマクツテ、逃ルト有タロウ、コレ〳〵阿部サン、ドウスル積リタ、一体オマヘハ人デハナヒソウダソ、畜生ニ細ニ千代ボクレオハムタ野良ヲソロ〳〵引ツレ、大宮八幡ヘ遠馬ト出懸ケテ、笠着タマンマテ参詣スルユヘ、社人カ咎メリヤ、苦ンウナヒナソ挨拶スルトハタマゲタコンダヨ、弓矢ノ神ナル八幡菩薩ヘ無礼ヲ働ク畜生野良メ、今ニオバチガ当ルデ有タロ、昔ノ御人ハ出陣スルニモ神前通ルニヤ、下馬ヲハ勿論、兜ヲ脱（カ）レテ通ルトイフ事知ラヌガ、タハケノアンマリアキレテ物サヘ言レヌ、ガリ〳〵野良ノ諸人ノソシリハチツトモカマハス、遠馬ハ附タリ、

仮宅ソシリモ嬉シサ半分、おたサンシヤナケレド、ニコ〳〵笑ツテ、飛ンテ出ルナゾトハアキレヲ止メル、アケクノ果ニハ遠馬テ見初タ十五ノ小娘、妾ニヒキ込チン〳〵鴨ヤラ、ワン〳〵アルヒテタノシムナゾトハトウシタコンタヨ、オマケニ世界ノ木像野良カ妾ヤ女中ノ手スシヲ頼メハ、役替ヘ昇進サセルト云フノハドウシタコンダヨ、カヤウニ政事カ乱テ居ルモノ、七両弐歩ニテゲヘル買ヨリ、間男スルホカヨツホトマシタヨ、ヤウ〳〵出来タル阿蘭陀製造ゲヘルニハ三千御払直段ヲ下直ニ定メテ、海防掛リノ役人初メル買取ケ様ナタワケカ、西流ニテ軍ヲスル気カサツハリハカラヌナレドモ、諸組ノ与力ヤ同心、黒鍬ナンソニ多分ノ手当ヲ出シタル上ニテ、稽古ヲサセルハマダシモヨケレド、御旗本ヲハ固メル御人ガゲヘルヲカツヒテドウナルモノタヨ、マタ〳〵分ラヌ講武場調練合薬費ヘル空砲ハナシテ、音バカリサセルガオキテデ済ナラ、芋デモタント喰ツテ屁ヲヒル稽古カマダシモマシダヨ、ハカルニ足ラサル血気ノ小人能イ子ノ顔シテ、牡丹ヲ附タル稽古着ナンソニ股引ハキ込、頭巾ヲ冠ツテ出カケルナゾトハドウシタコンダヨ、段々コラシテ今ニハ残ラス、髪テモ延シテ、飯ヲハ喰ハスニ、三度ノ食事ハ犬猫殺シテ喰ウデアルダロウ、此比専ラ蘭学流行一文不通ノ当気ノ奴カカランヤツシヤヲ壱冊アゲルト、先生顔シテ蘭書ノ調ノ出役ナゾトハ片腹イタヒゾ、後ニハ定メシ聖堂潰シテ畜生ノ祠ヲ建ルテ有タロウ、嵐ニ付テモ百俵以下トハ取越米ニテ下サル抔トテ、皆米モトキノ書付面ニテ、少シハ御家人息ツク積リテ喜ヒカ、ツテ、間モナク出米カ渡ツテ見タレバ、コイツモヤツパリ山師ノ細工テ、諸人ヲ一杯おこわニカケタカ御米ニ上下ヲ渡スト言ノハ、扨々キタナヒ仕方シヤナヒカヘ、ケ様ナ事テハ諸人ノ心ハ中々取レネヘ、カヘツテ気ゲンヲ損スル道理タ、是トハ違ツテ今度ノ張紙相場ノヨヒノハ書損シヤナヒカヘ、定メシコイツモ春屋カクサメタ吹雪ヨリナルホンホチ米ヲハ渡ステ有タロ、命ノ元ナル兵粮並諸民ヲ助ル籾蔵ナンソハコハレタマンマテ、シメツヲ求ル大船ナンソヲ作ルト云フノハドウシタコツタヨ、誠ニコマツタベラボウ野良タ、己カ天下ノ政事カ出来ヌテ、諸人ヲ頼ンテ時務策シロトハアキレタコンタヨ、左様ニ政事カマツクラ闇ナラ、明ルイ御方ニ譲サナルメヘ、ソレテモ構ハス、恥トモ思

ハス、ケタモノニハオトルゾ、御役ニ立ソナ伊賀殿ナンゾハアキレヲ止メテ言タヒ事ヲハ十分イワレテ、病気ト号シテ引タシヤナイカヘ、出掛タ土岐ニハ評判能テ言甲斐ナイノハ老ボレアホフカ、河内ノ出之助野良カ己レカ身上ニ引別シヤガツテ、天下ノ長物台所ツメルハドウシタコンタヨ、己レカ配下ノ勘定役ニモ十露盤玉ヨリ鉄砲玉ニテゲヘルヲカツガセ、異人ノ真似シテ、真黒出立テ、調練セサルハ当気ノシレモノメ、息子モ御見立先ニテ薩摩ノ家中ト口論初メテ、終ニハアヤマリ、屁腰ヲ遣ツテ逃出スナゾトハ、ヒキヤウナコシヌケ、漸々諸人ノ恨ミカ積ツテ目玉飛出シ、死ンダシヤナヒカヘ、悪ヲ其身ヲ云ス迄ニハイタラス、ケ様ナヤツラカ段々クタハリヤ、天下ハ泰平、国家ハ豊ニ成ルノハ目ノマヘ、今ニ伊勢サン並役人、天下ノ政事ニアツカル小人、愚僧カ寺中ニイニシヘ住タル狸シヤナケレド、終ニハ尻尾ヲ出ステアルタロ、ヤンレ〳〵世ノ中変化色々ニ十ヨリ一ツ、撰出シ、其内ヲ三ツ揃ヘテ、浮世三幅対トナスノミイ、

当世三幅対

若年テスヘ　（關宿

頼母敷三幅対　（市川市藏
奥州泉

欲バツテシソコナツタ三幅対　（奥御右筆組頭
市川小團次
請負地元〃

当年大当リ三幅対　（福山遠行
澤菴大根
長岡村替

始終覚束ナヒ三幅対　（下總佐倉
久喜万字ヤ
西洋鉄砲

シキリニハル三幅対　（川路ノ庇
迷ヒ子ノシルベ
山形ノ見習

出来ソウテ　（西丸様

出来ナヒ　深川女良屋
同　寺社奉行見習

ムツカシソウテ
直ニ出来タ（極タイ）
三幅対　土手ノ取払
亜墨利登城
上田ノ再勤

トウ〳〵スタリ
物ニナツタ　水戸（小石川イ）ノ隠居
同　品川ノ御台場
河内ノ奴

マンサラ根（ウソイ）ノナヒ
事テモナヒ　富山ノ珍事
同　小川町ノ駕訴
当時祢（おもひの外イ）イツタ　国替ノ評判
同　鈴木藤吉郎
片岡仁左衛門
夏目左近

精勤（再イ）シテ腹ノ内ハ（デイ）
土浦

メンボクナヒ　福山ノ家来
同　岡崎

六ケ敷身上ヲ能
取廻（直イ）シタ　大川端奉行（岩城平歟イ）
三幅対　角玉屋
雉子橋奉行（亀山歟イ）

五三六　参考　白石正一郎日記摘要

白石正一郎、字ハ資風、卯兵衛資陽ノ長子ナリ、文化九年壬申三月七日ヲ以テ赤間關竹崎町ニ生ル、幼名駒之助ト称シ、後正一郎ト改メ、資興ト字シ、又資風ト改ム、

安政四年丁巳

九月十二日、若州小濱藩行方仙三郎来訪、在筑ノ薩人竹（藪城彦一）内五百都ヨリ添書持参、一宿為致候、肥後横井平四郎（小楠）へ行キ帰路ノ由也、廉作相対為致、同十五日迄滞留、

十一月十二日、工藤左門（藤井良蔵）入来、同夜薩藩西郷吉之助（吉兵衛）・米良喜之助工藤ノ周旋ニテ来リ、各一宿、翌十三日夕方、西郷・米良乗船、江戸へ行ク（此日正一郎西郷ト始テ面会ス）

同十九日、薩藩板鼻俊蔵（村山松根）来訪、在築ノ北條右門ヨリ添書有之、江戸へ遊学ノ由、翌廿日出立、

（白石家文書（下関市教育委員会編）にて補訂）